女子文壇

第九年五月號　第七號

明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十
大正二年四月二十五日印刷納本（五日印刷納本）
大正二年五月一日發行（毎月一回一日）



東京　女子文壇社發行

新音譜賣出し

十五圓の蓄音器を賣出して世間を驚かしたる弊商會は本月大々的に下記の新音譜の賣出しをなす、樂燕の木村德田兩中尉は氏一流の妙節、原のぶ子の美聲は天下の珍其他取り〳〵に面白からざるはなし

◉東家樂燕　浪花節　嘘兩中尉　一、二、三、四、
◉東家樂遊　同　横川勘平馳付ヶ　上、下
◉同　同　南部坂雪の別れ、戸田局
◉同　同　天野屋利兵衛
◉丹娛倶樂部　和洋合奏　長唄　小鍛冶　上、下
◉同　同　同　鶴龜、勸進帳上
◎原のぶ子　伴奏澤田柳吉　歌劇　Ave Maria, Villanelle
◉吉原〆治　小唄　宮津節、ドン〳〵節



◎天使印兩面盤　金貳圓也
◉黒鷲印　同金壹圓五十錢
◎赤紙印　同　金貳　圓也
詳細は下名に御問合を乞ふ目錄無代進呈す

全國到る處に支店出張所あり

東京銀座二丁目　電話京橋二五七、二五八、二八八七

日本蓄音器商會


獨逸に多年研學した藥劑師間中網彦氏の創製で
ふけ、拔け毛をとめ髪のくせを
直す新香水
横口瓶なれば振掛けに最も便
ふけ取香水
レゾール
特製箱入一個一圓卅錢
大瓶　同　九十錢
小瓶　同　五十五錢
全國有名化粧品店藥店洋物店にて販賣す
發賣元
東京本町　合資會社　博愛堂
電本二八六、四四八四・振替八八一三番
代理店
日本橋横山町　村田屋　棚下商店
電浪二二〇・一六〇〇、振替四四九八番
關西特約店
大阪市博勞町二丁目　伊藤仁壽堂
大阪市平野町二丁目　丹平商會分店

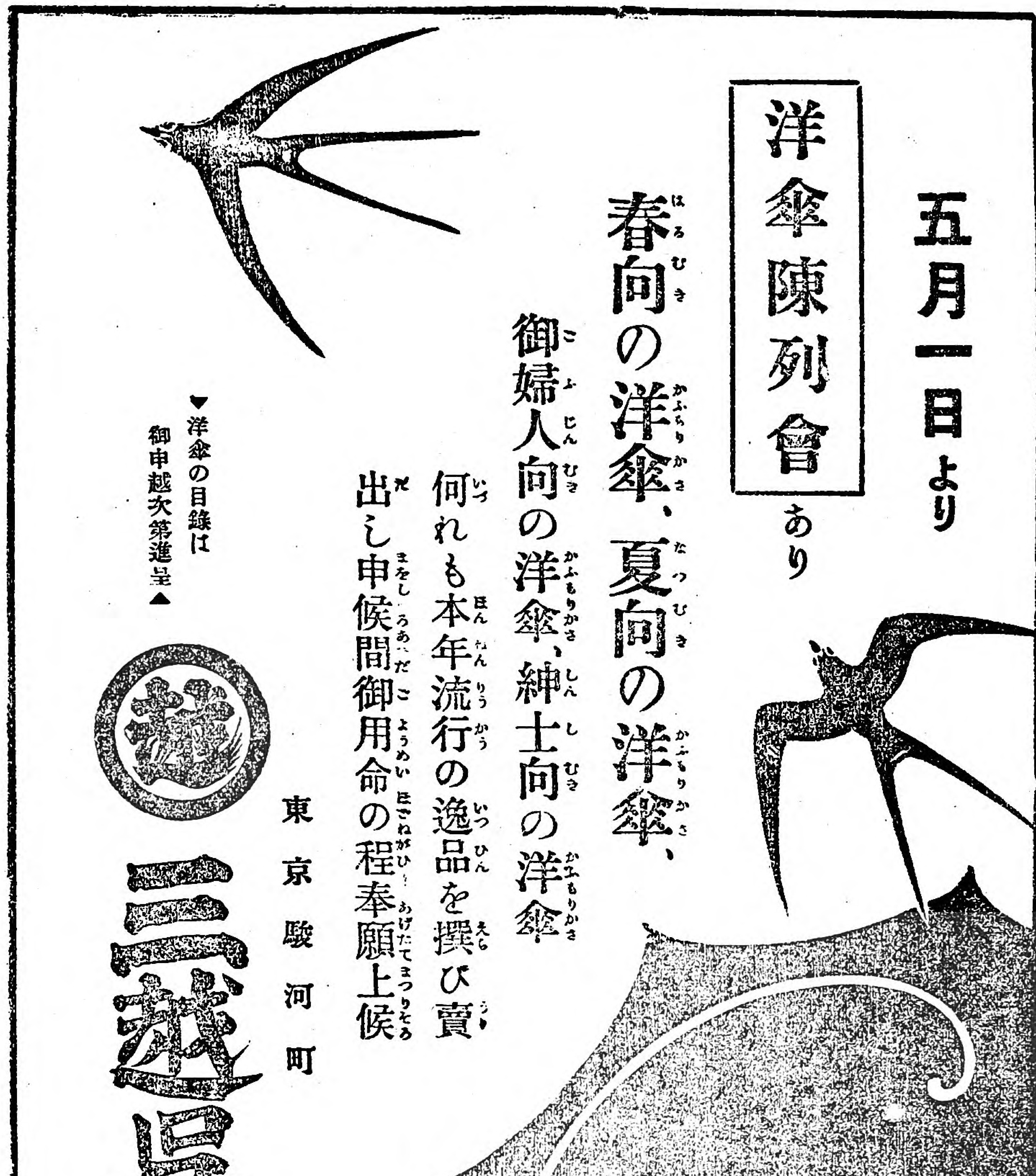
(扉ノ一)

女子文壇

五月號

第九年第七號

目次


五月一日より
洋傘陳列會 あり
春向の洋傘、夏向の洋傘、
御婦人向の洋傘、紳士向の洋傘
何れも本年流行の逸品を撰び賣
出し申候間御用命の程奉願上候
東京駿河町
三越呉服店
▼洋傘の目録は御申越次第進呈▲



新緑

紅涙潜々

實說不如歸

本號掲載浪子は誰ぞ、武男は誰ぞ、小説不如歸に泣きし人は本篇を讀め

婦人世界

五月一日發行 八卷六號 定價一冊 **拾五錢** 郵稅一錢五厘 半年七冊一圓五錢 一年十四冊金二圓五錢

◎**潔く過ちを悔悟した婦人**……下田歌子

◎孫の着物まで縫ふ九十歳の老女……記者

◎**慈愛深き我家の舅姑**……加納子爵世嗣夫人

◎酒を飲む良人を持つな……田島敎惠

◎**安價で滋養ある食物**……村地學士

◎子供にやる菓子の拵へ方……櫻井近子

村井弦齋氏の小説子寶は、ますます佳境に入りました。是非諸姉の御一讀を願ひます

▲**我が家の廢物利用**……星つね子 櫻井ちか子 川瀬富美子

◎家庭に應用すべき茶會……本多錦吉郎

◎**子供の褒め方叱り方**……岸邊東洋幼稚園長

◎同情の中心となりし徳田中尉夫人……

◎**娘を結婚させるまでの敎育**……安部磯雄

◎今年流行の悪性の痲疹……加藤博士

◎**歐洲各國皇后の隠し藝**……婦人記者

▲名流婦人の噂ばなし……

▲家庭園藝瓜の作り方……

▲名人に髮を結ばせた記……

▲弦齋夫人の家庭叢談……

▲貧しき家より……鐵火鞭

▲美容問答……北原十三男

發行所 東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 振替口座三二六番 賣捌全國書店

第十三年 五月 第五號

(海内唯一)

秀才文壇

(青年伴侶)

五月一日發行 普通號 一冊拾五錢(送料壹錢) 半年分一圓卅五錢 一年分二圓五十錢

新らしき藝術の問題……内藤濯

每號 鑑賞文藝 ○論文 ○小說 ○長詩 ○和歌 ○俳句 ○小品文 ○消息短文 ○六號文壇等

發行所 東京神田旅籠町一丁目(振替東京一九五五) 文光堂(電話下谷四八一九)

賣捌 東京堂○北隆館○至誠堂 東海堂○上田屋○良明堂

第二年第五號

講談世界

正價
一冊送料共金廿二錢
三個月金六十五錢
半年分金一圓廿錢
一年分金二圓卅錢

發行元
東京神田區旅籠町一丁目
文光堂
振替東京一九五五番
電話下谷四八一九番

五月號目次

――（賣捌所は全國各地書籍雜誌店にあり）――



新婚の人
密月の私共は、新緑の箱根に遊びました。良人は歌が好きなのです。私の着物に　衣裳お薫　のいゝ移り香のするのを「朝晴れの青葉の陰をさすらへば君の袂に風薫るなり」とよんだりしました。亦宅に居る時、もう梅雨だから蟲や濕氣の豫防に　衣裳お薫　を簞笥に入れてましたら「我妻は簞笥の前にうつゝとりと薫る衣裳に見とれてありき」ですつて、あんまりですわねえ、ほゝゝ。
衣裳お薫發賣元
大阪北區源藏町
飯田東籬園
各地著名の呉服店
小間物化粧品店にあります

静かなる讀書室



（書齋に於ける日向夫人）

一家のまとゐ



(子爵曾我祐準氏令嗣家庭)

滋養强壯 グリコナール錠

▼北里博士指導佐伯氏發見の方式に由り製出したる本品は卓越廣汎の用途を有する滋養强壯劑にして特に肺結核慢性胃腸病及一般病後産後等の營養不給に適應す



各地有名藥舖にあり
定價百錠入金壹圓
外送料金八錢
說明書御申越次第郵呈す

發賣元 東京市日本橋區室町三丁目
三共合資會社

本劑と同一なる消化効力ありと稱し粗惡品を强賣する向あり
信用厚き藥舖より御買上を乞ふ

タカヂアスターゼ

類似品數多あり
高峰博士發明品と
御指定を要す



◎本劑の試驗報告御申越次第進呈す

發賣元
東京市日本橋區室町三丁目拾番地
三共合資會社

THE GIRLS' GRAPHIC

少女畫報

第二年第六號　定價金拾五錢　郵稅一錢五厘　六冊前金郵稅共金九十錢　十二冊金一圓七十五錢

口繪

■ゆく春（油繪三色版）……齊藤五百枝筆

■暮行く春の悲さに（極彩色石版）竹久夢二筆

讀物

畫報

讀物

編輯顧問　高島平三郎　倉橋惣三　先生

東京麴町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九番　振替東京一一八一八

若葉めぐり

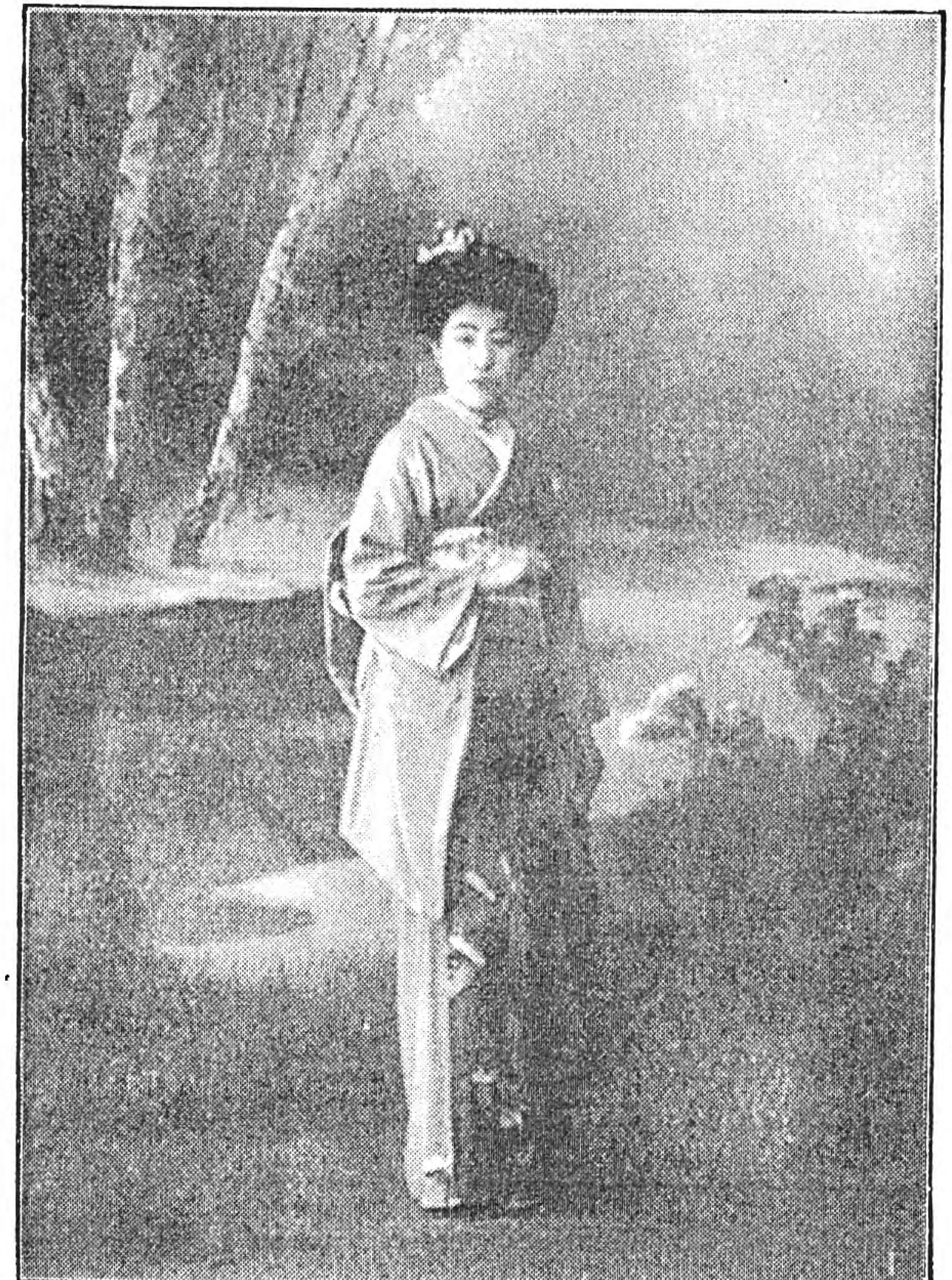
（其一、外出のお支度）



（其二、山王様の石段を下りて……）

室田文子孃　遠山英子孃

ひこばえ



橫濱豪商大濱氏令嗣夫人茂子



男爵岡內重俊氏令孃さみ子

▲面白く有益なる男女必讀書出づ!!



安産の心得

一册送料共
金廿二錢
切手代用五錢

▲本書目次▲如何にせば妊娠するか▲子をはらみしを知る法▲妊娠中食物其他の注意▲つわりの話▲體内の子の每月の變化▲出産日前知法▲出産の用意▲分娩時の注意▲出生兒の手當▲マグリの害▲授乳の注意▲産前産後ぬ乳を出す法▲産婆來らぬ前出産せし時の心得▲産後の注意▲産後夫婦別居すべき日數▲出産屆書式▲初産の話▲流産の話▲早産の話▲難産の話▲子を生みし苦しき話や失敗談色々▲産婆の秘密▲産婆を頼む注意▲胎内の子の男女を知る法▲どうすれば安産するか等妊娠出産の事を密書入れにて面白く分りやすく記せるもの男女必讀の良書也

發行所 東京神田區錦町 振替東京一六一八番 學友社書店

色白くなる

色黑き方、靑き方、赤すぎる顔の御方は郵便切手二錢封入御手紙下さい色白く美しくなるよい藥を御知らせ致します。日にやけて黑くなつたなどはすぐなほります。皆樣に御實驗を願ひました所、「日本一の黑美人なども笑はれた生れつきの色黑が色白くなりました」とか「美人の神樣と拜んで居ります」などいふを始め數千通の御禮狀をいたゞいて居ります。

東京市神田區錦町三 高柳こう子

美顔と化粧法

一册送料共三十七錢私方へ御申越あれば特別割引二錢切手十五枚にて送本致します

目次の大略▲色白くなる方法▲赤き顔を櫻色にする方法▲シワのよらぬ方法▲キメを細かにツヤを出す方法▲日にやけるを防ぐ方法▲色を白くする方法▲手の色を白くする方法▲髮の毛を黑くする方法▲毛のぬけるを止める方法▲毛をのばしつやを出す方法▲ふけを去る方法▲ちゞれ毛くせ毛赤毛を直す方法▲あるべき所に毛なきを生ずる方法▲やせる法ふとる法▲鼻を高くする方法▲聲をよくする方法▲入浴の方法▲化粧品の選び方▲おしろいのつけ方▲衣服の模樣と縞柄▲衣服の縫方▲衣服の着方▲其他色々皆誰にもすぐ出來る事ばかり記せる良書なり

●本書著者 東京神田區錦町三 高柳こう子

皮膚病新藥發售

(チロミン)TYLOMIN

壹瓶價金廿錢 送料金二錢

不思議ナル疣贅(イボ)、胼胝(タコ)及鷄眼(ウヲノメ)ノ特効藥ニシテ之ヲ塗ルトキハ刺戟スル事ナク忽チ薄膜(ウスカワ)ヲ生ズ之ヲ除去セズシテ更ニ其上ニ塗ル事一日一二回ナレバ間モナク脱落(トレル)シテ痕(アト)ヲ遺(ノコ)サズ

(パラシン)PARASIN

大器金廿錢 小器金十錢 送料金二錢

皮膚病特効藥ニシテ無害無刺戟性(ガイナクシミルナキ)ノ膏藥ナルニヨリ幼兒ニモ用ヒ得ベク一日一二回貼用スル片ハ痕症モ痕跡ナク速治ス

(主治)クサ、ハタケ、タムシ、シラクモ、インキン、ナマヅ、タヾレ等

(デルマチン)DERMATIN

壹瓶價金十錢 送料金二錢

皮膚病ヲ豫防(フセギ)シ且ツ治療スル新藥ニシテ無色無臭透明ノ液ヲナシ一日一二回筆ニテ塗ルトキハ神効アリ

(主効)ワキガ、タムシ、シラクモ、ナマヅ、インキン、ミヅムシ等

含暉堂 東京府淀橋町柏木七三 岡村製劑所

郵便振替貯金口座貳四壹九參番

お庭の遊び



(日向代議士のお子様たち)

青き木の實



増田農學士夫人幸子



法學士藤田小三郎氏夫人榮子



實業家岩崎重次郎氏夫人延枝子

未來の立身を望む者は必ず見よ

催眠術通信教授

說明書無代進呈



不可思議なる幽理と靈怪學の幻術とを應用せるが如き方法にて我が心の儘に人々の身心を統御し得ると云ふことは、如何なる事業に於ても成功の捷徑である。諸子よ冷靜なる頭腦を以て、立身成功家の過去の行程を考へらるゝの時、吾人の斷定の僞で無いことをいなみ難いであらう。催眠術及心力波及術はこれが法則を研究する科學であつて單に人を眠らしむるに止まる術ではない。これを應用して疾病を治療し惡癖を矯正し得るは今や確固なる事實であつて進んでこの原理を應用し處生上大なる利益を得るは實に理の當然である斯術は正則完全なる本會の通信教授法により、僅少の學費と日時とを以て確實に習得する事を得べし斯術の說明及實驗、本會々則等を詳述せる書冊は、葉書にて申込次第送呈すべし

大阪市東區生玉町

帝國神秘會

無類快品

美人珍畫

春の夜長のつれ〴〵に其の珍畫を其姿の奇態なるは美……か……快……か……そはいはぬが、花ならん、粋士諸君幸に推せられよ、三枚一組六十錢。六枚一組一圓二十錢、十二枚組二圓三十錢、寫眞十二枚組七十錢、十枚組六十錢、送料不要代金は爲替にて御送附のこと、切手代用一割増

東京下谷御徒町一丁目九　太刀雄堂商店

婦人用ゴム製衛生器

女の友

●本品はゴム製にて婦人の局部に挾み置く時は月經の際經水の漏洩を防ぎ立居を便ならしむ故に之を用ふる時は汚物の附着せず梅毒淋病を防ぎ子宮を傷する憂なく故に姙娠を避けんとする時又月經中の交接に必要なり特製八十錢二個入一圓五十錢上製六十錢二個壹圓（祕密送料八錢）

愉快なる最新器

佛國製男子衛生器ゴム製

春の友

特價　一藥付壹組三十五錢同貳組六十五錢同四組一圓二十錢送料當店持

春衣は在來のルーデサックにあらず極めて完全なる梅毒淋病の外毒防禦防禦器なり又婦人月經中に是非必要なり、姙娠を望む方は用ゆべからず、而も本品を使用せば愉々快々なる妙味を増大せしめるの效實に偉大なり。一個にして五十回以上使用出來る。

發賣元　東京市下谷區御徒町一丁目九番地　安蒜神明堂藥店　振替貯金口座東京九八四八番

◎そばかす
ニキビ

にておなやみのお方へ痕かたもなく、治り美しいお顔となるお薬をお知らせいたしますゝに、返信料を添へお所とお名前をお知らせ下さいませ◎東京市本郷本郷座横　久保つた子

最も人にきらはれる
わきが

の病に罹られたる御方又永年慢性わきがにて色々の治療を施されても治らずに苦まるゝ御方の爲めに不思議によくきく治療藥を御知らせ致します御望みの御方は御遠慮なく只返信料三錢切手御送り下されば御知らせ致します

東京神田區錦町三ノ三　中村喜三郎

口繪は乃ち是美人・主要記事は美人の秘訣

淑女畫報

第二卷第五號……五月一日發行

四六倍判口繪光澤紙寫眞版六
十頁石版三色版數頁本文百頁

正價廿五錢 郵稅二錢

六冊壹圓卅五錢 十二冊二圓六拾錢 外郵稅要

讀物

□美人となる奥義……谷津理學博士
□浮世目鏡……×××
□顔の美人と體の美人……大久保一路
□女中志願者の新傾向……
□芝居茶屋探檢……
□各流婦人洋行しくじり談……無烟火藥

畫報

（口繪）

初袷（原色版）……河崎蘭香
五月雨（十三度刷艶麗無比）……島成園

（寫眞版）

○北白川宮妃房子内親王殿下……
○山内侯爵夫人……○保科子爵夫人……
○戸田子爵令妹愛子、光子……
○一條公爵令孃朝子……○藤野子爵令孃……
○貴族院議員菊地長九郎氏令孃光子三千代子……
○其他名家の貴婦人令孃花の訣を聯れ千姿百態應接に遑あらざらしむ……

讀物

□催眠術の利用……鈴木好枝子
□アブサンの香り
□婦人記者の市中探檢記……
□不良少年人物月旦……王安石
□風俗八軒長屋……×××
□貴婦人界の首領と陣笠……×××

東京日本橋本町 博文館 振替東京二四〇番

初袷



月岡時子孃

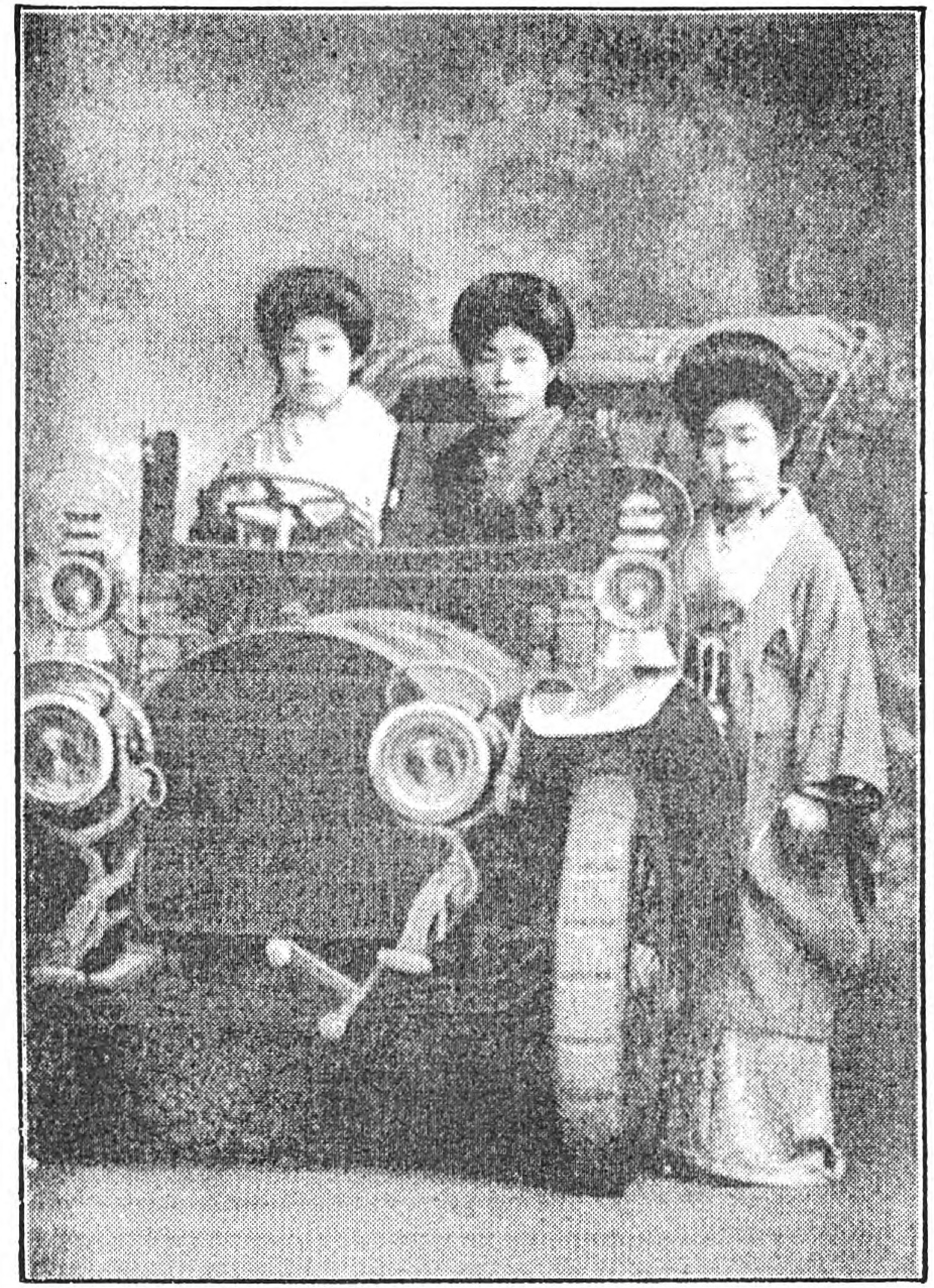


矢島玉子孃（木下淑夫氏夫人令妹）



北原梅子孃

新緑の頃



二婦人と本誌記者



工學士小晴壽氏の家庭

人若し薬を需めんとせば須く撰擇を要す

清心丹の三大特色は

一、効能の確實

二、品質の善良

三、價格の低廉



主治効能

心思鬱憂、頭痛眩暈、胸痛腹痛、過飲過食、悪心嘔吐、溜飲宿食、中暑中寒、下り痢疝痢、舟車不快、咯痰咳嗽、咽喉不調、齒痛口臭、

定價
壹圓箱入　五拾錢箱入　參拾錢罐入　拾五錢罐入
拾貳錢瓶入　貳拾錢紙包　拾錢紙包　五錢紙包

本舗 東京市日本橋區元大坂町八番地 **高木與兵衛**

講談世界春季增刊

あづま男

目次

△夕立勘五郎　神田伯山
△柳川庄八　桃川如燕
△佃の漁火　菜々齋葉柳
△多古の伊兵衛　一龍齋貞山
△喜劇 浮れ盜人（二幕の内）　檜山朝夢作
△落語 百年目（小三治改め）　柳家つばめ

正價金二十錢送料二錢

增刷三版發賣

發行元 東京神田區旅籠町一丁目二十三番地 **文光堂** 振替口座一九一五五 賣捌 各地書店

大正に於ける理想の贈り物

實用新案出願濟

七三八五四號

實體浮出

寫眞葉書



會則趣意書は郵券

二錢封入申込み送る

新案 家庭 教育 進物

浮出寫眞葉書は、物理學の原理を應用して、有ゆる事物を浮出さしめ實體のまゝを愉快に見せる。やその他の團體に備ふれば無上の娯樂として多數人の目を悦ばしめる。の參考としては物理、化學、博物の標本となり頗る有益である。とすれば高尚で、經濟的で、恐らく之に優るものはあるまい。

最近發行の種類

- ●青山葬場殿及び御大葬の實況
- ●大正元年の海軍大觀艦式の實況
- ●大正元年の陸軍大演習の實況
- ●本年鬪菊會有賞の菊花
- ●現代の風俗、流行の髪の結ひ型
- ●世界の著名の風景及動植物

驚く可き安價

定價		
浮出寫眞はがき	一組(十二枚)	金三十錢
レンズ實體鏡	一個	金七十錢
小包送料	八錢	滿鮮臺 三十錢

發賣元 **實體浮出寫眞會**

東京市神田區三崎町三丁目一番地

會長 子爵 平松時陽

(振替口座二三三九六番)
(電話本局四七八三番)

新文林

五月一日發行　一部金拾錢　郵稅金壹錢

五月號

半年分郵稅共六拾錢　一ヶ年分壹圓貳拾錢

◉口繪

◉思想（オウギユストロダン作）◉獨逸文豪ゲーテの家
◉內藤鳴雪氏の肖像と筆蹟◉島崎藤村氏よりの葉書

本號より改革

◉文叢

◉小說（秋江選）◉普通文（雨雀選）◉長詩（編輯局選）
◉短歌（空穗選）◉俳句（鳴雪選）◉短文（編輯局選）

懸賞投稿歡迎

發行所　東京市神田今川小路　振替東京二〇四三一　電話本局四九六六番　忠誠堂

諸名家執筆

現代小品叢書

菊判半截版装幀頗る優美紙數約三百頁餘

正價一冊金二十五錢

郵送料一冊金六錢

田山花袋氏著

椿

第壹篇

（既　刊）

正宗白鳥氏著

青蛙

第貳篇

（五月十日發行）

内容から言つても形式から言つても、自由で、清新で、且つ讀むにも丁度手頃の小品文。書齋にある時は勿論、電車の中でゞも、汽車の中でゞも、散歩の時でも寝轉んで居る時でも、一寸讀んで見られる小品文。さうして少しでも爲になる事、面白い事を知らうとする賢い人に向つて、玆に現代小品叢書は無比の廉價を以て提供された。皆な是れ名流大家が其の苦心の作より精選されたるもの、蓋し愛誦措く能はざるものあるに相違ない。今や既に其の第一篇として田山花袋先生の『椿』出で、第二篇として正宗白鳥先生の『青蛙』將に世に出でんとす。續々愛讀を賜へ。

第三篇　途上　前田晁

第四篇　砂丘　吉江孤雁

第五篇　題未定　窪田空穗

第六篇　題未定　島村抱月

發行所　東京神田今川小路　忠誠堂

振替東京二〇四三一

電話本局四九六六

新刊

■原田琴子著　岡本一平氏裝幀

歌集 ふるへる花

□菊半截形類美裝　本文二百三十頁　歌數四百餘頁　ポイント活字

女流歌人として令名ある著者艶麗なる歌四百餘首を收む。讀者は本書に依りてふるへる花の如く惱ましき女史の若き心緒に觸るゝを得んか。

價六十錢　送料六錢

再版

■長曾我部菊子著　小寺白衣子裝幀

情熱の女

□菊半截形類美本　本文三百餘頁

實社會に觸れて、其の如實相を摑まんとする記錄の結晶でそれが小說や小品の形式を假りて新しい色彩を帶びて玆に現はれて來たものである。

價五十錢　送料六錢

新刊　植松美佐男氏新著

少年少女小說　**あゝ故鄕**

價四十錢　送料六錢

血と涙と情と、勇氣とで綴られた可愛い。先生の一番熱心に書かれた書です。

近刊　植松美佐男氏著　少女小說　**愛の紀念**　價四十錢　送料六錢

再版　植松美佐男氏著　少女小說　**百合子の涙**　價卅五錢　送料四錢

■丘の人著　少女小說　**勇ましき少女**　價卅五錢　送料六錢

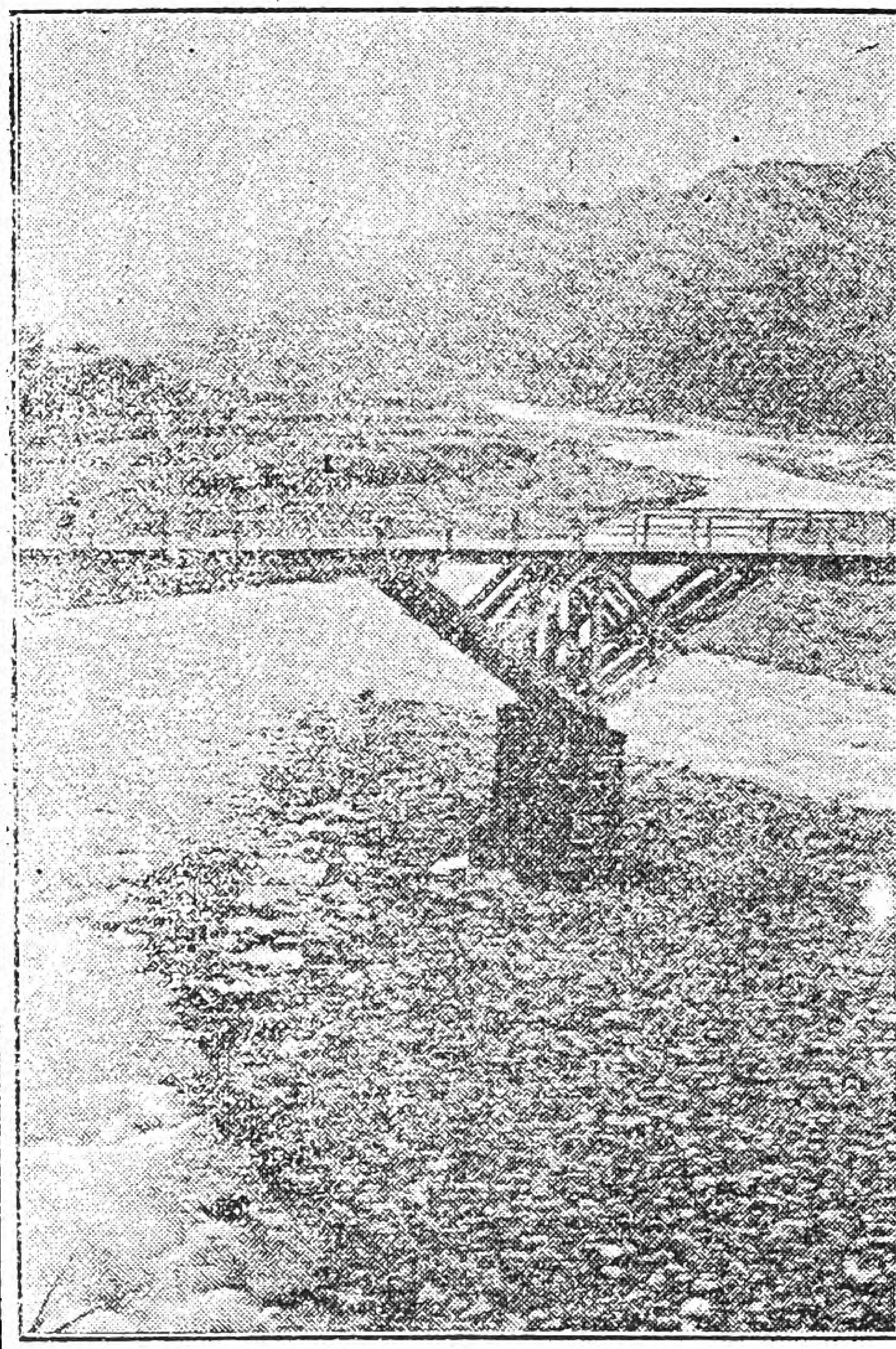
■無名氏著　少年少女小說　**三人同胞難船記**　價卅五錢　送料六錢

□東京淺草下平右衛門町　**岡村書店**　振替東京一九〇六五番□

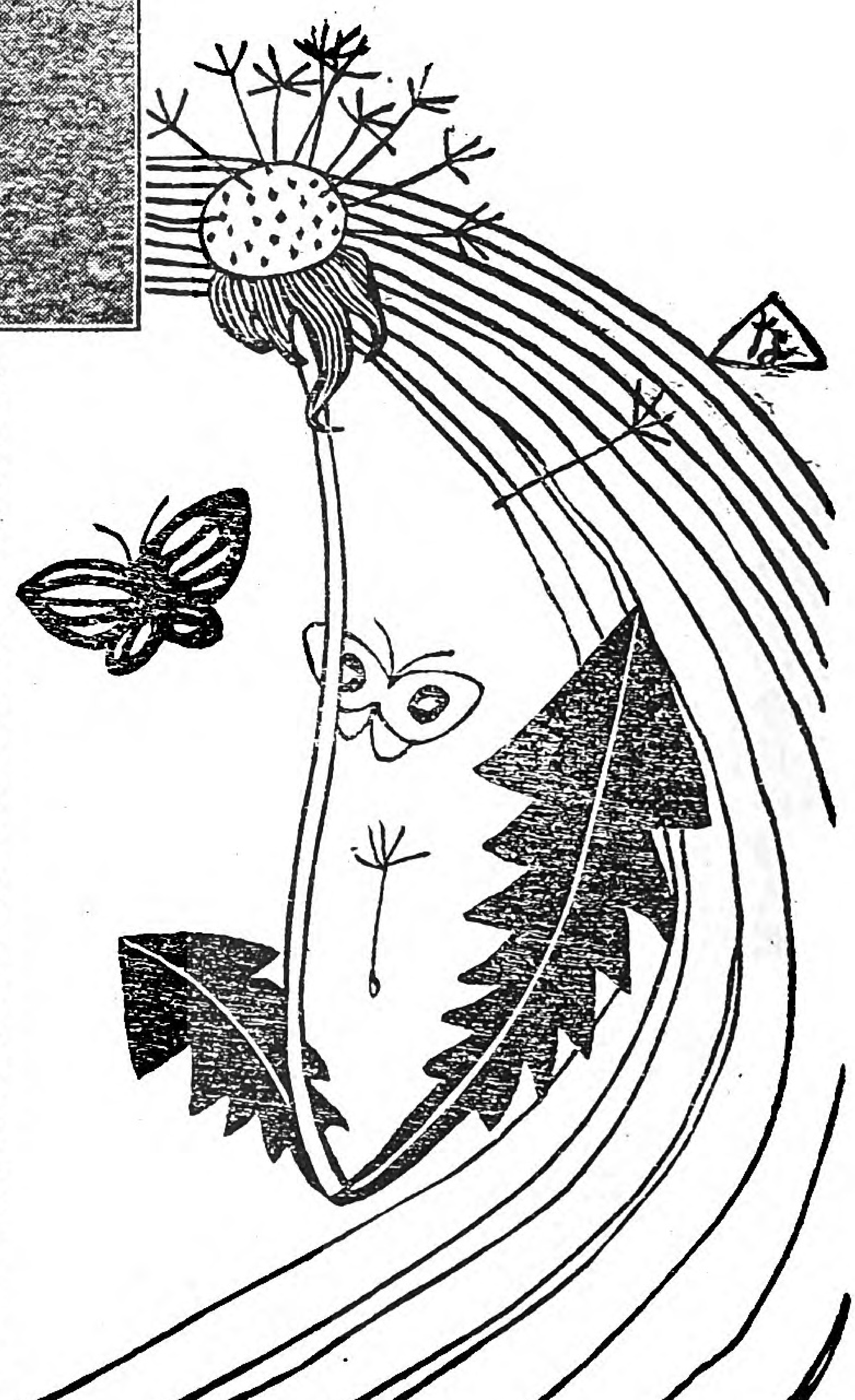
女子文壇

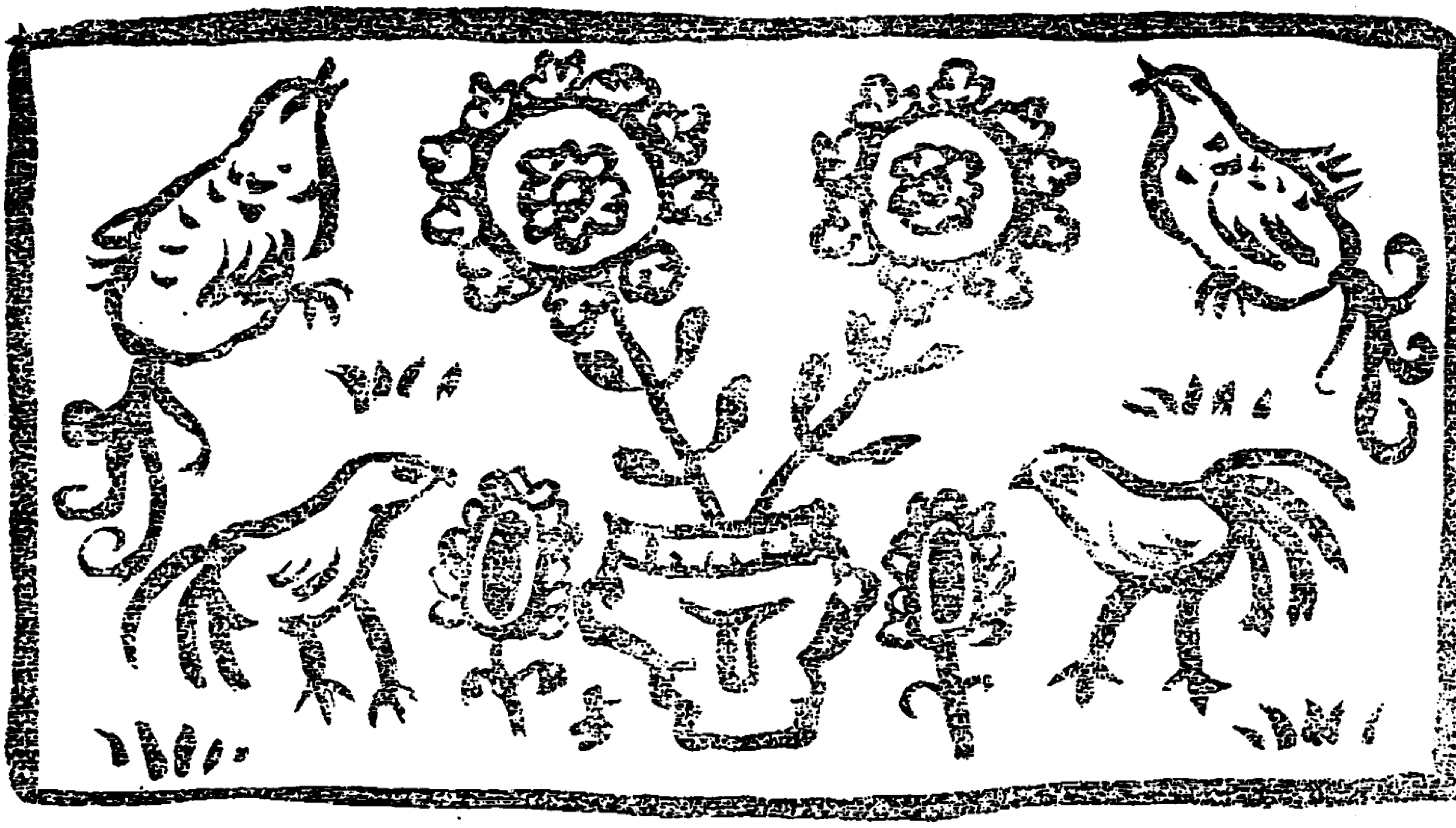
第九年第七號

大正二年五月一日



山よ、丘よ、杜よ、河よ、いつこんなに緑の色に覺めたであらう。地面のすきまもなく目の覺めるやうな美しい緑の練絹が敷かれた。其上に輝く太陽の光よ。燃ゆるやうな緑に蒸されて、息づいてゐる初夏の熱情よ、碧瑠璃を水から出した時のやうに輝いてゐる初夏の空中よ。木の葉よ、草の葉よ、一葉一葉の生命が柔かに伸びてゆく〳〵と、緑が空を覆ひ、地を覆ひ、晴れても青く、降つても青く、天地は只一つの大なる緑室となつて、其處や此處に紫の花や、純白い花で飾られる、爽かな五月の心持、いざ衣を脱いで緑の室に立たむ。





婦人問題（二）

菊地幽芳

◎現在の二大問題

婦人問題と勞働問題とが今世紀の二大社會問題であるといふ事は、誰もいふところであるが、この二ツの問題は實は聯關した問題である。双方を離れて考へる事は決して出來ない。その獨立したやうに見ゆるのは或點までゞある。なぜならば經濟上に婦人が獨立し得るやうにならないには、所謂新らしい女の要求も歸するところ無意味である。婦人が經濟上に獨立し得て、始めて婦人の新らしい要求の正當に聞かれる時代が到達するのである。婦人の新らしい要求の前には、經濟上の獨立といふ事が先立つ、經濟上の獨立なくして婦人問題を呼號するのは畢竟机上の空論に過ぎぬ。

歐米のフエミニズムは、日本の今日の婦人問題から見れば遙かに進んだもので、歐米の婦人は半ば經濟上の獨立を得つゝあるのであるから、

彼等の主張なり要求なりには相當の根柢がある。そして事實においても着々として實力を養ひ、彼等の要求する權利を一歩々々確實に摑みつゝある。最早机上の空論ではない。

全體經濟上に於る婦人の獨立といふ事は、一面において男子との生存競爭を意味する、經濟上に於て男子の職業を奪つて行くのである。こゝに於て婦人問題が勞働問題と適切なる關係を持つて來る。勞働問題の一面は男子と女子との戰爭である。この戰爭の來らんとする世紀において慘憺たるべきは社會學者の想像するところで、日本に於てはまだくそれほどの事は無い。婦人問題と勞働問題と關聯する事さへ考へられない。



蓮華草の花に埋れて

◎日本の婦人界にも警鐘鳴る

一體西洋の方では勞働問題が第一に起つて、婦人問題は第二に起つたものであるが、日本では婦人問題が先に起つて、勞働問題は後廻しになつて居る。その代り日本の婦人問題は適切に起るべくして起つたものとは思はれぬ。歐米の思想にかぶれて猿の人眞似をした景色が無いでもない。始めは人眞似であつても、最早事實問題の色彩を帶びて來てから、眞面目に研究して見なければならぬ時期に到着して居る。殊に近來日本でも婦人が男子の職業を蠶食しつゝある事實は、今眼の前に開けかけつゝある。同時に男子の就職難の聲が日に

高まつて來た。男子の就職が六かしくなつて、女子の就職が却つて容易になつて來た形がある。それは婦人が廉い報酬で働らけるからで、この點は男女勞働問題を研究するには重要な點である。で日本でも早晩就職問題について男子と女子の烈しい取合が起るであらうと想像される。

◎佛國の女勞働者二割以上

西洋の例を云ふと、今では女子が從來男子のして來た、殆んどあらゆる職業に從事するやうになつた。まだ部分的ではあるけれども、女が政治上の選擧權、被選擧權を有するやうになり、女の市長さへ出來れば、市町村吏員もあり、女辯護士、女巡査といふやうな、前世紀には夢想だもし得なんだものが、着々事實に現はれるやうになつた。更に勞働者に至つては慘まじき勢を以て　ます〳〵男子の職業を侵略しつゝある。こゝに佛國の例を申上ると、最近下院議員のベールーといふ人が勞働大臣に質問して、勞働大臣が答へた統計表によると、女子のあらゆる就業者（教育その他の高等なる從業者は省いて）が四百十五萬人ある。殆んど佛國全女子の二割乃至二割五分が勞働に生活して居るので、從つて男子との間に生活上の戰鬪が起らなければならぬ譯である。この光景の一端とその間の消息が、今度日本に來朝され、只今日本の風土觀光中の佛國文豪ユーゼーヌ、ブリヨー氏の最近の脚本、今年の一月に興行された『獨身婦人』の中によく出て居る。

◎脚本『獨身婦人』中の對話

ブリヨー氏は社會劇問題劇を書く人で、いつもこの人によつて社會問題を提供されるのであるが、この『獨身婦人』は矢張婦人問題に解決を與へんとしたもので同時に勞働問題にも觸れて居るのである。こゝにはその勞働問題に觸れて居る一節の中から引用するのであるが、テレーズといふ女主人公、乃ち女の獨力で世を渡り、自分の周圍に理想的の社會を作らうといふ女が女の勞働組合を組織し、女勞働者の地位を改善しやう

とする。するとその事が巴里の勞働本部(男子のみの)に知れて、本部の委員がテレーズの女組合を解散せしめやうとしてやつて來るのである。

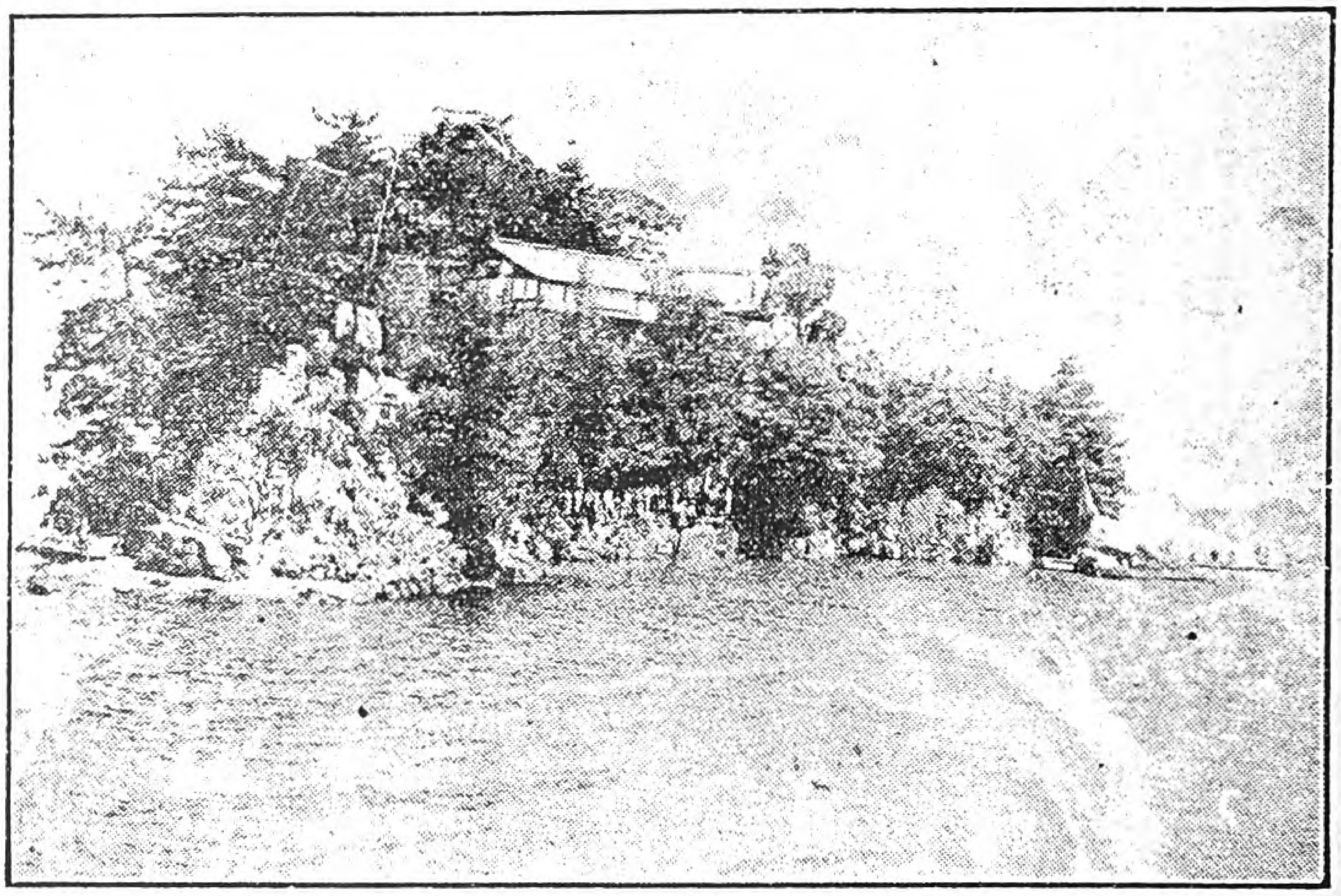
その委員とテレーズの働らいて居る工場の持主が談判をして居るところへ、幾人かの女勞働者の取締をして居るブーニユのお母さんといふ女勞働者が入つて來て、口を入れる、その對話の二三くさりを次に飜譯して御覽に入れる。

委員「己達は競爭者を叩きつぶさなけりやア承知しないんだ」

持主「さうすれば私の使つて居る女勞働者がどうなると思ふ？。」

委員「これ迄佛蘭西の女がして來た通り、家の中で働らいて居たらいゝぢやアないか」

(こゝへ「ブーニユのお母さん」が入つて來て聞て居るが、横合から口を入れる。)



琵琶湖多景島

女勞働者「そりやア私達だつて何も外へ出て働らきたい事はありませんやね。だけど家に居て何をしろといふんです？昔は女が家に居さへすりや、何かしら仕事のあつたもので、私は小供の時にお祖母さんがどんなに働らいてたか知つてるが、木を取りにと行つては森に行き、水を汲にと云つては泉へ出かけたものです。それから家で麵麭も燒きました。すゝぎ洗濯もしました針仕事も仕きれぬほど有ました

委員「お前さん等その通りの事をして居れば此方にも文句は無いんだ。

女勞働者「だが今日びは時節がころつと變りましたよ。

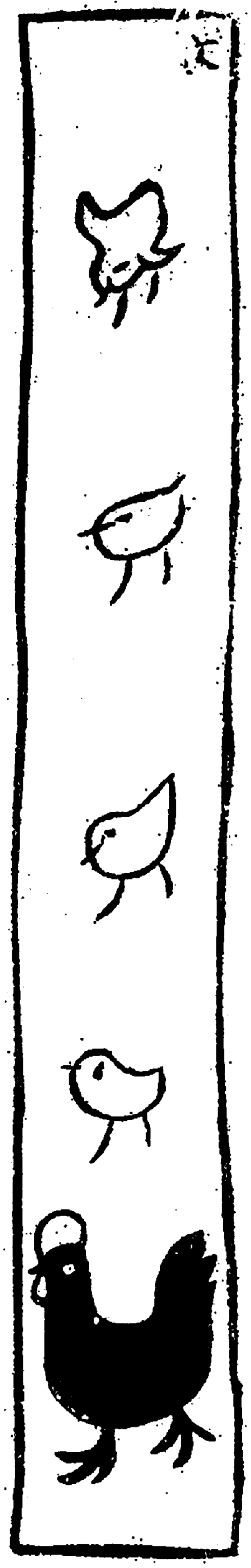
家に居て何をする事があるんです。もう泉へ水を汲みに行く世話もない。水道の栓をひねると水が出て來ます。山へ木を取りに行く心配も入らない。水と同じに栓をねぢつて燐寸をつけさへすりやアいゝんで、麵麭は燒いたのを賣つてるから、今時麵麭を燒くやうな家はありません。お菜だつてちやんと出來たのを安く賣つてるし、靴足袋だつて衣服だつて仕立上りの安ものがいくらでもあつて、それを買ふ方が安上りなんです……。それに家に居て何を働らけといふんです？、私達の室へ來て御覽、煮炊の道具だつて竈だつてありやアしない。たゞ狹い暗い室に小さな寢臺が置いてあるばかり……。」

以上の對話に見ゆるやうに、文明の利器が婦人の家庭における仕事を奪つたのであるから、女は外へ出て働くべく餘儀なくさるゝに至つたのである。そこで女は皆家を餘所にして働きに出る。さうなると生存上の競爭になるから、慘憺たる戰爭起らざらんとするも得べからずである。

◎内で働く時代より外で働く時代へ

昔アレキサンドル大王の父は屢々微行して女の有様を見た。一本のステッキを手にして、大道を歩行しながら、外に出て居る女を見ると、「お前達はなぜ外に居る。正直な女の働らくところは、ちやんと家の中に領分があるぢやアないか。早く彼處に歸れ。」と云つてステッキで彼等の家を指さし示した。昔はそれが實に正しい女の歩む道であつたのである。けれども時勢は變化した。下等の勞働者などになると、もう家といふものは殆んど無いのである。またます／＼高まつて行く生活難のため婦人の天職は家庭にありとのみ濟して行けぬ時勢になつて來たのである。歐羅巴の勞働者の家庭のすさんで居る有様は慘憺たるものであるが、この有樣はやがて日本にも實現さるゝ日が來るであらうと思はれる。いさゝかこゝに婦人問題と勞働問題の交渉を概說した次第である。

幸福の基礎は生活の獨立



早稲田大學講師　安倍磯雄

▲獨立は獨身の意味でない

婦人の生活の獨立が其の幸福の源泉となる事は疑のない處であつて、今更言新しく申すまでもないが、玆に經濟上の力を持たない婦人が、獨立する事の出來ない境遇によつて、どのやうな不幸と困難とを嘗めなければならないかと云ふ事をお話したいと思ふのである

私は已前から屢々婦人の生活の獨立については世間に發表する事として居たのであるが、私の言ふ處の婦人の獨立の意味は、強て男子に反抗して獨身でゆくことを主張しやうと云ふのではなかつた。

婦人の獨立と云ふ語は動もすると誤解をうけやすいやうであるが實に誤られざる婦人の獨立は、境遇の如何によつて、場合によればさう云ふ事の出來る資格を所有して置くといふ事である。

家庭を持つのは人の常道である。けれども世間には其の常道を外れたる道を餘儀なくせしめられる事が多いものである。此の常道の外を歩いてゆかなければな

らない人の爲めに、亦常道を外れねばならないやうな時の準備にも、婦人が生活の獨立、經濟上の諸問題に頭をこしらへておくのはよろしき事である。

▲誤れる結婚思想

先づ問題の最初において現代の若い女に考へて貰はなければならない事が三ヶ條ばかりもある。前に言つた經濟上の獨立これがその一つである。次には結婚に對する誤れる思想を除きたい。これが其の二である。



母に寄り添ひて

結婚は男女ともに一代の重大事件である。結婚が國家の爲めにはた一個人のために大切であるのは云ふまでもない事である。從つて結婚は重んぜられ、且つ祝ふべきものとせられて居る。

然るに現代の若い人々は、結婚をあまりに多く重んじすぎて、樣々の不幸を自ら求めて居るやうな觀がある。私はこれについて殘念に思ふのである。男女ともに必ず結婚しなければならない、結婚をしないと云ふ事を罪惡視し、人道でないかのやうに誤解をして居るのを、わるいと思ふ。

かゝる場合に私々は先づ結婚は我々の生活のどういふ位置を占めるものであるかを考へて見なければならない。また人生の目的が何であるかを熟慮したいものである。

そこで人生の目的は何であるかと云ふと、云ふまでもなく幸福である。幸福を求めつゝ人は生活をし

て居るものである、國家としてもやはりその通りである。人生の目的これを精神身體兩面の幸福を求めるにありとする事は、誰れも否定する事は出來ないのである。然るに今の若き人々は人生の目的は結婚であるとしてゐる程に、結婚にその心を囚はれて居る。

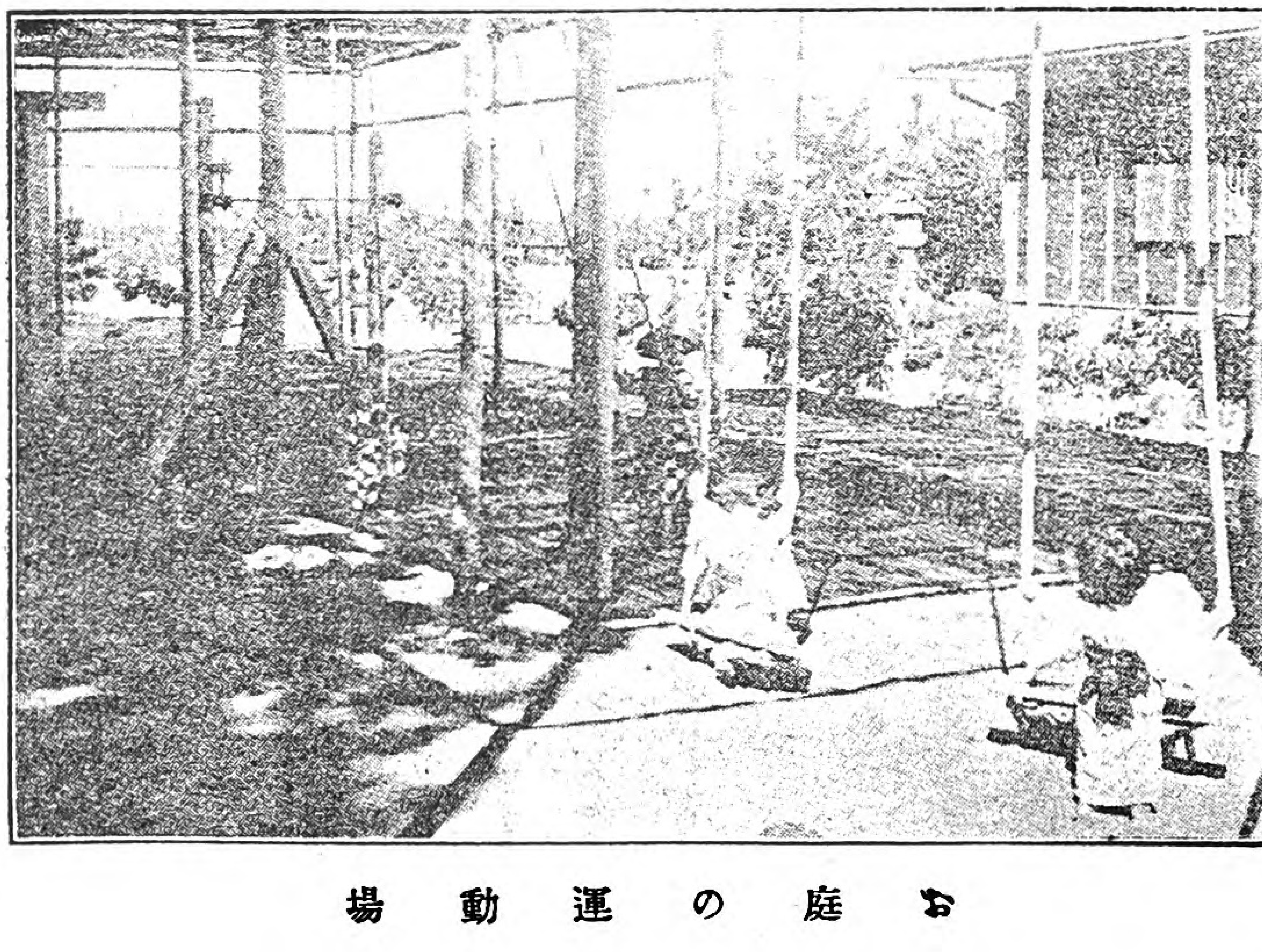
私はそれを見て一言したいと思ふのである。今茲にその人の生活に於てその結婚が幸福を與へ、人生の目的に叶ふものならば、いかにもよろこばしい事であるが、もしも幸福を與へず、人生の目的に反するやうな場合には、その結婚は決してよろこばしい事ではない其のやうな場合に人はわざ〱苦勞してまでその結婚をしなければならないと云ふ理由はどこにもないのである。結婚はたゞ幸福なる生活の手段にすぎないものである。

結婚がその人を不幸にみちびくやうな場合に、誤解された道を歩くと云ふ事は決してよろこばしい事ではない。

結婚に對する若き人々の思想が今一層正しく、あやまりのないやうになることは望ましき限りである。

▲虚榮心は婦人の位置を落す

第三には（これを經濟の獨立のうちに入れてもいゝやうなものであるが）婦人は婦人自らの實力に相應したる生活を營なければならないのである。男子も亦さうであるが、今日の場合特に婦人はその點をかへ



お庭の運動場

りみられたいと思ふ。婦人に、實力相應の生活をする事が當然であると思ふ考が強くなつたならば、今後の社會はどれ程改善せられてゆく事であらう。

婦人は虛榮心の權化とか云ふ事であるが、その虛榮心の根も亦、自分の實力を知らない生活をするところにあるので、虛榮心――卽ち、自分に相應した暮しをしない者が多い間は、婦人の獨立は得て望むべからざる事である。又婦人の位置も高められる事はないのである。

虛榮心にも樣々ある。金があれば位置の低い人であつてもそれに嫁入つて、生涯華美な生活をたのしみたいとのぞむ婦人もあらう、金はなくとも位置の高い人と結婚して、夫の影によつて、名譽心の滿足を得やうと焦慮する婦人もあるであらう。或は金はなくとも、位置はなくとも世にもてはやされる大學者、政治家などの夫人たらんとして、徒らに雲を攫むやうな願を立てる婦人もあるであらう。

虛榮心に囚はれたる婦人を觀察すると、まことに憐れむ可く笑ふべき事が多い。

▲榮華と引き換への結婚

然れども私は、人が贅澤をするのを強いて反對をする事はしない。何故と云ふにその人に於て世間から非常な收入があり、贅澤によつて故障を感じないといふのであれば――つまり實力あつての贅澤であるならば――それは今日の場合、(今日と云ひます)致し方のない事である。

玆に一人の婦人があつて、多くの收入があり、自分にそれ丈の力があつて贅澤をするものがあつたならば今日それを反對をする事をしないであらう。

其の樣な遣り方がいゝのではないが、兎に角實力があつてそうするのである。他人の寄生蟲となつて贅澤をするのではないから其の點を以てしては致し方がない事である。

然るに私達が今見るところの婦人は決してそういふ婦人ではない。さながら寄生蟲の如きものであつて、

他人によつて、うまく〳〵と榮華の汁を吸ひ占めやうとするのである。結婚をひきかへに榮華を覗ふ横着な考へである。

婦人の奴隷的な地位が今も猶高まらぬのは、その原因は同じ處に歸着する事が出來るのである。眞に獨立を得やうとする婦人は、一日も早くこの渦中から飛び出して來なければならない。

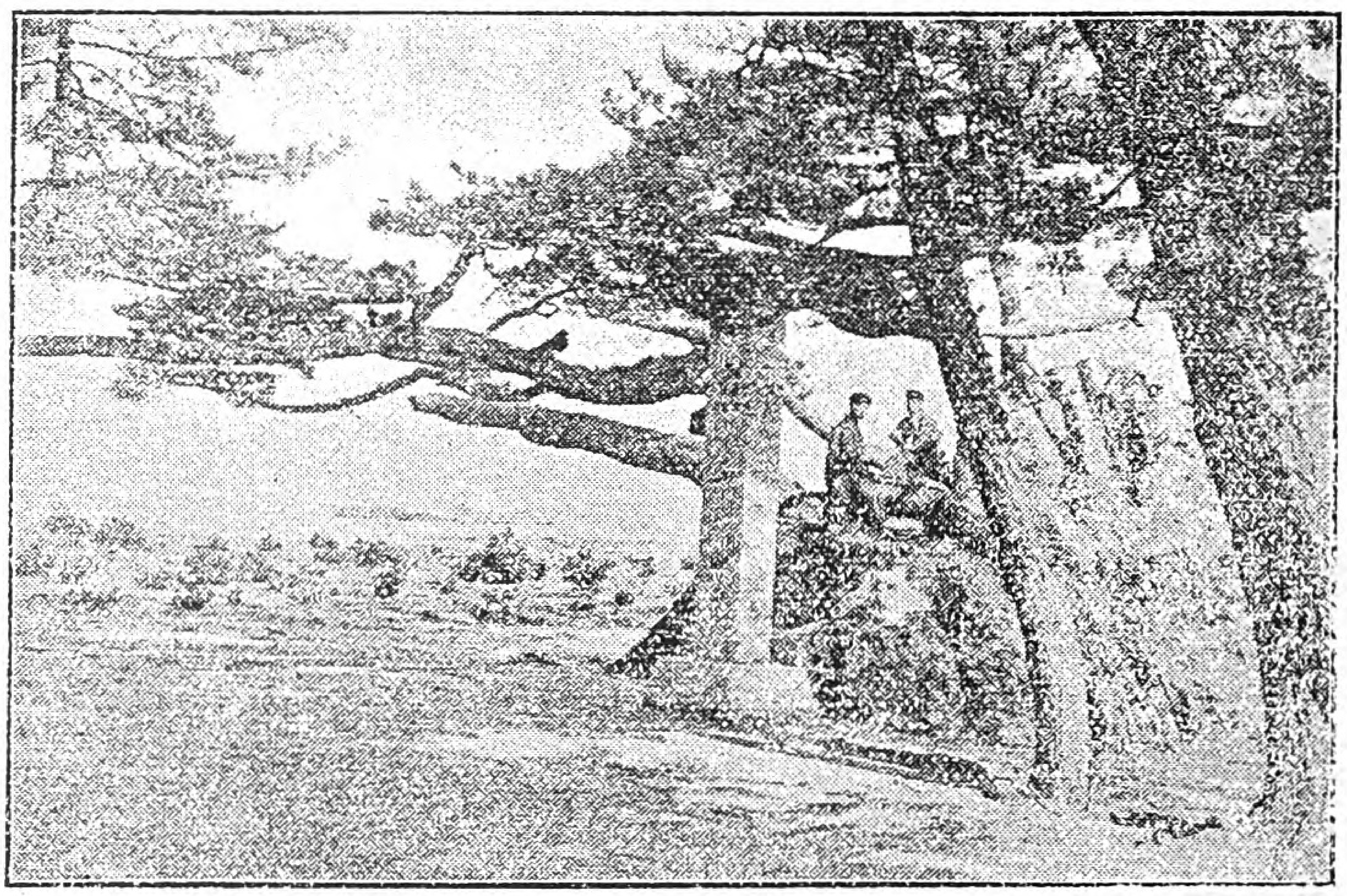
自分に相應の生活をすると云ふ觀念の大切なことはすべての人に共通の點であるが、特に婦人には目下の急務であるといつてよいのである。

▲我が娘の敎育の順序

次には翻つて、最初の經濟の問題に立返るのである。私は今自分の女の子を敎育をして居る。私の敎育の方法は斯様である。女の子に一番初めにやらなければならない事は、自分の腕で食つてゆけると云ふ經濟上の獨立である。私は生活の獨立をなし得る資格を自分の女の子に與へたいと思ふのである。

けれどもそうする事は敎育上第一に重要であると云ふ事にはならない。たゞ時間から見る時に、先にしてやらなければならないと思はれるのである。

生活の根據があると認められた上で、敎育のほんとうの目的である、吾々の天性の力なり、道德なり、身體なりを、出來得る限り發達させ、親に資力のある限りは敎育してやらなければならないのである。是れは時間からいへば第二であるが、敎育の順序か



伊豫櫻井町の海岸

ら云へば、正に第一に重大なる事である、全體人は男女に拘はらず自活の出來る人でなければ結婚をしてならないものである。結婚の資格の尤も重なるものは相互の自活し得るや否やの點にあるのであつて、自活力のないものが結婚をする事は、たゞ自分が困るばかりではない、引いては社會にまで厄介をかけると云ふ事となるのである。

勿論家に確にいつまでも動かない財産がある人は、それは別であるが、まづ普通の人々、是れからの中流社會の生活をするものにとつては、その自活の準備の出來た時を以て結婚の年齡としたいものである。其の中に結婚年齡は、自ら自活の準備の出來る頃の年と定つてゆくことゝなるであらう。

▲生活に遮られたる戀愛の失敗

經濟的の獨立のない婦人が、それがためにどういふみじめな目に遇はねばならないかと云ふ事を話したい大體三つに別けてお話をする。

第一は、經濟的の獨立をなし得ない婦人——男女ともに困難を感ずるのは結婚の場合である。單に小説の材料にあるばかりではない。實際世間には往々ある例であらうと思ふが、今日の青年男女のうちには、自活する力などは勿論ない、學生の時代に於て既に結婚の問題を考へるものがある。

双方の情が調ひ、いよ〳〵兩親に相談をすると、兩親は痛く反對をする。如何に嘆願しても頑として應じないと云ふ事はよくある事である。

勢ひ生命を投げ出してもと思つた熱烈な戀愛も、親の一言のもとに拒絶せられて泣寢入になつてしまう事が多いやうである。

何故泣寢入になるのであるかと云ふと云ふ迄もなく親の言に從はなければ學資を送つてくれない、又親に財産があればそれを分配して貰ふ事が出來ないからである。兵粮の道を斷たれては如何とも致力がないので折角思ひ立つた事も思ひ棄てねばならないのである。

表面から見ると何でもないが、若い間のさういふ戀

愛の失敗は其の人生涯の打撃である。斷えず附き纏うてその感情を苦しめる問題であり。其の事業の上に影響する處も深いのである。

然るに此の戀愛の失敗を救ふものがある。それはその人に生活の獨立があつたならば、決して親のために破壞し去られるには至らなかつたであらう。

▲情死の裏面は斯うである

男女相方に經濟上の獨立をする力があつて此の樣な問題に立至つた時、かりにさう考へると、如何に親の反對があり、困難が周圍にあつたにしても、さほど迄無雜作に結婚の目的を打ち壞されると云ふ事はなかつたに相違ない。如何に兩親が頑固に反對をしても、經濟的の權力が若い男女にある場合には決して泣き寢入にしてすます事はしないであらう。自分で自分を養ひ得ると云ふ強い自信があるならば、自分の思ふ通りに出來ないと云ふ事はないのである。

殊にある年齡からは自由の行動を取つていゝとは法律でも許してある位であるから、十分頑張つてゆく事が出來る。それが出來ないと云へばまつたく經濟の問題である。

若しその二人に非常に熱烈なる戀愛があるにも拘はらず、經濟上の問題が解決がつかない時には、進退きはまつた結果、遂に死ぬより外はなくなる。

情死は戀愛の熱烈を表明してゐるやうであるが、裏面を見ると、いかに生活力のないもの丶戀愛が悲劇であるかと云ふ事を語つて居る。

元來情死は日本特有のものであつて、外國には殆んどないと云つてもいゝ。

外國では男女の青年は、兩親の干渉を受けずとも生活をする事が出來るやうになつて居る。殊に日本の男女のやうに經濟上の獨立の出來ないうちに戀愛を考へるやうな輕卒な事をするものはないのである。

從つて情死をしなければならないやうな困難な境遇におちゐる事はないのである。

此れに依つても經濟上の力のないものは、男女ともにその人生の道途に於て、既に苦しみを味はなければならない。生活の獨立はまことに幸福の源泉である。

（つゞく）



不如歸の傳說

文學士　高木敏雄

不如歸と云ふ鳥は、支那に多いだけ其傳說も支那に多い支那の傳說では、人では皇帝、國では蜀の國が最も不如歸の傳說に關係が深い、日本では然う澤山もないが、多くは一つ話が本で、少しづゝ違つて傳へられて居るやうだ。此處に私の知つてゐる話を二つ三つ擧げてみやう、話は皆岩手縣の傳說である

一

岩手縣の或るところに親も兄弟も無い、たつた一人の孤子が有つた。其邊の村の長者の許へ馬子に雇はれて、毎日朝早くから馬を引いて、野に山に出掛て行つた。

或る時、例の通り馬を引いて野に行つた、其の日は空が靑々と晴れ渡つて、雲雀は高く囀り。野には花が亂れ咲いて居た。

馬子はあまりに春の景色が美しいので、夢見る樣にうつとりと眺めて居た。するといつのまにか馬の姿が見えなくなつたので、馬子は大いに驚いて探して見たがどうしても見えない。

それから馬子は、泣く〳〵長者の許へ歸つて來たが長者は其れを聞いて、馬を探して來ない限りはもう家へも入れる事はならんと言ひ渡した。

馬子はすご〳〵と長者の家を出たが、矢張り馬の行方が分らないので、黄昏れて行く春の野に一人立つてしく〳〵と泣て居た。

フツト空を見上げると一羽の鳥が鳴きながら西の方へ飛去つて行つた。



馬子はそれを眺めて、あゝ自分も、もし鳥で有つたならば、彼の鳥の様に思ふ所へ飛んで行つて、馬の行方を探さうものをと、一心に鳥の飛んで行つた空を仰いで居た。

そうするといつか知らぬ間に、馬子の姿は鳥と化してしまつた。孤子の鳥は空高く上つた。そして、

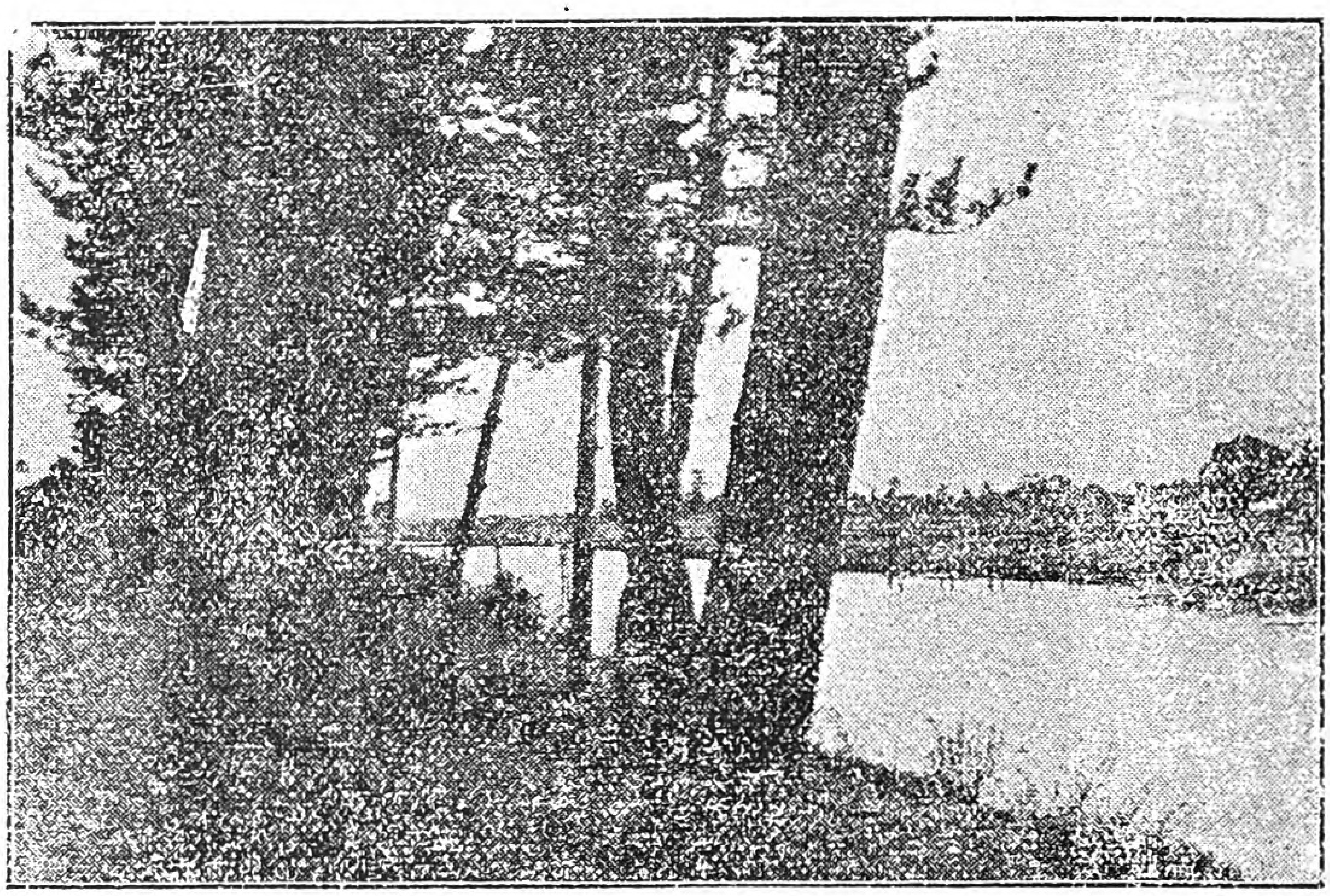
アッチヤトンデイッタカ

コッチヤトンデイッタカ

と毎日血の出るやうに鳴きながら飛で居る。

二

岩手縣の或る山里に二人の兄弟があつた。弟は大變に兄思ひで、毎日山へお芋を掘りに出掛た、そして其の掘つて來たお芋は兄に眞中の美味いところを喰させて、自分は後先の不美いところを喰て居た。



ほとゝぎす一二の橋の夜明かな

其れを兄は邪見にして、何でも弟は自分ばかり美味いところを喰て、兄の自分には後先の細い處を喰させるに違ひないと思つて、とう〱弟を殺そうと考へた。

或る日の事、弟の喰物入を見ると中には自分の思つて居たのとは違つて、實に〱不美味ところばかり入つて居た。

兄は大變に改心して、どうかゆるしてくれ、ゆるしてくれと悔悲哀のあまり鳥になつてしまつた。そして、

オトツトコヒシ

オトツトコヒシ

と鳴て飛びまはつて居ると云ふ。

三

岩手縣の或る所に二人の兄弟が有つて、弟は兄を大切にして居たが、兄は却つて弟を邪見にして、弟が山へ行つてお芋を掘つて來るのに、自分は家に居て遊んで居た。

此の國では芋の不味いところをガンコと言つた弟は其のガンコばかりを喰べて、兄には番美味い處をたべさせて居たすると兄はそれを疑つてどうしても兄に、ガンゴを喰べさして、弟は美味い處ばかりを喰べて居るのだと、云つて非常に責めた。

何と辯解しても兄が聞きいれてくれないので、とうとう弟は鳥になつてしまつた。鳥になつた弟は、

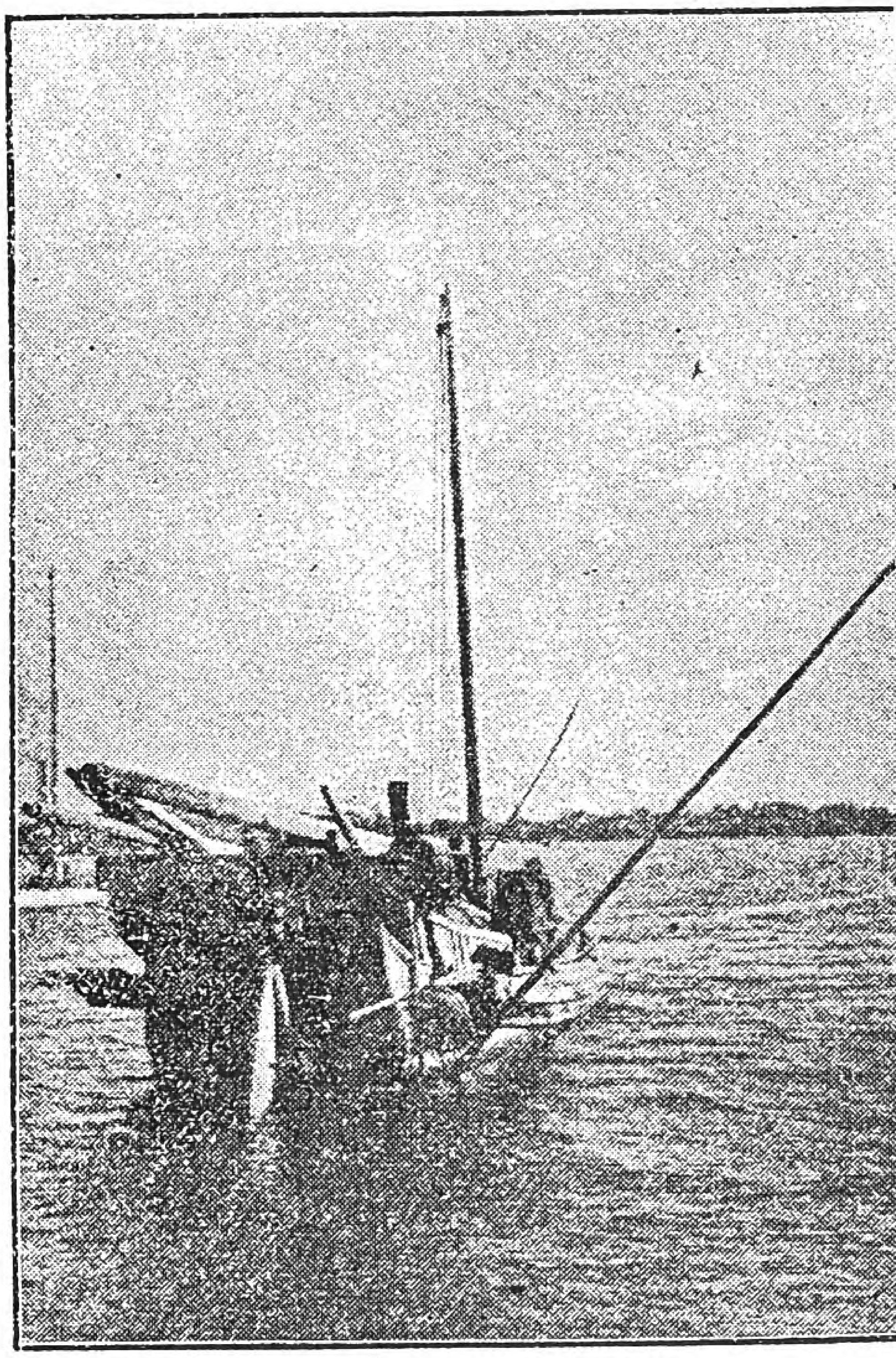
ガンクウ　ガンクウ

と一日に四萬八聲鳴なければ自分の氣がすまず、兄に其の心が通じないと、毎日四萬八聲鳴て居つた。

其うちにきつと人が鳴く眞音をするので、又初めから鳴き返すと、とう〳〵聲を破つて血が出る樣になつてもなほ、

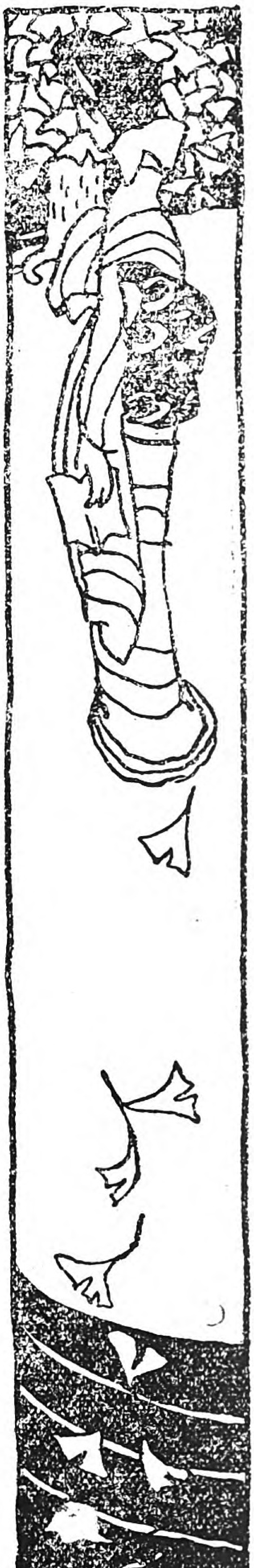
ガンクウ　ガンクウ

と鳴て居る。



海上に杜鵑を聞く

時鳥は昔蜀の國の帝の御名を杜宇と申し奉る。蜀の都を出で〻旅にてみまかり給ひ、其御魂魄ほとゝぎすに化し給ひて、鳥となりても國や戀しくましく〳〵不如歸…不如歸と鳴き、旅人までを我が方へ歸らんにはしかじとすゝめ給ふ。（あだものがたり）



群集と孤獨（上）

文學士　倉橋惣三

✿花盛りより人盛り

人間には種々な自然の慾望があるが、その中に多勢よりあつまりたいと思ふ慾望を持つてゐる。

假令ば梅が咲くと人がよりあつまる。櫻が咲くと人がよりあつまつて至る所に混雜してがや〳〵して一日を暮してゐる。花見と云へば大概さうした者である。然し乍らその一人々々についてあなたは如何云ふ目的で此處に來られたのであるかと尋ねると、或る人は花を折りに來たと云ふのもあらう。或は酒を飲みたいと思つて來たと云ふのもあらう。一人々々について云へば皆意識したる目的をもつてよりあつまつて來たのは云ふ迄もない事である。

然し實際に當つて、其場に寄り集つてゐる人々を觀察して見ると、眞實に花を見てゐると云ふのは稀のやうである。多くの人々は花に醉ふと云ふよりも、酒に醉ふと云ふよりもより多く人に醉ひ樂しんでゐるものである。花盛りよりも人盛りを見て花見の快を呼んで



令孃すがた

居ると云つた方が穿ちたる觀察であると思ふのである中には全然花そのものを眺める事を樂しんで出掛けて來た人もあるに相違ない。さういつた風流な人の眼からは、人を樂しんで花見に出かける者があると云へば、俗であると云つて卑しむ事であらう。然し一般の花見の人の人情について云へば、前云つた樣に花を見るよりも寧ろ人を見る爲めに集つて、滿足して歸ると云つた方が適切である。

❀群衆を喜ぶ人の心

音樂を聞きに云つた場合にもさうした心理作用がある。芝居を見に劇場に行くのも、繪を見に展覽會に行くのも多くの人は皆暗默の中に人の多いところに集まらうとする慾望をもつて出掛けてゆくと云ふ事が云はれる。

例令特殊の目的を持つて寄り集つた人々であつても亦さうである。人の寄り集りを喜ぶ傾向は誰れにでもある。若しも其の日入場た劇場、或は展覽會に數人しか入場者が無かつた時にはどうであらう。其の場合入場者の少いと云ふ事は寧ろ目的には都合が好いにも拘はらず、妙に人が少ないと物足りなさを感ずるのは誰れも經驗があるに相違ない。假りに其の日は滿員であつて、入り切れないで失望して歸つた人もあるといつた盛況であつたとすると、さう云ふ混雜は肝腎の音樂を聞き、繪を見ると云ふ事には極めて不便な狀態であるに拘はらず、どうも云ふに云はれぬ愉快な心

持のするのが人情である。

此の心理作用を以つて見ても、人が非常に強い自然の力で群衆を要求してゐると云ふ證據にならうと思ふ

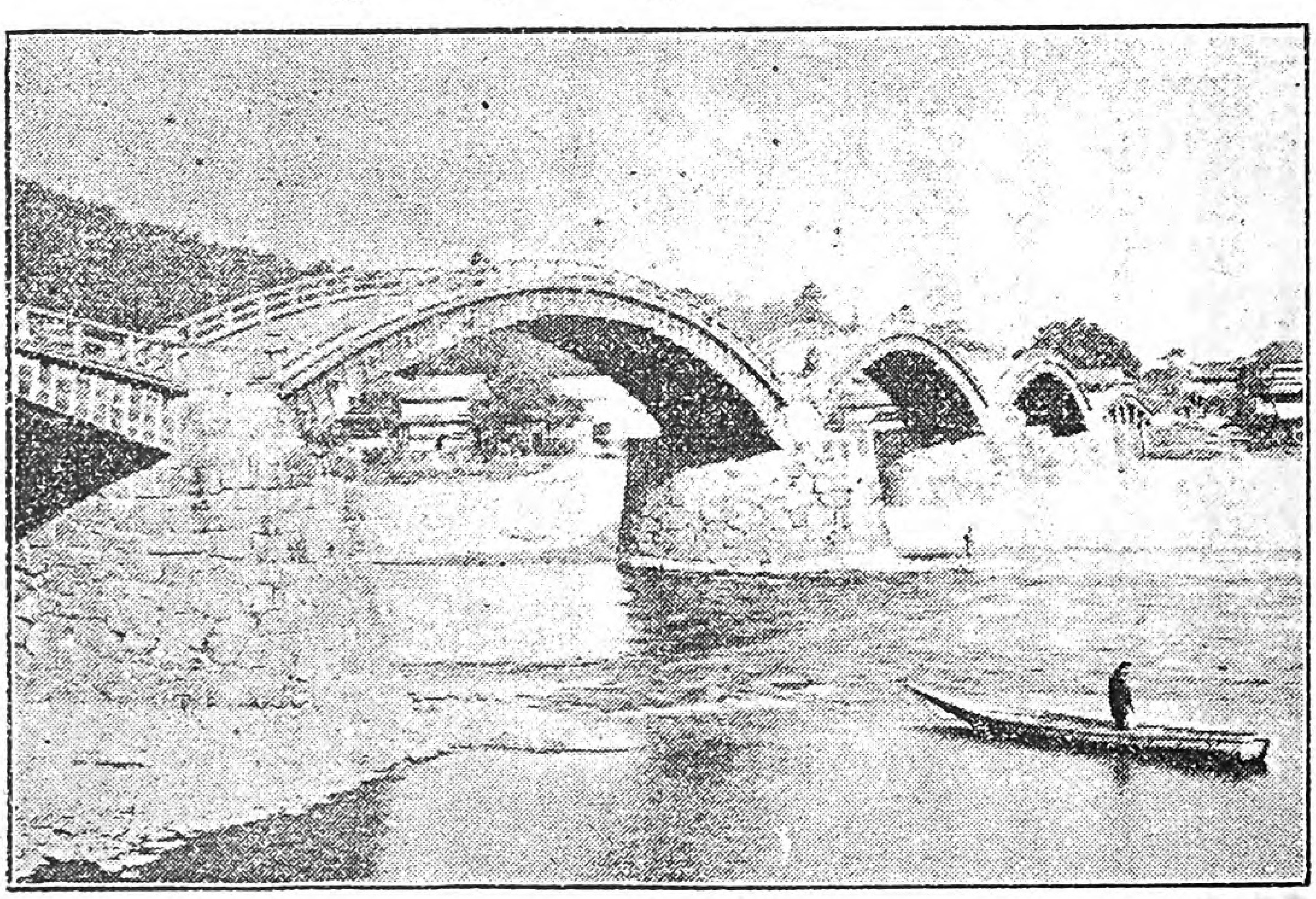
❀集つた計では物足りない

此の群衆を要求する人間の心理作用は猶深く其の中に詮索を進めて行くと次のやうな事を認める事が出來る。即ち唯寄り集ると云ふ丈では滿足がされない。その寄り集つた群衆の中に自分の同類の者を發見したい自分と同じ分子を其の群れの中に求めて滿足しやうとする慾望があるのである。

吾れ〳〵人間には常にこの慾望があり、この滿足を求める心がある。其處から出發して世間には同志者と云ふものが出來てゐる。此れは一定の目的の下に結ばれたるものであるが他に何の目的もなく、唯暇であると云ふ處から寄り集る人々がある。田舍の村に行くとよく目的もないのに、忙しい仕事をさしおいては集合する事があるのを見る。たゞ集ると云ふ事を樂しんで居るのであつて所謂同好の士と云ふのも此の類である

又地理的な條件によつて同鄕人と云ふものが親しさを味はせるものである。さう云ふ譯で兎に角、その集合の目的が明瞭不明瞭に拘はらず又其の集合が永續的であると否なとに拘はらず、少しでも同じ條件を持つてゐる人々は、常に寄り集つて、何等か樂しみを求めやうと

周防錦帶橋



する慾望が人には生れながらにしてあるのである。群れと云ひ仲間と云ひ、或は團體と云ふものは、此の點に根ざしを持つて居るのである。

普通吾れ〱はその日常生活に於いては無意識にその慾望の滿足を得てゐる處から心付かずに居る迄であつてわざ〱その事を取り立てゝ話をすると、奇を好み新をてらふやうな感じさへ起るのである。

然しながら今一層鮮明にその事を考へて見たいのである。

旅中の孤獨感

不斷は心付かぬ吾々の慾望も、一度滿足を得がたい境遇に置かれた時にそこに初めて如何に強い要求であつたかと云ふ事が解つて來る。群衆を求める自然の慾望も亦さうである。

我れ〱が旅でする其の經驗に徵しても明である。一人旅の宿で座つて居ると如何に同胞を求める衝動が強烈であるかと云ふ事が解る。常にはさう云ふ慾望が

あり、そう云ふ衝動が我れ〱の心理にあると云ふ事は一向氣が付かなかつたのであるが旅にあつては最も明瞭に發見するのである。

旅で味ふ一人の寂しさは、まことに苦しいものである。別に旅費が缺乏したのでもない。又土地不案內と云ふ譯でもない。唯々一人ゐるのが辛いのである。

そこで遂に宿屋を出て、人の多く集る所をさがしてその方に行つて見る。珍らしい風俗や習慣を持つた土地の人々の混雜の中に交つてゐると辛うじて苦しかつた旅の侘しさを忘れる事が出來る。

然し其の賑かな人だかりも暫時してゐると、却つて寂寞を增させるのである。何故と云ふに唯眼の前に多くの人の寄り集りを見ても、その寄り集りの人々と自分との間には何の連鎖もない事である。多くの人はそこにあつても自分は何等の關係も持つて居らない。卽ち自分が其の群れの一人でない、其の團體の一員でないと云ふ事が淋しさを催させて來るのである。

群衆を求める心は、やがて群衆の中に自分を求める

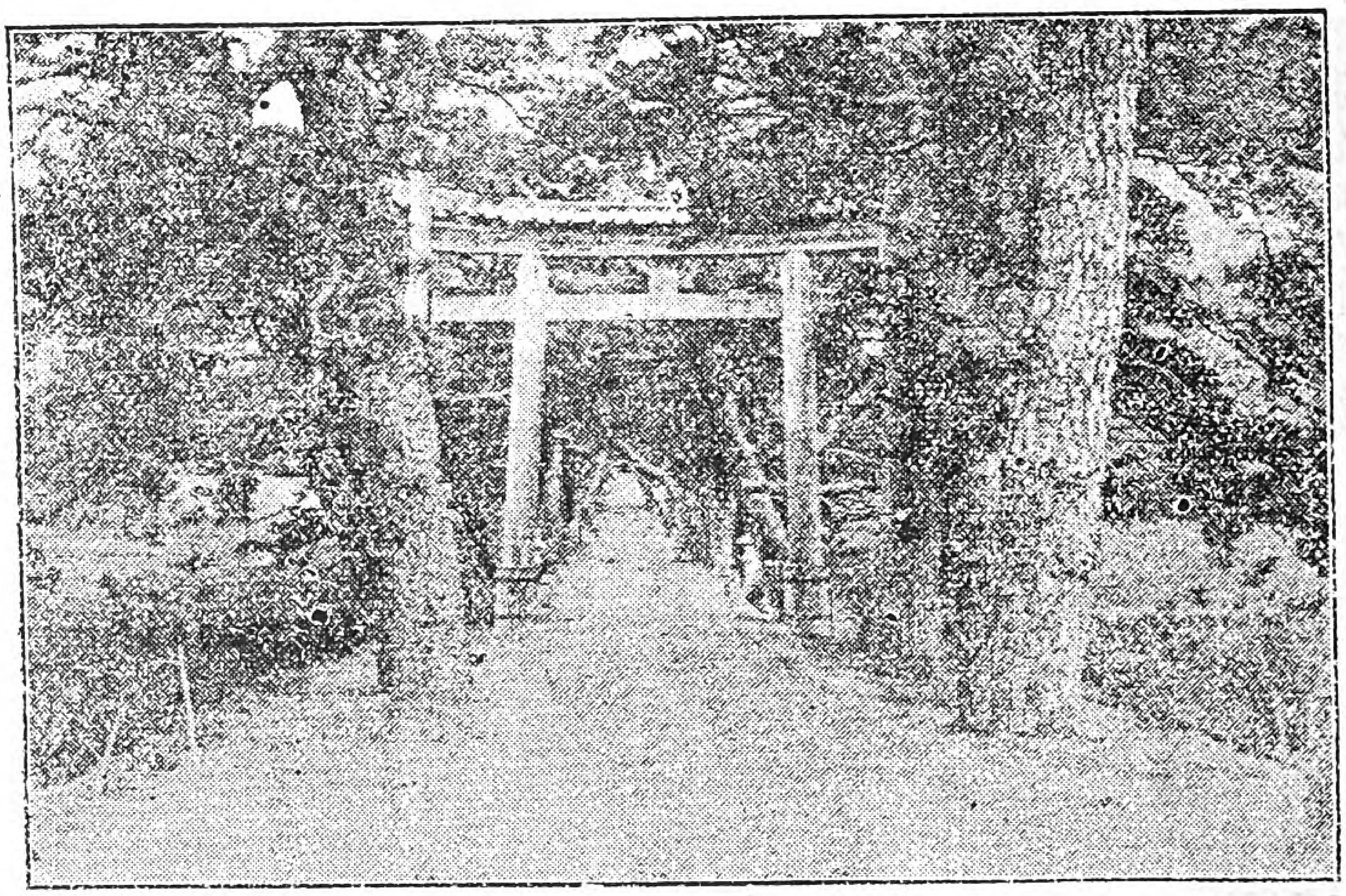
慾望である。その滿足を得られぬ以上は、依然として苦痛を感じなければならないのである。

❀ホームシックと囚人生活

ところが假りに其の群衆の中に知れる人を發見したとしたならばどうであらう。それは如何云ふ一瞥の人でもいゝ。汽車の中で馴染になつた顔でもいゝ。或は數年前に僅に知つて居たに過ぎない程の人でもいゝ、たゞ知つてゐた人に逢ふ事があつたならばその滿足はどれ程であらう。

決して其の人に依つて旅費の缺乏を心配をして貰はうと云ふのではない。また道案内を頼まうと云ふのでもない。さう云ふ打算的な慾望があるのではなく、唯話をする事が出來ると云ふ條件だけでも、云ふに云はれぬ滿足を得るのである。卽ち自然の慾望の滿足を贏ち得て漸く孤獨を忘れる事が出來る。吾々の自然慾はそれを禁壓された時に於て限りなく強く胸を襲うて來る。國を離れて慣れない土地に來て居るものが、其處に所謂ホームシックを起すのも亦これに源因して居るのである。

囚人などの生活も此の種の懊惱に尤も苦しむのである。ホームシックの場合には空氣の壓力の變化或は水の變化によつて、純生理的にさうなるのであると云はれない事もない。然しながら私の見る所を以てすれば、それよりも一層强い源因は矢張、群衆を求める自然慾の禁壓である。



出雲大社中の鳥居

私はその心理上の苦痛の方に大きい源因があると思ふのである。

✿自然的衝動の力

群衆を求める心を充たされず、たゞ一人でゐると云ふ事程多く苦痛を與へるものはあるまい。其の苦痛に壓倒せられて犯罪を犯す人もあるのである。囚人などにありては、確かにその感情を荒涼ませるものは此の禁壓の結果である。其の他多くの例をあげれば遑もないが、畢竟寄り集りを好むのは人間の自然的慾望であると云ふ事を一面から證據立てる事が出來る。

人間本來の慾望に從ひ、都合よく群衆と自分とが混和する事の出來た場合について云ふと、それは唯空間的に集つたと云ふのではなくして、一定の關係が生じ一定の交渉が起つて來るものである。

群衆の裡にあつて、人と人との間に關係が生じ交渉が始まる事となるとそれはやがて團體と云ふ形である既に團體となるとそこには秩序が生じて來る。又禮

義を生じ法と云ふ事も自ら起らねばならない。人と人とが寄り集つて種々の關係を生じるのは面倒なものである。厭な事も相談に乘らなければならないし、時には自分の意を枉げてしなければならない事もある。凡て世間に於ける人と人との交渉は苦痛の多いものである。

然し其の面倒、其の苦痛をゐへて意にしない程に、人間は團體の中に樂しみを求めやうとする自然的衝動を持つて居ると云ふ事が云はれる。而して自分を中心として上には先輩に對する關係、下には後輩に對する關係、横には同輩に對する關係を結び、其の多くの交渉の中にあつて生活をしてゐる、吾れ〳〵はさう云ふ生活をしてゐる者である。

✿社交性は本能である

再び繰り返して云ふと人と人との寄り集りは窮屈なものである。然し其の窮屈を忍ぶ心は群衆を喜ぶ心理作用の中に含まれて居るのである。

吾れ〲が世間にあつて多くの人と結ぶ複雜な關係を眺めると、後から其の關係をつけられて行くものゝやうに思はれるがさうではない。寄り集る事を好む心が吾れ〲にあつて後に自然にそこに到達したものに外ならない。

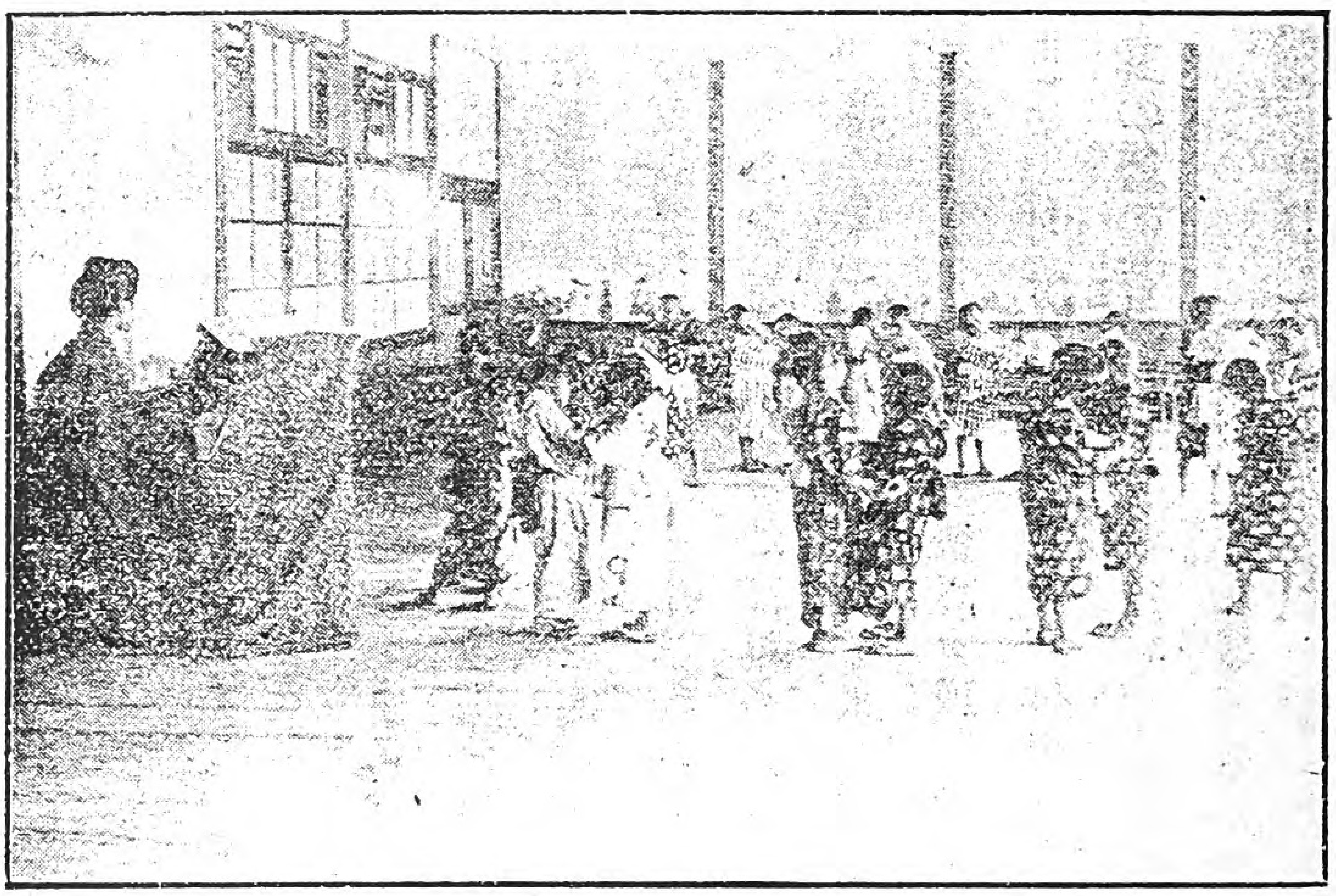
殊に人はその團體の外に自分を於いて、自分と團體との關係を考へる事をするものである。團體と自分との關係を見て、これを好みこれを愛する、そこに團體精神と云ふものが生じるのである。

此の團體精神は社交性に極めて單純なる發現であるが、此處ではこれだけを社交性として研究を進めたいのである。

社交性と云ふと普通世間に云ふ社交、交際と云ふ言葉と混同する恐れがある。それはこゝに云ふ社交性と全然かはらないまでも區別するのが便利である。それで私の說く所のものを本能的社交性と云ふ事にする。

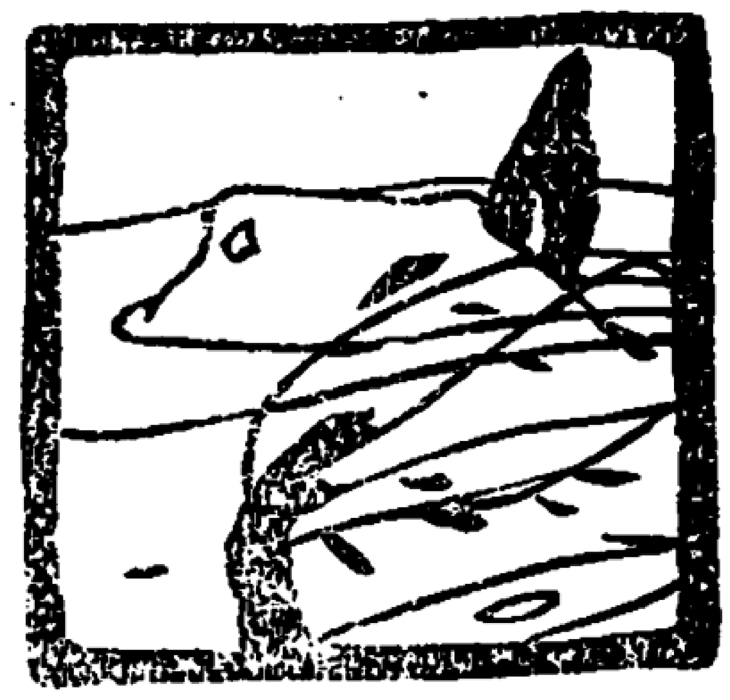
普通につかつてゐるものは本能に相反したものである。然に社交性は全然本能である。それで本能的社交性と云ふ定義を便宜上下して置く事とする。

偖て本能的社交性の說明は前に述べた通りであるが、こゝに此の社交性が違常の狀態にあつた場合はどうであらうか。その方の研究をしたいと思ふ。(つゞく)



無邪氣なダンス

記者曰く　右のお話は四月十二日通俗心理講話會の席上に於て『社交の心理及び教育』と云ふ題下に倉橋文學士の講演されたるものなるが、其味多き講演なれば、特に同氏の快諾を得て本誌の讀者にも一讀を乞ふことゝせり。

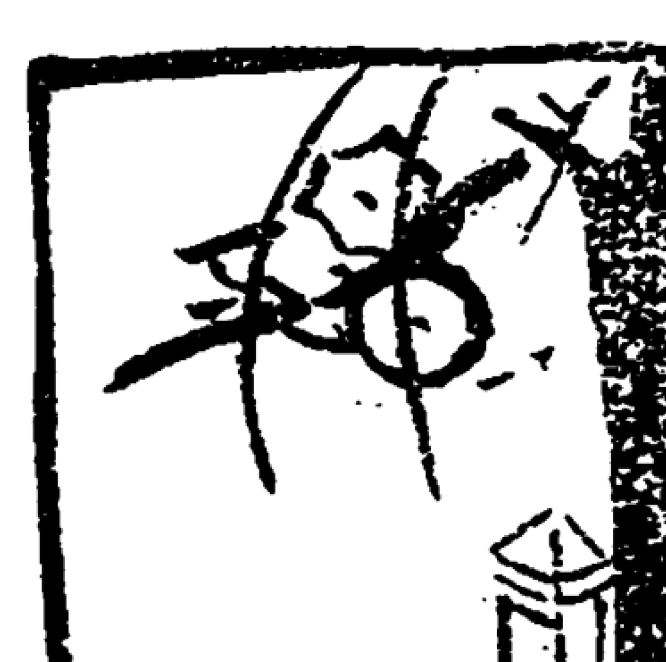


嚴格に躾けられたのが私の幸福

理學博士三宅驥一氏夫人　三宅逸子

私は六人の同胞の一番姉でございまして、私の直ぐ下の妹は昨年學習院女學部を卒業て、約婚のありました海老名(一郎氏)と申す方に嫁付いて居りま　。今年八歳になる妹が、五歳の頃から粕谷の叔父(蘆花氏)の許に貰はれて居ります外は實家に居るのでございます私の母は父と同じ熊本でございまして、極く年の若い頃に嫁付いて參りました。武士の家に生れました事故華美な事は嫌ひ、放縦の無い事は嫌ひといつたやうに誠に嚴格に躾けられました方で、今も其の儘の昔氣質でございます。

父(蘇峰氏)は御存じの通りいつも多忙い身體で、殆んど席の温まる暇もない程でございます。私が實家に居りました頃でも、父に逢ふのは僅に朝と晩の一時でございました。それですから父から取り立てゝどうと申す教訓を聞くと云ふ事は先づ無かつたと申さねばなりません。讀書などについては、父の口から斯く斯くと申された記憶はございません。女學部のお書物の外には雜多な讀書は致さなかつた方でございます、それよりも家で居まして母の昔氣質を見ならつて、同胞の世話を致し、お縫物などをするのが樂しみでございました。外出はまつたく致さなかつた方で、時々他家樣の方が自由に方々にお出掛けになるのをついお羨しく思ふ事もないではありませんでした。然し今になつて考へて見ますると嚴格な躾けを受けたのは良い事であつたのだと氣の付くやうな次第でございます。



私の祖父祖母は九十歳からの高齢となつて居ります

が幸ひにも壯健で逗子の方に暮して居ります。父はいつも忙しい身體でありますが土曜日になると必らず逗子の方に祖父母の機嫌をたづねに參るのでございます如何にしても出掛けられない時には、手紙を出したり使を出したり致して、長い間怠る事がないのででございます。

別にかうと申して、家で教訓を致された事はでざいませんが、父と母との爲る所を見ますると、矢張不言實行であるのだと存ぜられます。

私が學習院に入學りました節には、あらためて質素に致すやうに申し聞かせました。お友達の方が絹のお召物ならば自分は木綿の召物と致し、萬事華美の風に染まぬやうに申した事でありました。父が常に人に對つて申す事は正義と云ふ事でございます。人間は如何なる場合にも正義を忘れてはならない。正しいと云ふ事に反くやうな言語動作をしてはならないと若いものに向つては、此の事を繰り返すのでございます。



樹蔭の一休み

私が娘の頃に躾けられた事と申しては先づ只今申し上げた位で他家樣のお孃樣とそう大した相違はございませぬ。唯一層嚴格であつたと申せるのでございます。女は何を於いても柔順の德を忘れてはならぬとは、幼い頃から私の耳に常に離れる事がないのでございます。近頃は『新しい女』とやら申して、大分偉い女の方がいろ／＼お出になつたやうでございます昔氣質な嚴格い家庭に育ちました私共はたゞ／＼驚いて拜見致して居る樣な事でございます。



讀書力と習字法

十五銀行頭取
園田孝吉氏夫人　園田銈子

私共は英國に永年居たといふもの丶、只英國で日本の家庭を持つたといふに過ぎないのであります。永年あちらに居りました中に、これでこそ歐米の婦人は進歩するのである、又國が發展するのであると、非常に感じたことが御座います。其印象は他の珍らしい澤山の事柄よりも一番深く、鮮やかに私の腦裡に刻み込まれましたのが、それは歐米婦人が讀書心に富むこと、やがて研究心の盛んなことで御座いました。

彼地の婦人は始終何か讀んだり、書いたりして居ります。そして自分の趣味に向いたことをいつも研究して居りますのは、感心なもので御座います、ですから頭腦が實に豊富で、何にまれ、智識が廣い、從つて、物事に當つても判斷力、思考力の正當なのはあたり前で御座います。殊に讀書に依つて養はれる趣味の高いことは、やがて家庭を持ち、人の妻となり、母となつた時には、著るしく現はれて來るのでございます。

私の識つた婦人、殊に讀書の興味を持つた歐米婦人は、日本の或婦人の樣に、始終何か知ら、不平顔をして煩ひくらすといふ樣な人を見ませんでした。

それで私共では子供などにも、是非日本といふ限つた天地でなく、外國へ出ても十分家を持つて交際も出來、人をも使へるだけの、素養が必要だと感じて、子供の內から教師も雇ひ、教師にも通はせて外國語の研究や、風俗事情と云ふやうなことの智識を與へておきましたが、幸ひにも何れも外國へ出ても、どうにか家庭を持つて行かれるやうであります。



それからもう一つは習字と裁縫で、この二つは是非とも十分に習はせて置かねばならぬと思ひます。この二つが不十分でありますと、當人は一生一方ならぬ不自由な思ひをしなければならず、且つ又縁付いてから夫の代筆でもしなければならぬ砌に、筆跡がよろしくないと、夫に耻をかゝせることになります。

ついでだから申しますが、今日の若い方は字が上手に書けません、官立でも私立でも學校の時間は他の學科が多くを占めて、習字の時間が少ないからで御座いませう、昔風の家庭に育つた方は修むべき學科も少なく時間も十分にあつたからでせうか、正確に上手に字を書くことは今の方よりも勝れて居ります。

私は日本に歸りましてから、書を習ひたいと思ひまして、四五年前から三井五香氏に就いて今だに稽古して居りますが、其れが不思議ぢや御座いませんか。私の知人の外國人が、五香さんに就いて書を習つて居られましたこの方が、あなたが書をおやりになるなら、三井五香さんがいゝでせうと申して就いて居りますが日本人の私がどうでせう、外國人から師匠を見つけて貰ふなんつて不思議ぢや御座いませんか。一體筆には器用不器用、つまり才筆と鈍筆とがありまして、才筆は鳥渡見ても、綺麗で上達も早う御座いますが、鈍筆は見た所もきたなく、進歩がぬるいもので御座います

私が極く鈍筆の方で主人から始終「お前は鈍筆であるから、人より幾倍も勉強しなければ上達しない、出來上れば誠にかたいもので、才筆に名人なし、鈍筆に名人ありであるから、人よりも精出して勉強しなければならぬ」と言はれて居ります。それに書はよほど私の性質に叶つて居ると見えまして、何んな不快な時でも、筆をとつて紙に向ひますと、今までの不快もどこかにとんでゞも行つたやう、晴々して夢中になるので御座います。

書は一つの技術ですが、勉強としては讀書が最も大切です、私共が英國に居りました頃から、英國の婦人が讀書熱を持つて居ることには感服して居りました。日本の婦人ももつと讀書をせねばならぬと思ひます。

訪問みやげ(二)

婦人記者

＊＊＊

男爵濱尾新氏夫人　濱尾作子

▲樂しいことは●●●●●　讀書の外にございません、毎日晩餐を終りました後などでは、大抵讀書に耽ります。本は歴史ものと和歌の類を好み、成るべく多く讀みたいと思ひますが、中々出來ません。しかし讀書は私の一番好むことで、これを除けば、何も樂しみがありません。

＊＊＊

徳富蘆花氏夫人　徳富愛子

▲樂しいことは●●●●●　自分の生活でございます、寶石や花電氣に包まれた、都の方から御覽になつたら、こんな生活を如何御思ひになりますか知らさぞや愚かな人哉とも思召すでございませうけれども朝まづ此雨戸をくりますと、何物にも遮られぬ太陽の光りが照り、偽りない人々に交はり偽りのなき生活をつゞけ、富貴を思ふでなく、權勢を願うでもなく、感謝と祈りに充ちた日を送つて行く事は、じつに私に取つては、何よりの幸福で御座います。主人がいつでも申します、女に謙遜の徳が缺けては丁度花に香がない樣なもので、色や形の美も皆無となつて了ふからと、それで、私は考へますの、本富に大きなもの——神の御前に跪づき祈られぬ人々は、何うも愛の貯蓄ないのではあるまいか、從つて、本當の意味の、心からの謙遜がないのではないかと。ですから女に謙遜の徳は誠に大切なものと存じます。

＊＊＊

東京音樂學校教授　幸田延子

▲樂しいものは●●●●●　音樂の外にありません、今の私に取りましては、音樂はたしかに心の慰めでもあり、樂しみでも御座います、お酒を上る方はお酒で心を慰められ、花や植木を愛せられる方は、花や植木を慰にして居られることゝ思ひますが、それで恰度同じやうに、私も此の音樂をば心の慰めに致して居ります。

**

跡見女學校講師 跡見玉枝

▲嬉しかつたことは 維新の時、上野の戰爭もすみ、出征した人々も次第に歸るやうになりましたが、私の父は歸つて參りません。そこで伯父(花蹊女史の父君)も心配し、種々手をつくしてたづねましたが、一向委しい模樣は分りません。さうかうする中に父の同僚の若黨が、父の武具一切を伯父の手許に屆けてくれましたので、ヤレ嬉しや、委細の消息を聞かうと思つてたづねました所が、其の同僚が死んだので、若黨には更に分りません。そこで伯父も、武具を送つてくるからには、屹度戰死したに相違ないから、何時まで歸宅を待つたとて仕方がない。ついては後の方法を講せねばならぬが、兎も角も私の家に居れと申しますので、私は伯父の家に預かつて貰ふことになりました。其の年も過ぎて翌年忘れもしません明治四年に、戰死したと許り思つて居つた父は偶然と歸つて參りました。其時の嬉しさ!!! 懐かしさ!!! まつたく夢のやうでありました。

**

三宅雪嶺博士夫人 三宅花圃

▲嬉しかつたことは 私が二十歳の頃、父は元老院議官をして居りました、家も可なり大きくはありましたが、借家住の貧乏して居る時分で、或る夜母が、兄の一周忌が近づいたけれども、御祭りする費用がない、といふ意味を父に話をして居りますのを、私は恰度風邪を引いて寝てゐながらきゝましたので、それでは小説を書いて出して見たらと思ひまして、其時分大評判の春のや主人、今の坪内先生に見て頂きました所、案外にもおほめに預かりまして。序文までも頂戴し、出版することになりました。原稿料を貰つた時の嬉しかつたこと、今に忘れません。そのお金を以て兄の一周忌を立派に營みました。

**

女子學院講師 三谷民子

▲たのしみは 此頃獨逸語の稽古を初めましたことです、獨逸人の敎師に就いてやつて居りますが、別にさし迫つた必要があると云ふのでなく覺えるのが樂みでございます。



表情の練習

前田不二三

◇表情の調節は動物に出來ない

人間と動物との相違はいろ〳〵の點にあるであらうが、その尤も著しいものは表情と云ふ事である。極めて程度の低い表情は動物にも有るやうである。類人猿と云ふ動物には笑ひがある。フクステリヤと云ふ犬の種類は矢張笑ひの表情をするさうである。其の他表情する動物は二三に止まらないであらうと思はれるけれども、まつたく奏情についての相違は、人間は表情をとゝのへる事をするが、動物は表情をとゝのへる事をしないのである。それが人間が動物に超越してゐる處である。

表情の調節は單に人間と動物との間における相違ばかりではない、文明人と野蠻人との間にも劃然たる相違がある。卽ち文明人はその表情を巧く調節するが、野蠻人は表情を調節する事が少い。そこで表情の調節の如何によつて人間社會の進化の階梯を見る事が出來るのである。



◇綺麗な笑ひ

表情はそれを生理學的に云へば、精神の昂奮が筋肉に運動を與へて、喜怒哀樂其他復雜なる發表となるのである。

表情のよつて來るところは人間も動物も同樣である。唯動物にある表情は精神の昂奮に伴つて筋肉が運動をするそのまゝのものであつて、何等の調節も訓練もないものである。悲しいと思へば悲しい感情が筋肉を刺激するたゞそのまゝの表情であるにすぎない。

人間の表情は決してそうではない。是れを藝術的に考へると、精神の昂奮が筋肉の運動に移る時、その運動を美的に變化するやうに

する――それが人間の表情である。筋肉の運動を美的に變化すると云ふ事はとりもなほさず表情の調節である。

たとへば笑と云ふ事は精神の昂奮が口の周圍の筋肉に運動を起す處のものである。感情の愉快によつて口のまはりの筋肉が收縮するより外の事ではない。けれども藝術的の立場から云へばたゞ口の周圍の筋肉を收縮させた許りの笑をいゝ笑だとはせられない。必ずそこに美的に變化されると云ふ條件がなくてはいい笑だとする事が出來ないのである。

抑制する事は惡い

もしも表情と云ふ事を自然の儘に任して置けば、卽ち、精神の昂奮を筋肉の運動に變化するそのまゝに任して置けば、美麗なる表情は決して出來ないのである。あくまでも表情は調節せられたる表情でなくてはならないとおもふのである。

偖日本人の表情の調節はどうであるかと云ふとどうも出來て居らない。今かりに日本の婦人ばかりについて云へば、日本の婦人には表情の抑制と云ふ事はあるが表情の調節と云ふ事は、非常に缺けて居る。

假令ば笑について云へば日本の婦人は笑をかくすと云ふ事をするが、奇麗な笑をすると云ふ事は少しもつとめない。笑ふ時に袖で顔をかくしたり、低首いたりして笑を殺す事はする。このやうにして笑を抑制する事は西洋の婦人には少い。

日本の女は笑を抑制するが、奇麗な笑をする事を骨折らない、それは非常に殘念なる事である。笑は人間の表情の中でも、最も美的な進化したものである。花の咲くやうな美の發現は笑である。それを隱すのはよくない事である。むしろ飜つて奇麗なる笑をすると云ふ事に骨を折るやうにしたいものである。

表情の中心を取る

西洋の婦人は自分の表情をなるべく奇麗に見せるやうに骨を折るのである。それでは表情の調節と云ふ事

が必要だとすれば、どうして表情を調節するかと云ふ問題が起る。その方法は二つある。一つは表情の中心を取るのである。表情の中心を取るといふのはどう云ふ事かと云ふと、表情の發現をある程度に止めておくやうにするのである。

たとへば笑の場合に、非常に大きな笑を、生ずるまゝに大きな笑ひにせずに、中途の程度にてこれを止め半分丈の笑とするのである。

先年なくなつた團十郎は表情の中心を取ると云ふ事を主義としてゐたさうである。今一つは表情を抑制せずに精神の昂奮に任して美的にとゝのへてゆくと云ふ事である。どちらがいゝか今てゝに判斷する事は出來ない。その人の容貌の有樣により、主義によつて、その方法を選擇する方がよろしいのである。

自分の美の立場から表情の中心を取る事を好まない人であつても、その容貌の筋肉の動き方の有樣によつて、それが十分でない人は中途の程度でやめる方法を取らなければならないのである。

然らばどうして表情の中心を取るかと云ふと、自分の顔の筋肉の感じを練習するのが必要である。自分の手を見るやうに自分の顔を見る事は出來ないまでも、表情の中心を取る位の筋肉の感じは練習する事が出來る。それで俳優はこの筋肉感の練習をつねに積んでゐるのである。

私が日本の婦人に希望するのは、表情を抑制する事をせず、奇麗なる表情を示すと云ふやうにつとめる事である。日本婦人の表情は今あまりよく訓練されてゐない。日本の婦人の容貌は世界の女の中でも優美なる容貌に出來てゐるのであるから、表情の練習さへつめば、世界でもつとも優美な表情をする事の出來る人種になるに相違ないと思ふ。殊に表情の練習されてゐる人とゐない人とは、其の人格までも區別する事が出來る位であるから、自分一個人の爲めにも、平生から充分に用意して卑野な表情を愼しむやうにしたい。女で表情の訓練の出來てゐない人ほど不快を與へるものはないのである。

◉面白い浮世の娯樂恐ろしい社會の裏面

浮(うき)世(よ)

五月號

一日發行

定價
一冊金拾錢
送料壹錢
【半年送共】前金六拾參錢
【壹年送共】前金壹圓廿錢
（郵券代用一割增）

▲大色魔楊靜太郎……渠が毒牙の犧牲となりし博士令孃の不幸に泣け！

▲萬龍盛衰記……歡樂極りて哀情多き名妓萬龍が一代記！

◬娘の呪咀か老母の怨祟か……怖ろしき女の執念よ！

▲淺草公園の野釣淫賣婦……銘酒屋の白首以外に幾千の野釣は公園を徘徊せり

◬不良少女のなれの果……刑事に騙れた少女の涙

▲醜劣極る戀文一束……現代女學生の墮落を證明したる一束の手紙

◬呪咀れたる情夫……女蕩しの末路

▲素人落語界の內幕……美醜ある表面裏面を遺憾なく摘發してある

◬女郎の秘密函より……誤親類筋は警戒すべし

▲幽靈など見た人の實話……幽靈は居ないなど、云ふ勿れ、現に見た人がある

◬京橋加藤病院の看護婦……九人の女の品定め！

▲昔は强盜今は牧師……强竊盜數十犯、破獄再度の今は牧師が懺悔錄!!!

▲漁夫と結婚したる官女……對照の奇なるに驚く勿れ、內容は更に奇である

▲記者の手を握りし紳士の名刺……保險會社とだけ洩して置かう誰ぞ！誰ぞ！

◬毒藥を仰ぎし我が告白……失戀の物語は結了せり

▲生活難の產みし本所の夜鷹……悲慘な本所の淫賣婦は冷視してはならぬ

◬探偵實話死骸の行方？……奇にして妙、妙にして奇！

▲退校を命ぜられた女學生……罪なくして退校を命ぜられし氣の毒な女學生

◬落語心中立……圓右の輕妙な一席

▲澁谷魔窟富士見屋の一夜……三人の艷魔は如何にして生血を絞らんとはするぞ！

◬娘評判記……深川菊川橋際のお孃

▲深夜の東京橫斷……この記事を警視總監に一讀して貰ひたいのである

◬當世女優物語……小春、花子の最近の艷聞

▲二海軍大將夫人の前身……一人は女郎、一人は妾、その大將とは抑も誰ぞ！

▲杉子爵愛妾の末路……峰子は薔薇か、觸れて刺されぬ者はなつかな

其他『演藝欄』は新進劇評家の辛辣なる筆に『浮世くらぶ』欄は愛讀者諸君の投書を滿載し全國に亙る社會の裏面表面の縮圖を成せり。さては『讀者文藝』の月桂冠は誰が頭に戴せしぞ。更に又大懸賞募集あり。而して記事悉く斬新奇抜にして毫も虛飾なきは本誌の特色なり。

◉本誌獨特記事悉く現狀寫眞挿入

▲發行所 東京市京橋區大鋸町十一（振替東京二四三七九） 樂文社（電話京橋六〇七番）

◉全國各地書店繪草紙店にて販賣せり

一年間につゞく

名流婦人日記

三月一日より三月十日まで

小川一眞氏令息一雄氏夫人　小川豐子

三月一日。午後雪。

今日はなんとなく寒く、またかぜでも引くと皆に心配をかけると思ひ、八時頃まで床の中にもじ〳〵としてゐた。旦那樣は今日は休みだから、もう少し寢かしておいてくれと仰せられるので眞吉と共に御先に朝飯をすます。明日は日曜日なので金平さんの壽子さん、悦子さんが御雛樣を拜見にゆくからとかねてよりの御約束なので、乳母兩人は御雛だんを掃除しはじめたり、御豆入りをこしらへ、午後はなか〳〵忙がしさうにしてゐた。眞吉、壽滿子は菊と愛宕山へ運動に出かけ、歸つてくると本宅から母君樣の御使で、きくと貞が御菓子をもつてきてくれたので大嬉び、蓄音機などきかしてやる。本宅の貞はほんとにおとなしいいい女中だと思ふ。五時頃、里の弟來る、夜食をともにして旦那樣は相變らずいろ〳〵と弟をおからかひになるので、ほんとにおかしい。もう今年十八だのにほんとにまだ小供のやうに、眞吉や壽滿子を相手にふざけるので、皆で大笑した。弟も歸り、子供もそれ〴〵ねた後はまるで大風のなぎたやうな氣もちがして、やれ〳〵と思ひ、旦那樣と御茶をのんで十時臥床す。今日は一日旦那樣御在宅なので、別に此れぞと思ふ事もなさず暮してしまつた松平樣より幸子へ御人形をいたゞく。

三月二日。七時床をはなれ、旦那樣、眞吉と共に朝飯をすまし、髮をむすび、是から着物を替へやうと考へてゐたら、御母樣がお倉を連れて御出で遊ばす。眞吉は朝の中少し氣分が惡かつたと見えて、ぐづ〳〵乳母をてこまらせてゐたが、御ばあ樣がお出になつたので嬉さのあまり、氣分の惡いのも忘れたやうになり。例のとほりあまつたれる、やがて金平の奥さんたちが御出になつたので、猶々賑かになり、御白酒をあげたり、四方山の御はなしをしてる中に、となりの座敷で小供だけ皆一處に並んで御壽もじをめしあがりはじめたので大さわぎ、幸子は御ばあ樣にだつこしていたゞいて今日はほんとによく笑ふ。六時頃御母樣がお歸りなので、眞吉も壽滿子もおばあ樣の御歸りをいやがり、塞いのにおゝくりするとて、電車までお供してゆく、金平さんの奥さんはあまり一時に皆歸ると淋しくなるからとておのこり遊ばす。やがて旦那樣も本宅より御歸り遊ばして、皆で食事をする今日眞吉は少し氣分が惡かつたので、また熱でも出ると本宅の御兩親樣が御心配遊ばすと思ひ、體溫をはかりし處、熱もなく、旦那樣も御安神遊ばす、入湯は見合せ、常より早く歸られて、夜はいろ〳〵の雜話にふけり十時ふす。

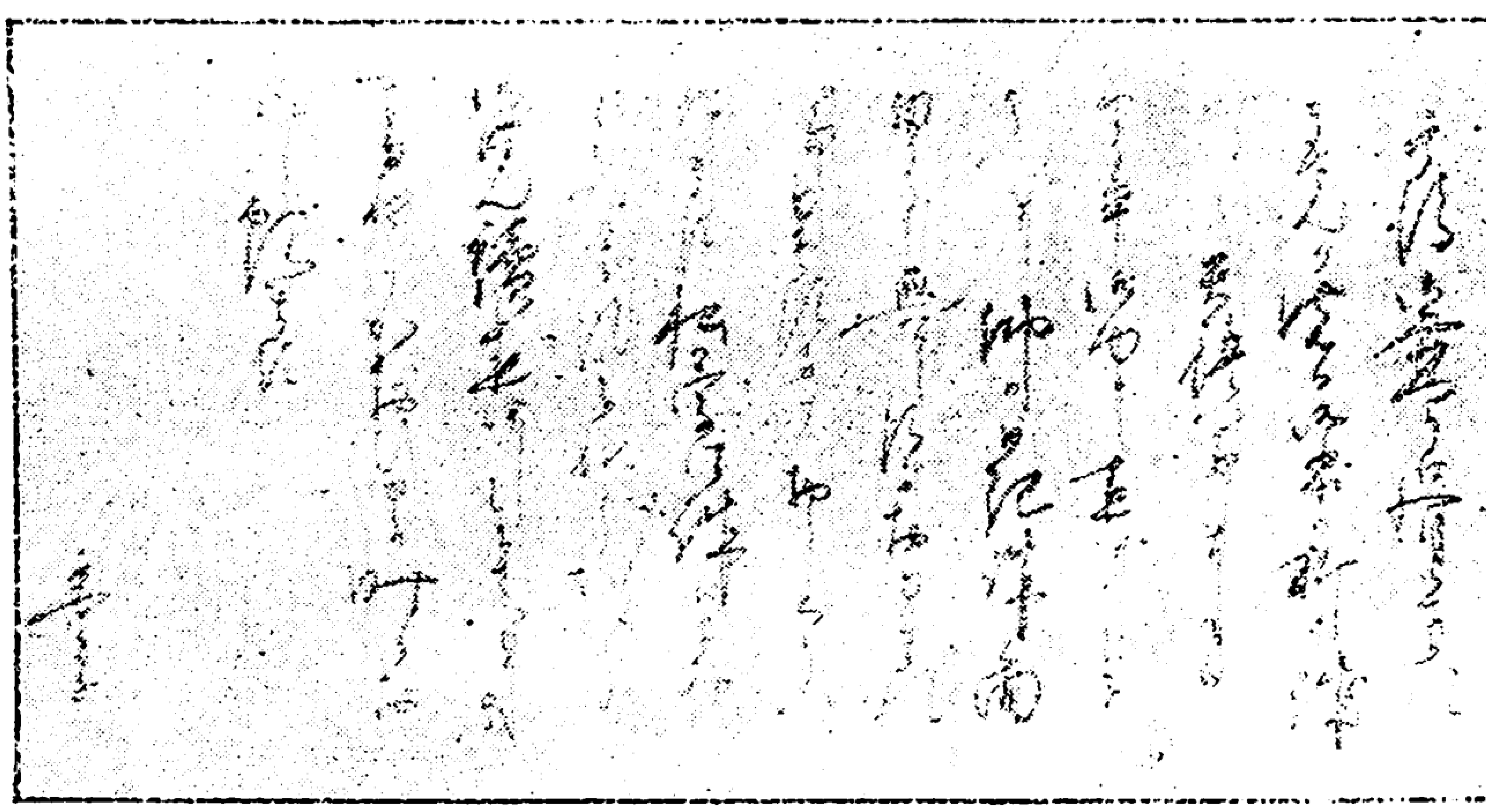
三月三日。

今日は桃の節句なので、里の御母樣御出の由、眞吉は嬉びおまち申すうち、日吉町の本宅へもおよりになつたとて、本宅の御母樣は御不例にておこしなく、眞吉の大好物の栗きんとんを、お母樣へおことづて遊ばしたので大嬉び、先づ〳〵御祝に御白酒を差しあげ、豊子と御はなし遊ばすより孫ども御相手の方がおたのしうと見え、眞吉をよく遊ばして下さる。六時頃御母樣には失禮して、日吉町の御兩親樣の御きげんを伺ひに、眞吉をつれてゆく。相變らず御兩親とも眞吉の顔を御覽遊ばすと、まるでゑびす樣のやうにニコ〳〵な御顔遊ばすのでほんとにをかしい、丸井さんの三味線をたのしみにしてゐたら病氣との事でがつかり母樣は豊子は御壽もじが好きだからたんとおあがりと仰せられるが、もう宅でいろ〳〵いたゞいたので、あまりたく

さんもいたゞけなかつた。眞吉はおとまりすると云ふ故に、若旦那樣と御一處に九時半頃おいとをまする、板垣樣大倉樣より御祝ひの御人形いただく。

三月四日。晴。

七時起床、朝餉をすませて身じまひなどなすほどにかれこれ十一時になり今日は御花の日なれば、少し早めに御ひるをすませて、壽滿子とゝもに本宅にゆく。今日からはじめて古遠州の御花をおけいこするので、白の桃をいけていたゞいて三四度ぬき替ていける、池の坊よりなんとなく形がはでなのでほんとにいゝと思つた、御母樣は赤の桃をおいけ遊ばす。父君樣お出で遊ばして御覧になり、豐子はきようだからきつと早く出來るなど仰せられる、いつもこんな事をおつしやつてはおからかひになるのでをかしい六時頃少し急ぐので、旦那樣と御一處にかへる、十時臥床。



小川夫人の筆蹟

三月五日。晴。

七時起床、眞吉は本宅なれば、旦那樣と御一處に朝飯をすませ九時頃本宅へ御出かけ遊ばす、御出かけの後をこれやあれやとかたづけ事などをし、幸子もよくやすむので靴下などつくらふ。眞吉本宅よりかへり來る、伊勢重來り帶かわをならべたて進めるが、先日本宅の御母樣に帶も着物もこしらへていたゞいたばかりなので此上はと思ひことわる。午後から旦那樣が上野へ一處に連れてゆくと仰せられるので、眞吉とゝもに出かける、かんしんにくたびれたともいはずに、よく歩く、南米展覽會の中で佐々木樣に御目にかゝる、御丸髷でほんとうに

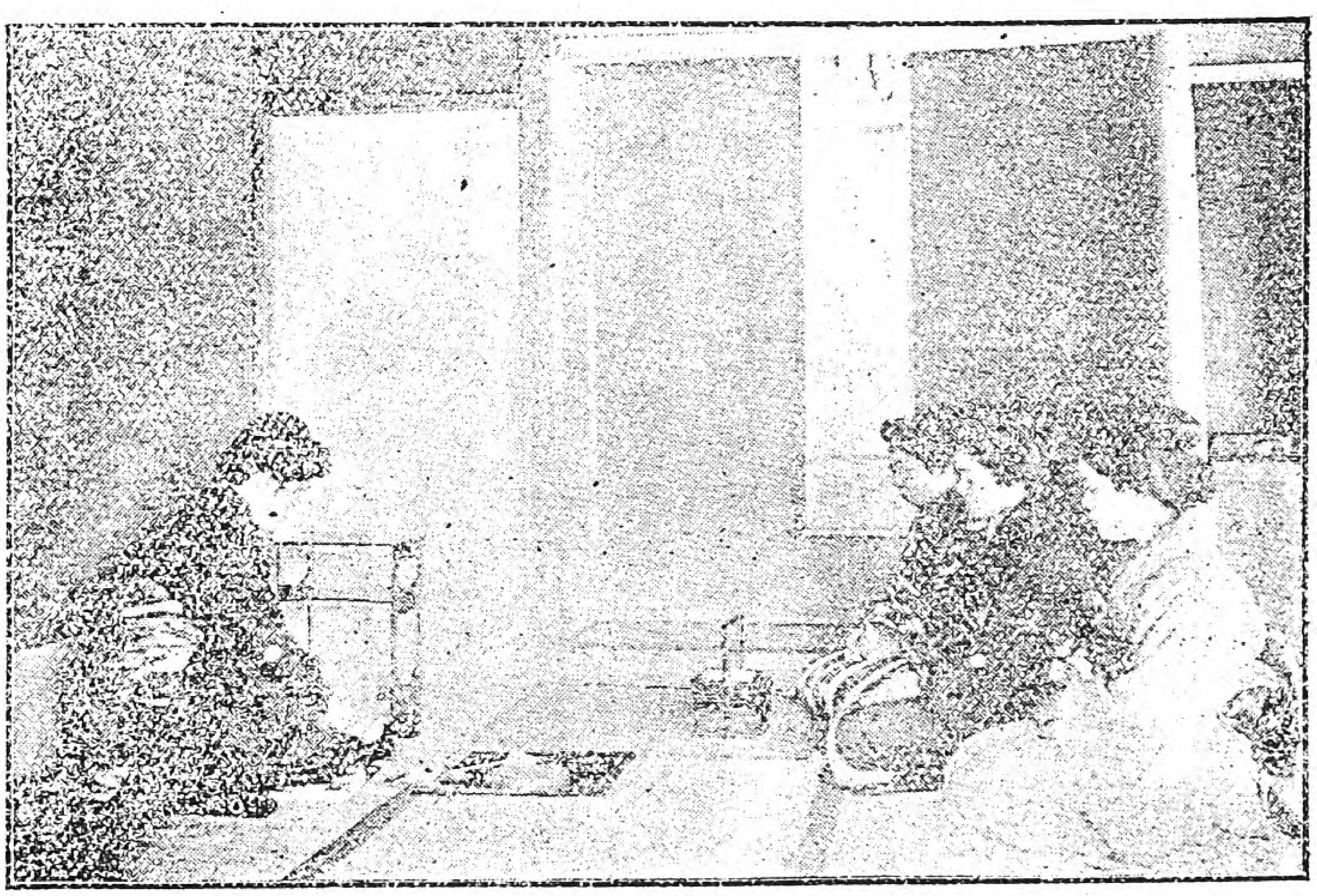
意氣におなり遊ばし、あんなに學校に御出でになる時と變つた方は無いと思ふ。進歩博覽會、明治畫會を見るあまり氣にいつた畫もなく、豐子は油畫よりは水彩畫のすつとした畫が好きなので水彩畫ハ景色で一枚ほしいのが有た。眞吉は常より畫が好きなので嬉んで見る。久しぶりで電車にのりもしたり歩いたので氣がはればれした、六時頃歸り、夜は店の「佐治」來り、十一時まで面白いはなしをして歸る、十一時半臥床。

三月六日。晴。

七時起床、旦那樣九時頃本宅へ御出かけ遊ばす、今日は御雛樣を寫しとるので下にかざつて有つたのを、二階へかざりなほして、朝の中はごた〳〵してすんでしまつた。午後から里の母君樣、尾車の娘を連れて御出で遊ばす、まだ豐子が里に居る時分、小さかつた娘がなか〳〵おてしやな子になつたので驚いてしまふ。御雛樣の前で御膳をもつておまつりしてをる處を、フラッシをつかつて寫したので、音に驚いて御膳をおとすやら大騷ぎ、五時頃までかゝたので佐治さんにお壽もじ出して、六時に佐治さん歸らる、ごた〳〵したので御湯が夜になつたので、急いで入る、十時臥床。

三月七日。曇り午後少し雪降る

今日は御雛樣をしまふので、なるべく朝早くかたづけるつもりの處、旦那樣御腹痛のきみにて十一時頃まで御床にお出になつたので、すつかりおくれてしまふ。三人がゝりで一生懸命にしたけ



茶の湯

れども、なか〳〵ひまどるもので五時頃までかゝつてやつとしまひ終つた。今日は風が吹て寒いので、また火事でも有てはならぬと、よく氣をつけさせて、少し早いと思つたが九時半頃寢につく。

三月八日。朝七時起床、眞吉と共に朝飯をすます、女中等は皆各受持の用にかゝるのでこどもを遊ばす、電車自働車をだしたり、學校のまねをしたり、また誰に敎はつたのだか「はげたゝいてかんでみろ」なんて歌



ベルトフツクと藤井薫子

ふので乳母は御祖父様の事ですからおそばで歌つておきかせ遊ばせなんて敎へるので、ほんとにこまつてしまふ。旦那様は御氣分が少し惡いので、御床に御入り遊ばすし、子供も今日はめづらしく二人一處にひるねしたので、かういふ靜な時と思ひ、手紙四本ほど認め裁縫をする、夕飯前に入湯して、夜は九時半臥床。

三月九日。晴。

九時頃旦那様本宅へお出かけ、眞吉はまだ食事中の處、御一處に本宅へゆき度ので、パーまでちよだいといひながら、急いで御飯をいたゞく、樣子がをかしいので皆大笑ひ、子供が有るとほんとに笑ふことが有るので朝から大さわぎ、眞吉も留守になつたので、長襦袢を縫ひはじめる。此の頃は日が長くなつたので少しはなにか出來るやうに思ふ、六時頃、旦那樣御歸宅、眞吉を連れていつたので御兩親とも大御機嫌、なんでも眞吉にかぎると大笑ひ、夜は雑誌など見て十時臥床。

三月十日。晴。

七時起床、今日はめづらしく髪を結び身じまひしても、やつと九時半なので、朝から裁縫をする。眞吉は朝早く日吉町から歸つて來たので壽滿子と共に高田の穴八幡へ蟲封じにゆく、五時頃歸つてきたので、すぐに食事をする。鶴見から「吉」が山に咲た櫻の花をたくさんにもつてきてくれるので、早速床へいけた。今日は少し風をひいて鼻がでゝしかたが無いので、また私がねるやうな事になるとこまると、女中等が心配してくれるので、八時頃に寢につく。

細川の叔母樣、松平民子樣より御手紙いたゞく。

十一日より二十日まで

理學士三宅恒方氏夫人　三宅やす子

三月十一日。江戸橋郵便局に外國郵便爲替拂込にゆく序に榛原と榮太樓にて買物濟ます、歸途カフエーパウリスタに寄つてドウナツ少し求む、聞きしにも増して味いと佳し、午後久振にて多賀子樣御出、前觸も何もなかりしに、あまりの意外、嬉しさに何から御話して宜いやら、ゆつくり御引きとめ申したけれど、夕刻は○樣御招ぎしてあれば準備もあり、强ひてとも御留め出來ず惜しき御名殘申す、五時頃○樣御出、御飯參らせ九時頃御歸りになりぬ。

三月十二日。午前×樣方に御病氣見舞にゆく、大きに御快方との事、時候も暖くなりたれば日ならずして御全快ならむと嬉し、午後上野に光風會展覽會を觀にゆく、まだ春景色調はねど上野の岡は人出夥し、理想博覽會、南米展覽會など催されありと聞けど往復の電車の時間を除けば光風會の會場に在るべき間僅かに十分か十五分位よりなし、我乳のみにて育つる不便さなどかこち言も出づ、乳呑ませて次に乳呑ますべき迄の三時間足らずの間をぬすむ樣にしては外出する氣の

忙しさ、あれこれ評判高き畫もよく〳〵は見ず、たゞ素通りせし中に、良人の出品畫三點は流石に興深く一番に眼に留りぬ。

相變らず此派の畫は派手やかに美し、中には新らしき流にやあらむ、あまり奇にすぎて見ゆるものもありぬ、「丁夫人の肖像畫」と題する裝飾畫は母親が幼き兒を抱いて居る處、色彩と畫き振、丁度艶子を思ひ起す樣にて多くの畫の中で之を最も面白く感じたるは、畫の巧拙にはあらず、母となりて眼のつけどころも自ら變化せしにやと我ながら可笑し。

三月十三日。くに(娩)少し胃を損ひ靜養せしため今日はなか〳〵忙しかりき、これといふ程の事も出來ず。

三月十四日。くに今日はよろし、S様御結婚との事にて祝物持たせ上ぐ、新婦の君はいと美しくおはすとやら風の便りに聞きまゐらせぬ。S様の御幸など申し合ふ。


三宅夫人

三月十五日。A様も近く御結婚の由につき何か御祝ひをと思ひ午後三越までゆく、例の急ぎの事にてゆる〳〵眼留むる事もかなはず、買物も落付いて選擇する事さへ難し、歸り見ればお隣の赤樣と緣側の處で玩具出して遊び居たり昨日今日やゝ暖かになりぬ。

三月十六日。同窓會の通知、卒業式の案内來る、同級會の知らせも來りぬ、いづれか一度にても出席したけれど、其日其日の艶子の機嫌によりて外出する今は、豫め定むる事なり難く、せめて同級會のみはと思へど當日になりての故障はか

り難き旨書き添へて返事出す。

三月十七日。午前よく遊ばせ置き、午後靜かに寢入りしを見て小石川にゆく、歸宅少し遲くなりたれば如何かと案じつゝ飛ぶが如くに坂を下りて、戸引きあくる間ももどかしく室に入れば未だすや〳〵と眠り居るに安心す、夜少し何やら氣分惡る相なり。

三月十八日。昨夜十二時頃より艶子熱氣あり、今午前二時熱をはかり見たるに九度五分、如何した事かと胸のみ打轟く。とも角も夜明けを待つて診察受けさせんと時の經つをのみ待つ心許なさ、床に寢かすれど泣いてやまぬに、せん方なく抱きあげて、共に泣きも出でたきおもひを小聲に唄などうたひてまぎらす、朝早く下條樣(醫師)迎へて診察を受く、消化不良症にて熱は



全く此爲に出でたるものゝ由、乳の分量過ぎたるなり乳の量を思ひ切つて減じて見よといはる。

三月十九日。昨日よりは機嫌宜し、熱も下りぬ、乳を十分に呑ませぬ爲、空腹を訴へて少しも眠らず、お守りに手の掛る事甚だし、便を檢べてもらひにやりし時明朝暖かなれば連れて來よとことづてあり、便も追追良くなりぬ。

三月二十日。午前艶子連れて下條氏にゆく、大きに佳しといはる、今迄乳を七分程呑せたりしを十分にして宜らむとの事、先安心す。

今日にて丁度結婚してより滿三年になるなり、月日の經つは夢の樣なり、思ひ出多き三年間をかへりみすれば實に樣々の事有りき、さて此先の五年十年いかなる事にか遭はむ、今は只我兒の成人をのみ待たれて。

二十一日より三十一日まで

高橋ドクトル夫人
高橋梅子

三月二十一日。音もなき春雨ふりしめりて生憎の祭日なり、お彼岸中に一度墓參をと思へど産後の日もたゝねば、本意なくも妹に代參をたのむ。國にお花もたせつけてやる、昨日母樣三越にて見分け給ひし品々屆く。則子の綿入にとて、紫紺地に櫻のちらし染、目もさむる計り、緋の下着をつける事にする。外に私にとてしづか織の片側帶、一寸氣に入つたのをとる。午後醫院の方より看護婦參り、則子のお湯つかひさせるのを手傳ふ、夕刻小林夫人お産の祝ひに參らる、引きつゞき阿久津博士來訪、先頃來某公爵邸へ往診にて日々この前をお通りのよし、御忙しければとて間もなく御歸り臺所の女未だ參りたてにて事なれぬため色々指圖す、今日は祭日にて醫院の方も半日故、お夜食は良人も共に樂しくすます、夜新座敷に父樣はじめ一同集りてお茶頂きつゝ、此度の新築の圖面をひろげ相談。私は臺所のうけもちにて、此間より所々のを見ておきたれば申分なき樣にせむと智慧袋しぼりて、新式の設備に少し氣焔を吐く、妹がくす〳〵笑ふ、母樣は段々年を取るから、御自分のお部屋のそばには必ず便所をつけてくれと仰つる、妹はお化粧室をゆつくりとつて頂戴といふ、それ〴〵都合のよい事計り、果ては大笑ひとなりて部屋にひきとる、十一時。

三月二十二日。此間より大森別邸に御逗留中の祖父樣祖母樣お揃ひにて午前お出あり、濱にてとれしあさりおみやげにとて御持參、おひるに早速おつゆにする、中々結構なり、けさ良人の御出ましを讓のおひてきかねば、致し方なく醫院へ共につれて、謙までおともにて御出かけになりたれば、あとは漸く靜かになり、て

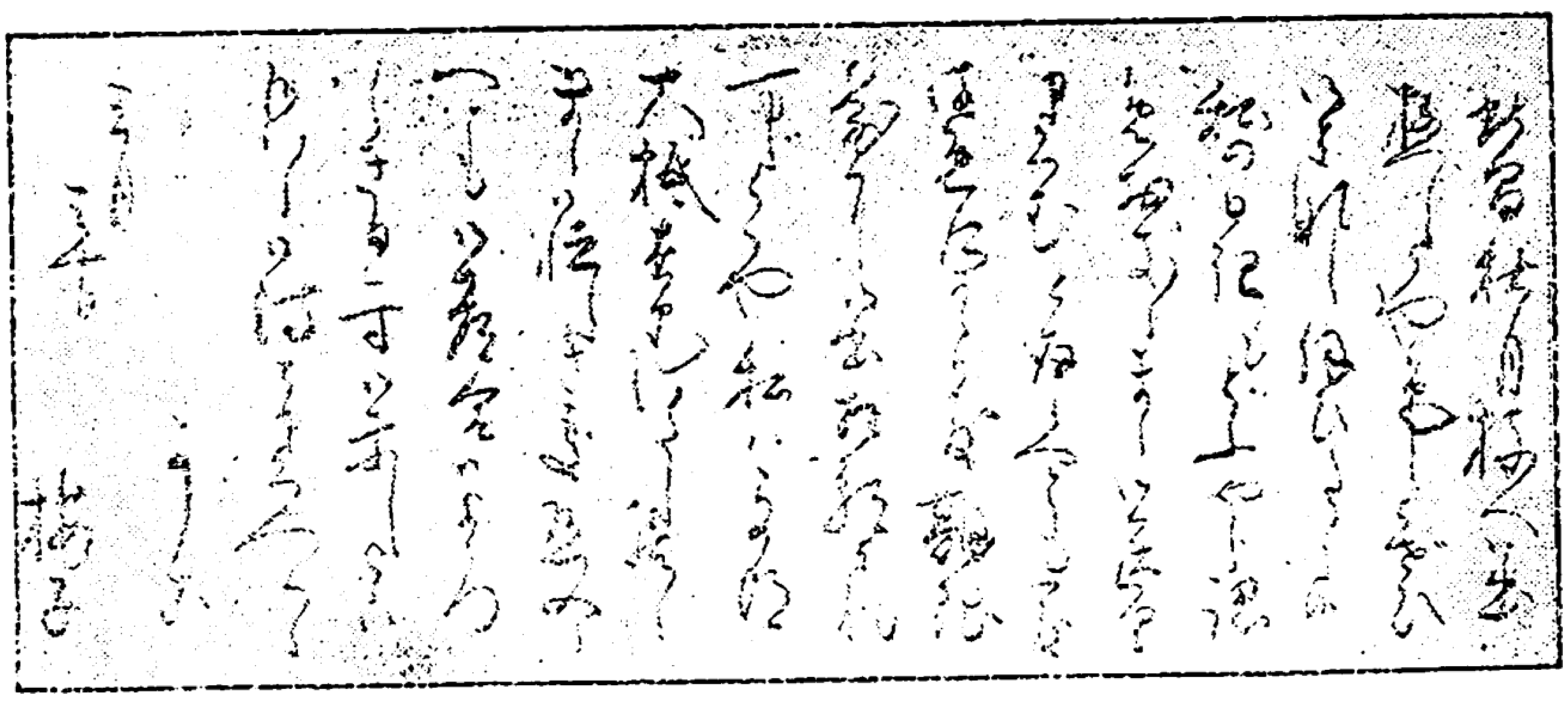
の間にすこし片附けものせむとする折柄、父様への面會人ひきつゞきてとう〳〵なにも出來ず。午後母様の御案内にてぢゝ様ばゝ様帝劇に御出かけ遊ばす、お留守中大森よりおさよ、下女つれて參る、濱邊の荒物屋の娘のよし、中々はき〳〵した女なり。仲働きに二三日おいてみてよささうなれば、荷物とりにつかはす約束しておさよ歸る、夜良人は歸宅、父様のお部屋にてお茶話し、母様方の芝居の御歸りのおそきに十二時臥床。

三月二十三日。永年忠實につとめし下女のつる、此度良縁整ひ此間より暇取る事に定まり、今日は田舎より父親迎へに參る。なが〳〵陰日なたなく働きくれたれば、祝ひに紋付の羽織地と丸帶、外に子供等の名前にてお包つかはす。よろこびの門出ゆゑうれしけれども、今更暇出すのいと惜しく、當人も涙うかべて名殘をしげなり、子供等まで門に出でゝさやうならいふ、百姓のおかみさんにはいかにもをしいもの、恥しげな花嫁姿が目に浮ぶ、平和な田舎のやさしい花嫁、幸多かれと祈る。午後則子に乳ふくませつゝ、新聞よみつつふと庭の子供等の話聲に耳傾く、謙の聲にて「君その棒を折つてくれ玉へな」友達「僕折れないや」謙「君そんな事いふものぢやないよ、何でも出來ると思つてさへすれば出來ないつて事はないよ、始めつから駄目だなんていつちや何にも駄目よ、何でもやり通さなきやいけないよ」何て大人びた事をいふ子かと呆れる、然しその意氣は嬉し。今日は日曜にて良人も半日休みなればとて、午後より謙と讓つれて上野に運動にお出かけ遊す。則子のお湯づかひを看護婦に任せて、三時より阿久津家に此間中の御あいさつに參る、同郷の心易きまゝ、いつもつひ長座してくれ〴〵にお暇する。父様は高峰博士の歡迎會にて今晩はお留守、お夜食の仕度整ひし頃、良人も御歸宅、子供達は動物園の話にて大賑やか、草臥れしと見え、食後早々に皆暖かき床に入る。夢に通ふは兎か猿か。

三月二十四日。寒い風、又白きものにてもおちさうな空合なり。午前の中子供達の着物つもりて、三人の下女に渡しおく。醫院の方の下女臺所の會計簿を見せに

持參す、產前より私の代理して、よく綿密に記しあり。一應調べてほめておく、おひるには大森より祖父母樣田中の不二子も參りて、殊の外賑々しく食事をすます。明日は祖父母樣御歸國とて御荷造りに忙がしく、夕方までかゝる、曾根の姉樣御別れに御出あり、祖父樣方を御馳走遊ばすとて寒いのに御一所に御出かけ遊ばす、夜政男さん來る、圖案家の事故に、早速半ゑりの圖案をして頂き、ぬひにやる事にする、花いかだの模樣なり。良人御歸宅、此の間よりたまりし書狀の返事を認む、お手傳ひしてあとは少し雜誌をひもときて十時臥床。

三月二十五日。午前九時の上野發にて、祖父樣、祖母樣、御歸宅の途につかる、良人は診察時間の都合もあり、私も子供等とお留守番する事にして、父樣、母樣　妹などを上野まで御見送りした、おたち後の家の靜かさ、間もなく良人も御出まし、あと片附してゐると曾根の



高橋夫人の筆蹟

俊子遊びに來る、謙は大喜びしておまま事がすぐ始まる、久しぶりにてオルガンをさらふ、午後山本樓に電話をかける、父君御重病のよしにて本日御入院遊ばされしよし、御心配御察し申上ぐ。今日は來客もなし、いと靜かなれば、此の間所々より祝ひに贈られし則子いきなのをつもる。一つ身を澤山つくるも無駄なれど、友禪にて四五枚綿入れと袷見つくろひて下女に渡しおく、間もなく醫院より電話かゝる、子供等をつれて運動に來よとの良人の仰せに、早速仕度して謙と讓つれて參る、丁度診察の休みの時間とて患者もなし、看護婦達とお茶を入れて暫く話す。小供等はバヽとはや二階にてお角力はじまり、天



春葉若葉

井も抜けむ計りのさわぎなり。時間も迫りたれば、邪魔してはと遊びたがる小供等を無理にすかしなだめて夕刻本宅に歸る。新座敷に父様母様の御機嫌を伺ひ、お夕飯後雜誌などをひもとく中、良人御歸宅、折から雜誌上にて大分やかましく論せられし所謂新らしき女について議論はじまる、色々論戰の結果、私は新らしいといふ事が悉くよいとは思へない、それに新聞の報ずる如く青鞜社とか稱する連中の行爲は、いかにも下品にて到底話にならず、むしろ世のあざけりを買ふ様なもの、大不賛成なりといへば、丁度來合せし從弟も、書生も、皆賛成するお菓子器も大抵からになり、そろ〳〵欠伸もはじまり、從弟も歸る、いつの間にか新座敷もお靜かゆゑ、皆々床に入る、三人の子供の安らかなる無邪氣な寢顔を見ておもはずほゝゑむ。

三月二十六日。溜池の英子、俊子、打揃ひて優等賞頂きしとの事に、母様は御褒美つかはさんとて、今日は謙に譲下女つれて溜池を誘ひ、三越にお出まし、妹は此間より、少し耳を痛め、本多先生に治療に行く。私は皆々の留守を幸ひ、床のお花をいけかへる。染物屋參る、少し早けれど絽の夏帯をしぼりに賴む序でに、羽織のぬひ紋も。午後奉天の妹より文届く、いよ〳〵豐秋同伴來月初め歸國するよし、久々にて都の花のいかに美しからむなど、いと樂しみさうな事、かず〳〵記し、今より御面會の折の事など考へては、淚こぼるゝ計りなりなど、いと切なる事かきおこす。今

年のお花見は賑しき事ならむ、はや共に出あるく處かぞへおく。父樣御在宅とて御座敷は朝來御客四五人つづく、漸くおひまらしき折を見計らひ、妹の歸國を御報告する、父樣もお嬉しさうなり。夕方小供等歸る、皆々おもちやかつて頂きしとて大滿足、御夜食の膳もおはなしにておほにぎやか。

三月二十七日。本月より謙入學のことゝて、今日は學校用品一切を揃へんとて、午前かひものに出かける、父樣は大森別宅へ、母樣は田中家へ、何れも御出まし暖かき日和故ふと思ひたちて、午後より銀座まで出かけ、關口にて兼てより望みのピンと櫛、序でにショール求めて大急ぎで歸宅、待ちかねし小供等を順々に入浴させる。いつもながら二人も入れては、實に逆上かへり、肝心の自分は早々にして上る事になつてしまふ。つまらぬ事なり、則子も今日あたりより漸く笑ふ樣になる。

夕方思ひがけなく、コールマン夫人來訪、御急ぎとて玄關にて暫しおはなし、次ぎの英語會にはぜひ出席せよと呉々も仰せあり、料理會にも久々にて出る御約束してお別れす。

三月二十八日。早朝よりの來客にて十時頃漸くかたづく和泉橋の番頭來る、お引き物の鶴の子を注文して、外に蒸菓子少したのむ。今朝は飛行機と飛行船青山に參るとの事に、朝來幾度も二階に上りて空のみながめる、十



野の草摘み

時頃飛行船のみわづかに見える、飛行機はとまてどもまでども來らず、やがて號外にて飛行機の墜落と、二中尉の悲慘の最後をしり、思はずぞつとする、午後謙のお友達大勢來り、お角力にて賑しさ殊の外なり、國元へ手紙認む。

三月二十九日。父樣、母樣、早朝より大森別邸へ。

妹を相手にシユークリームをつくる、中々巧く出來たり。午後醫院に電話かけ、良人を迎へて御手際を御自慢する、謙のお友達も來つて、皆一所にさわぎながら御茶頂く中、國元よりの吳服屋來る、例の米琉や、高貴織見あきたれど、いつも御用なしとて歸すも少し變なれば、妹と一反づゝおめし風の品とつておく。夕方より謙と讓つれて散步かたぐ西久保までゆき、雜誌類かつて歸る。夜は新座敷に父樣方と大森の庭の御相談、花ものを澤山植ゑる樣にして頂く、良人は今晚新富座へ御友人と。

三月三十日。和泉家より早々とおひき物の鶴の子の折持參番頭來る、一々札つけて松魚節と間違なき樣しらべて渡す、數多けれど一日にていそぎ配る樣出しやる國元より兄上樣弘資君御同伴御上京、夜の事にもあり私の代理として山下さんにお迎へに上野までいつてもらう、久々の御出京とて、御話は中々つきず、十二時臥床。

飛行機墜落にて慘死せし兩中尉に同情大により、弔慰金非常に集りし由新聞に見ゆ、嬉しき事なり。

三月三十一日。昨夜御着京の兄上、今朝八時三十分の急行にて京都に御出立、五六日御滯在にて、九州まで御出のよし、長閑なる春の旅、御供願ひたき位なり。晦日とて朝より金の出入に忙し、午前寺田樣來訪、午後漸く少しの暇をぬすみ新聞よむ、飛行機の記事にて、大半紙面を埋めたり、獨逸にては新に飛行機五十臺を作り、總經費五十萬馬克とは我國に比し富の程度、驚くの外なし、又政友會にては西園寺總裁引退にて、でたくらし、政界といふもの、いつも紛紜のたえぬものにや。

夜總勘定にておそくなる。

油斷

平塚白百合

夫より少し先きに私はからたち垣を廻らした屋敷の構へ外迄來た。門内でパッとマッチを摺つた人がある。乏しい光りで殊に背面ではあるし顔は見えなかつたが、脊のズグ〳〵した男だと云ふ事がわかつた。火は直に消えた。私はそつと足を返して五六歩すさると、心持大きくせき拂ひした。さうして門へとかゝつて來た。とすれ違ひに飛鳥のやうに其の男はすりぬけて、私の來たとは反對の方に驅けて行つた。直後に夫は歸つたけれどもう男は逃げのびてしまつたし、逃げればよいとその儘門を閉して、弓張提燈に燈をつけて屋敷中見廻つた。門と玄關との中央位に小マッチが一箱落ちてゐた。其の夜は非常に暗い夜で點燈もよく屆かぬ程の闇であつた。

中一日置いて二三軒先きの家に夫は病氣見舞に行かれた。私は一足遲れて其の後に出た。十五分間があつたかどうか疑はれる程僅少な時間で戻つて來た。

門を明けるといきなり夫が、

誰れか出てゐるのか。家内へ聲かけた。格子で半開きに暗を吸ひ込んでゐる。

いゝえ誰れも。その答へがきこえるかきこえない程に私は、平日開かるべき扉でない格子にふと氣がついて、

靴は、外套は。聲高く云つた。其の時胸がから壓迫されるやうな苦しさを味はつた。

ない。斷言が私を誘き入れるやうに玄關に引き込んだ。内からはランプが照し出された。玄關の障子は細目に開かれてあつた。靴はもう影もなかつた。

「やられた」さう云つた夫の瞳は不安に光つてゐる。

家には武張つた老人と、女とが留守居してゐた。

しまつたらう。いゝえ。老人に私は答へた。

夫がひけると玄關に片寄せて置くのが此の頃の習ひ

であつた。それに昨日ある結婚式に列席してもう一つの靴も並べてあつた。

上げ板をあげてごらん。念のために女に云つた。

矢張り無い。外套は帽子掛けの傍に玉ラシヤの毛を光らせて掛つてゐる。それでも外套だけ殘つて少し心が落ち付いた。

とられたかなあ。老人はたんそくした。

さつぱり音がしなかつたが。ほんとに毛程も音がいたしませんでしたよ。

いつも用意して置く提燈に火をつけて二手に分れて四邊をしらべ初めた。夫は派出所へ行かれる。

警察へとゞければ出ますよ。と巡査は云つたさうだけれどもあまりさゝいな靴二足位ではと其の儘に葬つて。唯惡者の立廻るらしいといふ注意を望んだ。

其の夜は非常に不安であつた。式臺にはゴム底らしい埃の足跡があつた。外套を取るつもりで足踏み掛けたもの丶玄關の次の室には老人が炬燵に新聞を讀んでゐた。下女は雜巾をさしてゐた。その影は映らないにしても、花紙張つたガラスを透して見えたのかも知れない。彼れらの慧眼には。

門が閉ぢてゐたので、屋敷内にひそんでゐる憂のないとも限らないので、車置き場や空虛な車夫部室、物置き、附屬した便所迄あけて見た。高い緣の下迄燈を入れて見た。

床下には萬遍なく二寸以上の砂がまいてあつて必ず足跡を殘すやうに綺麗にならしてある。

樹の茂みにも燈をさしつけた。

よほど慣れた小賊らしい。矢張門を閉めて出て行つたものに決定した。

家内を伺はれた、さう云ふ事は誠に心持が惡い。生き目玉を拔かれたやうだ、あほらしい。老人はいつ迄も云ひつゞけた。腕前に對してもあまり音もなかつた小賊が癪にさわつたものらしい。

先方はまたそれが商買ですもの。私はなだめた。

年若な下女はおど／＼して勝手に行くのもふるへてゐる。時計は丁度八時十五分を指してゐた。

その夜はおびやかされるやうな不安が充ちて、一睡もしなかつた。ことに十一時過ぎからは風が出て、黑い夜の面は强風を送りながら、おびえてゐる私達一家の神經を一層たかぶらした。

髑髏の歌　上

横瀬夜雨

有髪の尼君に。

梓弓　爪引夜音乃　遠音爾母　君之御幸乎
聞之好毛

古乃　人乃令食有　吉備之酒　痛者爲便無
貫簀賜牟

みづからを　嘲るうたを　歌はむに　かた
へ聞きして　手うちはやさね

針を刺す　痛みにありし　君が名も　わが
こゝろより　はなれ行く今

序

月波の山の馬鹿猿が、苔の生たるしやつ面で、よめンぢよ、よめンぢよ、嫁女欲しさに水の月、鏡が欲しいと言うたれば。

欲しくばあたいがなつてやろと、おどけた女が七人あつて、寄て集つて、嬲つて、棄てゝ、はやしてひいと泣かしたとさ。

元來猿の身なれば、どうで毛物の身ぢやものを、獅子の洞入洞反、ひつくり反つて、そつくり反つて、序にならうた小鼓の、囃につれていざ踊ろ。

『猿がけつアまつかんだ』

いかにも我等がおん尻は、赤いわ、赤いわ、赤けれど。

『牛蒡燒いてぶつつけろ』

何んのタコト、燒いたでばうが喰れうか。

時雨する夜は紙治が炬燵、小春が涙は汲まずとも、せめて簑とも仰しやれなう。

親方、親方、簑を賜れ、かくれみの。

隱簑だに着ようなら、おんぼろ、さんぼろ、ちやん

ちやんの、尻ひつからげて逃げよもの。
角鍔無反の落差、奴が髯は鍋墨なれど、面白いぞや、
秋の風、春の風、われ等が尻は吹つぱらし。

一

夢そのみ　ぬすまば罪と　ならじもの　誘拐男　われは盗人

「月は東に、すまるは西に」　人の子は　備後へ　去んで如月となりぬ

夜の花　曲輪に咲けば　おくれじと　人の妻等も　紅を差すらむ

子を生むは　蝗も爲なり　遊行女も　買はれ行くなり　あはれなる哉

乾き行く　涙と思ふや　おとよめは　七人ありて　君と別るゝ

同じ日に　呼吸しつゝあるを　せめてもの　こゝろ慰に　おもふこの頃

二

あゝカフエーに行かう。銘酒屋に行かう。
電燈の花やかな下に、白い顔をして、男の群を擒にしよう。
酔うて、酔うて、狂うて行かう、男といふものを呪つて。

唇も舌も腕も　腸も、たゞらして死
なむ火の酒のみて
今日よりは彼の犬の如き男の子らの
舌なめずりに身をばまかせむ
赤く青く燃ゆる炎のわびしさよ……
思ひ出を葬らんとて文がらと緋のはんけちを月
島に燒く

結んだ縁の……
あんまり憎うもあるまいもの
誰かゞ笑つた、泣かずにゐらりようか。
戀に死ぬべき美し
の命よ。
緋の長襦袢着て…
…
あゝいつの日。

三

『わが死ぬる時に
は名をも呼ばずあ
れ默せるまゝに逝
かむと思ふに』

（三色版の繪を刷つて洋紙の裏へ、ナイフの尖でたんねんに穴――蟻の足あとのやうな連續した小さな穴を明けて行つて一首の歌をつゞつた。

奴さん安物の泉筆を嚙ん潰してから、鉛筆すら持つてゐなかつたのだ。

何を彫るのだらうと思ひながら花のやうな顔を少しランプから遠のけて女は見てゐた。



見ちやいけないと言はれて、につと笑みながらつまらなさうに、柔かい前髪の毛を兩手で弄つてすぐ止めて小さなあくびをした。夜は一時を過てゐた。）

あなたも『白き戸』の一人だつたね。私が世に存らへるかぎり遠く近く周を廻つてあざけりの歌をうたふのは、あなた達白き戸の群である。自棄の涙に靈を腐らしてから、

女子は道德上の責任を解せずなど大それたことは言へもせぬが、母を思ふたび山門の扉の乳に縋つて泣いたといふ小さい時のあなたを考へ出す、私は法隆寺に遊んだことがある、木理なんか一寸も喰ひ込んでゐるかと思ふ程古い、聖德太子のいらした夢殿の感じも崇嚴なものだつた。白い尸に甘んずるよりか、幸お父さんにおかうぞりしていたゞいて明日からあすこの尼さんにおなり。

いや。

ぢやお止し、・・・・私はもつと別嬪だと思つてゐたんだけれど・・・・。

あらいやだ。だもんだから尼になれつて仰しやるの随分ね。

女皆白き尸となりにけり夢殿守の夢もたのまじ

さやれば鳴る鵄尾琴の絃戀て夜は來て彈く白き尸ら

尸等しなとの風に吹かれ來てわが鵄の尾のきんを取卷く

わたしの手これ汚いでせう。いつかの疵はさゝくれだの爪あかぎれだので見えなくなつちやつたの。四人も女中を使つてたあげくに××さんの家へなんか行つたからだ、いゝキビだ。しかし××『いね搗けばかゞる吾手を今宵もか殿の若子がとりてなげかむ』といふ歌もあるから・・・・。

知らない〳〵。

人妻ははなぐろいたち孕猫遊行女のごとく思へる君か

四

撓つかば櫛を吾手にとらしめて梳んといひし宮城少女は

平打を挿さしめむ日も滅びけり髮切りし日は君の去りし日

紫の打紐ながら枕きつれば髮は丸がれぬ夢に泣きけむ

盜人よ錢を與へむ今宵いんで宮城少女を盜りて歸らね

ぬす人よ鍵は渡さむから戸の中なる君を早も出でしめ

君を見る日天は落らむ地は壊むそれとてもよしや死なば死なむに

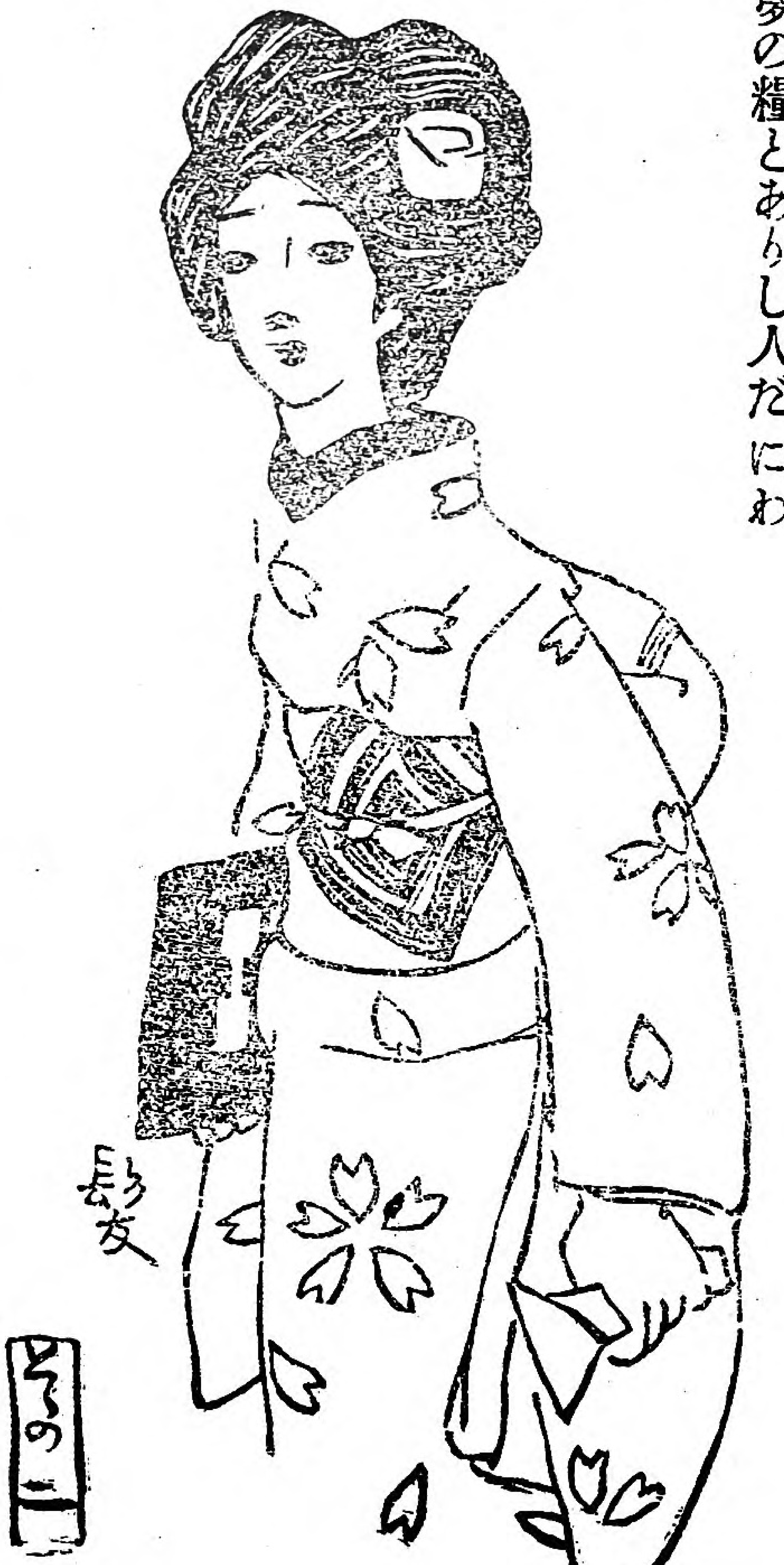
はかなさは四年を夢の糧とありし人だにわれを遠ざかりたる

夢の終焉戀の最終となりにけりうとましかくてなほも生くるが

わが歌も終の命となりにけり髑髏よ酒をいで呑ませんぞ

君が髪見れば母さへ泣くものを髪に賣らむ酒に代へてむ

母よ君に生く日迫りぬ兄ぎみも死ねと仰せぬこのぬすびとに



五

その一

あぢきなの、めをとや。朱房くけたる塗枕、きちと鳴らして眼を加れど、明日はお立、明日は三河へお立ちやるもの、つれなの君や、なせに「そがひ」になりたまふ、あゝ、なせなせ。

おもはれ妻のわが身ぞと、思ふ、思ふ、今日が今日まで思ふたものを、今宵忍んで、夢の吾君、ぬすむらむ、女白浪、えゝ、にくらし。

その二

わが床のべに遺ちたる小ぐし　筥に秘めんか　黒髪の一筋が　はつはつにからめる

わが床のべに落ちたる小櫛　美し人は手より脱けて
背向に眠れり

わが床のべにおちたるをぐし　青貝ずりのぶとふの
葉　子には眞珠をちりばめし　黒き小櫛

わが床のべにおちたる小ぐし　女の頭にありてこそ
挿頭は匂へ　いざかへさむ

緋のえり泄るゝゆきのちゝ　心にくゝおもへど櫛は
やらう　寢くだれ髮よ梳げよかし

六

美しき花の姿も世は夢と思へばはかなき幻なり、幻をわが世と思へば宵に淡き君がみ夢はいなみ難き現なり、其否み難き現のみ夢に生き參らせんとの願ひにておもかげばかりのうつしゑ封じ參らせぬ、人に見せたまはざれ、自ら輕々しきを耻ぢしものを、われ父母の許を去るまでは固く固く秘めおき給へ。

サンタマリヤわれは有髮の尼なれば寂しき君の
夢に生くべき

サンタマリヤ夢の少女が面影を君におくりて今
日より生きむ

有髮の尼今日は心の底を語り參らせ候、有りやうなげの節の候とも僞とな思しそ、忍ぶ者は幸なりと聞き候へば、わが願　幸なければまたよき折の來らんまで忍ばむと思ひ極めて、溶けて同じ谷川の水となり候までお目もじの折無しとあきらめし詩人の君に最後の文として書き參らせ候。

君が見る悲しき夢に伴ひてわれは降らむ地獄に
までも

心強う思し給へ。君がみ手わが肩におき給はゞ起ちて歩みたまふにしさいはあらじ、寂しかりしとのたまふ過去の御涙は、ひとりわが胸に流れしめたまへ。君の御いたみ輕かれと祈りて、わが足に燒きてあてし其日、御痛みいかにおはせしか知らず。

仰ぎ見る痛き光よ君が　のいばらのごとくわが
眼をとほす
御足の石とてほらむ　夜は
せめてわが手の中にいり
て寢まさね
痛みの火髓を焦して御足
の枯るゝ日あ
らばわれも燒
け死ね

尼にならんと願ひ候へど、わが涙涸れ盡して親はらからを忘れしには候はず、わが世あまりになつかしくわが血あまりに熱ければ、思ふがままに泣きたく人の目をのがれんとてこそ願ひ候へ。一人の戀に狂はんには、はた凡てを父母に捧げんには、わが胸にあまりに涙多し、情に走りて情に慰められず、理に走りて理に安んせざりし身は、父母の恩愛を容れ、友の心を容れ、兄妹の愛を容れ、世を思ひ人を思ひて、更に戀を容れんには可弱く狹き女心の堪ふべくも候はず。



高粱の靜に水堰
く圓石其つぶら
石わが夢に鳴る
戀に生くる女な
りせば涙にはく
たさじものを紫
の袖

堪へがたき憂も艱みも思ふがまゝに泣かば心やる方も候はむ、幸ある家に身を置きて人に涙を見せじと思へば、すべてを憂き夢とこそ思へ、更に「生」をくり

かへして人の母にならむことは命にかけて辛しと思ひ渡り候。

嫁ぎてふことも忘れば子生むことも我は忘れむ
悲しきものを
この涙子には傳へじ哺むべく乳はかたち好く胸
にあれども

命にかけて人の母にはならじと心を定め候へど、つらきは父母の恩愛たゞり、父母は色なる衣着せて晴のにはに琴ひかせんとねがひ候。

吉備津彦、父は七戸の庫明けて嫁入の衣をわれ
に賜ひぬ
しかすがに八重の緞子を帯にして寢る夜の夢は
花になれども
晴れがまし睫重きを知らずしてわが琴の上を燭
の照せる

（つゞく）



夜の見合

江木夫人談

夜の見合といふことは、まア稀なことでございませうけれど、何かの都合で然ういふことも絶對にないとは申されません。

然ういふ時に、何よりの問題は其燈火と、化粧法との關係、及び服裝の問題ですが、夜の灯火の美は電燈よりも瓦斯の火の方が美しく思ひます。

實際瓦斯の光は凡てのものを美しく見せます、殊に婦人の美は、電燈よりも瓦斯の火光の下に於て、一層美くしさが増すもので、又それに應じて化粧法も違ふのです。あまり白くぬりすぎて青く見えてもいけませんから、白粉下などに注意が要ります。電燈なら又電燈のやうに化粧もしますが、是非見合とか、其他美しく見せる場合は瓦斯の燈光を用ひたいものです、衣服の色なども、鮮明に、又美麗に見せるのは瓦斯の燈光の方が勝つて居るやうです、色ものは其色に依りまして多少の注意を要します。

子守唄

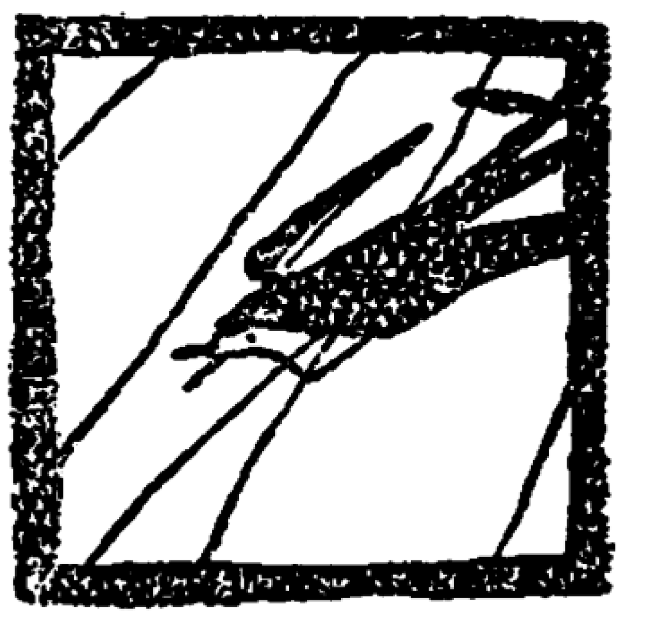
ジヤンニイヌ・グアド女史作
よさの・ひろし譯

わたしの赤坊よ、ブロンドの娘、
折々に、澄んだ青い目をじつと瞶る。
わたしは世間を案じて守をする。
おゝ、わたしの子供、ブロンドの娘、
強い指もつ惡者ばかり。

わたしの赤坊よ、青白い娘、
清らかな、なんにも知らぬ額つき。
わたしは將來の埃を氣づこてる。
おゝ、わたしの子供、青白い娘、
玩具と心を汚すだろ。

わたしの赤坊よ、かはいゝ娘、
柔かな、脆い、品のよい體つき。
わたしは嵐に身が慄ふ。
おゝ、わたしの子供、かはいゝ娘、
魂に冬の夜分が落ちかゝろ。

いゝえ、いゝえ、わたしの懷しい子供、
こんな事を、わたしは何より願つてる。
「愛」が祈禱であつて欲しい。
おゝ、わたしの子供、なつかしい娘、
いつまでも、おまへが其れを口にして。



カナリヤの短き一生

西村醉夢

(一) 太郎の愛馬

或る春の日の午過ぎ、ぽか〱と溫かい日が射して庭の雛菊の花に虻がぶう〱と唸つてゐた。私は長男の太郎――本統の名前は朝日太郎と云ふが、呼び難いので略して、單に太郎々々と云ふ――と一所に庭を步いて、色々の草花の說明をしてゐると、檜葉の籬越しに隣家のカナリヤが面白い節で長閑な歌を謠ひ始めた

『お父さま、あれは何ですか。』と太郎は年に似合はず、母親仕込の切口上で尋ねる。

『あれはカナリヤといふ鳥だ』

『カナリヤつて何んな鳥？』

『矢張り鳥さ。』

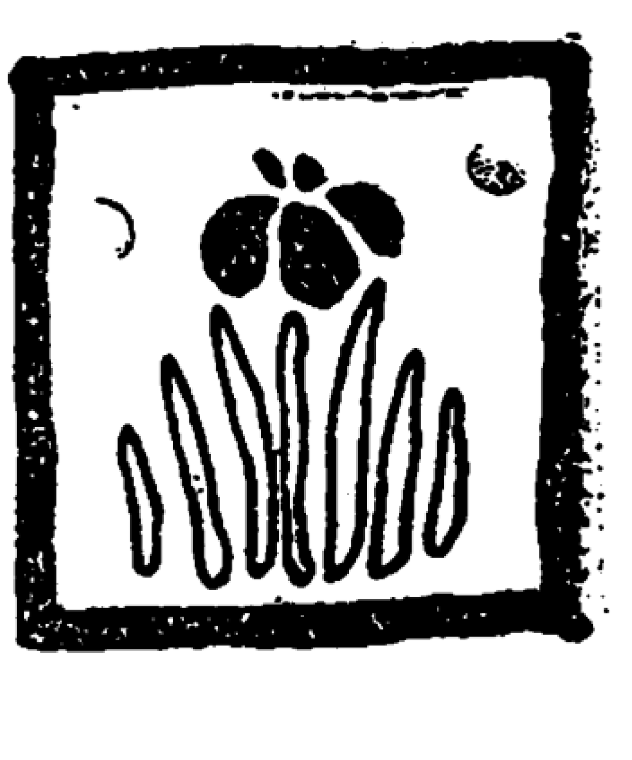
『鳥ツて何んなもの。』實は太郎には『鳥』と云ふ觀念もまだ明確でないらしい。

『鳥と云ふのは、鳩ぽつぽのやうなものだ、ちう〱、も、かあ〱も皆鳥だ。』私は恁う云つて、恰度前家の屋根に止つてゐた雀を指さし、『あのちう〱も鳥なんだ。』

『ちう〱も鳥、鳩ぽつぽも鳥。――そしてあの、お隣りのぴい〱云つてるのは何？』また元の問に返つて來た。

『カナリヤと云ふ鳥さ。分つたかい。』

『あゝ分つた。カナリヤぽつぽだねえ。』太郎は鳥を稱してぽつぽと云つてゐるらしい。で、私は爾うだ〱と首肯くと、



『坊やにもあの鳥を買つて頂戴。』と云ふ。私は曾て種々な鳥や蟲を飼つてゐたが、此處數年忙がしいので、蟲を全く飼はぬことにし、鳥はよく馴れたジフシマツだけ殘して、他は皆友達に與れたり、放したりして了つたが、そのジフシマツさへ、不圖した事から殺して了つたので、その後は一切飼はぬ事に決めてゐた。で、巧みに言を設けて太郎の要求を拒絕したが、彼は何あつても承知しない。

『あれが欲しい！』と遂には泣き聲で叫び、眼からは大粒の雨を降らし始めたので、

『ぢやあ、仕方がない、買つて上げやう。』と云ふと

『直ぐよ、お父さま。今買つて頂戴よ。』と促む。其處は親馬鹿ちやんりんである。可し可しと太郎の手を引いて門を潛る、柳の綠の煙つてゐる江戸川緣へ出て大曲の橋をわたると、緩やかな河水には櫻の花びらが流れてゐる。



左へ折れて川緣を少し行くと、熱帶の色を現はしたインコや、支那の平原を自由に飛び廻つてゐたベニスヾメや、深山の樂みを追懷しつゝ籠の中で踊りを踊る駒鳥や、野を慕ふ鵯鳥や、田舍の畑地に憧憬れてゐる鳩や、その外いろ〳〵な鳥が、手々な姿をして、手々に鳴き立てゝゐる。

太郎は吾を忘れて、うつとりとそれ等に見惚れてゐた。鸚鵡が唐突に『オトウサン、オカアサン』とやつ

た。太郎は變な眼附をして此の鳥の姿に鋭い視線を注いだ。

『オトウサン』。鸚鵡は又饒々と口を開いて愬う云つて、こつ〳〵とその黒い嘴で金網を叩いた。

奥の方では黄色いのや白いのや、瘠せてひよろ長いのや、肥つたのや、又頭に冠毛のあるのや、色々のカナリヤが飛び廻りながら、冴えた朗らかな聲で謠つてゐる。

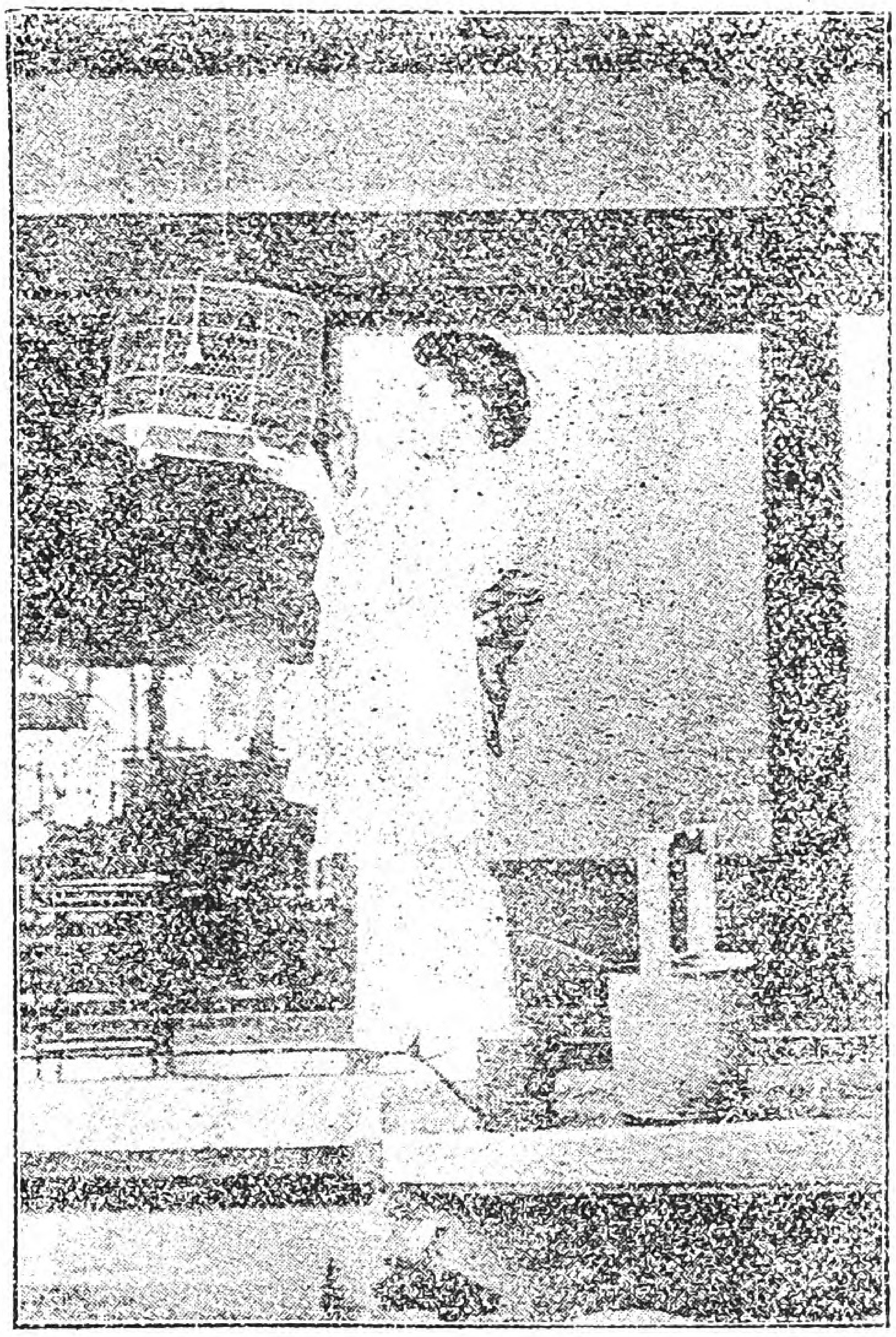
『あれがカナリヤだよ。先刻お隣家で鳴いてゐたのはあの鳥だよ。』と太郎をさし招いて説明すると、彼は急ぎ足にちよこ〳〵と駈け寄つて、

『カナリヤぽつぽ、』『カナリヤぽつぽ。ぴい〳〵〳〵ぴい。――可愛いねえ、お父さま。』と眼玉を瞬つて鳥籠の前に衝立つて、暫らく經つても身動きもしない。

私は私の最も愛する鳥の一つなる鵯鳥を見成つて、これも暫らく夢中でゐると、太郎は強く私の手を握て、

『お父さま、買つて頂戴よ。』

『あゝ、買つて上げよう。』と私は鳥屋の主婦と値段を決めて、年の若い二羽のカナリヤを買ひ求め、紙袋に入れて急ぎ足に家に歸つた。



籠のカナリヤ

（二）午前中は小鳥の番人

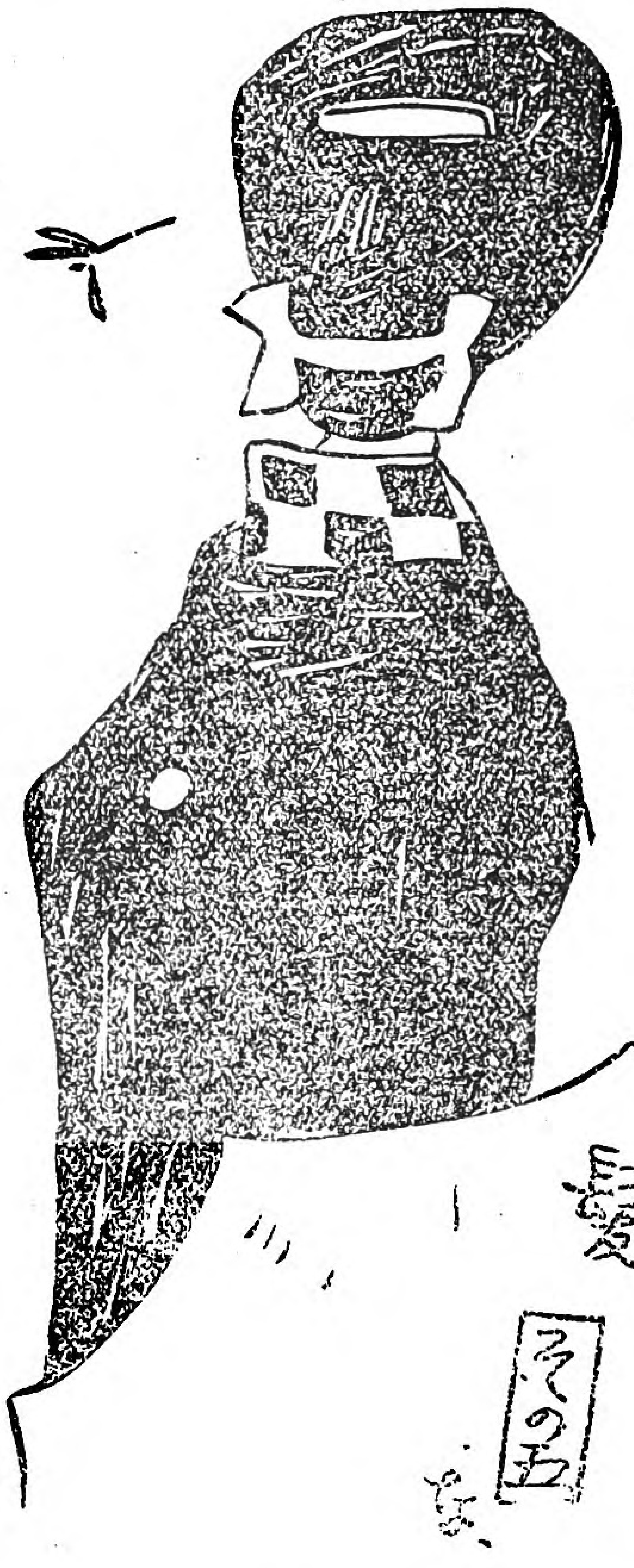
家に歸つて大きな鳥籠に入れてやると、太郎はほく〳〵ものでそれを眺めた。長女の春野子も來て、穴の明くほど中を覗き込む。

『お兄ちやま、それ何に？』

『これカナリヤぽつぽ。』

『カナリヤぽつぽ？』
『可愛いだらう？。』
『可愛い——それお兄ちやまの？』
『あゝ坊やのだよ。』
『赤ちやんにも
一つ頂戴よ。』
『否』
次いで來るものは、春野子の泣き聲である。暫らくして又機嫌を直して、二人は鳥籠の前で蠻人のやうな問答を繰返してゐた。

　翌日からは毎日々々午前の一時間許りを、二人は鳥籠の前で過ごした。幼い頭腦にも私等が日々小鳥に對して盡してやる事柄を覺えて、朝起きると直ぐ太郎は私に『お父さま、もうカナリヤに水を與つたの。御飯は？。』御飯と云ふのは粟や稗の事である。私が『あゝ與りましたよ。』と答へると、彼は喜ばしげに緣側を覗いて、カナリヤの雅びた姿に眼を曝すか、『まだゞよ。』と云はうものなら、『早く〳〵お遣りよ。』と催促するか、或は『坊やが遣らうよ。』と云ふのが常であつた。


その五

　始めの中、カナリヤは、籠の側に近う坐つて、指を差し出したり、覗き込んだりする二人を恐れてゐたが次第に馴れて來て、二人の姿を見ても驚いて跳ね廻る

やうなことがなくなつた。

まだ若いのも、飼ひ方が不十分であつたのとで、カナリヤは單に友達としてその春と夏とを送つた。庭の草花は種々と姿を變へて、カーネーションがその艶やかな色を、黄蜀葵の蔭に輝かしてゐる秋の始めが來た。葉にも花にもまだ凋萎の姿は見えぬが、梧桐の葉や、大空やには、何處となく秋らしい、寂しい色が泛んで來た。心の故でもあらうが、カナリヤは泊り木の上に並んで止つて、何となく寂しげにしてゐた。

（三）　鳥籠の蓋が書見臺

その初秋の日曜の午前、私は卓子に倚つてマーテルリンクの『青い鳥』に讀み耽つてゐたが、縁側で樂しげに話し合ふ子供等の聲に牽き附けられて、椅子を離れて縁側に出て見ると、太郎と春野子とは鳥籠の蓋を外して、その上に繪本を擴げて話し合つてゐた。

これが『桃太郎さん、これが雉子だ。ほらお猿が團子を持つてるでしやう。』

『あゝ、桃、桃。』と片言を云つて、春野子が合槌を打つてゐる。

鳥籠を覗いて見ると、無論二羽とも留守である。

『おい、太郎。お前がその蓋を取つたので、カナリヤが逃げて往つたぢやないか。鳥は何處へ往つたかえ。』

『えゝ、ぽつぽ？』と太郎は小刻みに早足で鳥籠の前へ來て、踞んで中を覗き込みながら、『おや、居ませんよ』。と驚いてゐる。

よち〳〵と春野子も來て覗き込んだ。そして口眞似をして『おや〳〵。』と云つたが、驚いたのか驚かぬのか、變な眼附をして四邊を見廻した。

金絲梅の垂枝から落ちる黄色い花が、やゝ濕つた庭の面を明るく見せて、松や檜の葉越に照らす日の光が葉は枯れても蔓の絡んだ朝顔の上に漂ふてゐる裏の垣根を見ると、その上に一羽のカナリヤが黄色い翼を休めてゐる。

ぴい〳〵と美くしい聲が聞えるので、裏の家の方に

視線を轉ずると、その屋根にも又一羽。何うすることとも出來ないので、叱々と聲を出して追ふと、垣根のは庭に飛び下りて籠の方へ歩いた。つゞいて屋根のも庭に飛び下りて、木の間を彼方や此方と飛び歩いてゐる。可愛さうだと思つたが、間誤々々して居れば猫の餌になると、摑んで元の通り籠の中に入れた。

『お歸り！』と太郎は籠の中を覗いて、『お前は何處へ往つてたの？』

春野子も荐りに中を覗き込んで、何とか彼とか分らぬ事を云つた。カナリヤは驚きと恐れとに心臟の皷動が烈しいと見えて、胸の柔毛が顫へてゐる。私は可愛さうに想つて二人の子供を座敷へ移し、小鳥を安靜の狀態に導かうとした。

翌くる日は最早落ち着いて、いつもの如く靜かでゐた。



(四) 憐れなる最期

その後私は居を山の手に移し、カナリヤも亦た住所を變へた。明らかな日光、清い空氣、繁つた樹木――四圍の狀態はカナリヤが憧憬れてゐる野山のそれに似てゐるが、生憎近所に黑猫がゐて、それが日に兩三回はカナリヤを襲つた。

或る時はどたんばたんと猫の籠を動かす音を聞いた。或る時はカナリヤの悲鳴を耳にした。或る時は籠の金網の中程の凹んでゐるのを見た。また或る時は一枚の尾羽の拔けて籠の外に落ちてゐるのを見た。妻は見るに見兼ねて、鳥好の許に遣はすか、或は放すか、二者の中一途に出でようと迫つた。併し、私は何うかして猫の害を免れる工夫をしようと思つてゐた。

年の暮が來た。貧しい吾が家でも形式ばかりは正月の準備をせねばならぬ。家人は何やら彼やらで氣忙しく數日を送つた。或る日の夕暮、雨戸を繰らうと妻が緣側に出ると、眼の凄く光つた黑猫が、驚いて驅け去るのを見た。それからと云ふものは、カナリヤは非常に弱つて、樂しげに囀ることもなかつた。

大晦日の朝、太郎は目の色を變へて私の側に驅つて來て、『お父さま、大變よ。』

『何が？』

『ぽつぽが死んでるよ。』

『何、ぽつぽが死んだ。』と私は早速鳥籠の側に往つ

たが、薄暗い籠の底には黃色い羽毛が散ばつて粟粒に塗れてゐた。そして生き殘つた一羽は、寂しげに泊木に止つて可憐しい視線を配偶の上に注いで居た。私は一種の悲に胸の塞がるのを覺えた。

* * *

七日目にまた一羽も死んだ。寂しい數日を配偶の追憶に暮らして、苦しい思ひの末遂に自らも命を殞したのである。私はその骸を前の鳥の隣に瘞め、小さい土饅頭を造つてその上に墓標を樹てた。『――わが愛せしカナリヤの夫婦安らかに玆に眠る――。』

歸つた！歸つた！
逃た鳥は歸つたのに
お父さま
なぜ鳥は動かない

幼きものよ
生命の不思議は
お前達に分らない
頓てものゝあはれを知る日が來たら
空しき鳥籠に鳥が來るであらう

（其カナリヤの爲に――醉茗）

特許 小町はり箱

（女學生諸孃通學用…優美堅牢）

本黑塗製

二ツ折鯨尺。クケ臺。針差。ヘラ。装形。コテ。鋏。絲卷。指拔。

（美麗二重箱付）　定價金壹圓貳拾錢

特製

二ツ折鯨尺。クケ臺。針差。鋏。ヘラ。装形。絲卷。指拔。

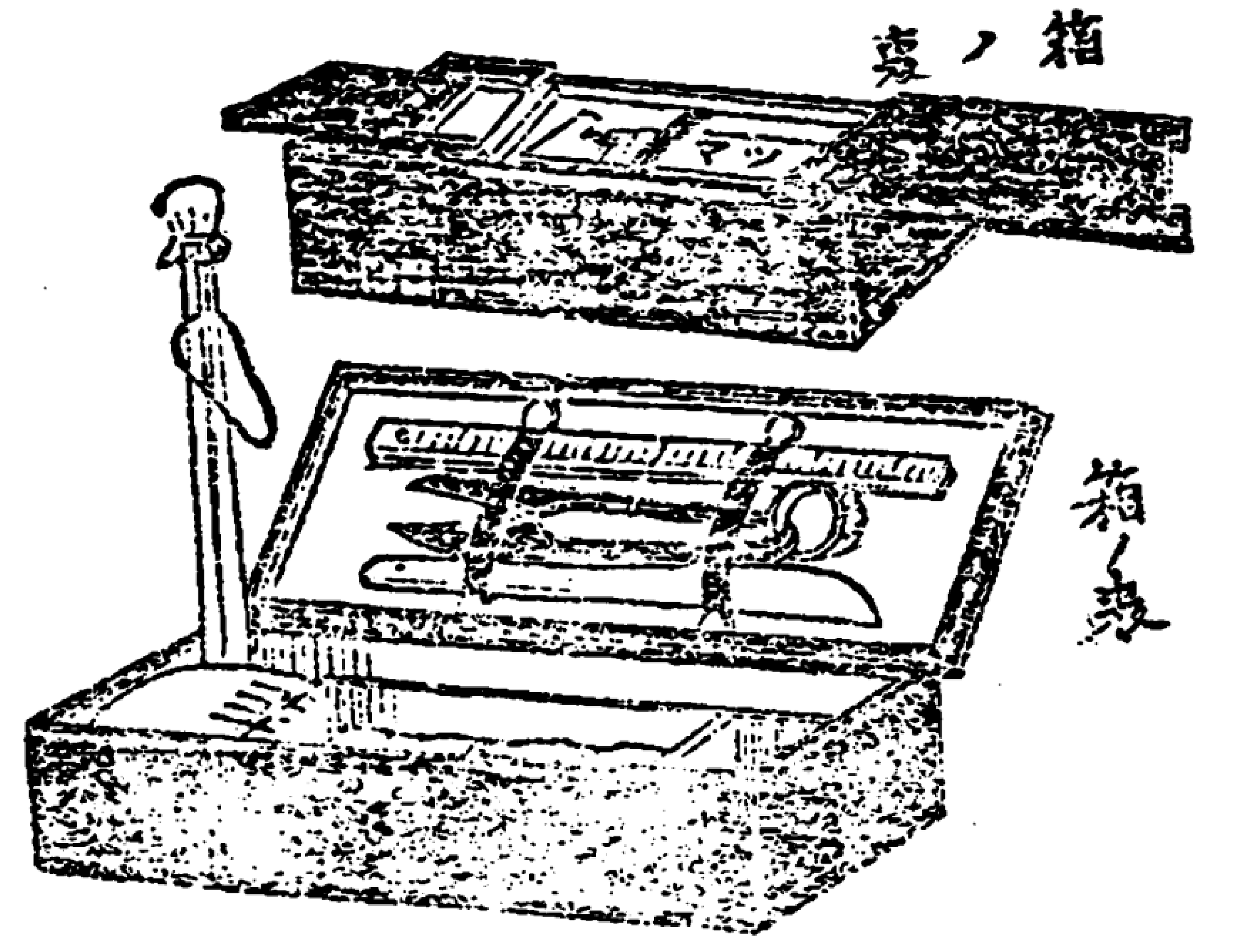
（美麗二重紙箱付）　定價金六拾五錢

上製

クケ臺。針差。絲卷。

（美麗二重紙箱付）　定價金五拾錢

【送料】　市内無料　地方八錢　海外參拾錢



此小町はり箱は通學用として携帶し易く家庭用として最も便利で其内には起臥自在のクケ臺を取付あり裏面を開けば敷臺となり又裁縫具一式を秩序整然と入れてありますから淑女諸孃の旅行用御進物に好適です

製造發賣元　東京市赤坂區青山南町二丁目十六番

竹中商店

電話芝二八八四番 ◉ 振替東京三三二三番

▲特約販賣希望の方は御申込みを乞ふ

陳列販賣處

銀座發明館、新橋天下堂、京橋ハイカラ堂、小川町天下堂、新宿日本橋苗株式會社、上野博品館秋山、京橋際綿問絲店

新案特許

ハイカラたすき



定價　一組箱入　金八錢

五組箱入　金卅五錢

送料二錢

▲特色

一 今までの襷とちがひ袖へ（しわ）のつく心配がなく掛けはずしにも面倒でなく御便利です

一 せなかへ（はす）に掛けると右の袖がうしろへ引かれる故水仕事の時に、最もよろしく腕を充分に出さうとするには袖口の近くへ（ばね）を御付になれば自由に出ます

一 十文字になりませんから畳中などにも衣類へあせが付つかずわづか一尺五寸位の紐さへ御取りかへになれば永年御使用が出來て甚だ御經濟です

御使用の節は必らず兩袖へ（ばね）を一ツづゝ付てから後でいろいろに御掛になればよろしいのです

▼女子文壇化粧實驗問題　藤波芙蓉先生實驗發明新化粧料▲

クセ毛のなほし　美髪劑

（清韓臺灣各送料參拾錢ヅヽ）

●定價小瓶參拾錢、中瓶五拾錢、大瓶壹圓（送料）市内四錢地方八錢

「美髪劑」は十有三種悉く人體皮膚並に毛髪の攝養となる純植物性のものより成り、天性のチヾレ毛には些しも効能はありませんが、クセ毛なら何んなひどいものでも直ります、譬へクセ毛の人でなくとも、毛がやはらか過ぎて、ハエギハもビンも、タボも下り易い毛髪でも、之を防ぐことが出來ます、又毛髪が硬くて自由の利かない人でも、すなほな好い毛髪となります、加ふるに毛髪の色澤を美しく致します。

美髪香油

（清韓臺灣各送料拾錢ヅヽ）

●定價一瓶金壹圓五拾錢（送料、市内四錢地方八錢）

「香油」は美髪劑の總ての効能を具有してある外に、一時的にチヾレ毛を直し、毛をフクラマス力をもつて居りますから、如何なる毛の薄い御方でも、これをつけて髪を御結ひになれば、フックリとして澤山の毛のやうに見えます、又皮膚が剝脱してフケが出たり、毛髪が赤く細く枯瘦するのを直す權威を備へて居ります。

純植物性洗粉

（清韓臺灣各送料參拾錢ヅヽ）

●定價小袋入參拾貳錢、大袋入六拾錢（送料）市内四錢地方八錢

此「あらひ粉」は顔料の洗粉として皮膚を美化するのみならず、洗髪料洗粉として髪のツヤを出し、毛をサラサラとさせます、即ち先づ此洗粉で御顔やおぐしを洗つて「美髪劑」を塗け「コールドクリーム」をスリ込み、其上に「艶肌劑」を御つけになれば「四劑」互に相たすけ合つて、根本的に自然美を發揮する譯であります。

●附言●（本品は原料輸入品のため暫らく品切の處今回澤山入荷製造仕候に付何時にても御用命を願ます）

化粧水

（清韓臺灣各送料參拾錢ヅヽ）

●定價一瓶金五拾錢（送料）市内四錢地方八錢

白粉のノビやノリをよくし、化粧を長く保たせ、肌理をスベスベにし、吹出物を防ぎ且つ直すといふ丈の効力しかありません、使用法は普通の化粧水と同じです

コールドクリーム

●定價一瓶金壹圓　（送料）市內四錢地方八錢

「コールドクリーム」の美顔料としての効用は、之をお化粧なさる前によく御顔なり、御手なりに擦込み、紙か軟かい絹で拭き取りますと、アブラ性の方は、アブラの出るのを防ぎ、アレ性の人はアレを直し、皮膚を艶麗ならしめ、光澤を出し、おしろいを翌日までも剝げずに落付かせ、殊にシワを延ばし、色を白くさせる力を持つて居ります。『但此クリームは美顔劑で、世のクリーム類の如く御化粧下用には立ちません、「艶肌劑」と「コールドクリーム」とは艶肌美顔の姉妹劑です。

（清韓臺樺各送料參拾錢ヅヽ）

艶肌劑

●定價一瓶金六拾錢　（送料）市內四錢地方八錢

「艶肌劑」は顔のシミヤオデキの痕を取り、キメを細かにし、皮膚のツヤを綺麗にし、化粧下にも、白粉下にもなり、而して白粉のノリをよくし、お化粧を落付かせる化粧料であります。

（清韓臺樺各送料參拾錢ヅヽ）

霜やけどめ

●定價一瓶金參拾五錢　（送料）市內四錢地方八錢

特にヒヾを直し、霜やけを防ぐ目的でこしらへました、用法は外出の時と臥床に際しおつけなさい、手足に限りません、お顔にも同様です

（清韓臺樺各送料參拾錢ヅヽ）

日やけどめ

定價一瓶四拾錢　（送料）市內四錢地方八錢

抜毛どめ

●定價一瓶金九拾錢　（送料）市內四錢地方八錢

産後のため疾病のためノボセのため頭皮炎のため、其他如何なる原因から抜ける毛でもキット止めるだけの特殊力を有し従つて毛髮の發生を誘致しフケを除去する副作用を持つて居ります、猶これを顔におつけになればアブラを取り、フキデ物の發生を防止することも出來ます

（清韓臺樺各送料參拾錢ヅヽ）

▲本品は世間にある化粧品と異なりワザと粧飾をなさゞる實用專一主義の責任ある無類珍品ですから、速に御試用あれ

▲本品は本社代理部の外一切發賣を許されぬ珍品なれば直接本社へ御申込下さい

藤波式化粧料 專賣元

東京市京橋區大鋸町
振替口座壹七貳九番
（電話京橋六〇七番）

女子文壇社代理部

女子文壇　一月増刊

現代婦人

▲新しき女とは何ぞや……嚴谷小波

◎町より村より　全國より八通信にして地方の文明は女子ノ手に描かる

▲若き女の人々……水野葉舟

▲二階の朝……澤村胡夷

◎顔の描寫　兄さんの顔あり女優の顔あり凄い顔あり千種萬様ノ顔

▲一喝　羅羅裏とは何者ぞ！玄の又玄磨訶不思議！

◎自己に對する愛……長曾我部菊

◎濱ちりめん……山田邦枝

◎無言のあひだ……太田喜志

◎深夜の入浴……粒木つね

◎貧しき生存……白木絲子

現代の婦人に與ふ……のりそ

▲驚くべき新説にして其實は動かすべからざる眞理なり▼

▲明治の小説に現れたる婦人の顔……外島浪之介

▲歌謠と東海道……前田林外

◎帝劇總見記……あやは

◎街になる村……平塚白百合

◎初奉公日記……龜岡みつゑ

◎職業を求めて……松龍紫花

◎有髪の尼……水香

◎南國の福音……石井とし子

◎小學教師……波の香

◎お裁縫り師匠……大橋榮子

◎武藏野の戰ひ……笹本多美子

◎短草怨……日かげ草

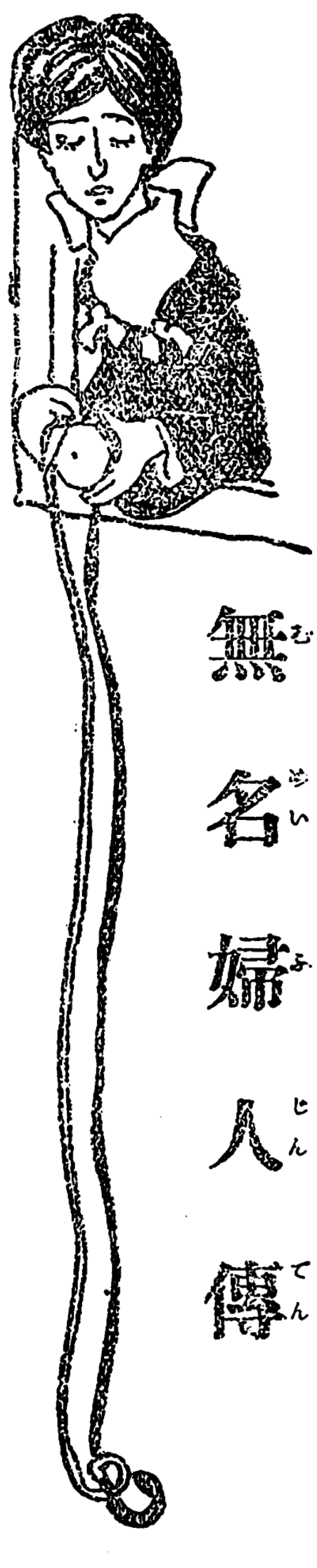
◎朝の出がけ……櫻木雪江

◎一日の仕事……加藤萩香

口繪　太田三郎筆（彩色石版）

一冊定價　金拾五錢

女子文壇社發行



無名婦人傳（の）

（二四）

夫の行方は知れねど子の愛に引かされて捨てる命を生存へて居る果敢ない身の上

龜岡めつゑ（播磨）

二ヶ月程前から我家の借家に移住した二十五六位の婦人があります。五十歳餘りの母親らしい人と、六つ位を頭に三人の男の子との五人暮しです。婦人はよその縫物をしたり、ムシロ打などをして居ますが、野村しづとしるした表札の美くしい女文字の達者な書きぶりから、荒仕事をして居てもどこととなう品のある體のこなしなどを見ると、元はよしある人の樣に思はれて

母はいつか身の上を聞いて見たいと云つて居ました。ところが私縫物がつかへて困つたものですから、先達て一枚仕立物を頼んで置きました。今日其仕立上げたのを持つて來られました、品物は二子ですけれど、縫目がかつちりと氣持よく仕立られてあります。恰度母と私の外誰も居ませんのを幸「失禮ですがお身のこなしから見ましても、借家住居などなさる方のように思はれませんので、いつかお伺ひ致したいと思つて居ましたが……」と母は問ひかけました。「ほゝお見かけの通りの者で氏も素性もございません」と始めは一寸語りませんでしたけれど、色々と母が眞心から尋ねますので、情に動かされたのか、話し出した物語りは哀に氣の毒なものでございました。そのまゝを皆樣にお傳

へいたしませう。
「私は明石の在の生れでございます。二つの時母にわかれまして十八歳まで後添の母の手に育てられました十八の暮緣あつて近村の舊家で名の通つた清水屋へ嫁入ました。良人は一人息で、姑と唯二人のごく心安く田畑が合せて五町餘りあり、何不自由なく其上姑が年ゆかぬ私を心から可愛がつて呉れまして世に云ふ嫁と姑などの樣な感じは夢にも致しませんでした近所でも羨しがる程で昨年の春まで過ぎました。ところが去年の春友に誘はれて良人は伊勢詣りをしましたが、思ひがけなくもそれが家の衰へる始まりでした伊勢から歸つて來た夫は、其後度々家を開けて年にも似合はぬ茶屋遊びをし始め、又相場に手を出しかけました。始四五百圓勝つたのが病みつきで姑と私がどれ程止めても聞き入れず、袂にすがる私の手をふりきつて「なくしてしまつたとて自分のものだ、いやなら歸るがいゝぢやないか」と毒づいては出ていつて五日も七日も歸りませぬ。終には田畑も人手に渡し、牛や自轉車まで賣り飛ばしては持つて行きます。それ程なくなつてもまだ醒めずに茶屋遊びも相場もやめません。姑と私は涙の内に日を送つて居ました或日見知らぬ人が來て「私は野村さんから此家も屋敷も買ひ取りました都合により二ケ月の内に立のいて戴き度」と、いくらなんでも家や屋敷まで賣るとは、餘りの事に言葉もありませんでした。



其夜つく〴〵子供の事や、行末を思ひ女の小さき胸に思ひ餘つて、ふら〳〵と家を立ち出で、汽車道までたどりつきました。折からゴー〳〵と走つて來る列車の響に、抱いてゐた子供は目を醒して、わつとばかりに泣き立てました其聲に我に返つた私は、後に殘つた姑と子供は誰が養ふと思ひまして、どうしても死ぬ事は出來ませんでした。それからは何事も運命と諦らめて、如何なる艱苦とも戰はうと決心しました。始めの内は手なれぬ仕事に手の皮をむいたり、肩がこつたりしてつらうございましたけれど、今は大方馴れました。せめて里の實父でも居て呉れましたら、何とかして呉れませうものを、一昨年亡くなつたのでございます。繼母は子供を捨て〻置いて歸つてお出でなさいまだ若いからどこへでも行けますと云はれますがまあどうしてそんな事が出來ませう。子供を里子におやりなさつてはと勸めて下さる方もありますけれど、ま〻しき中に育つた私は、我子を他人の手に渡すことは出來ません。たとへ粥の湯をす〻つても大きくしたいと思つてます。夫ですか、夫は家や屋敷を賣つて出ていつたきり何の音便もございません。姑樣の昔語り聞くにつけ、罪なき子供の、蜜柑賣が來れば母樣蜜柑か



つて下さい。めづらしいおもちや見ればあれほしい買つてようとせがむ子供見ますれば、いつ迄もゆたかで有様に思つて居る子供心がいぢらしうて、諦めて居ながらも、いくぢない涙がわくのでございますよ。女の愚痴をお笑ひ下さいませ。つまらぬ話に長々お邪魔いたしまして」と縫ふべき仕事をもつて立ち上りました涙もろい母と私は、もらひ泣きしました。人ごとのやうに思はれませんので、色々慰めて上げると、厚く禮をのべて出て行かれる後姿は、カタ〳〵と下駄の音微かに塀のかなたに消えました。

（二五）寡婦の母を助けて三百六十五日を一日の如くに働きつづける蠟燭屋の娘さん

秋月すゞ子（長岡）

おきんさんの父親は四五年前に亡くなつた。柱と頼んでた人に逝かれたので、妻や子は非常に悲んだ、けれど、そう悲んで許も居られず、仕事をせねば生活が立ぬので、母は勇氣を出して、元、夫の手傳してゐた事とて、けなげにも又從前通り馴れぬ女の腕で蠟燭をかけ初めた、細々乍らまあ、眞似かし見たやうに、ガタ〳〵ガタ〳〵と、お餅を延す時のやうな棒を持て、お味噌をするやうに蠟をすりて、左の手にて蠟を付けては、蠟燭をこしらへてゐるので有る。初めの二月位は職人を入れたが、さう職人を入れてやるやうな家と違ふので、今ではお金さんが見馴れて覺えたので、覺束乍ら母の手傳をして家業を勵んだ。

夏の日は暗い三時頃より床を離れて、ちよこ〳〵と鬢も髱も少しづゝ出した銀杏返しに結ふて、皆の汚物を洗つて掃除を濟ませて朝飯前に二人して店の一仕事しんの挿して有る細い棒を油にしまして立てかけて店一杯ひろげる、それからどうするのか知らねど、棒でガタ〳〵音をいはせ初める、其中に子供は眼を覺まして來る、お金さんは朝飯の用意に暫時勝手へ引込む。蚊や黄金蟲のがや〳〵邪魔する夕も苦にせずに、二

人して油じみた汚ない袖無しに腰巻に細帯〆めて、あつくるしさうな狹まい店に流汗も拭はずに食事する間も無いと思ふ程にすき間無く稼ぐ、夜なべは十一時頃までは必ずする。

蠟燭は家でも賣れるが一日置位には母なる人の朝早つから、長岡市より三四里離れた在鄕町へ賣りに行くのです。其留守にはお金さん一人でかけて居る事も有るけれど、多くはしんを卷いたり、出來た蠟燭のしんを切たり、或は蠟燭を入れる袋を張たり、毎日の事故、冬物をといたり、張物をしたり、其間々には四人の子供の世話をしてよくまめ〲しく働くことに、迹も普通の人には眞似が出來ない。

娘盛りのお金さんは、少しも身なりにかまわずに、母の心をよくくんで母を助けてゆく、大祭日やおつまり等には、人前が有つてさうも店で働く譯にも行かぬので、其時にはつぎ物やら縫物やらで一寸でも外見する事は無い。



何內國石川の上流

三百六十五日を殆んど一日の如くに働らく、手も足も凍るやうな冷たい朝でも、變らず三時か四時に起きて、ガタ〱ガタ〱と、棒をする音が聞える。私はいつも夜具の中に居て其音を聞いてる、夜は又矢張り遲くまで聞えてる。此正月でも一日の日に休んだきり、毎日願のやうに、棒をかきまはす音のしぬ日はない。

寡婦世帶の儉約な所から、一寸仕事の手をやめた時は夏ならば前の水打ち冬ならば屋根の雪おろしをやる朝早くから夜遲くまで日毎かく〱身の働きのつゞくかと感心する。蠟燭屋の娘と云へば親孝行で能く稼ぐので近所での評判者です。

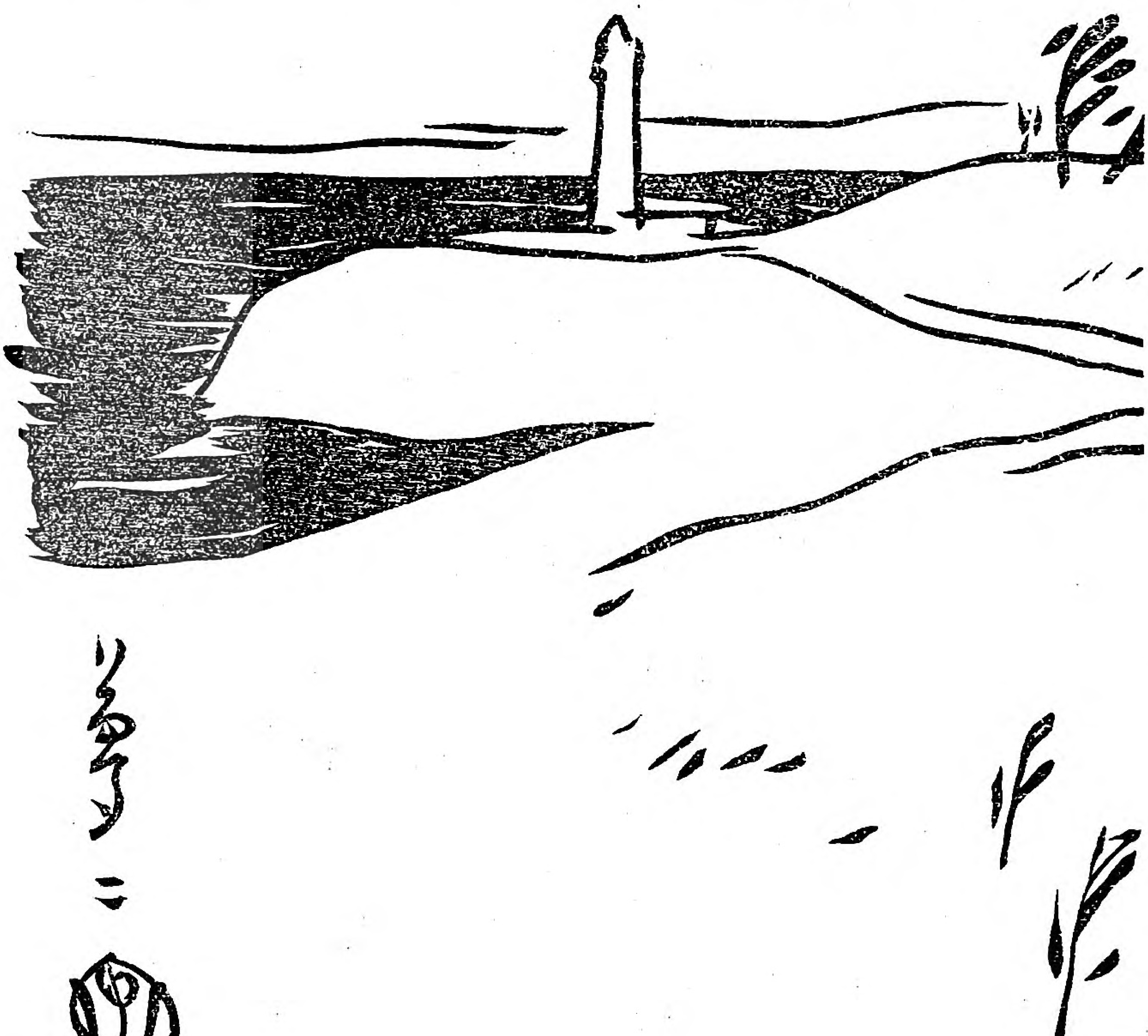
慈善

竹久夢二

晩春のある日、私は心よく旅に労れて松岸驛の待合室へきてベンチへ腰をおろしました。とみると群集に圍れて一人の少年が泣いてゐるのです。何げなく、人の後からのぞいてみますと、少年は首をたれて身上噺をしてゐる所でした。子を持つた女の人たちは、身につまされてもらひ泣きをしながら財布を探つて少年に銅貨などとらせたのもありました。少年はそれに一々頭をさげて禮をしてゐました。やがて登車のベルが鳴つて、群集は別れ〴〵に列車に運ばれていつてしまひました。どこへどう行くといふあてもない私は退窟まぎれに、群集に取殘された少年をつかまへて話しかけました。東京の深川の生れで、母は去年の冬、家出して父と二人暮してゐたが、母親戀しさに五十錢もらつて利根川通ひの汽船へ乗つて、銚子の燈臺の下にゐるといふ母親をたづねていつたが母親は幾日探してもそこにはもはやゐなか



つた。それで、仕方なく、父の家へ歸るのだと、また新しい涙をながしながら物語つたのです。十二にしてはませすぎた。鋭い眼をしたこの少年のいふことを急に信じることは出來ないけれど、給をかくことにも、遊ぶことにもつかれた、折柄なれば、少年のために驛長に頼んで兩國まで汽車に便乘させてやることを頼んでやり、そして、自分もわざ〳〵少年と共に兩國までゆくことにした。汽車の中で、ちよつと私が便所へ立つても少年は、おど〳〵と、私の行衛に氣をつけて、そばをはなれたくない樣子だつた。醉興な私もつひ、道學先生のやうな氣になつて、金のないことは恥ではないが、頭を下げて金をたゞ貰ふものではない。もし旅で金に困つたら、どこへでもいつて仕事をして金を儲るが好いゆめ〳〵遊んで金を惠まれてはならぬ。そんなことを言ひきかせて自分も變な氣がした。そして私は少年を深川の家へ送り届けて、また松岸へ引返した。こんなことがもし慈善と言ふのなら、世の中も好い加減なものである(旅のスケッチ帳より)





卒業まへ

そよ子

明日のユニオンの譯をしながら、ふと思ひ出して、急に行つてまゐりますと、譯をしてゐた鉛筆をノートへ挾んでミユーゼシヨールもコートもなしにそのまゝ出かけてしまひました。

こんな時にはいつも、おゆみさんに、またお草ちやんの氣分劇が始まつたつて笑はれますの。エヽ人生の女優よ、と新しい捨臺詞を障子の外に殘さうと思ひながら、くだらない！と、何所からか嘲けられるやうでやつぱり默つてしまひます。

門を出てから坂を上るとき、前掛けをしてゐたのに氣がついて慌てゝ帶の間へはさむ。大橋圖書館の石段を上つたのは十時でした。婦人室にはまだ誰もゐない暖爐がたつた一人で室をあたゝめてゐました。

いつもの隅へ腰かけてうつ伏しました。

あつきあつきなみだがながるこの瞳、そ
こひのごとく何も見えねど。

扉が開いたので驚いて顏をもたげれば、給仕がストーブのお火をみに來たのでした。

あてもなく馳け出してきたので何を讀まうかしらとカードをくつて、鈴を押す。

「黑猫」に葬られた吉井さんの水莊記をよみました。はじめの抄錄がさうなんです。

黑枠を取り消せ、と、葉がきへ梧桐さんの名まで書いたけれど、あまり氣狂ひじみてゐるので火鉢の中へ入れてしまつた…。思ひ切つて出せばよかつたのにと今になつて後悔してゐます。可あいさうに、何故そんなに黑猫社の方達は、吉井さんが憎いのだらうと不思議でならない。

あへてデカダンを讃美するわけぢやあないけれど、草が、荷風さんのお作が好きだと申しましたら、荷風の好きな奴なんてロクな奴ぢやありやあしない、氣をつけろ、と、おゆきさんの兄樣がのゝしつたさうな。

早稻田は抱月さんの領土主權にあるんだ者と侮せあそばせ、とてつちぢや平氣でございますわ、エ、平氣！主義ですのよこの節草はほんとうに平氣になりました。

四月から如何なさるの？、ときかれても、ボロボロと流れさうな涙を笑ひをかくす袂につゝんで、女優になつて、紫紺の洋裝でもして洋行して、せめて須磨子さん位の聲になつて歸りたいつて、平氣できり拔ければ、皆さまは、お草ちやんの云ひさうな言だ位にはやしたてゝ、さうしたらクラスからクラスの人達の名まへを染めぬいた總模樣の重ねを贈物するわつて、騷ぎなんですの。



卒業前の惜しき名殘

美しかつた四十幾人のクラスは散り〴〵になつて、もうふたゝび敎室の火鉢のまはりで演藝畫報の口繪を評することは出來ない：：、議會傍聽案の提出者にもなつたし：：、思ひ殘すことはないけれど、慾いな惜しがられをいはれゝば、後髮ひかれる心地にもなる、思ひかへしたつて、おもひかへしたつて、環のテーブルを廻るやうに、同じもとの考へにかへつてくるんだもの。

花の咲かないうちに、早く都を去つてしまふとおもふたびに、あきらめと執着とが混亂して：：自棄？のなみだがおさへきれないほどにせいてきます。

ノラをみた時。マグダをみたとき。さう、あの電燈のとゞかない數寄屋橋の停留場で、思はず倒れやうとして、そばの人にさゝへられた…ちりめんの袖口がたまらなく寒かつたとき！

お濠の柳がだまつてゆらぐ。

その夜ふけて蠟燭の燈にたどられた、あかい表紙の日記帳には、とぎれとぎれの文字が亂れた鉛筆で、いくページを語つてゐます。

智識の牢獄を放免され、刺戟のもりをのがれ出て、空氣のちつとも動かないふるさと、都よりあたゝかい南のふるさとは、もう花のつぼみも、めぐんでゐやう。…

一生懸命に先生のお講義を筆記しながらも、何を思つてか、「さよなら」と大きく書いて一枚とばしてあるところもございますのよ。

けれど、それもあともう幾日？！

どうだつてかまはない！この時、享樂といふ適切な言葉を見出したのをよろこびながら十二時がうつても

まだ私は水莊記をよみつゞけてゐました。

けものかと我みづからをうたがひぬ、あまりに森の中をこのめば。

あれはてぬ水莊のみが心まで、こゝろばかりがこひの夢まで。

ふたなさけふたりをおもうこひのため、わがみ一つのおきどころなき。

日と月と一時におなじところより、上るがごときこひをするかな。

誰なりしこの玄關の扉によりて、かへらずといひて一夜泣きしは。

萬歳

御即位式の話（一ノ下）

外島淚之介

（八）大嘗祭以前の諸儀式

前號所載の如く紫宸殿の即位式を終へて、其翌日賢所に御神樂の儀式が濟めば、更に大嘗祭の執行となる前述の諸儀式は天神地祇を始め、內外の人々に御即位の大禮をお示になられたので、今回はあらゆる神祇に陛下自らお供へ物をして祭られるのが大嘗祭で、內外の人々に酒殽を下さるのが大饗である。

先づ大嘗祭の前に

昔は御禊と云つて河原の齋院に行幸されて禊をなされた。今はその代りに、鎭魂式がある。式の順序は每年宮中で行はるゝ新嘗祭に行はるゝ鎭魂式と同じで、唯大禮使の官人が式に列するだけの相異である。此の式後伊勢神宮、皇靈殿（東京宮城）神殿（東京宮城）及び日本全國の官幣社、國幣社に勅使を派遣される。神宮神殿、皇靈殿等には掌典或は大禮使の官人が遣されるのであらうと思ふが、全國の官國幣社は其數頗る多いから、其縣の知事とか、縣の事務官とか云ふ大官に仰付られるだらうと推察される、かゝる場合には大禮使長官は祭文幷に幣物を奉受して各地方廳に送るのである。

（九）大嘗祭の御當日の儀式

大嘗祭當日は神宮、皇靈殿、神殿に、奉幣の式がある。之は陛下及び日本國に對して最親の諸神であるから、必ず大儀の前後御告をなされるのであるが、式の順序は即位式期日御奉告（三月號所載）の式と同じであるから玆には略す。

次に賢所の御前に種々の神饌を供する式がある、

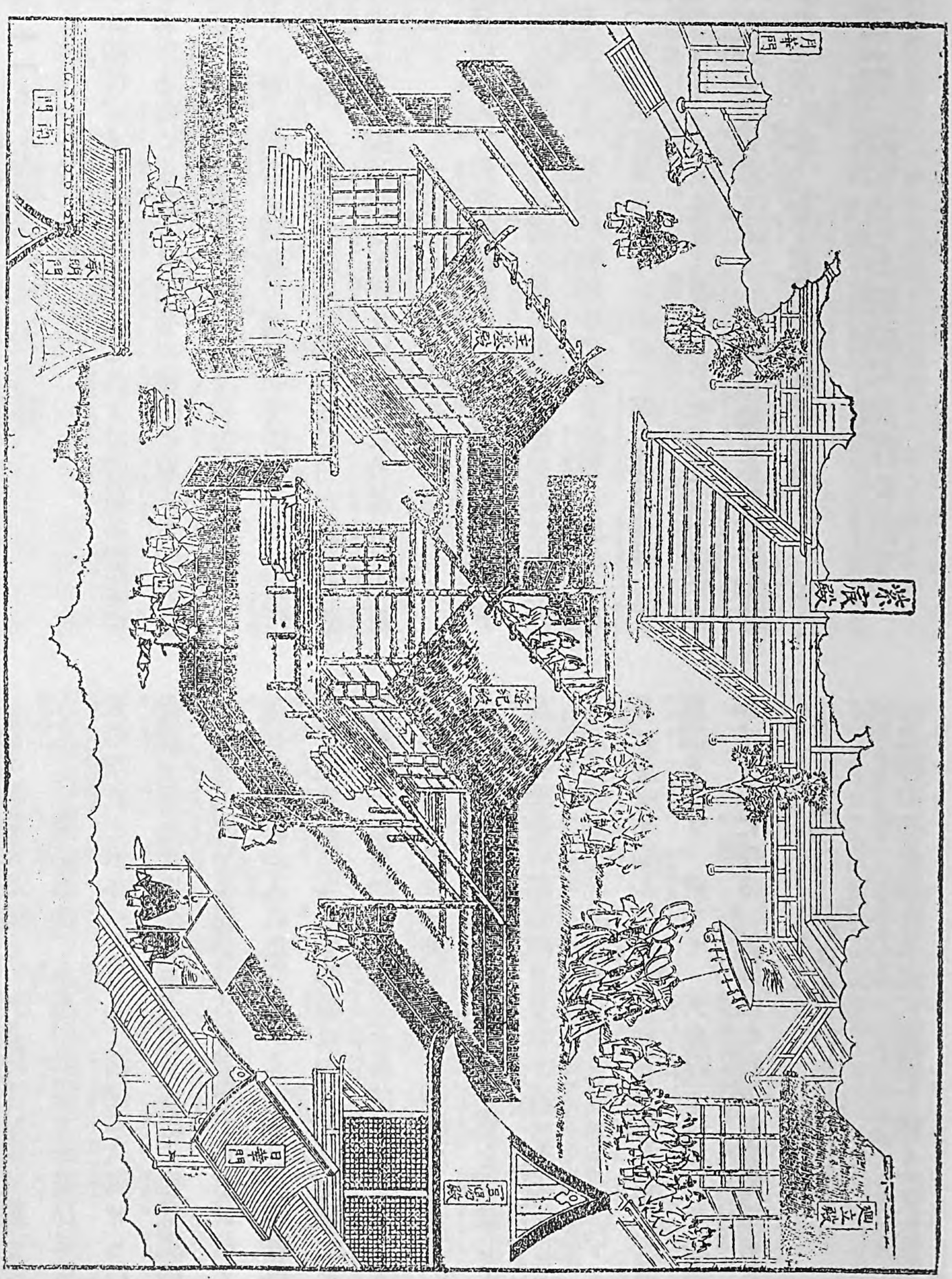
兩陛下は侍從及び女官をして御代拜を命ぜらる。

大嘗祭の儀。此宮は特別に建築されるもので。位置は太極殿の前龍尾壇の下の大庭或は紫宸殿前の大庭等時代に由て位置が異つて居る。今回は御卽位式を紫宸殿で執行される事故、大嘗宮は太極殿の前庭であるかも知れぬ。宮は東西三十五間許、南北三十間許の園に高さ九尺の柴垣などめぐらしたものを大嘗宮と稱し、それを南北に中央から又柴垣で兩分して左(補綴の右)を悠紀院、右を主基院と云ひ、悠紀院の中央に五間四方の殿舍が建つ、此を悠紀殿と云ふ。同じものが主基院に建ち主基殿と云ふ。其外此兩院の内に各自臼屋、神服屋、盛膳所、膳室、厠屋等の小舍が建築される。いづれも悠紀、主基、兩殿と同じく茅葺の白木造りで粗末なしかも崇嚴な神社造りの屋舍である。入口は四方に鳥居があつて、鳥居の外側に又柴垣が衝立の樣に立つ。之は外面より内部を見通されぬ爲の物である。猶兩院の内は其の掛の官人以外の者は入るを許されない。參集の諸員は大嘗宮の南方に勳位等に由て分れた幄舍が出來て、そこに列立して居るのである。以上が大嘗宮の構造で、次は

(一〇)悠紀主基兩殿の性質

大嘗宮が天神地祇を祭る處であるが、分けて悠紀殿に天の神々を祭り、主基殿に地の神々を祭る。故に神祇共に同じ儀式なのである。たゞ悠紀の國から出來る種々の進供の物は悠紀院の用に供し、主基の國からの產出物は主基院に收める。かくして雜具や種々の進供物は兩國の物を夫々分けるのである。

扨て參列員の服裝と云ふと、卽位の大禮の時と同一のもので參集所に集り、皇太子以下諸皇族方は頓宮(假の御殿)に集つた後に 兩陛下頓宮にお着になる。其前に儀仗兵は大嘗宮のまわりに整列し、次に大禮使の高等官二十六人が、大嘗宮の四門の内外の位置に着く。此人々の服裝は神社の入口の門の左右にある俗に矢大臣左大臣と稱する形に似て、平胡籙に箭を挿して、猶小忌衣と云ふものを着、日蔭の蔓をつける。此の



大嘗祭之圖

(一一)　小忌衣と日蔭の蔓

と云ふのは、大嘗祭に關係ある人々は當時の禮服の上に皆着けるので小忌衣は白布の青摺の單衣で、その衣に肩の方に蝶や小鳥を、腰から下の方には梅の枝、水の流れ、蕨、雉等を胡粉で畫いたものである。日蔭蔓は冠の笄の左右から下に掛ける、白と青の絹絲を數本合して三個所揚卷に結んで、總て八尺許の長さである。

大禮使の官人が所定の位置につくと、掌典長以下の官人は、樂人の樂の音の間に神座を悠紀及び主基の兩殿へ奉安して、猶粗栲和栲の御服を兩殿に置く。それが終つた頃は丁度夜になるので、掌典等は兩殿に齋火の燈燎(俗に云ふ燈籠か又は、雪洞の如きものであらう、黑木と白木とある)に火をつける。之と同時に庭には庭燎を焚く、以上は準備で、本當の御式は之れからで、即ち以下は夜中の式である。

(一二)　陛下自ら神祇に御饌を供す

即ち時刻になると　天皇陛下は廻立殿(特別に新築した御殿で十五間四方の大さ)に渡御され、小忌の御湯をお使ひになる。昔は天の羽衣と云ふのを召して浴槽に入御せられた。次に祭服を召し更に手水にて淸め、全く御仕度の出來た頃に　皇后陛下も渡御されお召變があるけれど　皇后陛下は神殿にお入にならぬからお湯をつかはれない。兩陛下廻立殿にお居での間は一切高聲を禁じてあるので警蹕さへしない。　兩陛下及び男女の諸官人が衣服を代へた時分に、參列の諸員は神門外の南方の幄舍の席に就く。次に膳屋では掌典が神饌を調理して居ると、樂人は悠紀の稻舂歌をうたふ(例へば近江の松本村が悠紀の齋田であつた時には稻舂の八少女と云ひ八人の小女が「松本の村の初穗をぬきそめて猶萬代のためしにぞつく」と云ふのを爲にうたつたのである。)次に今迄庭に置いてあつた種々の物を帳殿に置き、掌典長が祝詞を奏す。終つて　天皇陛下は初めて悠紀の本殿におすゝみになる。此の間の行列が立派である。先づ

(一三)　廻立殿から神殿迄

二幅の布を鋪き其上に葉薦を敷く(昔は此の葉薦の上を玉歩をお進めになる時

一人は前に延し、一人は後より卷いたので、陛下以外の者は此上を踏む事は出來なかつた。猶女官が翳を以て玉體をかざして進まれた。）陛下のお前は侍從が左右に脂燭を秉るもの、劍璽を奉ずるもの丶外は、式部長官宮內大臣の五人で、お後に從へるは皇族の外侍從三人、國務大臣九人、樞密院議長、內大臣、大禮使長官等十五人である、陛下のお頭の上には菅蓋がある。是は長い柄の先に金の凰鳳があつて、其嘴から大きな菅の蓋が垂れ、二本の綱が下つて柄は侍從がお背から差覆ひ、二人左右から御綱を張つて進むのである。

斯くして陛下は神殿の外陣の御座に著御される。（神殿は南の表から云ふと。階があつて、次廂、次簀に、次か外陣。外陣に幌があつて內外に分つその外陣の次か內陣で內陣の正面に神饌を供するのである。）隨つて劍璽も外陣幌內の案上に侍從が奉安する。侍從長と掌典長とは簀子に伺候し、皇太子以下親王、國務大臣等は南庭の小忌の幄舍に居る。

次に皇后陛下は親王妃以下の諸員を隨へ丶出御なされ、南庭の帳殿の御座に著御、次に大禮使の高等官が樂人を率ゐて南庭の右側（神殿に向ひて左）に立ち、國栖の古風を奏し、悠紀の縣知事が同じく樂人を率て左に立ち悠紀地方の風俗歌を奏する（昔は參列諸員か所定の位置に著くと隼人か犬の吠聲を出した。次に國栖の歌を十二人笛五人で奏し、次に悠紀地方の風俗歌（古今集にもある）をうたひ次に語部か古詞を奏したのであるが、今は隼人吠聲と語部の古詞がない。）此の

（一四）國栖の古命と風俗歌

は天神を樂ませる意味であらうと思はれる。初めは大和國吉野郡の國栖村の人が貢物を持つて來て其地方の歌をうたつたのであるが、後には雅樂部の官人が儀鸞門外で笛十二人、うたひ手十二人で歌笛を奏したのである。次に皇后陛下の御拜、次に皇太子、以下女王迄拜禮、次に諸員拜禮、次に皇后陛下廻立殿に還御なさる。古來皇后の大嘗祭に出御なされた事はなく、今回が始てである、然して天皇陛下みづから神に神饌を供される式であるから、皇后陛下以下のものは皆神殿外の南庭から拜禮され又拜禮終れば退かれるのである。

皇后還御の後、皇太子、親王、王は簀子に伺候すると、廻廊に神饌を列べる。其順序に陛下が親供な

されるのであるから、品物と、物品を持つ官位の處に注意しなければならない。其順序は、

脂燭（掌典補左右各一人　昔は頭からさげて兩手で持つたのである）
削木（掌典一人　木の枝の上部をさいて削つた杖で長さ三尺ばかりある）
海老鰭盥槽（掌典一人　御手を洗はれる長一尺幅中ぶとの槽）
多志良加（掌典一人　土製の水瓶で御手洗の水を入れるもの）
御刀子筥（陪膳女官一人　昔の御楊枝筥に相當するものか）
御巾子筥（後取女官一人　御手拭とも云ふべきもの）
神食薦（女官一人　神々供へるものをのせる薦）
御食薦（同　陛下に供へるものを載せる）
御箸筥（同　竹箸六本、内五本は神の料、一本は陛下の料）
御枚手筥（同　柏の葉を十枚合せて製れる食器）
御飯筥（同　柏の葉を合せて中を凹くしたる食器に稻、粟を盛る）
鮮物筥（同　窪手と云ふ食器四個に鯛、鮑、雑魚、鮒等を入れる）
干物筥（同　蒸鯛、干鯛、干堅魚、鰺等を窪手に入れる）
御菓子筥（同　干棗。搗栗、生栗、干柿等を窪手に盛る）
鮑汁漬（掌典一人　鮑の汁漬を土器に入る）
海藻汁漬（同　和布の汁漬なり同じく土器に盛る）
空盞（掌典補二人　土器のおさかづきなり）
御羹八足机（同　和布のあつものにて八ツ足の台に載せたもの）
御酒八足机（同　白酒と黒酒との二種類を置く机）
御粥八足机（同　稻米、粟の粥を置く机）
御直會八足机（同　陛下の召しあがるものを入れたるもの）

以上のものの悉く行立すると削木を執れる掌典が警蹕を稱る、之と同時に神樂歌を奏し、終れば天皇内陣に進み、皇太子、親王、王、侍從長等は帶劍を解いて外陣の幔内に參入する。次に陛下は御手を清めて、上述の神饌を一つ一つ天神に供へ給ひて御拜禮の後御告文をお讀上げになる。之が大嘗祭中第一の盛儀で終つて御直會と云つて陛下自ら召しあがる。次に陪膳の女官が神饌を撤して皆膳舍にさげる。之が悉く終つた後に初て天皇陛下は始めの如く廻立殿に還御になる。之と同じ式を又主基殿に於て行はれる。昔は主基殿の式を終へ廻立殿に還御になると采女が南の戸に進んで「あさめもよう、宵曉の御け、平につかんまつりつ」と申し上げたのである。かくの如く極めて丁重な同じ樣な儀式が二度あるのであるから夜明け迄かゝる。崇嚴な大嘗宮の内に庭燎の火影をあびて、古樂の音を秋の曉に聞いたなら、其神々しさに知らずぐ、頭が下るであらうと思はれる。（未完）

婦人年中行事　五月



▲五月の魚▼

あなご。鰹魚。はぜ。伊勢鰕。泥鰌。鮎。いさき、太刀魚。めじまぐろ。せいご。鰈。鯛。鰻。いなあわび。蜆。

▲五月の野菜▼

新蠶豆。茗荷の子。蘘荷。ぜんまい百合根。摘み菜。芋茎。蓮。胡瓜水芹。

▲五月の花▼

牡丹。藤。躑躅。罌粟。美人草。芍藥。菖蒲。燕子花。薔薇。天竺葵。金盞花。をだまき。つくばね草。栗の花。楝の花。アカシヤの花。若竹。新樹。青梅。櫻實。

▲花の名所▼

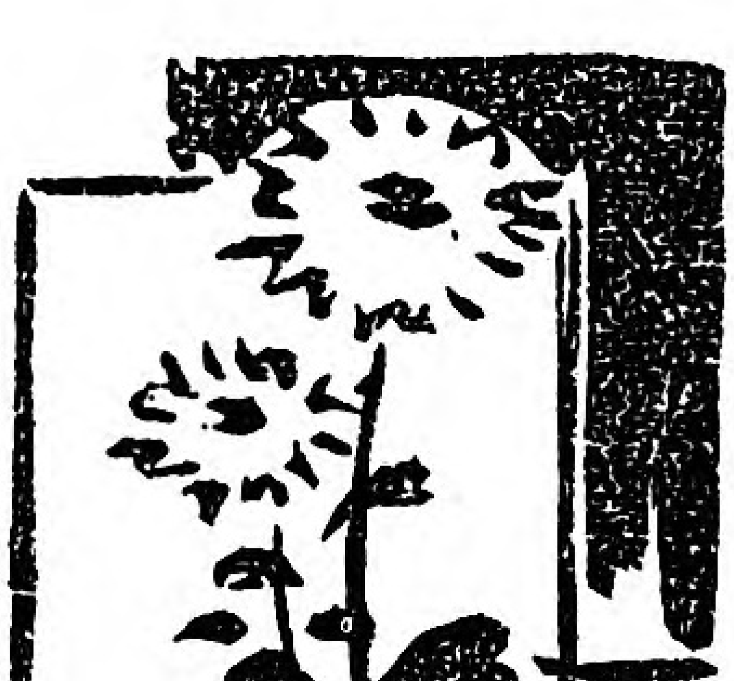
藤。龜井戸天神。越ヶ谷。
牡丹。本所四つ目。
躑躅。大久保。日比谷公園。

▲五月の暦▼

一日。招魂祭
二日。八十八夜。
五日。端午の節。
酉の日。葵祭（京都）
十七、十八日。淺草三社祭。

七曜表

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31



袷着て白き花生けんとぞ思ふ

子規

婦人年中行事

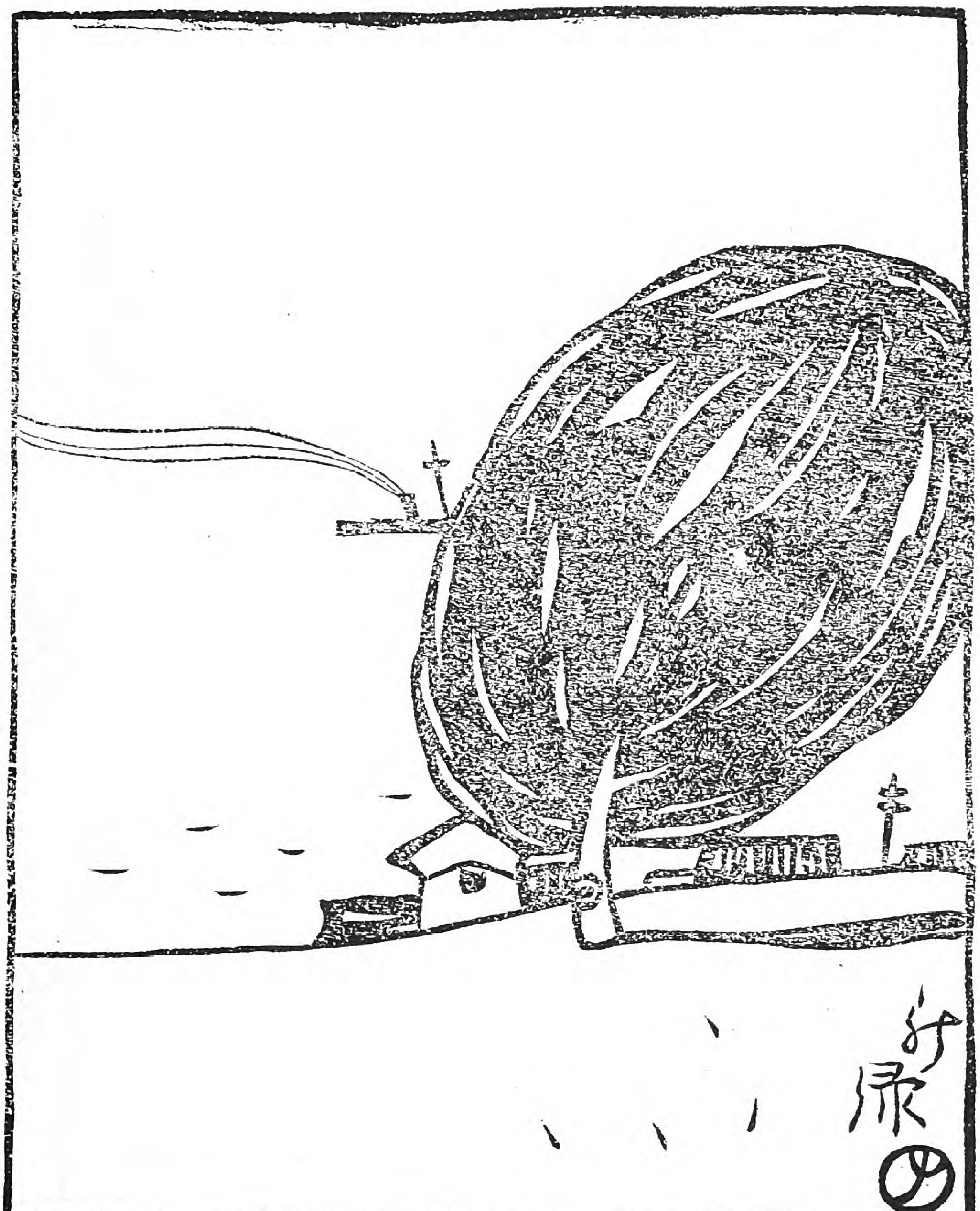
五月

△葉櫻となる。
△毛蟲落ち初む。
△張物の時季。
△袷の肌かろし。
△蘖生ず。
△綠の丘の夕方の散歩。
△時鳥に注意せよ。
△魚多し。
△初物多し。
△ビールうまくなる。
△朝顔の種子を蒔け。
△コスモスも蒔け。
△子供に寢冷さすな。
△晝寢の癖をつけるな。
△洋傘を直して置け。
△夏衣の用意。

櫻んぼいまださ青に光るこそ悲しかりけれ花ちりしのち　白秋

おほいなる紫の桐手に持てばわが世むらさきに見ゆるさつき野　牧水

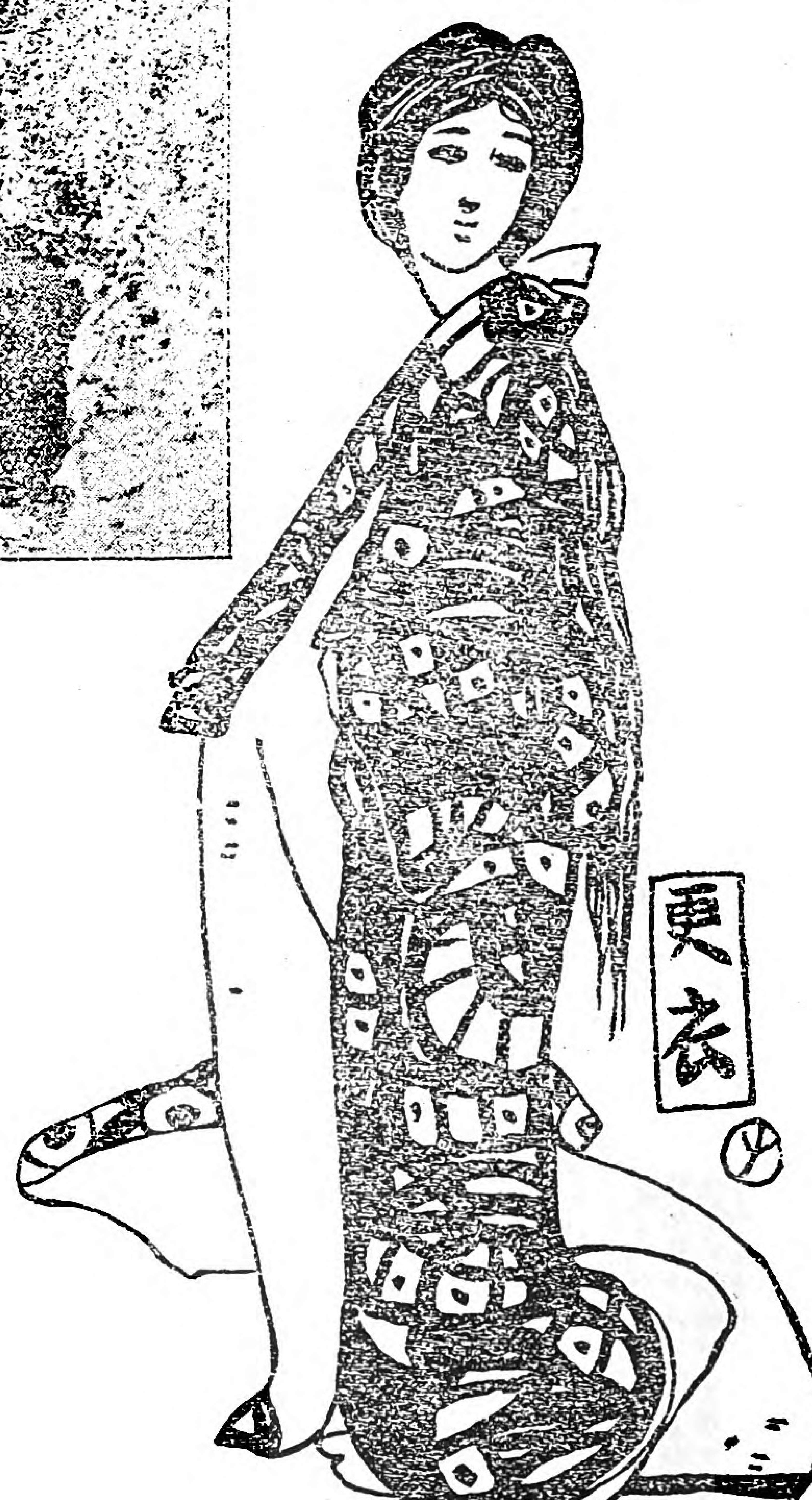
麥の穗の上なる丘の一つ家くまなく戸あけ傘つくり居ぬ　晶子



ころもがへ

今年の流行はやはり白きものより藍がゝつたものが、夏も流行することかと存ぜられ候。ショールは夏冬なく用ひられ候が、夏のうすものゝショールは、ヴエールをかねて、なほ盛んに用ひらるゝ事かと思はれ候、更衣の時となれば、いろ／＼思ひ迷はるゝ事も多く、一度お話に参り度思ひ参らせ候。かしこ

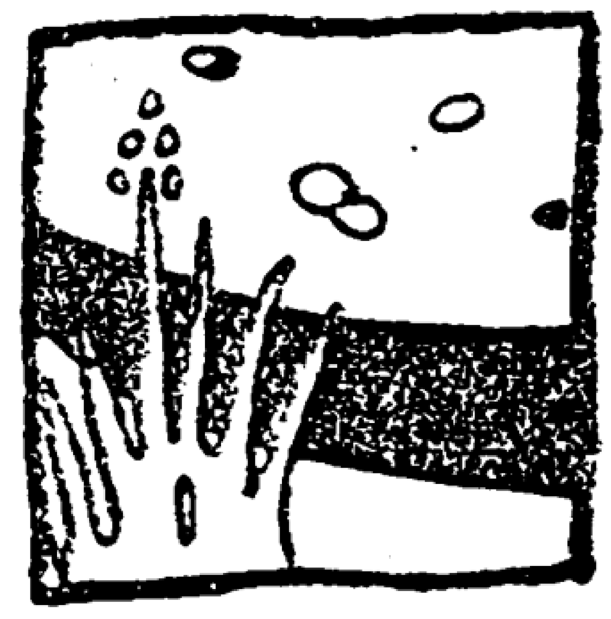




川越や肩で水切るほとゝぎす
浅草や上野泊りのほとゝぎす
三日月にあたまうつなよ時鳥
一番は日光立やほとゝぎす
ほとゝぎす何を忘れて引返す
これは偖て寝耳に水の時鳥
ほとゝぎす人間界をあきたげな

一茶

婦人年中行事



五月の運勢

▲二黒の人（十五、廿四、卅三等）進む事も退く事も出來ぬ實に凶月なり能く人を選み交際せねば思はぬ疑ひを受る事あり家内不和合がち、御婦人は不滿病難多し、暗劍西南の間大凶。

▲一白の人（十四、廿三、卅二等）失敗を招き易き月なり。萬事近きにあるが如くにて、實は遠し、故に諸事舊きを守るべし。九月十月には吉事來る、吉方南西正當、暗劍同斷。

▲九紫の人（廿二、卅一、四十等）幸福多き月、新規の相談來るか、物事變更する事等、皆進んで吉祥あり。御婦人は縁談、其他大なる喜び事あるべし。暗劍西南の間大凶方。

▲八白の人（廿一、三十、卅九等）急に進む事を愼めば、後必ず願望滿足、幸福を得ると思ふべき月なり、男女共病難御注意、吉方北南、暗劍西南の間大凶。

▲七赤の人（廿、廿九、卅八等）土生金の相生にて心地よき大吉月なり、諸事進む事吉、家業繁昌す、御婦人は縁談吉、亦是迄心掛りの事も今月は安心が出來ます。吉方西、暗劍西南の間大凶方。

▲六白の人（十九、廿八、卅七等）望み目的事揮って勇進すべし、障りなく充分通達する月、御婦人は縁談懷姙等あるべし、吉方西。暗劍西南の間大凶方。

▲五黄の人（十八、廿七、卅六等）盛運の月なれども、旅行は愼み御注意なさるべし、凡て平靜を主とせられよ、後幸福あるべし、病難注意、吉方北南、暗劍同斷。

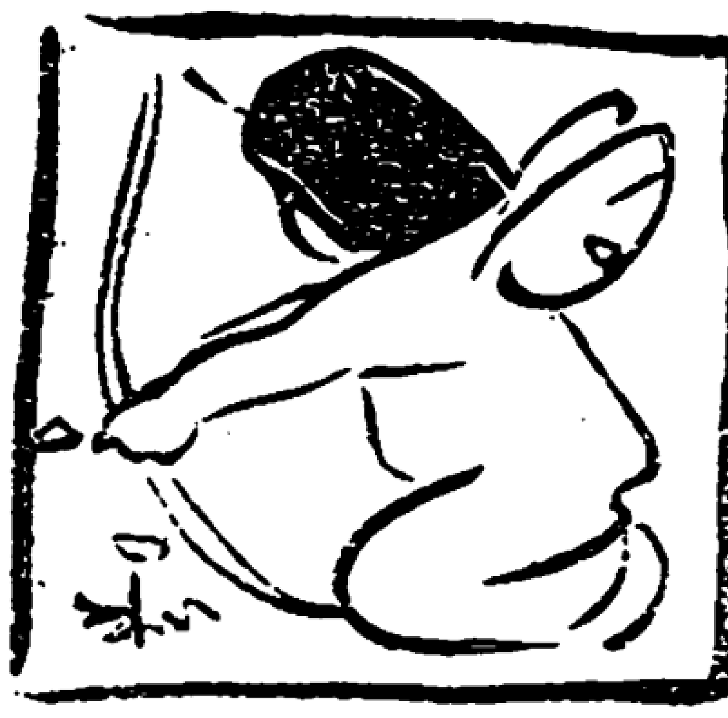
▲四緑の人（十七、廿六、卅五等）當月は石の上に蓮を植たる如く、育ちがたき月なれば、破れ亂れ多し、依て何事も時來るを待たるべし、暗劍同斷。

▲三碧の人（十六、廿五、卅四等）衰運の月、迷ふ事多く、善事半ば調ひ半ば妨げあり、思ふ存分叶ひがたし、急進すべからず御婦人は月の物不順（亦物事毀め動く事凶、現在を守る事肝要、暗劍同斷。

歴史上の五月

中橋 本清堂

▲一日、風土記を作らしむ（和銅六年）▲二日、金札と正金の引換を禁ず（明治二年）▲三日護良親王土窟に入れらる（建武元年）▲四日、漢學者古賀精里歿（文化十四年）▲五日、ナポレオンボナパート死す（一八二一年）▲六日、ソクラテス生る（B、C、四七一年）▲七日、樺太と千島と交換す（明治八年）▲八日、大阪落城（元和元年）▲九日、ミル死す（一八七三年）▲十日、遼東半島還附の詔勅出づ（明治廿八年）▲十一日、露國皇太子大津御遭難（明治廿四年）▲十二日、官吏公選の法定まる（明治二年）▲十三日、松平定信死す（文政十二年）▲十四日、大久保利通刺さる（明治十一年）▲十五日、頼政兵を擧ぐ（治承四年）▲十六日、林子平を蟄居せしむ（寛政四年）▲十七日、鐵道條例公布（明治二十年）▲十八日、露西亞現皇帝御降誕（一八六八年）▲十九日、新井白石死す（享保十年）▲二十日、コロンブス死す、一五〇六年）▲廿一日、元兵大擧來寇す（弘安四年）▲廿二日、ユーゴー死す（一八八五年）▲廿三日、伊達政宗死す（寛永十三年）▲廿四日、ヴヰクトリア女皇生る、一八一九年）▲廿五日、楠正成湊川に戰死す（延元元年）▲廿六日、木戸孝允死す、明治十年）▲廿七日、日本海海戰（明治三十八年）▲廿八日、初めて衆議院を開く（明治廿三年）▲廿九日、松平樂翁死す（文政十二年）▲三十日、大元帥陛下御凱旋（明治廿八年）▲卅一日、上奏案可決す（明治廿九年）



女學生の家計豫算表

銀冠郎

私は大阪市内の公私立女學校長に御依賴して、本年三月に女學校を卒業した人達に次の樣な二つの問題を提出して頂き、その回答に由つて、近頃の女學校卒業者が假に卒業後間もなく結婚して一家の主婦となつた場合には、凡そ主婦として家計の切廻しにどれ位の腕を持つてゐるかといふ事を略知る事が出來た。幸ひ此の御手數を御承諾下すつた校長が五人あつたので、つまり五つの女學校を卒業した女子の家政的能力を總括めて試驗する事が出來たのである。學校は公立高等女學校が三、私立が二、私立の中の一つはミッション、スクールで、集つた回答は全體で百二十八通であつた問題を受取つた人の數は少くとも七百五十八乃至八百人はあつた筈であるに關はらず、回答が右の樣に少數だつたのは甚だ殘念であるが、それだけ有れば兎に角研究の材料として不充分ではない。私が提出した問題は次の二つである――。

第一問。あなたの夫は四十圓の月給を取る官吏ですそしてあなた方には尋常一年生のこどもがあります。あなたは夫の四十圓の收入で月々親子三人が衣食住を賄つてゆかねばなりません。その豫算費目を明細に書いて下さい。

第二問。あなたの夫が月に百圓の收入を有する會社員であるとしたら、あなたは百圓の月收を以てどういふ風に家計を立てゝゆきますか。第一問と同じく明細なる豫算費目を作つて下さい。但し此の場合には、家族の數はあなた方夫婦の外にこどもが二人と下女が一

人、都合五人になつてゐます。

以上の二問に對する百二十八名の回答者の年齡は、十六年三ヶ月を最年少者として、十七年と十八年が多數を占め、十九年と二十年は極めて少數である。その回答を成績に由つて大別すると、全然物に成つてゐないもの、これならば年齡に比較して可成考へてあると思はれるもの、今少し修正を加へたら實際の役に立つもの、此の三種である。答案の全部を此處に擧げる事は出來ないから、便宜の爲め先づ第一問の答案から點檢しながら、特に氣のついたものに就いて批評を試み現代女子の思想と、家政經濟とに就いて少しばかり考へを述べて見度い。

一　丘田秀子（十七年三ヶ月）

賄費	拾五圓	豫備費	三圓
被服	二圓	生命保險	二圓五十錢
税金	一圓	家賃	七圓
交際費	二圓	貯金	二圓五十錢
雜費	五圓		

これに據ると雜費と豫備費との區別が明瞭に分らない。交際費の二圓は先づ好いとしても主人の小遣ひてどもの敎育費といふものは何處から出るかも分らないし、賄費を單に十五圓としたのも主婦の豫算としては極めて大づかみで、今少しく細く考へて割當をしなければ必ず何處かで破綻が生じて來る。乍併賄費を米副食物、薪炭、味噌醬油、鹽といふ風に細別したのは殆んど見當らない。

二　久保田よね子（十七年四ヶ月）

家賃	六圓	所得税	四十錢
賄費	十六圓	敎育費	五十錢
被服	二圓	小遣	七十錢
交際費	二圓五十錢	新聞雜誌代	七十錢
雜品	一圓三十錢	臨時費	二圓
醫藥	一圓	預金	七圓

新聞雜誌代に七十錢を取つたのが(一)よりも優れた點であるが、これも費途の判明しない臨時費と小遣の二項がある。(一)は主人の小遣がなかつたが、これは小遣はあつてもその七十錢は誰が何の爲めにするものか記してない。若し主人のものとしても、喫煙家であれば一と月に敷島が七十本、一日にすれば二本と三分の一以上は喫めない事になる。貯金の七圓は少々額が

多過ぎる嫌ひがある。他に收入のない限りは、四十圓内外の收入の人ならば貯金はその一割の四圓を標準とすべきである。

三　速水律子（十八年）

家賃	五圓
主人小遣	三圓
賄費（全部）	十五圓
妻小遣	二圓
被服費	三圓
小供小遣	三十錢
圖書費	七十錢
散髪、髪結、湯	一圓五十錢
雜費（器具、菓子、醫藥、菓物）	二圓
臨時費	二圓五十錢
貯金	五圓

これは賄費は十五圓で副食物からその他全部をやるといふ説明がしてある。散髪、髪結、湯錢まで氣のついた處は仲々頼もしく、二圓の雜費で器具から醫藥、菓子果物を買はうと云はれて見れば之は異議なく可決して差支ない。主人奥様の小遣から子供の分まで小遣を定めた處は如何にも細心で、奥様の二圓は假令それが臍繰にならうとも敢て差支はない。被服に三圓を見たのも適當である。その結果として家賃が（一）（二）よりも削減されて五圓としてあるが市を出離れて少し道の遠いのを厭ひさへしなければそれだけで結構な家がある。これは出來の好い回答の一つである。



女學生の摘桑

次に突飛なのは四十圓の月收の中から賄に二十三圓を食つて仕舞つた上に、十圓の家賃を拂つて、二圓で散髪と髪を結ふて、その殘りを貯金に入れて納まり返つてゐる奥様がある。十六年八ヶ月だから無理もないが、四十圓の月給取で十圓の家賃を拂ふ奥様はこの外にも三四人あつた。是等を玄關倒れといふのである。

左樣かと思へば月々三圓の税金を納める積りの人もある。月に三圓は一年に三十六圓である。いくら日本の政府が貧乏でも四十圓の月給取から三十六圓の税金を絞らうとは云ふまい。殊に今度の議會では、衆議院を通過した所得税改正案が更に貴族院で修正されて、所得年額から一割を除いたものが四百圓であれば（四百圓以下なら税金はいらない）、更にそれから百五十圓を差引いた殘餘、即ち二百五十圓といふもの丶千分の二十五を納めたら宜しいのである。だから四十圓の收入ならば所得税は一年に十圓八十錢、月にすれば九十錢づ丶の勘定になる。此處に於て右の奧樣の財政には税金の項目の中から、二圓十錢の過剩金が出て來た譯である。

全體に於て四十圓の會計は取扱ひ易い樣であるが、百圓の會計はそれだけ費用が膨脹して、却て切廻しがむづかしい樣に見受けた。それが爲めか百圓の豫算には出來の好いものが餘り見つからない。

四　中脇あさ子（十八年）

家賃	十五圓	新聞代	八十錢
米代	十三圓五十錢	點燈代	二圓
副食物、醤油、炭等	十五圓	保險金	二圓
被服費	四圓二十錢	税金	五圓
臨時費	三圓五十錢	湯錢	一圓五十錢
教育費	三圓	下女給料	三圓五十錢
小供貯金	三圓	交際費	四圓
貯金	二十四圓		

これにも主人の小遣といふものがないのみならず、奧樣自身の小遣もない。税金の五圓は約そ二圓程多過ぎてゐるし、保險金の二圓は夫婦が五百圓づ丶の保險に入るとすれば一圓だけ不足である。二十五ヶ年で五百圓づ丶の保險契約をする時には一ヶ年十八圓づ丶、即ち月に一圓五十錢が二人だから保險料の月割は三圓で充分である。四圓二十錢の被服費は下女の分を除いても親子四人に割當てると一人前一圓五錢にしか當らない、一年に十二圓六十錢で百圓の收入を有する人の家族が相當の物を着てゆけるだらうか。これも怪しいものである。貯金の二十四圓は甚だ結構であるが、これは寧ろ多きに過ぎてそれが爲めに他の費目に甚だ不

都合を生じてゐる。

五　鳥井榮子（十七年六ヶ月）

家賃	十八圓	雜費	二圓三十錢
賄料	四十二圓	醫藥料	一圓五十錢
被服費	八圓	新聞書籍代	三圓
諸稅	二圓	保險料	二圓五十錢
敎育費	二圓	豫備費	十一圓
交際費	二圓五十錢	下女給金	三圓
小遣	二圓二十錢		

これも亂暴な豫算の標本である。百圓の中から十八圓の家賃と四十二圓の賄料を合はして六十圓を取つて仕舞ふなんぞは餘程大束な奧樣であるに違ひない。一と月二圓で二人のこどもが敎育出來るかも疑問、交際費と小遣と雜費とを合はして只た七圓で其の項目通りに用が辨ずるかどうかも疑問である。この外に五人の人間が月に二十三圓で生命を繼がうといふ儉約家があるかと思へば、百圓の中から家賃に二十五圓出して二十五圓で着て、二十五圓で食つた殘りの二十五圓を貯金にするといふ樣な計畫だけは都合の好い當世式もある。（四）で既に二十四圓の貯金が身分不相應だと思はれてゐるのに、大枚三十五圓の貯金を考へてゐる二宮宗もある。總數百二十八の中、先づこれならばと思はれる樣なのが總て二十程あつたばかり、その中の代表的なのを二つだけ掲げる。

六　吉田滿壽子（十七年四ヶ月）

家賃	十五圓	主婦小遣	四圓
賄料	三十圓	雜費	五圓
被服費	十圓	新聞雜誌書籍	四圓
稅金	二圓五十錢	保險料	三圓
敎育費	三圓	豫備貯金	十圓
主人小遣	十圓	下女給料	三圓五十錢

七　黑沼はな子（十八年）

家賃	十八圓	貯金	五圓
米代	十二圓五十錢	下女給金	四圓
副食物費	十圓	水道費	一圓
薪炭費	五圓	保險料	三圓
茶菓子	二圓五十錢	雜費	四圓
交際費	七圓	臨時費	四圓
電燈料	二圓	家具費	一圓五十錢
稅金	二圓	主人小遣	三圓
新聞雜誌	一圓五十錢	主婦小遣	一圓

婦人職業案内（五）

山田菊水

婦人齒科醫

婦人の職業としての齒科醫

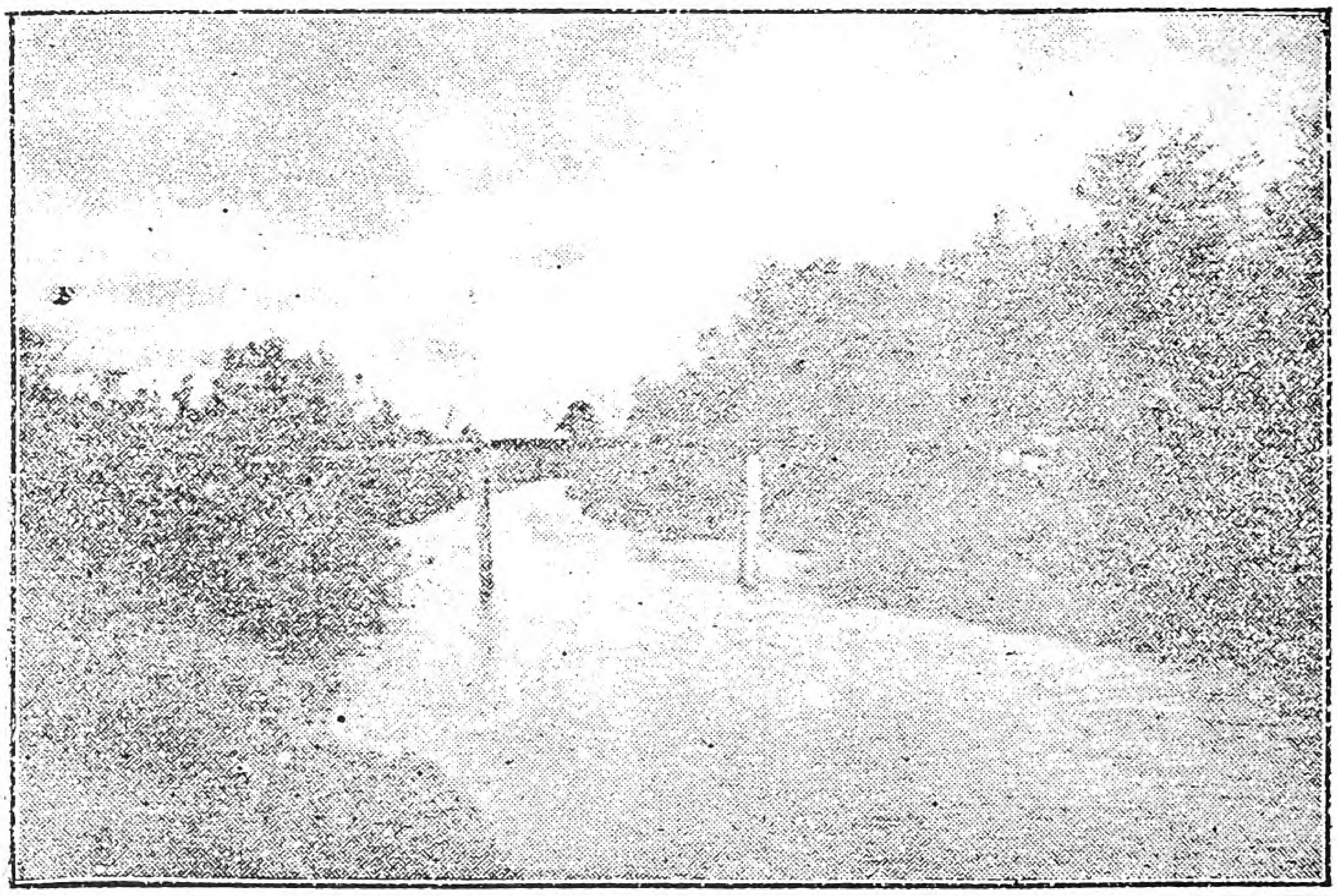
疾から婦人の職業となるべきもので、未だ婦人のために開拓されて居ないのは齒科醫であります、現在東京に於てさへも、高橋孝子氏を筆頭に、僅々四五名の婦人齒科醫があるに過ぎませんから、全國に幾人の婦人齒科醫があるか、恐らく數ふるに足らぬ位で、晨の星の寥々たるが如きものでありませう。これ蓋しその仕事が婦人に適しないためではなく、これを修業する機關が缺けて居たゝめであらうと思はれます。

齒科醫が婦人の職業として、特に都合のよいことは往診と云ふ厄介なことがないことであります。醫師や産婆の如きは、夜と云はず晝と云はず、雨の降る日も風の吹く夜も、患者や産婦があれば、時間構はず出かけねばならぬが、齒科醫にありては、往診などは殆んど絶無でありまして、且つ宅診の時間も一定して居て時間外の治療殊に夜間の治療などは、滅多にないのであります。この往診のない事、治療時間の一定して居る事は、他の醫師や産婆等と比較して、頗る都合のよい所で、外に出ることのないだけに、衣物を着飾つて風裝を繕ふ必要もなく、只だ小薩張した平常着の上に診察服を引かけて居れば、それで濟むのであります。

齒科醫の修業

齒科醫になるには、文部省の開業試驗を受けて、免

状を貰はねばなりませんが、その受驗資格には何も制限なきも、矢張り學校に入つて秩序立つた勉强をしなければ、合格することは難かしいのであります、而して女子の學生を收容する齒科醫學校としては、今日の所神田北神保町三番地にある東京女子齒科醫學校だけでありまして、これが婦人のための唯一の學校であります。この學校は齒科醫大久保潜龍氏の經營せる私立學校で創立も日尚ほ淺く、殊に學校の體裁をなしたのは、最近のことでありまして、現在五十餘人の生徒があると云ふことであります、入學資格は例によつて高等女學校卒業、又はこれと同等以上の學力ある者となつて居りますが、兎に角一個の專門學校でありますから、實際それ丈けの學力がなければ、入學しても講義が呑込めないのであります。



初夏の流水鄕

修業年限は規則の上には二ヶ年となつて居りますが、實際二年間位の勉强では、必ず開業試驗に合格するとは請合へません、故に學校でも卒業生のため、更に一年間の硏究科を設け、都合三ヶ年の敎育をして、開業試驗を受けしめやうと云ふ仕組みでありまして前後三年間ミッシリ勉强すれば、先づ開業試驗に合格する丈けの學力は出來るものと見てよからうと思ひます。

齒科醫開業試驗

文部省の開業試驗は、醫術開業試驗と同樣に、學說と實地との二つに別れて居て、毎

年四月と九月に執行されますが、隨分受驗者の苦勞する所であります。毎年の受驗者の數は七百人に上り、その内より合格する者が三四十人で合格率はザッと五分位に過ぎないのであります、五分の合格率と云へば大變に試驗が難かしい樣に見えますが、試驗委員の話しを聽いて見ると、採點が嚴重であるとか、又は問題が難かしいために、合格者が少ないと云ふ譯ではなく受驗者の期待する所が餘り低いので、それで落第が多いと云ふことであります。それは齒科醫と云へば、左して學問などは要らないもの丶如く考へて、中學も碌碌卒業しないで、試驗を受くるものが多く、中には履歷書さへ滿足に書けないものがあつて、誤字當て字等頗る多く、從つて答案を書いても、間違ひだらけで、縱令音は似て居ても、當て字を書いてあれば點を與ふる譯には行かず、見す〳〵落第さるるものが多いとの事であります。この試驗に合格者の少ないのは、必竟試驗が難かしいのではなく、受驗者の學力が足らないためであつて、中學若くは高等女學校を卒業して、その上で一通りその道の學問をした者ならば、合格しない筈はないのであります。而して女子齒科醫學校を卒業すれば、この開業試驗に合格するや否やは記者と讀者の間の重要な問題でありますが、未だ僅少の卒業者を出したるに過ぎざる學校のことですから、實例を以て證據立つることの出來ないのは、甚だ遺憾とする所であります、然し研究科まで修めて、都合三年間勉强したならば、開業試驗に合格する丈けの實力は出來るものと信じますし、又た現に少數なる卒業者中、三四人は合格したものもあります。

實地の練習

學校も研究科まで修業して、開業試驗も首尾よく合格したとしても夫れで、直に開業することは少し難かしい、それは普通の醫師でも同樣で、免狀を取つてから病院などに勤めて、實地の練習を經た上でなければ獨立して開業することは難かしい樣に、齒科醫も學校を出て免狀を貰つた丈けでは、少々覺束ない所があり

ます。殊に醫術開業試驗の方では、實地試驗に當り、兎も角病人の脈を診せますが、齒科醫の方は實地試驗と云つても、十分か十五分間の口述試驗に過ませぬから、開業試驗は必ずしも實際の技術を證明するものではありません。故に長い間齒科醫の助手でもして居たものでない限りは、是非半年なり一年なり、熟練なる齒科醫に就て實地を練習する必要があります。現に免狀を持つた大の男が、無給若くは辨當携帶で、齒科醫の許に通つて居るのもある位で、他日學校の設備が大に完成して、卒業までに實地の練習も悉皆させる樣になるまでは、學校の勉强以外に半年若くは一年位は、實地の練習をせねばならぬと云ふことを、豫算の内に入れて置かねばなりません。



臺灣人の稻刈

齒科醫の開業費

免狀も取つたし、實地の練習も出來たし、イザ是から開業しようと云ふ場合に、何の位の開業費が要るだらうか、これは殆んど際限のないので、多少は玄關も飾らねばなるまいし、治療室の飾付けも要らうし、電信柱の廣告や、新聞の挿込み廣告も必要でありませうが、これ等は一切別として、差當り必要な直接の道具だけを、極くお手輕に積つて見ると、ザッと二百圓から二百四五十圓あれば、一通り揃ふらしうございます、先づ治療用の安樂椅子は、齒科醫になくてならぬものでありますが、新らしく買つて四十圓から八九十圓までゞ、古いのを買

へば唯の八圓位でも買へることがあります、次はエンジンと稱して、足で廻轉して齒に穴を穿けたり何かする機械が是非要る、これが三十圓乃至四十五圓、夫からレーズと稱する齒を硏ぐ機械が十五圓、それに義齒を煎る義齒釜が十四五圓、その外これ等に附屬した機械道具醫療品等で、七十圓位も買へば差當り要るだけは揃ひませう。この二百圓か二百四五十圓か、云はば開業費用で、資本として固定するのであります。

藥品や原料品等は、何も初かめら澤山買込む必要はありません。藥の如きも變色したり何かするので、流行つて居る齒科醫でも、三オンス瓶に出して並べて置く位で、無くなつた時に藥店に行つて二三オンスづゝ買つて來れば間に合ひます、金粉なども高いものを澤山買込んで寢かして置くには當らない、必要の都度都度五分一匁づゝ買つて來ればよい。そこいらの不景氣な齒科醫で、斯う云ふ風にして居るものが澤山ありますから、開業當座はこれで十分でありまして、直接の開業費としては、前揭の二百圓ばかりの道具だけで、他には殆んど要らないのであります。

齒科醫の收入

そこで齒科醫を開業すると、何の位の收入があるであらうか、薩張り流行らない齒科醫になると、隨分見すぼらしい者もないではない。又た驚くべき收入のある者もあつて、一概に云ふことは出來ませんが、然し實際開業して居る齒科醫の話しを聞繕ふて見ると、極端に流行らないものを例外として普通一とほりの齒科醫以上を、假りに四等に分けることが出來ませう。而して、その最下級が每月の收入百圓で、その上が二百圓、三番目が三百圓で、三百圓以上の齒科醫となると何の位取つて居るか分らない、恐らく少くとも四五百圓以上の收入であらうとの仲間での話しであります。この最上級を期待するのは少し潜越でせうが、また例外の門前雀羅を張る底の者を標準とするのも、餘り謙遜でせう。そこで先づ最下級の百圓の收入を標準として云へば、その實費と云ふのは三分の一で、ザッと三

十圓が一ヶ月に要する實費であります。而して何人位の患者が來れば、この百圓の收入があるかは、患者の種類次第によつて定まるものでありますが、毎日新らしい患者が二三人宛も來れば、上等の齒科醫の内に入ると實際家は云つて居ります。

元來齒科醫の原料と云へば安いもので、殊に安い仕事ほど儲かると云ひます。例へば義齒一枚が一圓か二圓でありますが、その材料に和製を使へば、勿驚タツタ二錢五厘です、それで一枚二圓の金が取れるのであります。然し和製は折れ易いので、信用を重んずる齒科醫は舶來を使ひますが、それでも一枚の代價は五十錢で、患者からは一枚二三圓を貰ふのであります。またゴムの塡充の如き、原料の代は僅かに五厘位でありますが、それで患者からは何十錢を取るのであります。このゴムの塡充と云ふのは、本來藥をさしてそれを押ふるために塡めるのであつて、塡充は本來の目的ではないのであります。故に信用ある齒科醫は治療の目的には使ふが、塡充の目的には使はない、所が普通の齒科醫は此の方が安いからとて五厘の材料を使つて四五十錢も取るのでありまして、藥九層倍どころではなく、正に百層倍になるのであります。



初夏の林泉

齒科醫の需要

東京では大分齒科醫が増へて來ましたが、まだ〳〵餘地があります、殊に技術の如何はしいものも大分ありますから、

相當の技術を有つたものが要求され、殊に地方になると甚だ拂底して居て、郡役所々在地にでも行つて見やうものなら、僅かに一名居るか居ない位で、その技術も頗る拙であります、現に東京の齒科醫がよく近縣に出張所を設けて、相當に勢力範圍を有つて居るのを見ても、地方に齒科醫の缺乏して居ることが分るのであります、故に斯う云ふ地方に行つて開業しても、東京ほどの收入はあるまいが、相當の收入はありませうし、例の安い材料を使つて、割の良い仕事があるらしい、若し主人は郡役所にでも勤め、細君が宅に居て齒科醫をすることが出來れば、面白い共稼ぎが出來るし或は又夫が普通醫で細君が齒科醫をしても、都合が良いと思はれます。

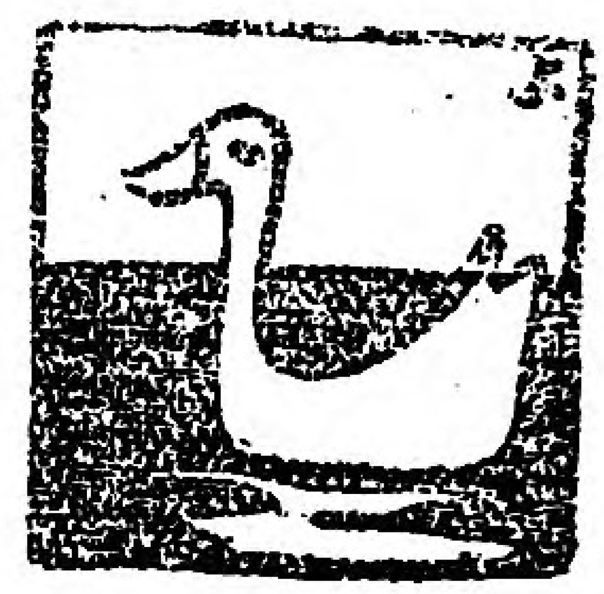
婦人に適するや否や

最後に殘つて居る問題は、婦人は齒科醫に適するや否やでありますが、これは齒科醫は婦人が良いとは云へますまいが、婦人は齒科醫になり得ると云ふ丈けは

確かであります。先づ婦人が適當すると云ふ方から云つて見ると、齒科醫の仕事は細かな注意を要し、且つ半ばは彫刻とか錺屋の樣なものでありまして、斯う云ふ點から云へば、寧ろ婦人に適して居ります。然し同時に醫師であつて、治療をせねばならず、或は切開したり齒を拔いたりする場合には、往々果斷勇氣を要することがありまして、斯う云ふ點になると男子に一歩を讓る憾みがあります。

又婦人には往々血を見て腦貧血を起す者があるが、斯う云ふ婦人が齒の治療殊に拔齒などが出來るや否や記者は初め此點を心配しましたが、學校で治療を見慣れて居る内に、段々平氣になると云ふことであります今一つの心配は婦人に特別なる每月の故障の場合で、斯う云ふ場合に立つて居ては何うかと云ふ心配がありますが、これは人によりては差支もなかるべく、又實際差支ふる時は、五日か一週間助手をして代らしめてもいゝ譯であります。

* * * * *



皮膚と毛髮と乳房及び臀部（つゞき）

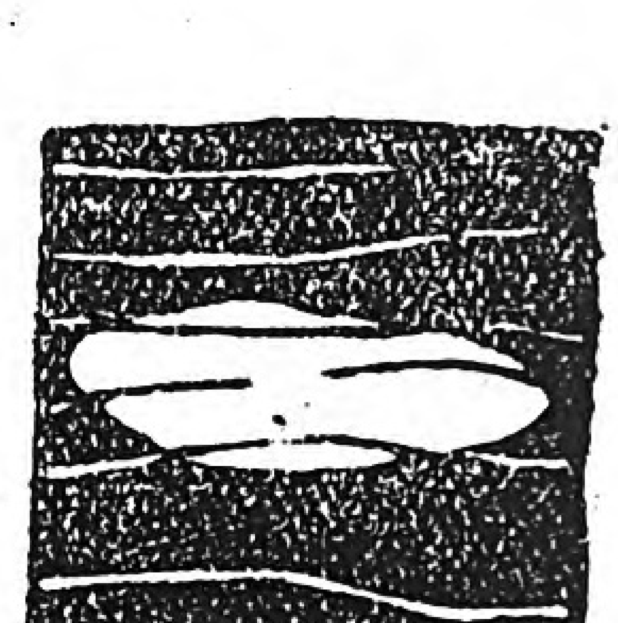
澤田順次郎

話が大變に長くなりましたが、漸々結末に近づきました。その最後の一節は、卽ち臀部のことで、何だか下卑たもの〻樣に聞えますが、併し臀部は、婦人に必要な裝飾で。

◎美の一要素

である―とは、一番初めに述べた如くです。それでお臀が小さくて、男の樣に狹い婦人は、顏が何んなに美しくとも、決して美人といふことは出來ません。これを言ひ換へると、大きなお臀は、美人の資格で、小さいお臀は、美の資格を缺くといふことになります。丈も美人には、皮膚と毛髮と、乳房　臀部　の調和を要するものですから、お臀ばかり潤大で、他との釣合が取れないと、全然大道臼の樣で、それこそ下品此の上もないのです。

◎臀の大小と身體との釣合



そんならば、お臀が何んなで、他の部分が何んなであれば、調和するかといふに、皮膚の色がクッキリと白く、肩は撫で形で、乳房は胸に半球を畫した樣に突き出て、胸から下は細くなつて、帶筋のところで止まり、それから漸々太くなつて、潤大な臀部に接續し、そして脚は胴部に比して、短くないといふ樣な姿勢は完全無缺です。さうして顏が美しかつたならば、鬼に金棒で、極美、絶美といつてよいのです。

然しさういふ姿勢と、顏の美と調和した人は、稀有

であらうと思ひます。途中で出逢ふ婦人を見ても、さういふ婦人は滅多にありません。婦人の大勢集合する婦人會や、何かに行つて見ても、中々無いやうです。して見ると眞の美人は少いもので、大抵の婦人は、水平線以下です。此等の

◎水平線以下の婦人

に就いて見ると、一番臀部が目に立つ樣です。といふのは、臀は元來下品なもので、見やうに依つては、醜いが、併し此の醜いものが、他と調和して恰好よく見えるのです。これを言ひ換へると、臀部は美と醜との境目で、恰好がよければ美、否らざれば醜となるのです。それで他の部分との釣合が取れないと、大きなお臀が、愈々目立つて、愈々不恰好になります。お三どんはそれです。然るに其の釣合が旨く取れると、大きいお臀ほど恰好よく、隨つて美に見えます、脊のすらりと高い人は、多くこれです。

併し困ることには、お臀と身體との釣合を測るには一寸外から觀察されぬことです、そこで

◎婦人美の觀察

には、木地でなければ、完全ではありません。臙脂鉛白で、黑い色を隱したり、美服で以つて、人工美を加えたりするのは、美の本質を發揮することは出來ません詰り裸體で、臀部の大小と、之れを中心として、上行部と下行部との釣合ひ、それに對して、乳房や、胸や、背や、肩や、額やの工合などを、見なければ、十分に婦人美を觀察することは出來ません。

併しモデルじやあるまいし、美人の品評にそういふ注文は、實際に行はれないのですから、普通に着物を着た上から、觀察することが必要です。それには身長を標準とする外に道がありません。

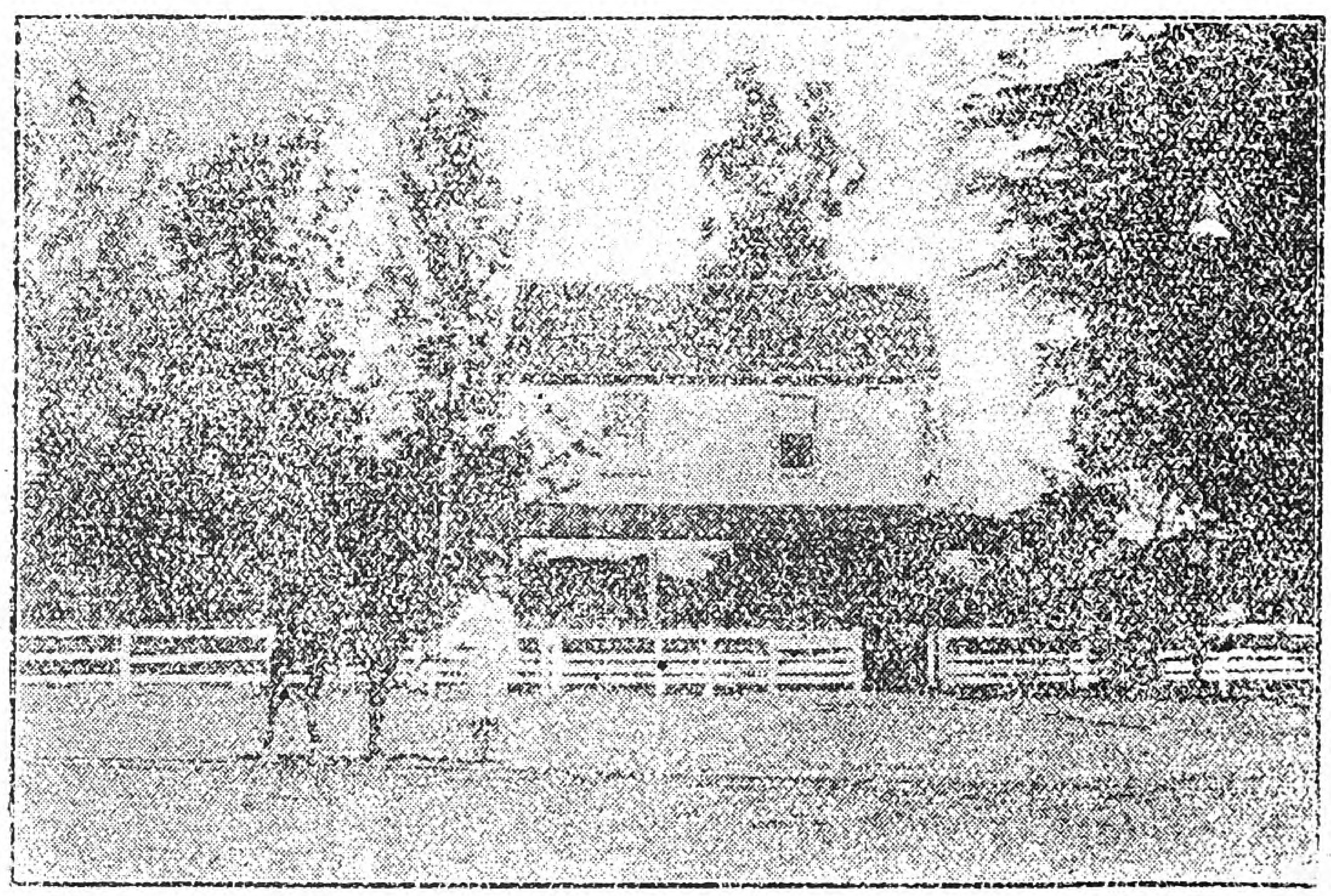
日本人は一體に脊が低いが、特に婦人は短身で、西洋婦人に比すると、まるで小兒の樣ですが、併し妙なことは、さういふ短身な人も、臀から上部は、西洋人と大した違ひはなく、臀から下部、卽ち脚が短いので

す、それで脊の低い人は、臀が中心以下になつて、大變に醜いのです、姿勢に、身長を標準としなくてはならぬといつたのは、これでお分りでしやう。箇様にお臀の大小は、身長に比例しなくてはなりませんが、男は何うかといふに、

◎臀の大きな男

は、臀の狹小な婦人と同様で、男としての姿勢はゼロです。尤も男には女の様に大臀をもつてる者は、生理上ありませんが、比較的大きな臀をもつてる者は、女形で男らしくありません。

それで男が女に化けると、直ぐ尻から割れて來ますそれと同様に、女が男になつても容易に發覺しますこれは俳優でも分りますが、彼等は



布哇の耕地

女になつたり、男になつたり、變身術は頗る巧妙ですが、それでも女になつた者は、直ぐ分ります。特に女で男になると、尚更よく分ります。といふのは、女は其の大きな尻を男の様に小さく見せることが困難であるからです、男が女に化るときは、尻に布團か何かをくつゝけて、その上に女の帶をすると、何うやらかうやら、胡摩化されますが、女が男になつて、男帶を締めると、尻が著しく目立つて、直ぐに分ります。それで俳優は、矢張男は男、女は女と別々になる方が、宜からうと思ひます。

これは餘計な話かも知りませんが、土臺男女の區別は、自然に具つてあるものですから、此の規則を犯して、互に異性の眞似をするのは、

不自然で、到底眞に迫ることは出來ないのです。

◎臀の大小は骨盤の關係

何故女の臀が大きくて、男の臀は小さいでしやう。これは申すまでもなく、骨盤の關係で、骨盤の大小と臀の大小とは一致するのです。骨盤は男女に依つて異なり男のは高くて、横が狹く、これに反して女の骨盤は低くて横が廣いのです。骨盤は男にあつては、腸を支へるだけですが、女にあつては、胎兒を宿して之れを保護し、又分娩の際には、骨盤の内腔を通つて、胎兒が生まれるのですから、狹小な骨盤では、時として難産することがあります。それでお尻の小さい婦人は不恰好な許りでなく、難産といふ憂ひがあるから、何ちらから見ても、お尻の小さい婦人は、不幸を免れません。お尻の大きな婦人は、先づ以つて安心して可なりです。

◎蜂腰と臀

西洋婦人のお尻は、頗る大で、本邦婦人の殆んど倍であるやうに見えます。それで西洋婦人は、日本婦人には臀が無いといつて居るさうですが、西洋婦人のお尻の大きいのは、實際に大きいのと、胸が細い爲に、尻が著しく目立つて見えるとに依るのです。西洋婦人が人工的に、胸を細くするのは、詰り臀部を大きく見せる爲で、西洋では、お尻の大きいのが美人です。それで西洋婦人には故意に、お尻に綿などを押し當てゝ大きくするのがありますが。これは服裝上の關係で、洋裝では、尻の小さいのと、胸の太いのとは、我々が見ても、見つともありません。本邦婦人で洋裝すると何うも胸が太くつて、映りの惡くなるのは、これが爲で、調度西洋婦人が、日本服を着た樣で、不恰好ですから、特殊の體形を具へて居る婦人だけは、何所の婦人でも、自國の服裝をするに限ります。日本の最美人も、洋裝をすると、二段も三段も美を損するのは、着慣れない爲でなく、全く自然の體形が添はないからです。

◎日本婦人の帶と臀部

我國でも婦人が、幅の廣い帶を締めて居るのは、意味のあることで、西洋婦人が、コルセットを用ゐるのも、同じです。何故といふと、コルセットを用ゐると胸が細くなつて、臀部が大きく見えるからです。厚帶を用ゐるので、お尻を大きく見せる爲で、厚帶は確かに日本婦人を美ならしむる、裝飾の一つです。

然るに西洋婦人は、本邦婦人の姿を見て、日本婦人は佝僂だといつたさうです。恐らくは厚帶を締めた上に、羽織を纏ふて居たのを見て、さう思つたものと思はれますが、實際美の上からいふと、羽織は日本婦人には、不釣合なものです。何んな立派な帶を締めても羽織を着ると、見えなくなる許りでなく、後から見ると、全く佝僂の樣で、醜くなります。然るに羽織を着けずで、良い帶をすると、りうとして大變姿がよくなります。

こんなことは私がいふまでもなく、婦人方の百も千も御承知のことですが、私は厚帶が衞生上宜しくないと言ふ人に對して、一言答へて置きたいと思ふのです果して厚帶が衞生に害ありや否やは、事實上未だ確定しませんが、本邦婦人が、これを以つて少しも苦痛としませんのは、數百年來用ひ來つて、厚帶が日本婦人の體によく適合する樣に、つまり婦人の體が、帶と同化した爲だと思ひます。それで美の上からいふと、厚帶は日本婦人に缺くべからざるものと謂はなくてはなりません。

コルセットが內臟を壓迫して、姙娠を妨げたり、肝臟病を起したりするのは、事實ですが、併しその割合に、病人の增加しないのは、矢張習慣になつて、體がコルセットに適合する樣になつた爲です。一も衞生二も衞生といふ今日は、衞生の時代には相違ありませんが、併し今日の裝飾法は、果して衞生に適つたものばかりでしやうか、裝飾と衞生とは、必ずしも一致するものでありません。

◎臀部の上で子供が遊ぶ

西洋人ばかりでなく、野蠻人でも、お臀は婦人美として、見られて居ります。ホッテントット人の如きはそれで、而もそのお尻は西洋婦人のよりも、著しく後方に突出するのが、賞讚されます。それでホッテントットの婦人は、これを裝飾として、幼い時からお尻の

突き出る樣に努めるのですが、よく發達したものになると、お尻に小樽を附けた樣に、後に突き出て來ます。小兒のあるものは、脊に負ふて運びますが、我々の樣に、小兒の兩足をぶら下げて、固く脊に縛ることはなく、その突き出た尻の上に、小兒を立たせて、輕く之を母體に結びつけるのです。さういふのは、勞働する場合で、一寸兒を負ふ時などは、小兒をお尻の上に載せた切りで、小兒は尻の上で遊んで居るといふありさまでです。お尻もかうなれば重寶ですが、併し之れが爲に、下肢が後に傾むいて、側面から見ると、實に滑稽な姿勢となります。

◎大きい臀部は結構

ホッテントット婦人の樣に、馬鹿に變挺なお尻も極端ですが、日本婦人のお尻の樣に、小さいのも極端です。かういふ樣に種族に依つて、お尻に大小あるのは全く習俗の然らしむるところで、尻の大なる種族は、それを好むからで、小尻の種族は、その反對です。西洋人と黒人と、臀の型が違ふけれども、兎も角、前者の例とすべきで、日本人は後者の例です。

併し日本でも、尻の小さいのを喜ぶ風は、文祿時代の遺風で、其の以前は一般に、大きな尻を愛した形跡があります。西鶴の本に尻附き大きく、平たく見ゆるを好みとあるのは、その證と見てよからうと思ひます。それが、浮華輕佻の風に化して、あゝいふ尻の無い美人(?)が出たのですが、明治の世になつてから亦、豐尻を賞美する樣になつたのは、結構と謂はねばなりません。尙終りに臨んで、も一つ婦人の

◎尻の振り方

に就いて、一言したいと思ひます。婦人は歩く時にお尻を左右に打ち振る癖があります。これは婦人の解剖學的特質で、つまり尻が大きいから、自然にさうなるのですが、その尻の振り方を、亦美として賞讃する國民があります。歐羅巴ではスペインの婦人が、其の振り方が旨いとして知られて居ります。亞弗利加ではパプア、埃及等の婦人が有名です。

我が日本でも、内輪に歩む婦人は、上品としてありますが、此の内輪の歩き方に依つて、お尻が左右に振れるのですから、日本人も、お尻の振りを賞讃する國民と謂つて差支へがなからうと思ひます。（をはり）

秀吉を嫌ひたる

川村きく

（講談）

昇龍齋貞丈



天文五年正月元日尾州愛知郡中村の土民の家に生れ、一代にして關白太政大臣の位にまで陞進りましたる豊臣秀吉公、我が日本では古今に此の方位の破格な出世をなすつた方は恐らくございますまい、從つて斯ういふ方は小兒の內から爲される事が總く凡人とは變つて居られたやうでございます、十四歲の時に父の許を離れて遠州濱松へ參り、今川義元の軍學武術の指南役松下嘉兵衛の家來になりまして、文武の敎へを受けて居る內に、弘治元年六月となり、相州の北條と今川義元と戰ひの時に、富士川に於て敵將伊藤日向守秀虎を討取りましたが、今川義元が木下藤吉の小兵なる所から之を疑ひ、拾ひ首か貰ひ首ならんと云つて別に賞を與へません、藤吉郎腹の中で、義元のやうな馬鹿大將の下に居た所が仕方がない、御主人の嘉兵衛行綱といふ人は剛い人ではあるが、其だけの技量を現はす事の出來ん、己れの家來が大功を現はしても、其れに對して褒美を授けられんやうな人では、迚も長く足を留めて居るやうな事は出來ないと腹の中に思つて居るから、今では身を入れて稽古もせず、只一日一日と過して居る內に、松下嘉兵衛は其の氣を察して、末に見込

みのある者だからどうか手放したくない、當國に足を留めさせたいと思ふから、大層藤吉を叮嚀に扱ふ、誠に此の嘉兵衞は人を使ふのが上手でございますから、當人の氣に入るやうにされるだけ、流石の藤吉も退散をする事が出來ない、遂に三年といふ月日を重ねました時に、嘉兵衞は藤吉に向ひ　嘉「其方は誠に見込みのあるものであるが、どうぞ親戚同樣の交りをして貰ひたい、就ては尾州中村から出て、固より百姓の伜であつて、苗字もなかつたが、之より我が姓を遣はすから松下藤吉郎と名乘れ」と申されましたる時に　藤「誠に有難くは存じまするが、旦那樣の御姓を頂いては恐れ入りますゆゑ、公といふ字を除いて木下となり度う存じます」と云つたのは、何も公といふ字を憚つたのではない、固より大量の人ゆゑ、松下と云へば松一本の下、木下と云へば總體の木の下であるから、餘程事が大きくなる、一寸した事にも大きい事を好むのが藤吉の氣性でございます、されば愈々此の所に足を止めて居る事を好みません樣子を見て嘉兵衞は胸中に、ア、

困つたものだ、併し女の髮の毛には大象も繋ぐといふ譬があるから、一ツ當人に妻を迎へさしたら、其が爲に長く當地に足を留めやうと考へましたゆゑ、或る日の事　嘉「藤吉、さて其方も早や二十四歳に相成つたな」藤「左樣でございます、此方へ參りましたのが十四歳の時、其から十ケ年御厄介に相成りました」嘉「就ては獨身で居ると誠に物が定まらんが、何うぢや妻を世話をして遣はさうと思ふが、女房を持つ氣はないか」藤「有難う存じます、私は女房を持つ氣がありましても、どうも來てがございません」嘉「イヤ來てがないといふ事はない、某しが媒酌をして遣はすであらうから」藤「旦那樣が媒酌をして下されば、其は旦那樣へ對して一人位ゐ來ては呉れませう」嘉「其とも何か其方此の女を生涯の女房にしたいといふ者でもあるか」藤「左樣で……實はございます」嘉「あるえ、却々豪い男だな、誰だえ其の女は」藤「左樣なれば打明けて御話しを致しますが御用人の川村治兵衞殿の娘におきくといふのがございます、當年十七歳になります」嘉「ウムある〱

藤「好い女といふ程でもございませんが、色の白いポッチャリ肥つて目尻の切上つた鬢の毛が少し縮れた目の縁の黒い女で」藤「ウム却々貴様は剛いな」嘉「アノ娘を疾うから目を附けて居りましたが、どうか那れを女房にいたしたうございます」嘉「其は易い事だ、早速取計らつて遣はさう、善は急げといふから今日の內に計らつて遣はすから左樣心得ろ」藤「有難う存じます」

嘉「治兵衛を呼べ」と早速御沙汰になりましたから用人の川村治兵衛何事かと思つて早速御前へ出ると、松下嘉兵衛の傍に藤吉が一人座つて居る樣子 嘉「サアサア之へ參れ、其方を俄かに呼んだのは餘の儀ではない少々申入れたい事がある」治「何事にございます」嘉「イヤ外ではないが確か其方の娘きくは今年十七歲に相成るな」川「左樣でございます、當年十七歲に相成ります」

嘉「未だ定まる夫はないか」治「諸方から種々申しては呉れますが、未だ之と申して定めた者もございません」

嘉「然らば拙者が媒妁をいたして遣はすが、嫁けたら宜しからう、早速緣組をさせやうか」治「有難う存じます、先方は何れでございます」嘉「先方と申すは之に控へて居る藤吉で、富士川の一戰に伊東日向守を討取り第一の功を立てたが、少々仔細あつてさしたる出世も致さんが、併し終始は見込みのある男だから、藤吉に遣はしたらどうだ」治「ヘヱ、恐れながら私の娘は人間でございます」嘉「默れ、娘が人間だとは何だ」治「ヘヱい、さるとはお情けない」嘉「默れ、洒落れるな、其の儀が不都合とあらば是非に及ばん、其方に今日限り暇を遣はすから早速當所を立退くやうに」治「之は怪しからん事を」嘉「何が怪しからん」治「此の儀に就てお暇とはお情ない」嘉「其だから受合つて藤吉に娘を遣はせ、忌なれば其方親子の者今日限り暇を遣す」治「委細承知いたしました、只今立歸つて娘へも申附けました上御返答仕つります」嘉「然らば藤吉を待たして置くから其方早速立歸つて相談をして善き返事をいたすやうに」

治「畏まりました」と川村治兵衛御前を退りましたが悄々として宅へ戻りました、宅では何も知らないから治兵衛の家內は 女「貴所急の御用といふのは何でござ

いました」治「イヤどうも今日は御殿の方が暗劍殺に當つて居ると見えて酷い惡い事が出來た」女「何でございます」治「イヤ殿樣が自身に媒妁をして下すつておきくを嫁つけろといふのだ」二「へヱ、其は喜ばしい事ではございませんか」治「其がさ、尋常ならば誠に喜ばしいけれども、マアおきくも出處へお出で、お前は飛だ者に見込まれた」きく「何でございます」治「何だどころぢやアない、お前は猿に見込まれた」きく「親父さん何でございます猿に見込まれたといふのは」治「マア聞きなさい、御前へ出ると其方が娘は今年十七歲だなと仰しやるから、左樣でございますと、申上げると、未だ定まる夫はないか、ない



ならば予が媒妁をして遣はすから嫁けろと仰しやる、其れゆゑ先方は何方でございますと伺つた所が、爰に居る木下藤吉郞だ、若しも厭だと云へば親子共今日限り暇を遣はすから早々當所を退散しろといふ嚴命だ」と聞いて妻君は泣き出した、娘おきくも之また聲を上げて泣伏すきく「アヽ親父さんお情けなうございます、人間と生れて猿の所へ嫁に參るとは、何の因果でございます」治「さうだとも俺も其の事を御前で申上げた所が、何分殿樣がお聞濟みがない、不承知なれば暇を出すといふ仰せであつて見ると、今まで御奉公をして居て之しきの事で暇になるといふのも殘念、種々考へ

て見たがどうも致し方がない、此の上は迷惑ながらお前の心一ツだ、親の爲だと思つて一旦嫁に行くとしてさうして置てから何でも藤吉のいふ事を聞かんが宜い何を云つても厭だ／＼と云つて、若し愚圖々々云つたら藤吉を毆るが宜い、其で藤吉が御前に出た跡で近所の女子供を集めて花骨牌をやるとも、一八でも買つてメチヤ／＼に小遣ひを使つてやるが宜い、さうしたら先方で呆れて離縁をするだらうから」きく「畏まりました、親父さん阿母さんのお爲になる事なら私は覺悟をして參る事にいたしませうとお話が極りましたから再び治兵衞が御前へ出まして承知の趣きを申上げると、藤吉は手を叩いて喜こんだ



其の日といふ譯にもなりませんから、四五日經ち吉日を選んで川村の娘おきくは藤吉の所へ嫁に參りましたが、元々親子相談の上で來たのだから、おきくは堅くなつて居る藤「おきくや緣あつて夫婦に相成つたものだから最も打解けて話をするが宜い」きく「イヱ別にお話申す事はございません」と初めの內はツン／＼して居りましたが、後に天下を一統する程の藤吉郎、何處をどう說附けたが、此頃はおきくも大きに藤吉郎を慕ふやうになりました。陰に樣子を聞いて居た川村治兵衞夫婦仲が宜ければ其に越した事はございません、強て間を裂くといふ譯もありませんから其の儘にいた

して居りました所が、藤吉は忠實の男だからモウ日の内に二度となく四度となく川村の所へ參りやす、治兵衞も慕つて來る者を追返す譯にも往かず此の頃ではおきくも苦情を言はないものだから　治「マア辛抱をなさい」藤「有難う存じやす」治「富士川の大功を現はした事に就ても、上の思召しに叶はん所から別段御褒美もなかつたやうだが、其の内に旦那様か、殿様へ申上げ、其外御重役方からもお執成しを以て近々出世をするに違ひないから、必らず當所を退散いたしてはならん」

藤「どう仕つりまして、却々退散などはいたしません左様ならば」と歸つたかと思ふとまた藤「今日は」治「藤吉か」藤「ヘエ」治「何しにお出でだ」藤「ハイ御機嫌伺ひに參りました」治「其は餘り仰々しい、高が用人の川村の所へ御機嫌伺ひなどゝは身分に過ぎるから參らんでも宜い」藤「でも私の爲には舅御でございますから差支へなからうと思ひます…左様なれば」と歸ると間もなく藤「今日は誠に御無沙汰をいたしました」治「何だえ先刻來たばかりぢやアないか」藤「アヽ宜いお天氣と間違へました」治「疎匆かしい男だな」藤「左様なら…」

其の翌日蒼卒しく參りまして　藤「今日は」藤「また來たかえ」藤「一大事出來いたしました、只今袋坂まで參りますと、足に蹴附けた物がございますから、何であるかと思つて見ると此んな物を拾ひました、何でございませう」治「イヤ是は宜い物を拾つた大黒天だ」藤「ヘヱ妙なものでございますな」治「之は三面の大黒天ト云つて何方から見ても顔が眞向きに見える、お前に授かつたのだから家へ持て行て御神酒でも供へて粗末にしないが宜い、此の三面の大黒が授つたものは生涯に三千人の頭になるといふからお前も必らず今に三千人の頭に立つやうになるであらう、能く辛抱をするが宜い」

藤「然様でございますが、其では持歸つて御酒でも上げませう」と藤吉右の大黒を持つて戻つて參りましたが　藤「おきくや今戻つた」きく「オヤお歸んなさいまし」藤「其所に鉈があるだらうから取つて呉れ」きく「ハイと」何の氣なしに鉈を取り出すと、藤吉此の大黒を石の上に乘けて鉈でもつて粉々に叩き毀したのを見てお

きくはきく「マアお前さんは勿體ない、大黒樣を何となさる」藤「大黒も何もあるものか」きく「然んな事をして何になさる」藤「貴樣達の知つた事ではない、默つて居ろ」と粉々にして了つて、之を茶袋へ入れて川村の家へ取て歸し 藤「今日は」治「また來たかえ」藤「少々御覽に入れる物がありまして參りました」治「何だえ」藤「之でございます」と袂から出した茶袋の口を開いて、何だか木の屑を取出し藤「之が三千人でございます」治「何だえ」と治兵衞が眼鏡を掛けて其を見ると 藤「どうぞ能く御覽下さいまし、之が三千人で〳〵」と遂々終ひには茶袋を逆さにして出したのを見ると、最前の大黒を粉々にして了つたので 治「ヤア之は先刻の大黒だな」

藤「左樣で、斯う細かになりました」川「馬鹿氣た男だな、何だつて大黒樣を斯んなにしたんだ」藤「貴所の仰しやるには生涯に三千人の頭になると言ふ事でございましたが、私は生涯に三千や五千の頭になつて喜こばしいと思ふやうなものではございません、其ゆゑ斯う粉々にして人掛けが三千人とすると、一寸四五十萬の頭になるといふ考へでございます」治「どうもお前は變だぜ、氣でも違つたか」藤「別に氣も違ひませんが、今に私は數十萬の頭になる考へでございます」と云つて立歸つたが、サア斯うなると早く當地を立退きたいといふ考へが又起つた、然る所此の松下嘉兵衞の門人が境神社へ額を奉納するに就て、其の金の集め方を藤吉が吩附りましたので、藤吉の手に黃金二枚銀十三枚入りましたから、一時尾州へ立歸る氣になりました、併し夫婦の情は別段のもので、おきくの其の話をしたいが、若しおきくに話をして川村治兵衞に話しをされては困るとは思つたが、マア當つて碎けろ、話して見なければおきくの心中が分らないから 藤「おきくや、一寸此處へ來るが宜い」きく「何でございます」藤「他ぢやアないがお前と夫婦になつて斯うして居たが、實は少し私も望みがあつて今ではないが先へ寄ると一寸在所へ歸つて兩親の樣子も聞て見たし、又次第に依つたら當分足を留める事のなるかも知れん、就ては其を旦那に云へば中々許して呉れないに依て默つて立退く心算

だが、お前は女房の事ゆゑ話すが、何と私と一緒に尾州へ行くか、其とも私は厭だ、此の土地を離れるが厭だと云へばどうも致し方がないから、今日にも離縁をして、後の心殘りのないやうに致したいと思ふがどうだ、遠慮なく云へ、眞逆離縁を呉れろともいふまい、連れて行て呉れといふだらうな」きく「其では尾州へ行て、モウ此方へは歸つて下さいませんか」藤「其が分らん、どういふ事になるか何うも親達は歸すまいと思ふ」きく「左樣でございますか、さういふ事ならば幸ひででざいますから」藤「一緒に連れて行て呉れといふのか」きく「左樣ではございません、固より貴所の所へ參つたのは據ろなく參つたのでございますから、さういふ譯なれば丁度宜うございますから、どうぞ離縁をして下さい」藤「へエ、ぢやアお前は私を慕はないかえ」きく「別段慕ふ所ではございません」藤「オヤ〳〵強て離縁をして呉れろといふか」きく「左樣でございます、今では貴所が親切にして下さるし、其に何から何まで實家の事をして下さいますから斯うして居たやうなもの丶、遠い所へ行くのは厭でございます」藤「然らば離縁をしてやらうが、今此處で離縁をして後々に至つて後悔をするな」きく「何を後悔するものでございます」藤「さういふなれば一言云つて聞かせる事がある、昔し太公望といふ人があつて、其の人が日々川に釣を垂ること三年所が鮒一ッ釣て來た事がない、女房の媽氏之を怪しんで、何んな事をして居るかと思ひ、太公望の釣を垂て居る所へ來て見れば、其の釣棹の先に針もなければ餌もない、只絲を下げて居るだけの事で。其の樣子を見て媽氏は大きに笑ひ、お前さんのやうな馬鹿な人は世の中にない、棹の先へ針も餌も附けないで釣をするやうな人では生涯見込みがないから離縁をして呉れろと云つた、太公望己むを得ず媽氏に離縁をして遣はした處が此の人遂に周の文王に仕へて、殷の紂王を滅する際に軍配を取つて其の戰ひ致して大勝利を得、愈よ天下泰平を謡ふやうになり、大公望は八ヶ國を賜はり、駟馬の車に乘つて往來をいたした、或る時原中に於て車の前に一人の老婆の跼づきたる樣子、太公望是を見

れば先に自分より望んで離縁をした嬀氏にて、何うか元の鞘に納めて下さいと太公望の出世をしたのを見て賴み込んだ、家來の者之を聞いて追返さうとした所が太公望手荒き事をしてはならん、全く私の以前の妻に違ひない、之へ參れと云つて側へ呼び、元の通りになりたいといふなればして遣らないものでもないが、盆に水を汲んで持て參れと聞いて馬鹿の女ゆゑ忽ち盆に水を汲んで持て來た、之を大地に明けろと言へばハイと云つて明けた其の大地に明けた水を再び盆に返して見ろと云つたが返らない、之れ覆水盆に返らず破鏡再び照さず、落花枝に戻らざるの理だきく「南無阿彌陀佛

藤「馬鹿を云へ、法談と心得て居るか、其方今離縁を求めて後再び元の通りになりたいと云つて來てもなる事は出來んぞ」きく「何うしてお前さんが何んな身分になつても決して元の通りになつて呉れろとは言ひません」藤「然んならば其で宜い、然らば此處で離縁狀を書いてやらう、就ては此の事を今直ぐにお前の親父にいふと面倒だから、之は先に依て話すが宜い」きく「畏まりました」ソコでおきくを離縁をいたし、夜に入つてソッと我が家を拔出し、故鄕へ立歸つて居る內に圖らずも織田信長公に見出され、草履取から足輕と段々出世をいたして行く。其の內に組頭の藤井又右衞門の娘を妻にいたしましたが、後に出世をして太閤秀吉公となり、飛ぶ鳥を落す勢ひ、相州小田原攻めの時に駿州府中に御滯在なさいました。其の折不圖思ひ出した段々おきくといふ者を尋ねると、今は漁師の又六といふ者の家內になつて居るといふ事が分りました、秀吉其のきくを本陣へ呼び出しました所、家來も驚ろいた、どうも殿下の元の妻君だといふから定めし立派な女であらうと思つて居た所へ木綿ぞつきの衣類で、頭は疣尻卷、色は眞黑でございます、驚ろいたけれども仕方がない、其の通り申上げると、苦しうない之へ案內いたせといふから、近習の侍が其へ參つて近「きくといふはお前か」きく「ハイ私でございます、此方へお出で疎匆のないやうにいたせ」きく「ハイ藤吉さんが私に逢ひて呉と言ひなさるか」後へ尾いて參りますと、正面

に御簾が下つて居ります、暫くすると御簾の前へ一人進み出で○「お言葉に從ひ漁師又六の妻きくと申ずる者お目通りへ罷り出でました」と披露をいたしまするど前の御簾がズーッと上る、正面に山鳩色の御裝束淺黄地八房の御袴奴、紫の石の帶、金色二重長の冠りを附け、雲丹甲の笏を取りお控へになつた御方は、いふまでもなく關白秀吉公であります、おきく頭を上げるとき〳〵「オヤマア藤吉さんどうしたえ、大層立派になんなすつたねえ」○「コレ〳〵」とお傍の者が制しまするのを　秀「イヤ〳〵捨て置け〳〵……きく、何十年振であつたらうな」きく「マア暫らくでございます、段々私が惡い事を致しまして了ひにはモウ身代も失し親達は疾うに死んで了ひ、今では漁師の女房になつて居ります、別に子供も出來ず今の所でも厄介者で居りますが御前さんは出世をしなすつたねえ、どうだね元の鞘に納めちやア」と婆さん氣樂な事を云つて居る　秀「イヤ其方主ない者ならば、此方に於て手當をして遣はすが又六といふ者があるゆゑ左樣に手當をして遣はす事が出來ん、聊か手當をして遣はすに依て又六といふ夫を大事にいたせよ」きく「マア濟みませんねえ、那の時分には私め若うございまして、赤い布掛け島田の髷で…………」お婆さん浮れ出しました、ソコで秀吉公お手許より數多のお手當を下すつてお歸しになりました、おきくは生涯漁師の妻で終りましたが、之全く藤吉郎の醜男を嫌つたる爲、折角手に入つた德を人に得られ、己れは生涯貧しく暮したといふ川村の娘おきくのお話でございます。(今村次郎速記)

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

大津繪ぶし　　廣瀬淡窓

大學朱熹章句子程子の曰く、色は思案の外とは云へど賢を賢として色にかへよとは、そりや聞えませぬ孔子樣、仁義五常も色からよ人に不善といはれても、やはり二人が閑居して、竹の杜にかやの軒、樂んで、そしいをくらひ水をのみ、喜怒哀樂も我儘にて、二人なかよく暮らしてみたいもの

三泣車
（四）

犬相

赤犬の爲に牛舍にありし乳牛が咬み付かれ、鼻頭半分持つて行かれたとて、分署に駈込み、犬の捜索願ひを出した男、犬の飼主が判明したなら、此損害は取れませうかと述立てしが、係官も之れには聊か面喰ひ、人なら人相とくる處だが、豈に犬相でもあるまい。唯赤犬と許りでは捜し出すには容易ぢやない、お前自ら捜した上、其犬召連れ、訴へに及んだなら、必ず牛の仇は討つて遣る。罷り下れと諭されて、引下つたのは、茨城縣石岡の田山といふ乳屋さんだつた。

車掌の名

毎日電車のゆきかへりに、車掌や運轉手の名札を讀んで見るのは一種の興味がある、外濠線の運轉手で八月朔日を●●●●ほづみと讀むなども六かしい方だが、巣鴨線に小山大豆吉と云ふのがあるのも珍らしいではないか、最も振つたのは外濠線の木村男女重であつたが、餘り振ひ過ぎてるといふ其筋の注意を受けて秋男と改名してしまつた。

挺變な土俵入

先年渡英した京都角力の横綱大碇は、渡航の當座こそ大人氣であつたもの丶、其後追々飽かれて來た爲め、收入は減ずる、脱走者は相踵ぐちふ有樣で、僅かに十六人となり、新に柔道屋を雇ひ入れ、其男が振袖姿の娘に扮して、相手を投げるといふのを前藝として、ドン尻に肉襦袢、股引姿の不細工千萬な大碇が、横綱土俵入をやるのだざうで、胸に色々のメタルを付けてるのは最も奇觀だと。

嫁入に 山吹の花

愛媛縣南宇和郡東外海村の、何れも生意氣盛りの若者共去日、本多鹿太郎が遙々高知縣より花嫁を迎へ、花嫁御は親戚知己に擁せられ、今日を晴れの滿艦飾にて夜十時頃、婚家へ向ふ途中を要し、西洋流に花でも投げて、祝意を表するどころか、山吹色の人糞をば手々に投付け、萬歲々々と引揚げたところは豪勢だつたが、三日の拘留と五十錢の科料を喰つた。も一つ話さう群馬縣碓氷郡細野村では、中村寅吉方の婚禮の晩、同家より數回酒を强請りし上、尙ほ出さねば村中を騷がすぞと近所にある釣鐘を亂打した若者があつた皆拘留二十日に處せられた

夢流し

羽前西田郡邊では、正月二日の夜、寶船を枕に敷いて寢るが、吉夢を得れば、翌朝錨を書き添へて家に置く、凶夢を見ると、帆を書き添へて川に流す、錨と帆を使ふ處が面白い。

奇怪な 狂女の髮

群馬縣多野郡上野村、青木半十郎の妻かめは十七歲の時發狂して以來、縊死溺死を企てたること數回に及びたる程の難物なるが、同人の頭髮は不思議にも時々全部白色となり、又黑色となる事あり、白髮三千丈憂に因て此の如く長しといふ譯か。

牛の血を 飮む美人

伊勢松坂家畜屠殺場に、毎日二人の美人が來て、見るも氣味惡き牛の生血を、一碗宛飮むで歸るを常とするが、二美人は結核患者で、牛の生血を飮ば病氣が癒ると信じての事らしい、慘ならずや。

男か 女か

甲州東山梨郡八幡村字下市河の亡內田七右衞門の五男行綱は、幼少より女兒に交つてお手玉手鞠キシヤゴ貝抔弄ぶを好み、裁縫炊事をも爲し、十七の頃から製絲工女となつて、諸所へ出稼したこともあり、身長はやゝ高いが、手足や聲は女のやうに優しく、誰だつて同人が多數工女に交つてるのを怪しまずに恐らく女性に對する愛情は有るまいとまで言はれてゐる、此男？の母は、四人續けて男兒を産んだので、姙娠中今度こそはと祈つてゐた、其心理作用で、斯く變性したのだらうと、其妙な變性男

子は當年取つて二十五歳である。

嫌ひな女

岩野泡鳴の『嫌ひな女十三種』に曰く（一）大きなお腹をつき出して歩く婦人、（二）四十になつて赤裏の衣服を着る女、（三）猫なで聲をする婦人、（四）年齡をかくす女、（五）貞女ぶる婦人（六）獨身者を子供扱ひする婦人、（七）卑猥な事を口にする婦人、（八）客を子供のお守にする女、（九）化粧するのを惡くいふ女、（十）昔の榮譽を誇る女、（十一）生かじりの英語を無暗に使ふ女、（十二）他人の心理を見ぬいた振りする女、（十三）同情を強ゆる婦人と、又々これでは足らない。

錢勘定が道樂

越後頸城郡上早川村醫師澤來二郎は、命より錢が大切といふ男だけに、十何萬の財産を拵へ暇あれば土藏で錢勘定をして娯んで居るが、此程來二郎が藏入する後から、泥棒が喰附て這入つて莫大の金を盜み去つた。

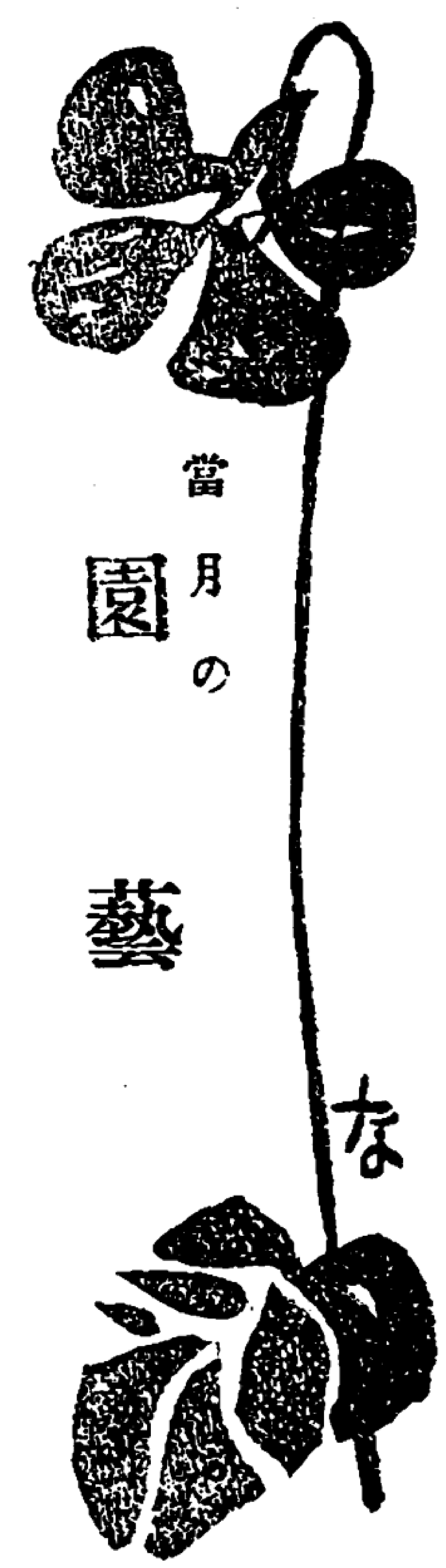


大同江に於ける韓人の洗濯

お割りなさい

フランスでは皿や小鉢の陶器を店に並べて、お客樣に打毀させる商賣がある、其入口には陶器の碎片が山のやうに積んである、奥へ入ると新しい大小の陶器や、燒繼をした陶器が並べてあつて、値段次第に何れでも、之れでも手當ばつたり粉微塵に毀させる、腹の立つた人は皆其店に出かけて、行つて陶器を破碎して痛快を感じて居る日本でも今も夫婦喧嘩が起ると、一寸お前さん其を投げたけりや彼の店へお出よと云ふやうになるかも知れない。

當月の園藝



フリージヤ

四五月頃になりますと菖蒲によく似た葉の間から花梗を出して、白或は薄黄色のよく水仙に似た筒咲きの花が咲きます。サッパリとした花で左程に綺麗な花とは見えません。何所やら淋しい花です。然しその爽かな芳香は花の中での王様でせう。

花屋でも先月に漸く温室で咲いた位で、温室外ならば本月あたり咲きます。球根草です。

作り方はさまで面倒ではありません。十月か十一月頃に球根を植えて、冬の心配は霜にあてぬやうに出來るだけ大切に取扱つてやればよろしいのです。言ふまでもなく水氣は絶やさぬこと。種子は貯藏するにはむつかしいからしない方が安全です。

餘り人に知られて居ない花ですが非常によい花です是非お勸めします。

ロベリヤ

ロベリヤ。心持よい響のある名ではありませんか。自然と優しい花ではないかと想像されます。普通は紫と白との小い花。その形は蛾のやうで誠に可愛らしい花を持ちます。草の丈は僅か四五寸、澤山な枝を分けて一株に非常に數多い花を付けますので、鉢植として眺めるにもよく。よく花壇の縁植として用ひられます丈が低くて可愛い丶花を持ちますので縁植には何よりです。本當に風情の多い花です。

一體この花は一年草なのですが、冬の防寒をよくしてやれば持ちます。又土地によつては宿根しますから根分けによつて容易に蕃殖されるのみならず、種子を蒔いても至極生え易く育ち易くありますから、種子を採つて蒔きますと翌年の春には立派に咲きます。挿木でも咲かせることが出來ますが、餘程注意しなくては不可ません。

勿忘草

勿忘草、歌にも詩にもよく使はれる花の名で、愛の使に立つのは言ふだけ野暮と思ひます。大抵の方は知つて被在る花です。四月から六月頃まで濃緑色の可憐な小い花を持ちます。西洋人は非常に愛して居ります。勿忘草は多年草でありますから、根分けで蕃殖され

ます。種子を蒔くならば四月頃に蒔いて叮嚀に世話してやりますと、翌くる年の春には見事な花を見ることが出來ます。

縷斗菜

葉の形は牡丹に似て小さいが、莖葉共に白い粉を被うて居ります。花の色は紫又は白で四五月頃に咲きます。此花の不思議なことは決して滿開でないこと、花瓣が十あれば五つは上を向き、五つは下を向いて居ることです。

縷斗菜も宿根草ですから、秋の彼岸になりましたら根分してやると殖えます。種子を蒔くならば秋の彼岸に蒔けば來春咲きます。肥料は油糟をやればよろしい。外に西洋縷斗菜と言ふのがあります。これには一重と八重があつて、色には紅、藍、紫、黄、白などがあつて非常に綺麗なものです。

華蔓草

この花は種子を蒔いてから三年目でなくては花が咲きませぬから根分けて殖しなさい。特にこの華蔓草は移植されると生活力を削ぎますから、一度植えたならば出來るだけ動かさぬ方がよろしいのです。そして移植さへしなければ他の花に較べて生活力が強いものですから、他の花を植えても充分育ち悪い日蔭でも育ちます。餘り強い日光を受ける所では思ふやうに成長しませんからよく氣をつけねばなりません。

矢車草

六七月頃の縁日などで賣つてをります。矢車の形をした花で、紅、紫、絞りの花を咲かせまして、切花としてよい花です。

種子は秋の彼岸に蒔くことを忘れてはなりません。莖はよはく裂け易いから成長しましたら支柱を立てゝやらねばなりません。

獨逸の國花であると言ふことです。

金盞花

一重のになりますと名の如く金の盞の樣でありますが色には紅黄、樺の別がありますが、明るい心持よい程に黄色を呈した花を見ると誰でも心持よくなります。一度咲いた花は容易に萎まず、色も變りませんので切花として適當です。この花は日光がないと決して咲きませぬ。

一年草又二年草でありますが、蒔く時によつて開花する時がちがひます。床蒔にしても鉢蒔にしてもよろしいのです。肥料はかはりがありません。（八葉生）



化粧問答

化粧研究會婦人修容會顧問
藤波芙蓉

△(詐偽されたと仰しやる方へ)何日間で色を何ずるか、何日遥つて來ればキット毛を生やすとかいふ言葉を信じて、莫大の金をシボリ取られた結果は、何等の効能も齎らさなんだのに奮慨して、この上は藤波にたよる外はない、女一人救けると思ふて、是非コレ〳〵の良劑を拵へて呉れとの御手紙が、近來私の机上に擇山舞込むやうになりました。一面誠に御氣の毒に思ひますが、一面から申すと、詐偽される人がわるいのであるまいかと存じます、名醫は療途を豫斷すれども治不治を豫言せずと云ふではありませんか、人事無常、其治否は、只大自然てふ大醫のみ能く窮盡する處、限りある人智の以て測り得べき範圍ではない、毛一本と雖も大自然の大化粧家の手を離れて、僅かに人智の研究を當にする我々風情が生かすも生きぬも出來る藝ではない、若しそれが出來るといふ者あらば無學倨傲の山師にあらざれば、不敬暴戻の誇大妄想者でなければならぬといふことは、少しく事理を辨へて居る人なら、誰にも先刻御承知なるべき筈ではないですか。それを誠に受けて詐偽されるは、詐偽される人が圖法もない慾張り根性から自然と誘惑された沒常識の極度を再び白狀する不見識のお擧動としか私には受取れないのです。とは云へ美を欲するは誰しもの人情その美を必ず何日間に授けると云はれては時に智者でも迷はされるが當然かも知れません。この弱點に乘じて、迷へる小羊のやうな可憐の人を邪に陷れ、自分の暴慾の餌食にせんと毒爪を磨き居る化粧受賣商、否、理髮師上りの美顏術者、業名を女に假りて廣告して居る前科者の惡蹤こそ憎みても餘りある次第、それと知らずに引掛つた御方は本當に御氣の毒の至りです。李下に冠、瓜田に履、朱に交れば朱くなる世の譬へ、知人等が擧つて私に化粧家としての看板を公然標示せよと強つて勸めて呉れる厚意に對し、いやと云ふて依然獨愼の趣味に、これが研究の步武を進めつゝあるも、一つは斯んな虎狼に等しい鼠業と同一視さるゝの名譽を得たくないからです。私を依賴するに足る化粧家と信じて下さる辱知の人でしたら、自分の力の及ぶ限りは、友として御相談相手になることを喜んで諾します。けれども治否の決定は天にあり、只療養の方途を示す以上のことは出來ないといふことを豫め御承認を願つて置きたい、現に其療養の方途に於いてすら、例へば等しく頭毛が拔けるとしても、それには皮脂漏、病後、貧血、梅毒、急性の傳染病、身體の衰弱、房事の不謹愼、其他遺傳、婦人病等の原因があり、原因異れば療法また從つて異らざるを得ません。同じ皮脂漏と申しても、所謂脂漏症なればカプトール、とかユピカリンとかを處方すべく、乾燥性なればナフトールワゾーゲン、梅毒性なる白降汞劑に代へねばならぬといふやうな譯で、その原因がよく見當のつかぬ先に乾燥症と思ふて調製したのが脂漏症であつた梅毒性と知らずに婦人病が原因だらうと考へて拵へて差上げた爲め、無効のことも往々にしてあり勝ちのことと存じます。それで直ぐ右の詐偽連

中に組込まれるやうなことでしたら、豫め御免を蒙ります。で若し信じて御依頼になるからには、不惑と忍耐の精神を私に寄托して戴きたい、でもなければ決極相互のためになりませんから

問 (一)脂肪性でニキビ吹出物が顔一面に出て居りますが。(二)ニキビの取れた痕が小さな孔になつて、冷い風に當りますと紫色になりますが。(三)加里石鹸で洗面して文光堂のニキビ新劑をつけますと、顔がほてりひどくシミます、又振りまぜてつけますと、白い粉がつきますが(室蘭の愛讀女)

答 御尋ねは三題になつて居りますけれど一所にして御答致します。全體あのニキビ新劑を用御ひになる場合には無論よく振りまぜて下さらんではいけません、白い粉の浮くのは何の差支にもならんことです。それに該新劑をおつけになる先に加里石鹸で御洗顔なさるは甚だよろしくないこと、その代りにベンヅインを少々微溫湯に入れて御洗顔なさいましたら、そのやうにひどくはシミまいかと存じます。併し該新劑で直りませんのでしたら、その上は剝離劑を應用さるゝ外ありますまい。

問 私は本年十六歳ですが血肥りの故か、十四歳の時から月のものを見まして、いつも月經前になると屹度薄い水のやうな臭い下りものがあり、陰部にカユミ又は痛みを覺え時々頭痛さへ致しますが、子宮に故障のあるのでせうかそれとも鼻から濃いねばりある汁が出ますから腦がわるい爲めでせうか(埼玉、愛讀女)

答 本欄でお答すべき範圍外の御尋ねですが、今の内に早く然るべき專門の醫師に就て、適當の治療をお受けなさるとを御勸め致します

問 先生は大層の優しい方のやうで、それで氣むづかしい處が御持りなさるやうですね、NSさんと申上げたら私共の親友で先生も御承知の筈、そのお方が先生のことを、それは〳〵御崇拜やら御敬慕やらなさつて、先頃までは藤波式の化粧法だと仰しやつて綺麗に身仕舞なさつてでしたが、近來は碌々お化粧もなさらず先生の御噂さへなされぬ故、根ほり葉ほり其譯を御尋ね致しましたら、何か先生から誤解を受け、其後は御手紙さへ下さらず、當地へ御出ましの節はお宿申上げるとの御約束まで出來てあつたのに、御立寄りにもならずに知らぬ顔で御歸京遊ばしたとかで、それが口惜さに悲觀なさつたのだとのこと、精しい事情は存じませんけれど、さりとは同情深い先生にも似ず、餘り一酷で御出なさいますのね、先生は何と思召てか知りませんが、NSさんは純潔なる處女で私共の一團が先生を御信頼申すやうになりましたのも、もとはNSさんの熱心な御すゝめによるのです。それを先生が何かの誤解のためにうとんじなさるなんて、私共まで殘念で堪りません。若し御氣に障つたことありましたならNSさんに代りて私共から御詫申上げますから何卒もと〳〵通りのやさしい先生としてNSさんを許して上げて下さい、でもなければボイコットでも(大阪、芙蓉組の一女)

答 美しい御友誼誰も斯くありたいと私まで心地よく、御言葉の數々誠に恐入りましたNSさんの深厚なる御心情の程、さては純潔なる處女で在はす事は、不肖頑迷なる私にも能く解つて居ります。解つて居ればこそこれに服すべくNSさんのためを計らねばならぬ義務が私にあるではないでせうか。古聖の句に千江水あり千江の月、萬里雲なし萬里の天といふがあります、これをもつて御答と致します。決して誤解するとか、うとんずるとか、そのやうな惡感情は神かけて持つても居らねば夢想だもして居りません。斯くても私を御解りにならず、貴女方までボイコットなさるとなれば吁致方もないこと、桃花の色影、溪水を赤しと認められた自分の至らぬ德を自ら恨んで止みませう。

問 (1)過酸化水素水を顔に塗て居りましたら、眉や生際の毛が赤くなりました、如何い

ふ譯でございませうか。元の樣に黑くなる法を。(2)過酸化水素水を他の化粧水と等分に交て顏に塗けましても差支ありますまいか(神戸、松子)

答 (1)毛につけば赤くなるからとは、本欄で屢々御注意申上げて置いた筈と覺えますが桐の葉若くは柘榴根皮の煎汁で赤くなつた處を御洗ひなさい。(2)いけません、第一過酸化水素水を御用ひになる理由は、白色化さんが爲でせう、皮膚を白くする料としての過酸化水素水は四プロ以上の強度を有して居らねばなりません其を化粧水と等分になされば、其丈プロセントが弱くなりますから、白色劑として何の役にも立たぬことになります。のみならず其化粧水の種類によりますと、化學的分解を起しまして却つて皮膚に害を及ぼすとがあるからです。

問 冬季毎晩入浴して居ります時は殆ど何の匂もしませんが、夏季は酷く腋臭を發するので、或人は明礬で洗へば一時除臭するとが出來ると申しますが、然るべき方法を(草知の藤枝)

答 明礬は古來から用ひられて居る一方で、一時除臭することも出來ます。根本的に直しますにはX光線の應用若くは無痛切開法によらねばなりませんが、過酸化水素を塗布するか、ヴエストヅールを三四日の間毎日一回宛御つけになれば大抵五週間位は直つて居ります。

問 (一)毛髮を黑く致しますには、椿油と胡麻油と何れがよいでせうか。(二)白粉を塗けますと顏がつれて困りますが、何か簡單に白粉の浮ない樣に化粧の出來る法を。尤も私はアレ性で赤黑い性ですが。(三)素人にも出來て痕のつかない樣にホクロを取ます法を(山梨一少女)

答 (一)椿油がよいでせう。(二)化粧下クリームを薄く溶いて御つけになつた上に粉おしろいを御打ちなさい。(三)發煙硝酸を藁の先につけ、それをホクロの上におつけなさい尤もそのあとは一寸孔になりますが、日數經つにつれて直ります。

問 目ボとか申すものが澤山出來まして困りますが如何したらば直りませうか。又顏は赤黑いのですが。冬瓜仁劑か丹砂劑といふのを服用致したら宜しいでせうか。宜しうございましたら其販賣所も御知らせ願ひます(京都、しづ)

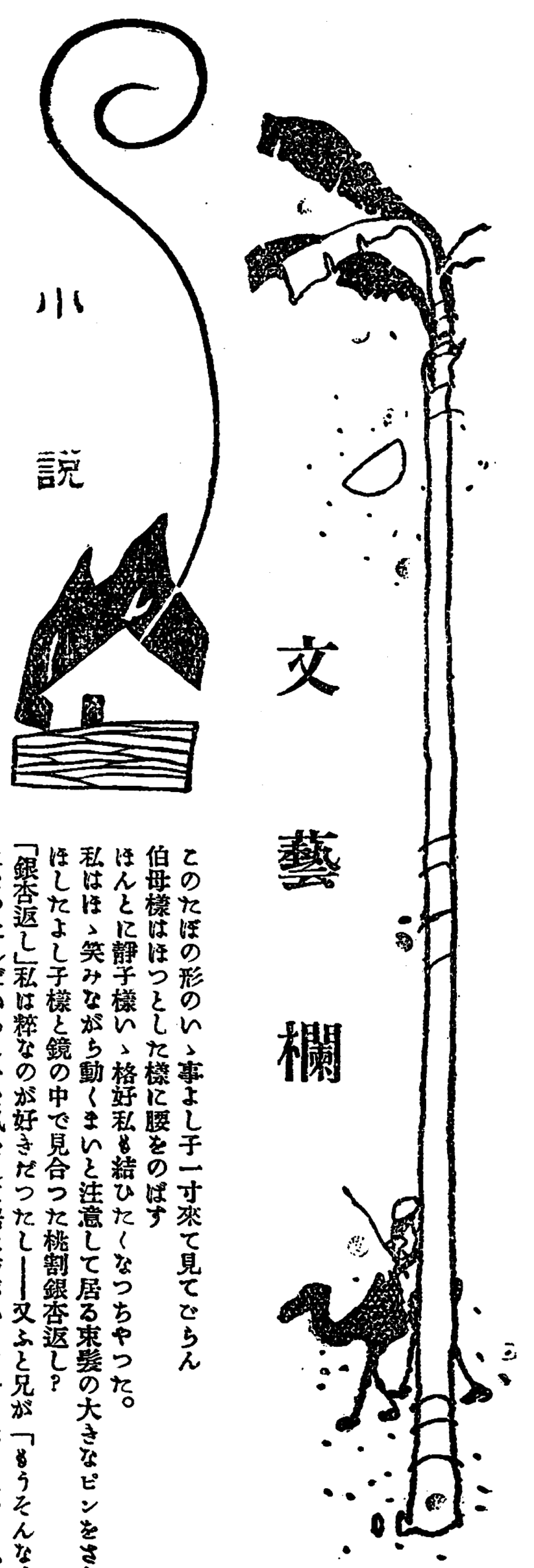
答 目ボとは何のことでせうか、今一應解りよい名を仰しやつて下さい。何方でもよいと思ひます。それは御自製なさるべく、販賣品にはなつて居りません。

問 (1)私は製絲工女ですが、湯燒して困りますから、これを防ぐ法を。(2)顏や手のアレを防ぐ法。(3)毛髮を濃く致しますには、(4)ヒヾ、アカギレを防ぎますには。(5)美顏料や香水のよい品を、(信濃、新子)

答 (1)と(2)は毎日二回コールドクリームをよくすり込みなさい。(3)種々の方法もありますが、その一方としてサリチル酸六分、カンタリス丁幾、タンノプロミン各一匁、安息香酸豚脂三十匁を煉合して、氣永に御つけなさつたらよいかと思ひます。(4)文壇社から霜燒止めを求めて御つけなさい。(5)文壇社から御わけして居る化粧水は如何ですか、香水は種類が澤山ありますが代價が安くて品質の精良なのは、キヤロルエッセンスなど其一つかと存じます。

問 (一)ラノリン過酸化水素を用ひました上へ、クリームや白粉をつけましたらいけませんか。(二)粗惡なる煤は眉毛を損ふとのことですが、何がよいでせうか、その製法を(三)太くて短かい眉は如何こしらへたら形よく見えませうか(紀伊、愛讀女)

答 (一)それをおつけになつて約半時間程したら、一應拭き取つた上に御つけになれば差支ありません。(二)梧桐の枝を燒きその油煙を御つかひなさい。(三)扮飾術の原則として、眉は眉のために、形ち作るべきものでなく、顏全體の美にふさはしく、又はその美を添へるために眉を作るもので、御顏の格好がわかりませんでは一寸御答に困ります。



文藝欄

小説

くろ髪

東京　静香

ほんとに静ちやんの髪のいゝこと、

多い髪を持ちにくさうにして御伯母様は私の髪をしきり梳いて居る、

「こんな髪が――」鏡の中で自分の顔が笑つて居るのを見てまた顔をくづした。

障子に日が暖くさして心地がよい日私の心も晴ればれとして微笑みがちだ。

油氣がなくつて實際結び憎いでせう、

えゝ少し油氣がないけれどもどんな格好にでも結ばれさうだこの髪ならば伯母様はしきりに毛並をそろへて居る。

兩鬢の無くなる様に取つた前髪も氣になつたけれ共もう少し出してほしいと思つたけれ共默して居た。

このたぼの形のいゝ事よし子一寸來て見てごらん

伯母様はほつとした様に腰をのばす

ほんとに静子様いゝ格好私も結ひたくなつちやつた。

私はほゝ笑みながら動くまいと注意して居る束髪の大きなピンをさしなほしたよし子様と鏡の中で見合つた桃割銀杏返し？

「銀杏返し」私は粋なのが好きだつたし――又ふと兄が「もうそんな身體になつたんだからじみな風をして居た方がいゝぞ」と云つたのを思出した――から

襟をぬいてもぬいてもつかへ相なたぼを氣にして面はゆい様な心地で火鉢によると

「まあ御綺麗でございますこと」とぼんやり立つて居る女中そんなに宜のだらうか病院で「ほんとにこんなにいゝ髪をして御可哀想だ」と云つた看護婦の事等を思つた。

そしてうるさい髪を切つて終いたいと悲しんだ手術前の事や肥つた看護婦が美しがりながら長く長く編んでくれた湯殿の中――、伯母様に髪を結つてもらうなんて云ふ事は夢にも思つて居なかつた――

なにしろ静ちやんは毛がいゝからねどんなにでも結へる一度上手な髪結様に島田を結はせて見たい。

手を洗つて着た御母様が前髪のあたりを見ながら云ふ。

髪結が結ふとあんまり油をつけるから似合ないの。

と云つたあとであゝ島田！結ひたいけれ共私の心には悲しいやるせない思ひが起つた。

私こんな低い銀杏返しが大好き一生この髪にしやう。

伯母樣はなんと思つたか。

なに御嫁に行けない身體だつて島田が結はれない事はないよ一度結つて御覽。

なぜ御母樣はそんな事を云ふんだらふよし子樣に侮辱され樣なつらひ思ひ

島田は大嫌!

くろ髪故に、と思ひつゝもこの髪がなかつたらけれども髪を結つたとて喜ぶ樣な私ではなかつた、さうだ片輪だものうれしがるなんてつまらない事だ。

ねえいゝでせう御飯をたべて御出なさいましよ、

と云ふ聲を後にほんのりと瓦斯の暗い道に出れば黒塗の杖は脇の下にはさまれて居るふし目して裏路づたいに家の格子を開けた時は丁度夕食

まあほんとにお前に似合ふよ

「そふ」私は氣のない返事をした

兄はうつむいて居る私の髪をつく〲見て

伯母樣が結つたのかその方がお前にいゝいつもおとなし〲さう云ふ樣に結つて居れ束髪なんて結ふな、

默つて食事の終つてから

いつもこふ云ふ樣になにも掛けないで優しく日本髪にばかり結つて居たい御母さん、と私に云つた。

そしてじみにおとなしく日本髪を結つて日蔭に暮すといふ事がなんとなく好まれた一生。ね一生その夜床に入つてまでもその時を思つて居た。

(地 賞)

嫁ぐ女

廣島縣 葵の花

浴場を出たまゝの細帯一つで、火鉢の前にぐたりと折れた樣に座つて、私はしばし何者をも思はないで、瀟洒とした浴後の心持に酔ふて居た。冷たい夜の空氣が赤らんだ頰からやわらかい手の皮膚をなめてゆくと、全身の弛んだ筋肉が、次第々々に引き締められる樣で、私は我れにかへつた。

帯しめ直して裁板の前に座つて針を動かして居ると、おしまいまでじやぶじやぶ湯を浴びてゐたお藤が、ふいと白粉臭い顔を突き出して其向ふに座つた。

私は何んとも云へぬ胸苦るしさを覺えた。

更けてゆく冬の夜の空氣は、黒色に沈滞して髮の毛一つの動揺も見えない程物靜である。裏の小溝の澱りにて𪀚する蛙が、何とも云へぬ哀音を暗から暗へとつたへて滅入つた私の神經は、何所か深い地の底にでも引き込まるゝ樣で苦しい沈默を暫時まもつて居た。

『別れ』と云ふ哀愁のかげが、二人の間に漂ふて、淡い悲しみが胸の肉に喰い入つて居るからだ。

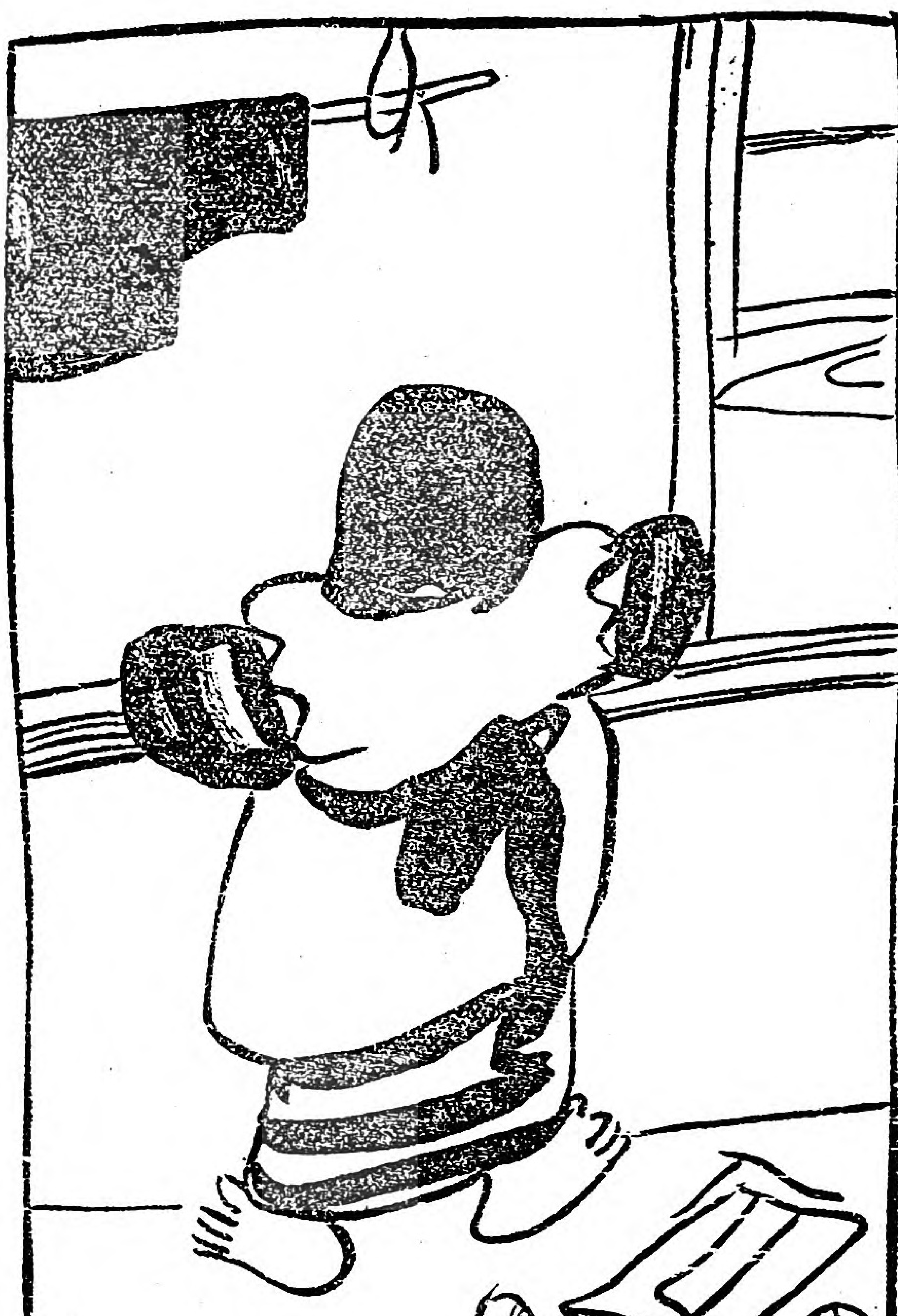
私は此の沈默を破るに適切な言葉を今夜に限つて見出しえない、思ひ疲れた時は手にせる針を傍に投つて、火鉢の側ににじりよつて無意識に火箸の尖もて灰をかきならして居た。ふいと氣が付くとそのまゝグイと火箸をつき立て、「寒いねえ—お前寒くないの?」、と夫程かんじもしないのにわざと仰山に云つて手もて頸をおさへなどしてあたゝめた。恁んな事二三度繰りかへして疲るには餘りに早い時間であつた、私は此の沈默な空氣の中をのがれたいため焦々してゐた、裁縫を止して床にはいつて了へばなんともなくなるのだ。それは私には自由であるけれども、私と云ふものを信頼して針を握つて居るお藤へ對しても、私には去る氣儘な事は出來なかつた。六年と云へばかなり永い月日を友とも妹ともなつて、それは云ひ知れぬ苦を忍ぶ日が中には交つて居たろうけれども、さるけはいは色にも出さず、忠實に、素直に、夫れは夫れは痒い處へ手のとゞく樣につとめて呉れた、恁うした女だもの、今更手ばなすのは惜しい別れるのはいやだけれども——。

木枯吹き荒れた今日の午後、赤毛布を身に纏ふてお藤の胸は略内約せ此の縁談をすべく三里の道も遠しとせず來たのである。

「わたし嫁くのはいや、何日迄も此家に置いて貰ふのだ」、

とのちにはすゝり上げてなくのを「何んと云ふいぢらしい娘であらう—?」と思ひ乍ら利害をといて漸くなつとくさせたのは、母とそこして私なのである。

懐うして差し向ひになると、愛着の念は一層つよくなつて彼我の胸から胸へととびまわつてゐるのである。何日までもいつ迄も何んのわだかまりもない昨日の安けさを續けて行うと云ふ、そんな慾心はさらに更にないが、明日をと限られたえにしの絲をたつには餘りに儚い別ではないか?、だが一方お藤の心裡に思ひ及んで見ると、其處には云ひしれぬ喜悦のかげに奈邊にか形をひそめて居やう。みづし女として人の背後にのみ日かげにのみ動いて居たのが、小いながらも一家の女主人公として浮世に竿さず時機が到來たのであるもの、世の波風を漕ぎゆく重荷は雙の肩負はされてあるけれど、それに伴ふ希望の光りは彼女が前途にあかくあかく輝いて居る筈なのだ。些々たる自己の感情にとらはれて彼女まで氣まづい思をさせてはならぬ、幸多き前途を祝福してやらねばならぬ、私は懐う思つてじつと見ずへた彼女の肉付豊かなる頬にはよろこびをたゞへた色も見えなければ、愁をしのぶかげも見えない、やゝ崩れた銀杏返しを少しかたむけて、一心に針を動かして居たが、何思つてかふいと上げた面とぱつたり視線が合つて二人はなにがなしに。ニツコリした（人賞）



（天賞）　お窓　芝　後藤女郎花

四時過ぎ

深　矢澤　榮子

電車を下りた靜江は左側をおとなしく歩いて、自分の家の近くへ來てから小走りにくゞり戸へよつたそして勢よく開けてかけ込む樣に中へ入つた。

格子戸を開ればチリンと輕く小鈴が鳴る千本格子の間から外を見ると、勝手口に八百屋の小僧が立つて下女のお福と面白さうに話しをして居る、つい立の横を通つて倉のわきを過ぎながら一寸御店をのぞくといつも御帳場に居る父さんの姿が見えないで、番頭の吉どんが例のむつかしい顔しながら帳合をして居る、其のそばに新どんが何か書て居る、小僧が火鉢にあたりながらゴヤ〳〵とさゞめいて居る、客が一人來て居るけ

れども品物は少しばかりしか出て居ない。

茶の間へ一寸顔を入れると乳母やがたびをついて居る、いつでも近眼の樣に鼻の先まで手をやつて居るのが何だかおかしい樣に思はれる。ヴアヰオリンを床の間の上に置て、くづれる樣に長火鉢の前に直つた、そして乳母やの笑顔を嬉しくうけながら別に話しも無く其のまゝ火ばしをいじつて居た、灰をつゝいたり火をかきまはしたり同じ事をくり返しくり返し。

ふと玄關先に誰か人のおとづれる聲がした、とつゞひてお稲の聲がした

乳母や誰か御客樣の樣だね、と靜江は聞いた。

一寸乳母やは耳を立てゝ居たが、さうで御座いますねとだけで默つて居る、客が來たか來ないかよくわからない樣な顔をして居る。

襖子から出てきた母はいそ／＼として居る。

乳母やコーヒーを入れておくれよ、今日は珍しい人が見えてね。

誰なの本郷——の兄樣？

さう／＼武ですよ、あのそれ四角な帽子をかむつてねホ……入つたらすぐ靜江持つて來ておくれよ言ひのこして急で出て行つた母の後姿を見送つて居た靜江は、

乳母や、コーヒーはまだなの、早くおしよ。

靜江の心の奥が急に騒しくなつてきて、おち付くつもりでも何だかそは／＼してしまふ。

さあお孃樣冷たいうちに。

乳母に出された蒔繪のお盆を手にして、靜かに茶の間を出た、離座敷から若い武樣の笑ひ聲が洩れて來て、靜江の胸は高く血の波がゆらぐ、母が珍らしい人と言へばもう武樣にきまつて居る、ほんとうに月曜毎に來て下さればいゝのにと、せはしく思ひながら離の樣にひざまづいた、障子を開けると母が直ぐ振返つてニコ／＼してゐる、いつでも斯んな時には常に靜江の心はおびへて居る。

行儀よく座つて頭を下げると、

靜江さんですか、何だか大變に大きくなりましたね、見る毎に變る樣に思はれるね、伯母さん。

えゝほんとに此頃は大きくなりましたよだつてもう十八ですよ………

靜江は子供の樣に思はれて口惜しくてたまらない、けれども從兄の武と未だ親しく口をきいた事がないので、今もだまつて何とでも許されて居る母は思出した樣に、

あの櫻菓子が有るでせう、あれを持つて來ておくれな、ハイ……と小さな返事をしてすべる樣に座敷を出て茶の間へ入つてからホツトした樣に思つた、そして何氣なく時計を見ると四時四十分過て居た。

黑い印象

みどり女

思ひに疲れた頭を兩手に抑へて夢の樣な、現の樣な境に茫然として居た私は、新聞やの勇ましい鈴の音に驚かされてふつと目を開いた、恰ど闇い地の中から出でゝ太陽に照りつけられた樣に、強い電氣の光りが目を射て頭腦分が分明してくると同時に、今までどこかに潜んで居た哀愁が寸時も許さず壓迫してくる、實に堪えがたい、苦しい、闇の中から逃れる樣に私は家を出た、そしてわき目もふらず山吹町の通りの頻繁な人の中へ紛れ込んだ、右側には大道店がずらりと居並んで頻りに客を呼んで居る、生存の苦しみを訴へる樣な聲や、急しさうな靴の音や、人のさゞめきなど大きな音樂となつて絶間なく何者から何者へ傳はり流れる中を、私は自分とは何等の關係もない別世界の哀音の樣に感じながら、周圍の人に急かれつゝいつしか江戸川の邊へ來た。

ぼんやりした電氣の光りが川に映つて幾條も水に碎けて流れてゐる。時々電車の摩擦する青い光りが稲妻の如く水底に閃く、それも知らず顔に急かず息まず粛々と流るゝ水は、己が運命を悟りたるものゝ如く、斯くて幾萬年の後までも、時と共に進み流るゝ永遠を思ふのである、それと共に人の生死は幾度繰返さるゝのであらう、

人生のはかなさがしみ／＼感じられる、

冷たい川風と共に芳香我頬を掠めて行く、川の兩側に咲き亂れた櫻がほの白く見えるのであつた、懷かしき此櫻よ過古の執着を深からしむる此

香よ思出の糸に引かるゝ足はそゞろ早きを覺えた、向岸には櫻花の本に燈籠を立てられてそれに俳句が書いてあるなど座ろ風流人の心を引くのであつたがゴー〱たる電車の響は是等の美を打こはしてしまふ、私は此花を後にして八幡神社の境内へ上つた、此處にて花は今を盛りと咲誇つて、さながら花蓋の屋根をなして居る、電光の遠い櫻樹に身をよすれば芳香忽ち我身を包んでしまふ。かゝる美しい自然の賜ものも荒涼たる私の心には、何等の感興も起らない、唯斯うした靜寂な妄想を亂す人聲のない處に、私は自由に消えてはかなき夢を追ひ、敗殘の憐れなを現在の我に千行の涙を灑ぎたいのです。

十六の暮母に別れてより、あらゆる世の荒波に飜弄され眞の愛に飢えた私が戀てふ嬉しき愛の香に醉ふたのは去年の春此神前此花の下であつた、あゝそれも今は夢永久に變らぬ堅き心を神に誓つたのは僞であつたのだ。

私の捧ぐる全身の愛を右手に握つた彼人は、猶左手に若い女の手を握つて居た、惡むべき彼は惡魔である、恨むべき彼は色魔であると私は心に叫んでみる、けれど純白な、新しい綿の樣な處女の胸に傷けられた黒い印象は、雨に洗はれても嵐に打たれても消ゆる事なく益々眞に喰入つて私しの心を苦しめるのである、實に辛らひ、やるせない此哀愁を忍びつゝ猶生存しなければならないのでせうか、くれ行く野を心もとなげにとぼ〱辿る人を思ふて見た、鐵道線路に首を切斷されて居た人の事を思ふて見た、けれども漂浪はあまりにみじめにあはれであつた死、其れはあまりにあさましい。



（地賞）春の夜　下谷　山田いま子

下を行く人の下駄の轟きが聞ゆる一瞬時、彼人が來る樣に思はれて私の胸はとどろいた、あゝ我ながらふがひなき弱き心よ、彼人の僞なるを知つて、憤然父の前に斷念する事を誓つた彼時の誇に對して私の顏は熱つた。

佐保姫の袖のゆらきの樣な微かな風が、かつて床しい物として記憶に殘つて居る樣な懷かしい香を通はする、促へんとすれば忽ち消えてしまふ、唯白き櫻は己が美を誇るが如く悶ゆる我をあげる如くかすかにゆれて居る。

あゝ、私はいつまでも人無き此神前に彼人を思ふて泣きたい、けれどもつらひ、忘れるのも惜しい、然し忘れられるゝものなれば、限りなく湧き出づる涙にて胸にきざまれた黒い印象を悉く洗び去らるゝ事を神に祈つたのである

▲本號の選評　▲靜香さんの『くろ髮』は細かく書いてあるのが好い、けれども斷片的でまとまつて居ないきれ〲の文章と云ふ外はない▲葵の花さんの『嫁ぐ女』は如何にも小說らしいが、少しくど〱してゐる、もつと氣の利いた處が欲しい▲矢澤榮子さんの『四時過』は前半と後半とが別々になつてゐるやうで、小說としては中心も何もない、書きぶりはすら〱として癖がない▲みどり女の『黒い印象』は小說といふよりも一種の感想文である、それもあまり巧くはない、徒らにむづかしい文字を並べたに止まる小說壇の著手は今少し振はなければいかぬ、此頃は新しい人が出て來たやうに思ふが大いに振つてほしい。



詩

春の夜の夢

神田　Y子

桃色に染えし夕の雲…
小さい蟲の羽も紅に輝き
夕日は赤く燃えつゝ――
――地平線より落ちぬ、

夜の青い色は
靜かに河口へ寄せる潮の様に忍び來り
足音もなく憶病に
土藏の白い壁に……
その窓に……
カーテンに……
ソツトしのびよりなつかしく――
溶ける様に柔かく相抱きぬ。

青い色
その中にポツト浮いてる花園の夢よ。
白い花が少女の如く――
身體をふるはして泣いじやくる
少年の瞳の様な星が、
美しい藍色の空からジツト
またゝきもしないで――
見つめてゐる。

かくして春の夜は
靜心なき夢を守りて
靜かに靜かに更けて行く（地賞）

（評）官能を歌つた詩は、兎角亂れがちになるものだが、此詩は秩序が立つてゐる。

島よ！浪よ！

豐後　散り殘る花

（一）

島よ！
あの廣い大洋の中に
淺黄の大空と
みどりの深い潮の間から
湧きいでた雲の様に
ぽつんとうかぶなつかしの小島よ。

（二）

美しい少女がダンスをする様に
ドードードヽーと
よせては返し返してはよせる、
女浪男浪のひゞきよ
どんな心を
どんな思を
數知れぬ渚の小石にささやいてゐる？

（三）

おゝなつかしい沖の島よ
此の寂しい私をたつたひとり
お前の國に住はせてくれないか
なつかしい潮のさゝやきよ
此のつめたい私の胸の 血汐を洗ひ去つてはくれないか。

（四）

島よ！
私は塵深い浮世からはなれて
お前の國に只ひとり
月をあふぎながら
やさしい浪のひゞきをきゝながら
眞砂の數をかぞへつゝ
靜にしづかにくらしたい――、
あゝなつかしい島よ、潮のさゝやきよ。（人賞）

（評）詩の作り方は心得てゐるが、詩想は未だ充分に出來てゐない。

夕闇に包まれて

廣島　中村靜子

花もまだない山の裾から
はらばひながら闇が迫る――
ハタと閉ぢたページの間から
なぐさめ顔にさしのぞく、栞の紅總――
假り初めに執上げたりしペンの
碧きインクの中指に染める悲しさ――
何物をか？
求める心につひ動かされて、
立ち出し南の椽――たゞ朝夕に拭きこまれて

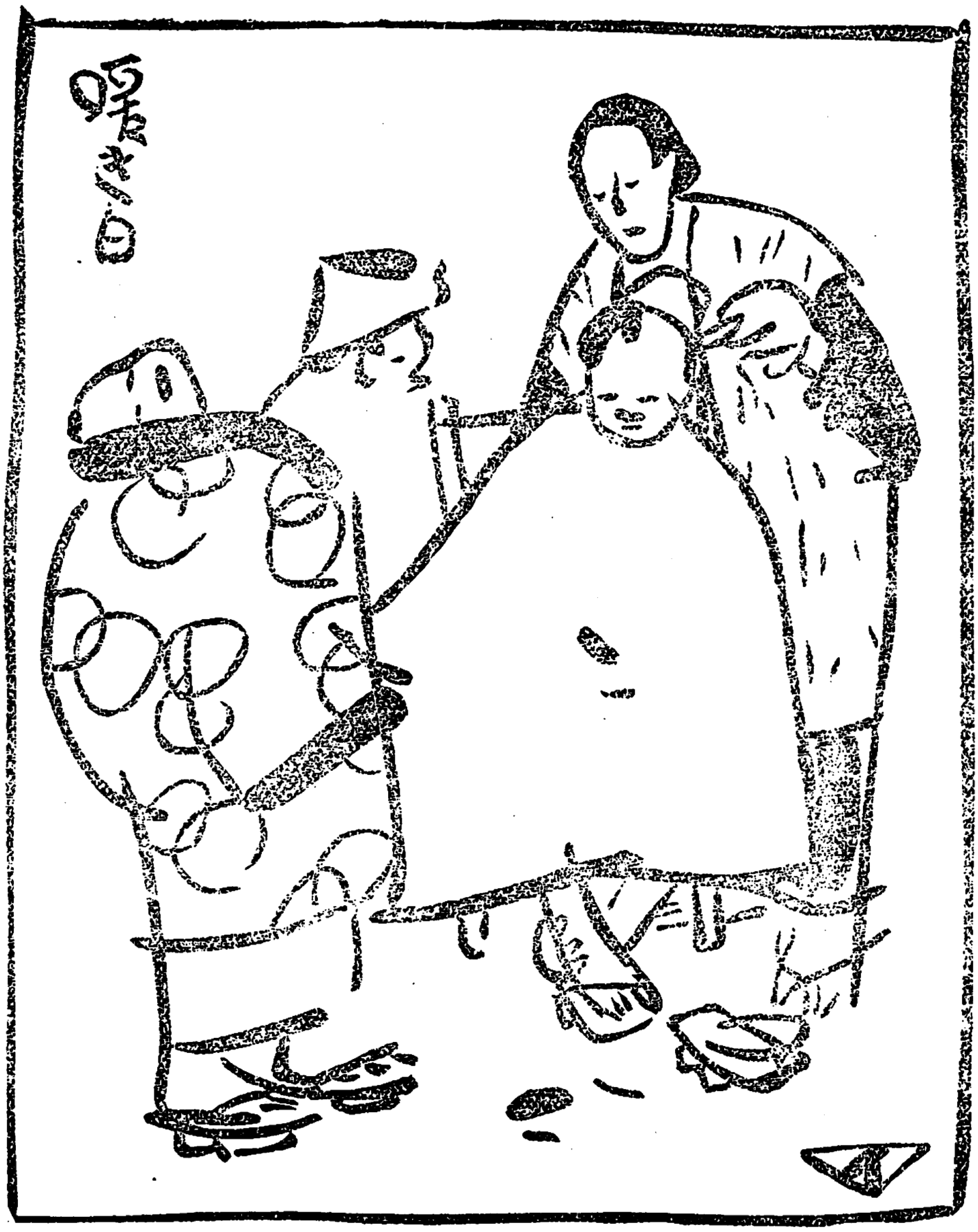
滑らかなるのみ——
讀むべき人の消息
もなければ、
にちり寄る夕闇に
怨みはなけれど—
さびしき哉、人を
失ひて……

そろ〳〵と芽をふ
きかけし青柳の、
ものに縫るゝこの
夕べ、
少女椿の二三輪、
かそろ〳〵なりつゝ、
落ちも得せず、
淺間しき執着の姿
——、
ぢり〳〵と詰め寄
りし夕やみ、
身につまされて、
全く包みもあへず
たゆたへる、——
悲しき花の命哉!?
悲しき物のいのち
かな!!

戀に亡び、涙に飽
きたる少女が魂、
うつろとなりて肉
は何物にか凭らむ
とす。

かくて猶一時も生むとすらし。

はらばひながら夕やみの



猶一ときも生きむとすらし。

（人賞）　暖き日　岡山縣　池田のぼる

いまぞ總てを包み
たり。
春といふ光りの中
に消えてゆきし、
物の命の幸なりし
かな。
靜かに闇の懐に入
りし、すべての物
の色の美し。

(評)玉と石と混
つたやうな
とは斯んな
作を云ふの
であらう、
大いに洗錬
すれば好い
作が出來さ
うな人だ。

春雨

上毛　雲路

しとしと……と
さゝやくやうな、
泣くやうな
春雨の歌。

窓に凭れて

雨手に青の瓶いだけば
淋し淋し我がいだける如く
其の心の淋しさに
しとしと……と
春雨の歌。

（評）原作に嬰兒の乳吸ふ音と春雨を形容してあつたが少し無理だ。

思ひ

東京　靜香

うつくしくも樂しき
あかき思出よ――
くればくれば
赤き絹絲のもつれては
とけもつれてはとけて
長き物語り
かなしくもなやみ多き
わが想像よ――
思へば思へば
白き絲のあやしくも
うねりくねりて
かなしき白き路

風

かなしくも叫ぶ
風の行來に
血のごとき椿の花の
くるはしき樣
あはれ石垣の上の
黒猫の瞳――

（評）前の作は好い。「風」は氣取りすぎた。

たはぶれ

名なし草

ひる下りの一とき
赤き強きま夏の光りと
痛き迄眼にしむよ
――夜をこめて日をこめて
遣るせなき思ひに
うみ疲れて心はたはぶれて
しろかねの小さき簪に打震ひ
うまゐせる小猫のそひらつと突けば
おびえたるさまにもなくて
欠伸交じりに見返す眼の佗しさ
ひる下りの一とき
かゝる時いとふさはぬ
赤き強きま夏の光りと
痛き迄眼にしむよ
しろがねの小さき簪を射返して

無題

富山市　厨川水脈子

×

……それは金色に輝ける
美しきペンさきなれど
一度インクの中に入れれば、
悲しくも元の光を失ふ。
あはれペン先よ！
處女よ！

×

強き握手に
しびれし指を見れば、
口惜し、はらたゞし。
我が指の取爪は、
清くも美しくも
櫻色に匂ひしものを……。
悲し、淋し。
土色に、死してか冷くなりぬ。

春の寂しみ

高輪　島津春枝

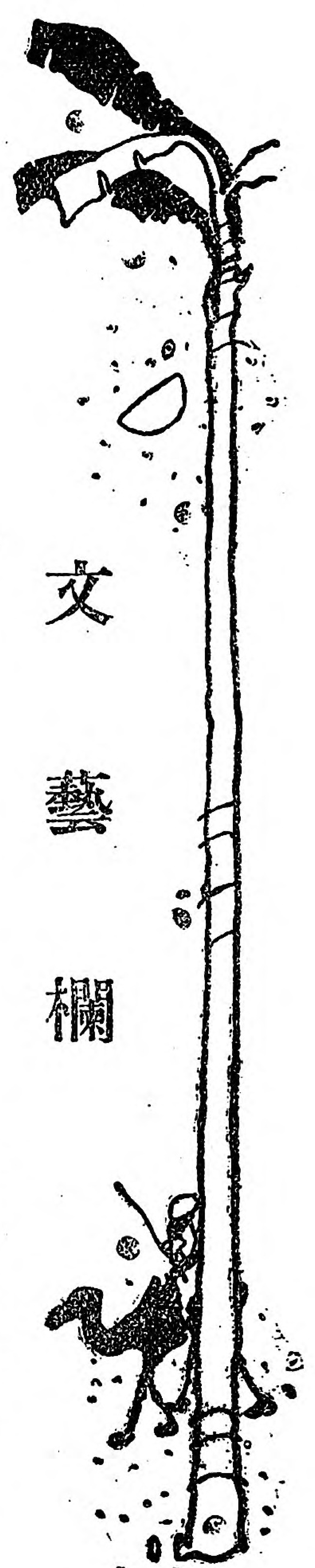
ゆらゆらと立ちのぼるミルクカップの湯氣見てあれば――
柔かいはつ春の聲に耳を澄ましてあれば――
暗み行く心よ！
子猫は親猫に戯るれども、
鉢の竹の根は一つなれども、
投げ入られし一輪ざしの寂しや。

緋桃の花

靜岡　堀内あつ子

あまやかに
ほんのり輕ろい薄絹の
ゆるくまつわる朝霧の
なかにしんなり枝垂木に
緋桃の花が咲きました。

文藝欄



小品文



開かれたる世界

大分　みね子

其まゝ後の壁に倚ると、おつ被ぶせる様に心好い陽の端は柔らかく私の顔を被ふた。

紅絹の布で押へた熱した瞼の下の、痛んだ後の亂れた様な中を、今さした強い色と光りとはぐるぐると馳け廻る。又痛み出しはしないだらうかと、探ぐる様に鋭くなつた神經にかゝへられて、つまらない事をしたと思ひ乍らそれでも先刻の明るさは別物の様に浮んで居る。

十幾日かぶりの今日やつと黑い眼鏡が外づせて、一仕事成し終へた様に誇りかにいつもの通り馴れた道を、輕うなつた目を細つそり明けて、懐しい土の色を見詰め見つゝ家まで歸り着いて今廊下に佇んで居ると、ほつくと木の芽の香を含んだ二月末の暖い陽に、生れた一つの美しい色が偷む様にちらつと瞳の中に、走つたのにそゝられ氣味に顔を揚げると、直ぐ横の縺の手になつた手すりに掛けられた紅友禪の小さい着物が待ち構へた様にぱつと輝いて、斜すかひに陽を受けた棕櫚竹の葉の茂みに泳いだ。そして其紅い輝が家と家との間の猫の額ほどの庭の片蔭に、そこゝに浮いた明るみにからんで、丁度幼い時、三角硝子の筒の中で見たやうな輕い美しさである。

まあ、なんて晴れぐしい事だらう。

ちよつと、官能の一部の閉ざされて色彩の中から遠ざかつて居る間に、何となく色つぽくなつた陽足に驚き乍らもほれぐと、目映しい眼を一つぱいに開けて、上に眞靑に暢びた空を凝つと見入つて居ると、いつとはなしにぼんやりと涙が溢れて眼球がずんぐ窪んでゆく様な氣がしたのにはつと眼を蔽ふた。——

かける様な小さい動搖が止みかゝつて、時々筋を引く様にきりつきりつ痛とむ。其都度待ち受けては眉をひそむる醜い顔が、陽を眞面に受けてるのを想ふて、覺えず苦笑した。（地賞）

（評）　晴れやかな日光をたのしむ心持と眼鏡をとつた嬉しさとが巧みに描かれてゐる

行きつまりて

信濃　世良田優子

自己の哀れな、見すぼらしい、そして意氣地ない心をじと上から眼を閉ぢて見下してゐる程つらい思ひはありません。社會の暗黑面は純な處女の心を底の底のどん底迄落してそして潮笑してゐるのです。世はかうしたものかと悟つた日は既に私の心は行きつまつてゐました。そして私は眞黑などん底からして世を呪ひ周圍を呪つたのです、そして私の悶えはこの所から明るい道が開かるゝ樣にとの心でした、もがいてくく行きつまつた心から、踊げ乍らも主義といふ樣

な心が開かれたのです、開かれたと共にあゝここだ――自己の行くべき道はと見出したもの、それは矢張り寂しい自己の小さな影に泣かなければならない暗黒の道でした、それもこれも走らうと決心した道ならば凡てを犠牲にするに餘裕はなかつたのです、フレンドと頼み背景と頼みし人の手に高原を下りてゆく私はしほらしさに自ら泣けるのです、しかしかうした行きつまりし心から見出した自己は又むざ／＼破碎といふ手によつて動揺されてしまひさうです。社會からつき出された私はこの雪の山を越えて北に逃れませう、そしたらかくれ死ぬ海は私の前に横はるでせう。

月の夜更けに泣くは千鳥とわしばかり――潮の音と千鳥の聲のあけくれの一人は淋しい日計りでせう、そして耐へぬ日が來たならば海は私を人に知らさずに葬つてくれませう。（入賞）

（評）新しく生きて行かうとする人は皆此の煩悩を感じてゐる。

夜道

兵庫　南　眞夕美

ねえいゝでしやう一度遊びにいらつしやい、其人はブル／＼私の方に近づいて來る私は嫌でたまらない、提灯はと見ると蠟燭が短くなつて今にも消えさう心細いつたらない、私は力一ぱい足を速めて歩いた、而し其も駄目だつた、女の身の悲しさ、やゝともすれば遅れ勝な私に近づいて來て、長いマントの裾で私の身體をまこうとする、今はもう嫌ひなのを通りこして、恐ろしくてたまらない、誰か人が通ればいゝと思ふけれども犬つ子一匹通りはしない、其人はますます私の方にすりよつて來る、やゝともすれば肩と肩とがすれあふ、私は恐しくてガタ／＼慄えてゐる、オヤと私は叫んで立ち止つた其人も驚いた様につゝたつた、何です、エヽ宅からむかひに來て居るのです、健さん私は細い力のある聲でかう云ふた、失敬しまず其人はイキナリ私の手をいやと云ふ程握つて直ぐ横町にそれてしまつた、ほつとして、健さんなのと再度いふと、アヽ僕だよ、私は小走りに走りよつた、ピユーツト北風が吹きよせる、オヽ寒い私は思はず健さんに身をよせた、健さんはだく様にして私をマントの中に包みこんだ、綠兒の母の懐に安んずる様な暖さに私は滿足した、オヤどうしたの、慄へてゐるぢやないか、エヽ、今恐しい人につけられちやつたの、私本統にこはかつたわ、吸がはづんで切々にかういつた、暗黑と叫び様やにわに健さんは細い私の兩肩を太い腕でだきしめた、私はいだかれたまゝ、戀しい健さんの胸につゝぷした、暖かい健さんの吸が私の頰にかゝる。

（評）穴がなく書けてゐる。

槇子様といふ方

青山　柏葉

眞黑でうるしの様な長い髪をいつもおさげにして淋しいけれども人を引きつける様なかるい笑みはいつも槇子さんのお口許にたゞよつて居ります、色が青くて小さい方いつも教室の隅の方に小さくなつてだまつて笑つて居らつしやいます、私の組の花いな華かな春の花ではないのです、淋しくてりんとしたけれどもなよ／＼しい何の花にたとへたらばいゝでしやう、秋の野邊に咲く桔梗？いゝえそんな花ではない、深い山の内にたゞ一本咲き殘つた山吹の花に梅の香りとコスモスのなよやかさとを加へた花があつたらばそれは必度槇子さんにふさわしい花なのでしやう、皆んな夢中になつてさわぐ學期試験でもたのしいクラス會でもたゞだまつて笑つていらつしやいます隅の方で私たちが五年になつた時最上級で大ゐばりに肩をふり／＼歩く庭でも槇子さんは下をむいて小さくなつて相變らず隅の方を歩いていらつしやいます作文でも習字でもなんでも出來ない事はない方、作文のお上手な事いつもなだらかなすき通る様なお聲で讀んで下さる時私達の心はいつも春のパラダイスに遊んでゐる様です、いつでしたか秋の午後學校が退けてから私と槇子さんと百合子さんと三人で矢來の町はづれを歩いた事がありましたつけ。ちつとも知らない道を知らない家を尋ね／＼て歩きましたみじかい日あしはもうぢき西の山に入りさうになりました、「槇子さんお家の道がおわかりになりまして？」「私はたゞ夕日が山に入る方に入る方にと歩いて行けば必度家に歸れるでしやうつて四つ辻でお別れしました、つかれた小さなお體を静かにはこんでいらつしやるお後姿を遠く／＼見えなくなる迄四つ門に立つて見て居りました、あの時にあんまり歩いたのでその時から重い病氣におかゝりになりました。ほんとにお體の弱い方、お顔の色

が青くつて、けれども腹を立てた事のない方なのですどんな事でも、そして五年の間を通じて泣いた事のない方、女子文壇を私のクラスにはやらしたのも此の方で、私も槇子さんから詩を隨分をしへていたゞきましたつけ。あゝ云ふ方の御心の内とてもわかりませんわ皆様の暖かい御心にそむいて獨り孤獨に泣くのですものとお云ひになりますお顏を見るとなつかしくつて御胸にすがつて泣きたう御座いますけれどもいつも自分の感情をおさへてばかりいらつしやる方なのです、父樣や母樣今は父樣はなくなられましたがあんな子をもたれた親はどんなにうれしいでしやう、たゞお體がお弱くなかつたら、此の頃少しも女子文壇にお現れにならないので本を手にする時にたへがたき落膽にうたれます終りの夢も半ばで終りましたものおゝ槇子さんを思ふ時必度淋しいけれども人を引つける笑みとなつかしいお聲とを思ひ出します。

（評）　よく其の人があらはれてゐる。

蔦紅葉

長崎ちさ子

やゝ凹字形に築かれた石垣の隙き間から斜に生え出た雑草の中を潜ぐつて、白壁の塀に花模樣の樣に這ひ上がつた一くさりの蔦紅葉があつた、それは、おほらかな日光にけぶつて見える兩側の建物に狹くくぎられた紺碧の空が高く幾日も續いた頃、赤や淡紅の細い葉を、纖細な草色の莖にかゝつた蔦紅葉を白壁に見出した時から、眼を張つて仰ぐに隔てのない私が獨りのもちものとなつた。いつとも知らず偶然に描き與へられた繪である。

石垣の下に生氣強く水を浴びて並べられた青物を、櫻色の大根と、燃ゆる樣な人參の黄の色とが調和よく色彩つた市場の朝を、俯向いて歩く私は、獨りの持物を忘れなかつた、柳の枯葉が夥しく舞ひ落ちる夕近く、埃立つた惣菜を手籠に求むる町人の群に交つて、白壁の夕陽に烈しく刺戟された眼には涙をため乍ら幾度も幾度も振り仰ぐのであつた。

朝々同じ姿を繰り返して物はこぶ田舍人の眼にも、悦しい行人のひとりでも美くしい氣分に見上ぐる餘裕を與へられたであらうか。

崖際に集まつたざる。の何れにも、赤くつややかなのや、黒味を帶びて毒々しう熟しきつた柿が堆く盛られた中に青味を散らした黄の蜜柑が懐かしい頃まで、深藍色の空と白壁に根強く映えてゐた蔦紅葉は物圍ゐ低いトタンの屋根に霜が降りて蜜柑に聊かの凋びが見える頃、血の樣な葉の段々と薄れて


摘草　中澁谷　渡邊安子

一ツ〱に失なはれて行つた。黒く動搖めく朝の人込に見え隱れて十間十五間の先を往く白茶や空色の見覺えある洋傘に追ひつかうとあせる時も喜びの眼をあぐる事は忘れなかつた私が藍色の傘を目當てゝ道連れになる友の誰にも私は何故か白壁を指さなかつた。

　行けと催促されるでもなく、行かねばと自ら勵ますでもなく、忘れずに袴を着くる私が幾年の同じ姿を何のためとも意識せず、根底のない迷想に陷つて、蔦紅葉も忘れて歩るいた幾日かを、川端の洋館の屋上におとなしく翅を疊んだ鳩の樣な鷗の群を見たとき、馴れた途なればよくも無意識に辿り得たと細い黒門を驅け込むのであつた。そしてさま〴〵な姿で集まつて來る友が、赤いしごきを艶にちらつかせ乍ら着物の柄や模樣を箱に納めて、白い事業服の一樣な姿になるのを火鉢に凭れてなつかしう見入つてゐた。

　珍らしい南國の淡雪にへだてられて、白壁を仰がぬ日は幾日、——灰色の石垣には高い足場が造られて、トタンの家に物賣る人を驚かすまで、パラ〱と破片を振り落しながら頽されてゆく白壁に、蔦紅葉の黃黑い莖の形骸は枯柳の樣に寂しう凋びついてゐた。

（評）　此の人の作としては氣乘りがしてゐない。

桃割れ髮

信州　首藤いく子

油浸みた元結を切り落して、サラ〱と櫛の齒を入れはじめた。私はいゝ心地に前の鏡を見た。髮結の白いエプロンが、兩方の肩の上に見える。

『ホントに癖の無い好いお髮ですこと。おいぢりいゝつたらないんですよ。『で姿もこちら樣へは、樂しみにして參るんです』

と盛んにお世辭を並べながら、サツサと解してゐる。

　ふけを落しはじめた。新聞紙を兩手で擴げて受けてゐると、パラ〱と白いのがいくらでも落ちて來る。いゝ心持だ。ジーツと目を閉つてゐると、自然に眠くなつて來さうだ。何しろ、痒い處へ手が屆くのだもの……　……。

『隨分お在りですよ』例の上ずつた調子で言つた。

『一日置きに結ふのにどうしてかうあるんでせうネ。いつも夜になると、痒くて仕方がないの』と皆まで言はせず、待つてゐましたとばかり、

『何か心配事でもなさるんでせう、さもなければ、あんまり御勉強なさるからですよ………』と後はまた例の世間の噂。どこそこの人は勉強が過ぎて腦を惡くし、今は何も出來ずにブラブラしてゐるとか、誰の毛は佳いとか惡いとか、どこやらの家では、ケチでお茶も與れぬとかと口も手も休まずに働かせてゐる。私は鏡に映る自分の顔が、毛を緩めたり引いたりされる度にピク〱と變化するのを細目に見てゐた。

　解かし終つて、いよ〱結びはじめたので、姿勢を直して、元結の輪にしたのを片手に持つた毛筋の先が頭の肌を撫ぜて、あちこちと走る。髱とと前髮を附けてから、兩鬢を附けて、根は出來た。私はじつと鏡を見つめて、工合を見てゐると、油浸て節の高い不格好な手先で、器用に、クルリ〱と二つの輪が出來る。白い丈長を根本に卷いて、周圍の容を直してから『どうぞ』と言つて、私の手へ鬢搔櫛を渡した。私は前髮と鬢へ齒を入れて合せ鏡をして見た。筋目立つてフツクリとした髷、鬢は兩方へふくらんで張出して、髱は耳のうしろから白い首筋へ垂れてズツと末を輪の下へかくしてゐる。白い丈長の結び目はさながら蝶のやう、今にも簪の蝶と共にヒラ〱と縺れ縺れて、舞ひ出しさうだ。

　心持は清々したし、出來はよし、兩手の鏡をあちこちへ動かして、もう我と我が頭に見とれてゐると、傍で、『不出來でございます』と謙遜しながら、紙で手を拭いてゐる髮結ひの顔にも快心の色が見えてゐる。

（評）　優しい寫生文である。

窓によりて

美代子

ヅーンと響くやうな——讀書に疲れた腦を休めようと、音を盜んで、窓の硝子戸を開けた。ひた〱と、くつつくやうな小さな波動の、うすら冷たい、夜の微風の、重も苦しい頭を——さうして熱した頰を、掠めて、部屋に流れ込んだおくれ毛の二三本、頰にはら〱と打ち顫ふ。かうした時は、過ぎにし追憶の絲の、其れからそれへと、たぐるのであつた。小さい毛穴から泌み込む、冷たい空氣に、茫然とした腦は、刺戟されて、丁度、夢から醒めたやう——同時に

たるんだ筋肉も、緊然として、思はず秘密をかくすやうに、兩の袖をかきあはせた。何處からともなく、芳烈な梅が香の陰険な暗に、漂ふ。仰げば、際限しなき大氣の向ふに、青玉紅玉羅列して、目の届く限り、星のまたゝき下界に悶ゆる人の憐みを慰めてゐるやうな、微笑である、あゝ影うすき、我が生の姿は、後から電燈の光に追ひまくられて、細長く地上にしいてゐる。

譫言のやうな「ぼう」が發電所の方から、暗を傳はつて、鎭守の杜の寂莫を破つた。煙筒から、吐き出された龍蛇の黒煙、意味ありさうに、あの屋根の上に、渦まくつてゐる。けれど、何時とはなしに、夢のやうに消え。後から、後からと、吐き出される黒煙は、タイムのやうに、自分の胸をもくすぶるのである。前なる鎭守の杜は、夜氣に包まれて、暗を縫ふ街燈は、消えなんとして、又瞬く、灯は冷たい、瞳をなげかけて。自分の胸を讀むやうである。茶枯れた、寒さうな、つじうら賣の聲が横町に消えた。吹く風に送らるゝ、梅が香の苦なつかしう涓ぐまれて。誰に贈るのだらう。自分の胸に釘打ちて、去りにし人々であろうか?。

（評）新しく書かうとして努力してゐる處は見える。



黒いりボン　青山　加藤喜久子

病院にて

小樽　小川英子

私は緩い階段をのぼつて仄暗い廊下傳ひに時ちやんの病室の前に立つてゐた。漸く氣を沈めて、『御免なさい……』と、思ひきつて扉をひらくと、叔母さんと病人の顔が一緒に私の面に溌れてゐた。

『喜代さんよく被在したわねえ、さあ此方へ什うか……』侘しく取散かつた毛布を繕ひ乍ら時ちやんはじつと私を見入つてゐる。

『時ちやんも此頃は尠少は癒くなつてね……』

叔母さんは盥で洗つた手をタオルで揉み乍ら、優しく斯う言ふた。

『それは可かつたねえ、早く癒つてね歸らない

とお爺さんが心配して被在るからね……』叔母さんは、

『眞とうに……』と、輕く慫う言ふて私の顔を覗いた。

幾許か上氣した時ちやんの瞳は霑を含んでゐた。緑艶な毛髮は赤いリボンで括られて、フワリと臥臺の上を這つてゐる。何か耻羞むやうに髮を纖手で拵りに弄つてゐる容子が、寔に可愛らしく見える。

『時ちやん此の人識つてゐるの……』叔母さんが賺すやうに言ふたが、耻羞むやうに睨つと瞼を伏せてゐた。

夕映の紅い光りが芭蕉の葉に燃えて、白堊を綺麗に色彩つてゐるのが窓越に映る。

白い上衣を纏つた看護婦は、狩り顔にあわただしく馳せてゐるのが疎らな樹隱れに映つてゐるのを睨つと眺めてゐると、『死の方へ』若い小女の死を想ふて、熱い泪が一パイに瞳を蔽ふてくる――。

慫した憂愁な、人生の執着――斯う思ふと私の軀が傷ましくなる。

庭の子羊が三疋、あどけない瞳を見はつて、トボ〳〵と柵の方へ消え行くのが悲しげに瞳の底に流れ込む。痛ましい葉擦れの音が、幽かに白堊のあたりに消えてゆく……。

うら若い女の笑ひ聲が、玻璃窓にひゞく、何となく艶しく、アイロニカルな強い響が私の頭腦を嚇かして可怖いやうな、暗黑の裡に漂ふてゐる――悲慘な人生――かなしい對照を窃かに想ふて睨つと眼を瞑つて泣いてゐた。

（評）　病院の一室にくりかへされる悲哀。

月の一日

山梨縣　八代きみよ

水蒸氣の多いこの頃の空は、今日もどんよりと曇つて心地が惡い。時々青葉を生溫い風がさつと吹く。「さうだ追ふ必要はない、逃げるものを追ふなんて馬鹿らしい。勝手にするがよい」と、空を見上げながら獨言する絹子。

二ケ月前にきたまゝ今になつても、何の消息も無い。やつぱり忙がしいのか知ら？いくら忙がしいたつて、ハガキ位よこしてもよい。忘れてしまつたのだ。轉宿したといふ事だけは聞いたが、其の知らせもない　それをきく必要もないかも知れんけれ共……だつてあんまりだと時候の加減もあるが、絹子は毎日〳〵いら〳〵してゐる。

「五月中にはきつと出版する筈、そしたら一部送るから讀むがよい」との便り。またいつもの氣休めと思つたが、それでもと心待ちに、待つてゐたが、もう二十九日。あゝやつぱりうそだつた欺かれたとの感が犇々と迫る。

今はもう何でもハイ〳〵と、眞面目にきく程單純でもない。自分がこんなことをいつたつて、何の印象も殘らないのだ。また自分もいふ權利もないかも知れぬ。馬鹿らしい。と心の奥でいつも叫ぶ。私だつて人間だ、逃げるものは追ふ必要は無い。と平然としてゐるつもり。だけれ共……けれ共……。

絹子には自分の心が分らぬ。雨の日などは殊に物足らぬ氣がする。

（評）　追ふ必要はないと思ふ事の出來る丈女は覺めて來たのである。

もの言へぬ人に

ふみ子

あゝ、妾は一口あなたに、何かゞ言つて見たい。妾の現に今思つてゐる、くさ〴〵の情緒をみんなまとめて、たつた一言にして、そして、あなたの胸のどん底に、いかりが海水の中に沈む樣に、刻一刻と深い印象を留めさせたい。それが出來たら妾は死んでもかまはないにと思ふ。

併し、たくさんの狼の樣な男の人の瞳や、小猫の樣な女の人の瞳が、妾共二人の四つの瞳をきびしく、とり卷いて居るから、瞳の交換だつて、自由には出來ないに、どんなに、深刻な言葉を思ひついて居たつて、到底それを聲に現はして、妾の口から、あなたの耳へ、お傳へすることは出來ない。思ふと、悲觀もされますわ。あゝ、此の、もの言はれぬ二人の斯うした間は之れから未來永劫、持續して行くのだ二人とも冷土と化すまでは、斯うした苦しい、かなしい、やるせない境から脫することは出來ないのだ。

思ふと、もうつまらない心地がする。人の世の、うるさゝが無性に呪はれる。あゝ、青々とした限りない芝生の中に端坐して、コバルトの大空を仰ぎつゝ妾の口から、あなたの熱い耳へあなたの熱い口から妾の耳へと、自由に、生れてから記憶して居る、言葉のみんなを語つて見たい。

北の海の海岸を歩いた時だつた。

渚に寄る波の音の、物やはらかい靜かな音の

外、何等の妨げのない日、妨げのない場所で妾共は語つたことがあつた。あなたの低い太いそして、強い聲は、まだ妾の耳の幾部に殘つて居る。あゝ、今現在、あなたは南の窓、妾は北の窓にあることが三四時間も、つゞいて居る。

春光のきざしそめた彌生の始めの太陽が、あなたの凭つて居らつしやる南の窓から、玻璃窓を透して來る。白いカーテンをずつと引いて、あなたの眉の濃い顔がある、ほんとに、白いカーテンとあなたの顔との、うつりが好いこと、あゝ、日影のさゝない北の窓に居て、南の窓のあなたに、物言へぬ身の果敢いことよ。

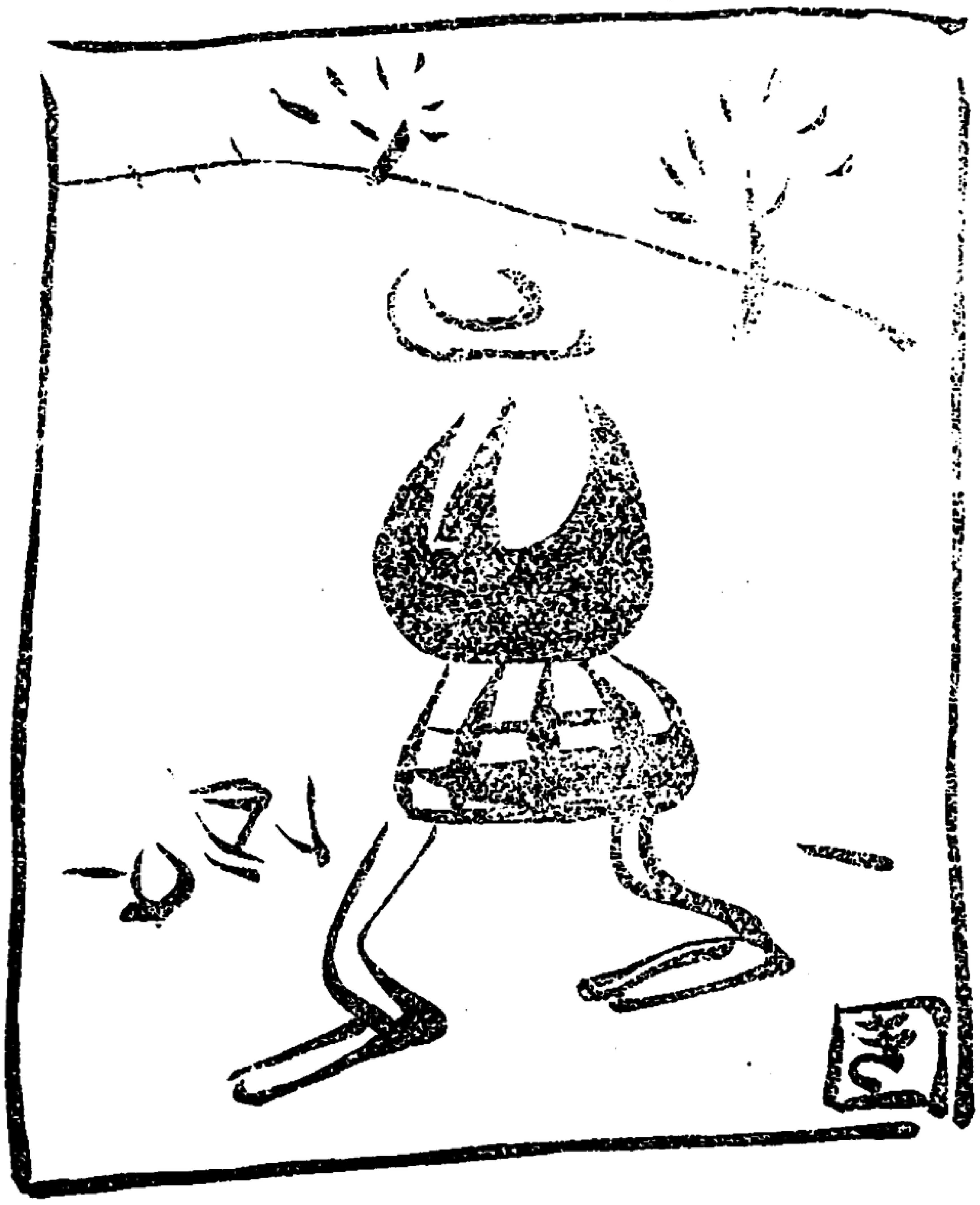
（評）　相見てものゝ言はれぬ悲を訴へる間は情ほど美しいものはない。

若き心

堤　美花子

口惜しい悲しいと思つた時にはきつと私は裏からそつとぬけて浪うちぎはに足を向けますの、鳥の形や龜の樣な大きい小さい眞黑の岩がすきまなくならんで居る所をあつちへよけてこつちへさけて漸く三間もある平たい岩の上に腰かけて胸の上に袖くんだまゝじつと海の面を見るのが何よりも心をなぐさめられますさうして悲しい悲しい自分の經歷を思ひ出して一人泣くのが何となく詩にありさうな又小說の女にでも成つた樣な氣がします都に居た時のかなしかつたけれど又永久にえられない少女のはなやかな時代を思ひ出して涙の中にほゝ笑む事も御座いますそして今の身の味もない枯れた心を思ひ出していつそ此の浪に自分の影をかくしたらどうだらうか少しは美しい歷史の人間と成れるであらうか新聞では花をつけ色をつけて我が身をいろどつてくれるだらうか自殺と云ふ異なつたいんしやうの深く〳〵きざまれて世間の人の頭に我が名のわすられずに居られたいちよろ〳〵とあやしの物の目に映じるのでじつと見れば鐵色の海へび氣味の悪い姿は浪に消えたぞつとして吾れ知らず二三間走りのいたいつも美しく見る夕焼の空岩に當つて時ならぬ花を咲かせて水の景も急に恐ろしく白く建てる高き家へと向つた、何の鳥か草むらでホロ〳〵と淋しくなく音にも胸の高浪はをどるのである小走りに戸口に立つた時はもう胸は靜まりこれが少し前に死を望んだ吾が身かと思ふとそゞろはづかしい高い夕焼の空はいつに變らず美しい。

（評）　ロマンチツクな情景は矢張人の心を惹き付ける。



漂泊　　新潟縣　町田きよ子

散る櫻

麻布　今井千代子

ひら〳〵と櫻の花が散る數限りの無い花片は中空に舞つて戯戯して居る一片地に落ちた又落ちた可愛い小供が赤い絲の附いた針で落た花片を集めて居る魂が有たら恨むでせう花片の中央を針で刺して又紅絲に通した散る花片は紅絲の囚となつて一つ一つ重なつて行く敢果ない者であるけれども又來む幾春の樂みを秘めて居る櫻の幹にひらび付いて居る蟲の脫殼が悲しい秋の哀を催させる哀れな者は秋蟲の樣だ然し此秋蟲が如何なに人を慰めるか知れぬ人間の弱者は只秋蟲の聲が唯一の慰藉者であゝ花の美。秋蟲の聲、共に人の心をそゝる樣な又勵ます樣な云ひ知れぬ歡樂哀慕の念を感ずる事が出來ない

群星

＊＊

富基角鐙臺　美花子

▲少女界少女世界に熱中して居た頃で御座いました、友達に雜誌をかすにも交換でなければ承知しなかつた。友が姉君の女子文壇をそつと持ち出して、望んで居る妾の雜誌と引替へて喜んで歸つた夕、始めて見る女子文壇の物珍らしく勉强せよとやかましく云ふ祖母をごまかして一心に讀みましたが、詩や散文の意味がわかりません、わからないだけきつとゑらい本だと存じまして、それからは幼稚な少女世界がいやになつて、そつちのけ、女子文壇狂に成りました、

其の頃誌上で筆をお染めあそばして、今尙お見えに成る方は、信濃の優梨子樣、長曾我部菊子樣平塚白百合樣太田喜志子樣等と存じます、そして其の當時の文はおしなべて、しつとりと紫の少女が胸に手をあてゝ考へる樣なのが多う御座いました、此の頃の樣な若い血のみなぎる文壇とは、全く反比例して居つたので御座います、三四年の月日の下に、かうも變るものかと只々恐れ入ります。

昔日の文體を草花にたとへたなら、丁度谷間に咲ける白百合と申し度う御座います、其に相反して只今の形勢は、美しう夕日にはえるダリヤになぞらへたく思ひます、さあ皆さま御ふんれい遊ばせ、古さを捨てゝ新しきにつくが何とやら、大正の女子作家の御うでぶり、明治女の谷間より拜見させて頂きましやう、白百合樣如何なすつて、古き年山吹の花と云ふ短文、うれしう御座いました、喜志樣の二三年の中にかうもお作の新しうお成りあそばしたのは只恐れ入ります。

＊＊

播磨　龜岡薄綠

▲私は昨年の花咲く春の四月から本誌の愛讀者となつた二十歲に滿たぬ少女です。從つて皆樣のお作を拜見したのもごくわづかで批評などゝはおこがましい次第ですが、一寸思つた事を云はせて下さい。

▲昨年中讀んだ皆樣のお作の中で、一番よく頭の中に殘つて居るのは、廣江曉子さんのお作と毒だみさんのお作とです。

▲廣江さんのお作は、大さう懷しみのわく作でしんみりとしたのが大好き、讀んで居る中にいつか物の中へ引き込まれる樣で、其土地お作の中に自分も居るやうな心持ちで讀みます。長く記憶に存して居るのはこんな心持ちで讀むからでせう。廣江さんは現在のハイカラだとか、流行だとか云ふパッとしたのはおきらひぢやないかしらと思ひます。しなやかな京風の、花にたとふれば海棠の雨にぬれたやうな方。

▲毒だみさんは正反對なパッと神經を刺激するやうな事をお書きなさる。けれどもあれは一時神經の高潮した時のお作で、平生はごく冷靜なお方でせう。お作を見ると大さうな感情家らしう見えますけれど、花ならば、ばら、ちよつと見ると刺があつていやですけれど、つみ取つて見れば氣高い匂ひがいつまでも忘れられぬ樣なお作。心から御交際でもすれば大さう友情の厚い方のやうに思はれて仕方がありません。

▲此二方樣失言お許し下さい。そしてますく本誌のためにお振ひ下さいませ、お願ひ申ます。

＊＊

新潟縣　若井紅雨

段々普通の婦人雜誌に近づいて行く本誌の三月號を手にして少々思つた事を云はせて頂きます、小品文は幼ない思ひ出の記が多い樣で以前の樣に二度三度と繰り返して讀む氣にはなれない。小說母と娠、一隅にて、吊し柿等皆古臭い匂ひがした。只玉枝の心持ちがよく現はれてゐると思つた。

詩は夕草さんのが好いわけて三篇が好だ。

食へども其の味を知らずとか詩を解する事は出來ても歌ふ事の出來ない私はあゝ悲しい口惜しい。白鳥さん吉田さんの詩は每月樂しみにしてゐる。

和歌欄には私の心にしつくりと合ふのがなくて淋しい。

こぬ人を待つ間もどかしねしろべば搔きゝしりたき窓の月かな

ほゝゝ、私は笑つてしまつた御免下さいよ俳句欄も何て振はんのでせう第二の千代女や園女たる人はないのでせうか。

春の野邊踏むところ菫花薫る

傘置いて又出なほすや花吹雪

鳶の輪の下に小村の日永かな

などが好だ。然し我越路には何時其麽シーズンが來るのやら、今日も朝からチラ〳〵、三月半と云ふのに上越地方の積雪は九尺以上との事。

文藝欄の衰える反對に化粧欄は益々盛んになつて來た。やがて日本は世界の美人國になるでせう。御氣に障つた方は御小言下さつてもかまひません。

**
*

信濃　龍江新子

▲妾は申すもいともお恥かしき製絲工女ですが皆樣から、蛹式部よと冷評されるのは大に殘念ですよ。製絲工女といへば、無學者の卑しき者と思ひなさるでしやうが、今はさう云ふものばかりでもありませんよ、文藝に趣味を持つて居るものもあるし、婦人雜誌を嗜み、相當の敎育あるものを、目下は敎婦を備ひて養成して居ります、笑ふ者は笑ふがいゝ、妾は大に自覺する處がある。

**
*

ふみ子

▲男はいかにも、男らしいのが、女の目につくにやけたなよ〳〵した顏のすべ〳〵した樣な男は、心ある女から見れば、如何にも男性美にかけた男としか思へない。美男のモデルとして業平男といふが、業平男のよろこばれた時代は遠い昔だと思ふ。

▲男の衣服に氣を用ふ程、つまらなく低く見えることはない。ましてや、お化粧などする男と言へば、聞くさへ嘔吐を催す樣である。

▲女つていふものを、奈落の底に、けなしつける男は、よろしく獨身すべしと妾は言ひたい。

▲斯く迄に、女を嫌ひ、女の缺點を見て居る男は、女をそばに近づけるのは、無論嫌ひな筈であろ。然るに、皆愛妻をもつて、幸福を感じつつ世を送つて居るではないか。

▲ましてや、女の裡面をよくあばく男子の人に多く家にあつて、妻君に頭があがらんのがあるぢやありませんか、妾は言ひたい。凡てとは言はないが、或る一部の女攻擊者は、一種の好奇心に、女のことが言つて見たいのだと思ふ。自分の好むものは、却つて惡口なんかゞ言つて見たい樣なものである。すると、女は何處までも侮辱せられて居る。併し、妾は侮辱せられる女よりも、侮辱する男子の人の心事の淺いのを歎く。何事も、積極主義のもてはやされる世の中ぢやありませんか、惡しき方面は默許して、善き方を示し、女をして理想の域に達せしめんとするのが、眞の男子たる人の本分ぢやありますまいか。

▲新しい女として、此頃諸々方々、やかましい聲が立つて居る。妾は、之れ大いに、同性のために祝す可きことだと思ふ。新しい女の解釋はこゝに論ずるまでもなく、兎に角、斯くも我等女たるものゝ、社會に注目せられる樣になつたのは、それだけ、女なるものゝ地位が、社會に高まつたのぢやあるまいかと思ふ。

**
*

千葉　花の里

▲三月號の本誌群星欄で安藝の靜子樣と仰しやる方が『千葉の中學の○○が九十九里海岸の浪にさらわれたのは去年の初秋！』云々と書かれてゐましたが、妾はまあよく御存じなと不思議でなりません、私の弟もその××會の一員ふ會員三十名位御座います樣です毎月厖大な筆記雜誌を廻覽して却々盛んの樣で御座います。

私もこれから文壇にベストを盡したい心算誌友の諸姉樣御仲間入りを願はしう存じます。

新刊紹介

○虚子小品　高濱虚子著

「死絶えた家」「子供等に」以下十篇の小品文を集めたもので、虚子氏獨特の寫生文式の面白い文集である、刺戟の多い文學物に飽いた一般の讀書界に歡迎されるであらう（定價金四十錢、京橋區實業の日本社出版）

○性慾論講話　澤田順次郎著

從來澤山出て居る性慾に關する著書の中で最もまとまりのついたもので、性別學に造詣の深い氏の著述だから、殊に其邊の興味が深い、性慾に關したる一般の智識を得ようとするには近來此書の外にはあるまい、說明も出來る丈け通俗にしてあるから、深い豫備智識を持つてゐない人にも能く分る、函入美本（定價金一圓五十錢神田駿河臺文明堂出版）

○人の面影　植松美佐雄著

○勿忘草　同人著

○野の花　齋藤笹舟著

右三書とも少女家庭小說であゐ、從來十數種出版されてゐるから此種の小說には讀者のお馴染も深からう、右發行されたことを紹介して置く（三書とも定價金四十錢、本郷駒込本郷書院出版）

和歌

○（天賞）

片岡の若葉青葉となりしより海の音さへ遠くなりにけり　茨城縣　小林りつ

（地賞）

夕暮の木立にもたれ遠野より湧き來る霧を見てある淋しさ　但馬　井上久子

○（人賞）

乳房おさへ獨りぞね殘るこゝろよき此ぬくもりの春のあけがた　足利　飯塚米子

○

春の夕御堂三十三間の暮れゆく影や月のぼる時　名古屋　ゆふづき

○

野にたてばわが悲みは風となり草に木の葉にすがりては泣く　小石川　小野こと子

○

杉がきに桃さく乳母の里とへばいくとせぶりと涙こぼしぬ　名古屋　高橋かき子

○

煙草屋の娘が日傘廻しつゝをどるが如き一群の桃　長崎市　淡野幽香子

○

ほの匂ふ櫻林の中に立ち潮の音きく三月のひる　赤阪　小川あき

○

小鼓のしらべゆかしき春の夜を小窓によれる美しき人　濱千鳥

○

あひみては胸のふるえに言ひえずて別れて後に只泣かれぬる　小石川　北畠きく

○

月ほそうそゞろに人の戀しくて指のリングにそと口づけぬ　高橋　桃子

○

空青き四月のまひるフリジアの花は默して黄なる息吐く　小石川　佐藤欽子

○

病める子の枕べにさく紫の花にそまぎて朝の風ふく　本所　佐藤千代子

○

遠に居る人の戀しさ戀ふる身の心にいたし夕ふれる雨　熊本　本島とよみ

○

われのみの君と思へば逢はぬ日はいと安からぬ心地こそすれ　横濱　津由香

○

用なしと取り出して燒く文がらのゆらくと立つほのほ悲しも　信州　首藤いく子

○

猿澤の池のほとりに小鹿きて春は柳の新芽をぞ食む　富山市　厨川水脈子

○

すべもなく紙白粉にまぎらせどすねし心のものたらぬかな　兵庫縣　松並ひさ

○

ものとへばたゞうなづきてほゝ笑める君の瞳のなつかしきかな　深川　矢澤榮子

○

くれなゐの椿咲くなる垣根より美しき人を見る見ると寄る　伯耆國　田村美子

○

眼をとぢてもろ手をくみて思ふこと氣まぐれに似て悲しかりけり　若松仙子

○

燈籠に灯ともすころとなりぬればとげざる謎を見出さんとする　姬路　九十子

○

紅か白かみどりかこの心色は知らねど悲しみてあり　姬路　春紅

○

一さいを忘れんとして戸によればうらひすなきて又物思ふ　石川縣　明星

○

かなしくも醜く生れあさましく片輪となりてなほも生くるか　しづ香

○

さまぐのいろどりに富む日の光り我立つまへをひたばしりゆく　廣島縣　葵の花

君去りし頃のさびしさもの音の絶えたる空にひとり悲しむ　廣島縣　大塚民子

○　　　　下谷　青木扇花
我が机ほこりの浮きてゆび跡のほのかに見ゆるが胸に淋しき

○　　　　悠々子
春なれや溫き光の杉の葉や軒の下邊に羽蟲とび交ふ

○　豐後　散殘る花
野に山に春はきつれど限りなき淋しき胸を抱きなくわれ

○　加賀　村田いと子
消え殘る白雪わけてなつかしきにほひかぎつゝ蕗の薹つむ

○　茨城　田村はつ子
しろがねの春雨そゝぐ庭の面に白き腹見せつばめ飛び交ふ

○　信濃　八重樫美草
此のまゝに果てなく行かむゆき暮れてたふるゝまでも君と歩まむ

○　神戸　綠髮子
その昔かくありなんと雛壇のまへにあこがる大古の夢よ

○　函館　桂木花枝
さふらんの花しらじらと散るあした戀することを知りしわが身よ

○　伊賀　山中靜子
あかしけりおぼろ月夜の花影に三年抱きし我が秘め事を

○　岡山市　石井明子
二羽のはともつれあひつゝみ空行く襟みてありぬ如月の野に

○　府下　磯田紫葉
美はしき望をもちて春の野を歩めば花の咲きてあるかな

○　　　　山口縣　千香子
來し方をふとかへりみて今さらに岨し山路に踏れぬる

○　　　　浮舟女
行き給ふみ姿送る野邊にしてつれなく隔つ春霞かな

○　　　　藤井光澤子
藁ぐろのかげにさびしく顫へ咲くなづなの花を吾とし思ふ



あたゝか　岡山縣　木村水草

○日本橋　小林政子
うら若き自殺女のありと聞く夕べは泣きぬ悲しき心は

○下谷　丘たけ子
この日頃すべてうとはしこの日ごろ君がみ名さへわすれんとする

○山口縣　倉光芙蓉
わかれてはきゆるともなき夕雲のたゞずまゐにも君をしのばる

○上毛　小澤竹子
若草の芽も美くしく出でにける庭に映れる小春日のかげ

○備前　あきつ
息吐けば冷たき窓の硝子すがりて結ぶ露の淋しき

○淺草　小林双葉
ちら〳〵と陽炎もゆる春の野に繪筆拾ひぬ京の旅にて

○上毛　阿久津雲路
エメラルド輝く朝は我が心輝く如し春の嬉しさ

○兵庫縣　松並ひさ
面はゆしネーブルむける我手をば見つむる君とやゝしたしめど

○京都　別所君子
萬感を胸に抱けど君と我言葉は無くて時の過ぎ行く

○播磨　龜岡みつゑ
翼あらば鳥ともならむ地の上の我家はなれて心のまゝに

○秋月すゞ子
わがこゝろひとつのものにあらねどもあけくれ思ひなやむくるしさ

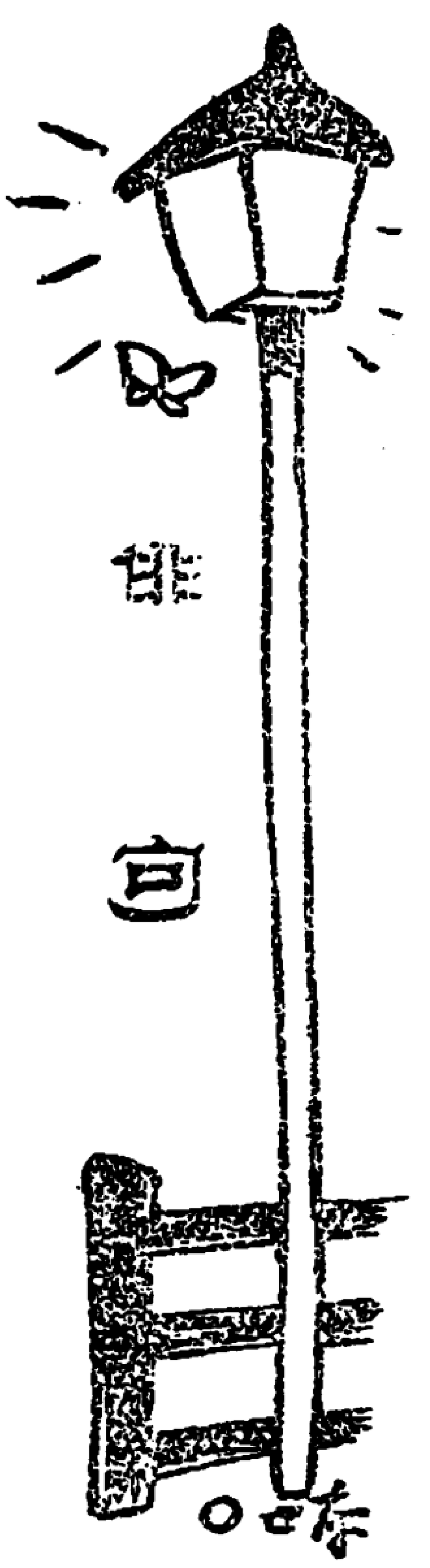
○深川　永井とり子
動きなば火も出づるべしわれやこのころがる山の石の靜けさ

○豐後　孔雀
笛の音に今はなれゆく夕月のなつかしき空ふり仰ぐかな

○對島　波奈子
去年の花又咲き出す春の日に空しき心抱きては泣く

○青山　中川あや
あじきなき此の世に住ふ悲しさにはな見てさへも涙こぼるゝ

○名古屋　波の花
花の野に初旅姿美しき男女を見てありし哉



○（天賞）
春の風玉歩運ばず御苑哉　府下　橋田秋峰

○（地賞）
三千の美女皆惜む落花哉　上毛　阿久津雲路

○（人賞）
春雨や曾我をはなれて磯傳ひ　麴町　牧野はん子

笹啼や能の面彫る翁あり　横濱　津由香
放つ矢に聲あり遠きかすみかな　下谷　丘たけ子
曉の山駕寒し藤の花　大阪市　黒田明子
衣張りし板戸さしけり時鳥　横濱　かね子
時鳥一寸休めしお針の手　澁谷　木村くすみ
松原や一本交るおそ櫻　麻布　小林美佐保
陽炎に瞼の重き晝間かな　大阪府　宮崎唯代
暮れて行く池の畔や白き藤　芝區　てふ子
早咲の梅や月にも羞ひて　小石川　田村よね子
馬の背の雛屆きけり桃の里　大和　すみれ女
山門の古き扉や櫻ちる　伊賀　操子
我一と爭ひ出るやつくづくし　豐後　散殘る花
鐵橋越す汽笛のゆるし春の河　茨城　田村紫色
麗や机の上の女神像　京橋　外山みさを
山あひの日長うして女連れ　神奈川　木村紫雲子
春風に吹かれて小川わたりけり　府下　鈴枝
昔男似た人もなし春の宵　淺草　小林双葉
田螺洗ふ水のぬくみや櫻散る　新潟　若井紅雨

穩かな春

今年の春は穩かであつた、風も吹いた、雨も降つたが、さしたる事もなく、靜かな春は暮れて了つた。曩に木村、徳田二中尉が飛行機から墜落して死んだことは、一時世間の人を一齊に悲ましめたが、兩中尉の遺物は九段遊就館に殘され、勇ましき遺骨は青山墓地の落花に埋れて了つた。其外四月になつては何事もなかつたが、毎も花時には心中が多い、今年も果して心中が多かつた。千家男爵の子息が牛込の玉突屋の娘と鐵道心中をしたのを初め、東京にも地方にも心中が多かつた。花時の若き人々の心は戀に狂ふのであらう、思へば愍に痛ましいことである。

藤村氏の渡歐

前月二十四日新橋發渡歐の途に上つた島崎藤村氏は、途中用事を果し愈よ四月十四日神戸解纜の佛國郵船アーネスト、シモン號にてマルセイユに向け出發した。

婦人文藝發賣禁止

去る十五日發行の本誌第二增刊『婦人文藝』は、其筋に於て風俗を害するものと認められ、本日發賣を禁止されたり。

四月二十日

○木村正辭翁の逝去。國學の大家、文學博士木村正辭翁は、昨年より腎臟病に罹り、療養中の處終に前月四日病革りて逝去した。翁は下總成田町の生れで、幼より國學を好み、其功勞は少くない、殊に翁は『萬葉集』に精通してゐたので、其註釋の著述が澤山にあつた。

○乃木邸公開。赤阪區新坂町の乃木將軍邸は愈よ前月十四日より開放して一般公衆に縱覽を許すこととなつた、將軍在住當時の室々も其儘にしてあるから見る人々をして一層追慕の念を深からしむるものがある。

○女官、宮城を出づ。先帝陛下に仕へ奉つた柳原愛子の方を初め小倉、園、姉小路の權典侍、掌侍其他の女官達三十名近くは先般來逐次宮中より霞ヶ關離宮に移りつゝあつたが、前月十四五日頃御局全部は引移つてしまつた。

○一千人の行方。本年一月より四月十五日まで、全國に於て家出した人の數が一千四百九人ある、その中でも四月が割合に多いやうである、これも花時に人の心が浮かれてる所爲であらう。

○市內の小公園。東京市內に設小公園設置の豫定であるが先づ數寄屋橋虎の門、蠣殼町、今戶の四公園の設計が成つた。數寄屋橋は八百坪あつて、主として西洋の樹木を植ゑる、五月には竣工の筈。

○原田琴子の歌集。本誌上、常に新しい作歌を發表して居る原田琴子女は今回其作歌を一冊に纏め、歌集として近く岡村書店から出版する筈だ

○女子獨逸語講習會。我邦には未だ女子獨逸語の講習機關がない。今回麴町土手三番町三十番地に開かれた和獨女學會（會主前田不二三氏）は一週間に三回宛女子の爲に獨逸語の講習會を開くことになつた。

新刊紹介

○桐の花　北原白秋著

豫て噂のあつた北原白秋氏の歌集『桐の花』が出た、氏の和歌は氏の詩ほど手ざはりが厚くないが、其代り眞卒な無邪氣な心持がそつくり現はれて面白い、氏の言葉で言へば道化た歌にも面白いのがある。

ほそ〳〵と出臍の小兒笛を吹く紫蘇の畑の春の夕ぐれ
ほこりかにとんぼがへりをしてのくる若き道化に淚あらずな

それから悲しい歌も無數にある。

罪人はつみびとゆゑになほいとし悲しいぢらしあきらめられず
かなしくも君に思はれ此惜しくきよきいのちを投げやりにする

それから戀のうたも無限にある。

片戀のわれかな身かなやはらかにネルは着れども物おもへども
さしむかひ二人暮れゆく夏の日のかはたれの空に桐の匂へる

而して此の一卷を誦してゐると、戀の苦しみと悲しさと、嬉しさとが、永〳〵續いてゐる。はてしもなく續いてゐる無數に、無限に、歌の數が現はれて來る、なつかしい歌集である、此ほど再版が出たから改めて此處に紹介して置く（定價金一圓、京橋畔、東雲堂出版）

○青鞜小說集　青鞜社編

▽最近の青鞜社の活動振りにはめざましいものがある。世間から冷罵熱罵を浴られる事は依然としてゐるが、然かもおめず臆せず所信を遂行して、兎も角も收穫を得つゝあるのは喜ばしい事である。殊に今まではやゝ輪廓の不明瞭な嫌があつたのが、此頃はいかにも旗幟が鮮明になつて來た。らいてう氏の序に於て語るやうに、まだ若いといふよりも幼い青鞜は未來に生きて居る。女流小說の進步が、此の元氣な女の一團の內から認められるやうになる事は心から誰しも切望するところである。たとへ藝術といふものゝ一個人の才の發露であつては、多數の團體の集合力で、直接藝術そのものに對する貢獻は意のまゝでないにしたところが社會的に婦人の藝術趣味の程度を向上させる點に於いて効が多いであらうと思はれる。收むる處は十八篇の短篇小說であるが、就中野上彌生、水野仙子、小笠原貞子、諸女の作を面白いと思つた。（定價金八十錢、京橋畔、東雲堂出版）

○木魂　青木穠子著

名古屋の人、青木穠子の歌集である、生々した好い歌がある、製本も頗るみごとに出來てゐる個人の傳として氣持が好い。（非賣品）

▲なほ一三七頁に紹介あり▼

▲露木ふみ子さんの現住所を御存知の方は御一報を願ひます、輕謝を呈します
女子文壇社內　青柳とし子

女子文壇社代理部特賣品

本社へ御申込になれば便利で確實にして安い物が買はれます。此の外廣告欄にある品物は何でも御取次致しますからドシ〳〵此機關を御利用下さい

産科婦人科專門山本、高橋兩醫學士證明

新案特許 冷え知らず（一名子宮保溫器）

▲特價金五拾錢　送料四錢

此を御用ひになれば、家に居つても溫泉に入浴も同樣にして、子宮を溫め婦人諸病を根本から治する効能あり、使用法も亦簡便にして何の面倒もありません。

東京流行 德用蛇の目傘

▲特價｛●女持七十錢、九十錢、一圓二十錢 ●男持八十五錢、一圓、一圓三十錢 ●學校用小供持三十錢、各送料八錢

いろ〳〵種類がありますから御注文の折は男女の別又は年齡を御申越下されば色合等は見計ひ送品致します、御好品も調製致し升。

藤川藥學士先生發明

新案特許 安全帶

▲特價｛安全帶●甲一圓二十錢●乙八十錢●並五十錢●各一本で四五年使へ升●安全衣一打金四十錢●內地送料一組（帶衣共金八錢餘）

歐米婦人の用ふる月經帶の長を取り短を補ひたる物ですから起居動作にも便利なり、如何なる月經の多き方にも之を使用せば過失の憂なし。

藥劑師間中綱彥先生發明

新ふけ取香水 レゾール

▲特價｛大瓶金九十錢 小瓶金五十五錢 各送料八錢

如何なるぬけ毛、ふけをとめ髮のくせを直すこと妙なり。

新案特許 ハイカラたすき

▲一組箱入定價金八錢 ▲五組箱入定價金三十五錢｝送料二錢

特許竹中式 小町はり箱

▲特價｛本黑塗製金一圓二十錢、特製金六十五錢 上製金五十錢△送料小包八錢海外三十錢

本品は學生諸嬢が通學に携帶し易く家庭用としても便利且實用向にて取扱も亦自由なり

特許竹中式 絲掛附くけ臺

▲特價｛朱塗箱入金七十錢 黑塗箱入金六十錢 同上製金二十五錢 各送料十二錢 同特製金三十錢 同並製金二十錢

針仕事に綛絲を絲巻にまき取る時一々人手を煩はさず其上絲の亂れ、ヨゴレ等の心配なく、使用後は折疊み輕便にて針差、尺度を自由にシマイ得る三德兼備の重寶あり

特許竹中式 庖丁掛附兩面用 俎板

▲特價｛大金三十二錢 中金二十八錢 小金二十二錢 各送料十六錢

本器は兩面何れへも回轉し至極便利にして從來の俎の如く水氣のため足より腐朽する心配なく何年使用するも破損の憂ひなく德用の珍品なり

◉原稿募集

▲文藝的作品として小說、詩、和歌小品文、俳句等を盛んに投書あれ近頃は投書家の顏ぶれが新しくなつて來た、此機會に於て新しい若い投書家はよろしく其手腕を試したまへ。

▲文藝欄の投稿は一切振がなはいりません。

▲本欄用の原稿として、感想文、告白文等、一切の婦人の手に成つた好い文章を募集します。別に文章の種類に拘泥しなくともよろしい、只、書いてみようと思ふてとなら、何でもかまひません、本誌に揭載の上は薄謝を呈します。此分は振がな入ります。

◉寫眞募集

諸孃のお寫眞は勿論、風景、風俗各種の寫眞を募集します、揭載の雜誌は必ず贈呈し、寫眞は御入用なら返しいたします。猶ほ全國寫眞業者諸君にも、同好の方は御寄贈を願ふ

◉文藝欄投稿規定

▲文藝欄の投稿は女子に限る ▲原稿は自今振りがなを要せず ▲二十一字詰小品文は三十行乃至五十行以內 ▲小說は二十四字詰百行以內 ▲詩は長短隨意 ▲群星欄も長短隨意二十一字詰 ▲和歌俳句は一人一首限り ▲圖畫は必ず方二寸以內 ▲投稿は每月十五日、嚴に締切る。

▲贈賞 ▲小說は天賞金二圓、地賞金一圓、人賞金五十錢 ▲小品文は天賞金二圓、地賞金一圓、人賞金五十錢、▲詩は天賞金一圓、地賞金七十錢、人賞金三十錢 ▲和歌は天賞金一圓、地賞金五十錢、人賞金三十錢 ▲俳句は天賞女子文壇叢書一冊、地、人賞は本誌一部宛 ▲圖畫は天賞金七十錢、地賞金五十錢、人賞金三十錢 ▲群星欄は平素優秀なる投稿を送る人に三箇月每に金一圓の特賞を呈す ▲以上贈賞は金一圓以上は物品一圓以下は圖書切符にて贈るものとす。

改正 定價表（每月一回一日）（外年四回増刊）定期號増刊號同額	
△一冊分（送料とも）	前金拾九錢五厘
△三月分（増刊共四冊）	前金七拾參錢
△半年分（同八冊）	前金壹圓四拾錢
△壹年分（同十六冊）	前金貳圓七拾錢

◁申込注意▷

注文は總て前金のこと◎振替貯金（口座東京一七二九番です）にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと（用紙は最寄郵便局にて無料にて吳れます）◎郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと◎郵券代用は必ず壹割增のこと（收入印紙は絕謝）◎最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ本社への照會は返信料添付なければ回答せず

◎廣告締切期限……每月十五日の事

廣告揭載料金は御照會次第御報す

取扱所 博報堂、電報通信社、各報社、文明廣告社

大正二年四月二十五日印刷納本
大正二年五月一日第九年第七號發行

不許複製

編輯兼發行人 野口竹次郎
印刷人 松本魁
印刷所 東京國文社

發行所 東京市京橋區大鋸町十一番地 女子文壇社
電話京橋六〇七番
振替東京壹七貳九番

特約販賣 東京堂 館 上田屋 至誠堂 東海堂 永久堂 頁明堂 大阪盛文館

五月一日發行 第九年第七號 (毎月一回一日)

女子文壇

大正二年四月廿五日印刷納本

▲頭痛持の婦人へ

春先きから夏にかけて、道路や電車の中で、頭痛膏などを貼り付けて、如何にも心配さうに、シカメ顔して居る婦人をよく見受けるが、是等の婦人は、多分頭痛に惱されて居るのであらう、實に婦人は頭痛の多いものである、何故婦人に頭痛が多いかと穿鑿して見ると、婦人病の殆ど凡てが其原因となるが、就中一番多いのは、ヒステリー(血の道)である、さて夏に向ふ今は、所謂時候の變り目で、萬物の機能に變態を來ずるもので此季節にヒステリー患者の増加するのも全くこれがためである。

◉ヒステリー(血の道)の原因及び症候

ヒステリーの原因は、重病のあと、家庭の不和とか、子供に死なれたとか、すべて過度に精神を興奮させた場合が一番多いが、其中でも生殖器の故障から來るのが最も多い、そして其症候はどうであるかといふと

▲嫉妬心が強くなる今まで姉妹の樣に仲のよかつた友達を疑つて、相手の感情を害したり、品行方正の良人を持ちながら良夫が情婦を作りはせぬかと邪推して、言ふこと爲すこと、良人に當り散らすといふ風になる。

▲頭痛が起る 頭が重く頭痛がしてジツト坐つて居る事がつらく仕事が厭になる。

▲目まひがする 坐つて居て急に立つとか、長く家に應對でもして居ると、眼が暗くなつて、身體がヨロける。

▲逆上がする 考へ物でもすると、血液が頭に上つて顔がほてり、後で眞青、

▲血色が惡るくなる此病氣は特別に顔色は淋しく蒼白になつて、一寸見ても薄氣味が惡るい。

▲月經が不順になる早かつたり、晩かつたり、長かつたり、短かかつたり、多かつたり、少なかつたりする。

▲夜眠れない 大抵の病氣は夜眠れないが、分て本病は著るしい、日中人と對話して居てさへ居眠りをする癖に、夜になると眼が冴て、いつまでも眠れない。

▲手足が痲痺する 針仕事が出來ず聲帶が痲痺して話が出來ない樣な事もある此外身體に蟲の匐ふ樣な感じがしたり食物の嗜好が變つ

◉如何たらヒステリー(血の道)が治るか

此病氣は主として精神關係から起るのであるから精神療法と、藥物療法の兩方面から治さなければいかぬ、ガミ〳〵いつて患者の感情を害するなどは最も惡い、悲哀の小説や芝居など精神を興奮させる樣又好まざる仕事はさせないがよい、適當の運動は勿論望ましい食物は成るべく變化あり滋養あるものを選ぶがよろしい、次に藥物療法について一言して置くが婦人科專門ドクトル木村順吉先生などが稱贊して居らるゝ如く中將湯は精神異狀殊にヒステリー神經衰弱などに最も有効であるから、根氣よくこれを服用すれば容易に全快の喜びを見る事が出來る。

猶ほ此外婦人病に關する原因症候及び其療法については「婦人衛生手引」に最も詳細且つ平易に記述してあるから同病患者は參考の爲め是非一讀を願ひたい、同書はハガキにて東京市日本橋通四丁目津村順天堂へ申込めば早速無代進呈する。

(明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可)

女子文壇 定價金拾八錢 郵稅一錢